

ソードアート・オンライン 白い罪人

かえー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一章：特に目的がなくSAOにログインした主人公。デスゲームの世界でいったい何を見たのか…：本当の正義とは…

第二章：妖精の世界ALO。少し前にあった事件も解決し平和に見えたが、攻略と同時に進行する計画とは…：運命の人と会えるのか…？

第三章：リンネが目覚めるとそこは終了したはずの剣の世界。一人の人物を中心に異端な世界は再び動き出す。リンネ達は抜け出すことはできるのか…？

第三・五章：待ちに待ったフェスティバル、種族対抗陣取り合戦。リンネは仲間と離れインプのメンバーと共闘する。どこの種族が優勝するか…？

第四章：2030年、SAO事件から8年経ち、VRMMOを終わらせるため、秘密組織Virusが行動を始める。白い罪人の終わりが始まる。

第四・五章：to be continued…

(通信切断)

※if要素が少し入ってきます

主人公はPKです

アニメは全て、原作は8巻まで見えます。コードレジスタをやっておりこちらからもキャラクターに登場してもらおうと思います。

原作キャラクターは出たりでなかったりです。あまり出ないような気がします。

コードレジスタ、終わっちゃいましたね…

目次

SAO

ログイン

1

登場人物：SAO編

4

生贄の罪

8

決別

13

収容所

18

決闘

23

死神

30

見放されたもの

34

儂い夢

38

一時の休息

44

白い真実

50

事後の静けさ

60

罪の重さ

65

仲間

69

終焉の正義

74

ALO

登場人物：ALO編

83

復帰

87

守るべきもの

91

ロスト・プライド

95

死神の再来 前編

102

死神の再来 後編

109

拡散する鼓動

113

貴方を絶対離さない	118
明と闇の激突	123
竜使いの少女	129
妖精の羽休め	136
生けとし謎の原石	141
覚醒する不死の神	147
Mを探せ	156
暴走する欲	164
解き放たれた闇	172
さよならはまた明日	178
IF (イモータル・フロンティア) 編	
IF 編 登場人物	186
再会	191
死神に憧れた	196
豹変	200
地下の世界	206
神なる捌き	215
時は止まることを知らず	234
夢を見続けて	241
エピローグ	244

SAO

ログイン

窓を覗くと外はそれなりに明るく、見慣れた住宅街が広がっていた。最後に昔ながらの携帯を確認した。その画面には病院で使うようなヘッドギアが映し出されていた。そして、携帯の電源を切りカーテンを閉め段ボールの中からそのヘッドギアを取り出した。暗い部屋の中、俺は今手の中にある機械をただ眺めていた。ネットで見たものよりも大きく見える。このギアは、「ナーヴギア」といい、VR世界に完全ダイブできるそう。そして今から自分はその世界に飛び込もうとしている。ナーヴギアを被ると隅っこに時刻が表示される。その時刻は14時04分を指していた。目の前にはよくわからないコードや確認が行われ、ログイン完了の文字が。そして僕は叫んだ。「リンク・スタート!」

叫んだ瞬間、目の前が電子の世界に飲み込まれていった。

こうして、目の前にはゲーム『SAO』、通称『ソードアートオンライン』主体となる、浮遊城アインクラッドの世界が広がっていた。古そうな街並み、どれも見たことのない初めての世界。だが、正直自分はこのゲームをクリアしに来たのではない。ただ、やってみたかったからやっているだけで、友達と遊んだらすぐにログアウトしようと思っていた。そんなことを思いながら第一層のはじまりの街をただうろろろしていた。一つ思ったことがあり、やはりゲームだからか、アバターの顔がとても現実ではなさそうな顔がとても多かった。このゲームは体つきや性別、顔を変えられるらしいが、自分を変えるつもりも特になくただ使い捨てるつもりだったため現実に似た顔つきとなっている。その方が目立たないし、友達も見つけやすいだろう。損はないのだ。迷宮区に挑む人、人とギルドを組み話し合う人、一人ベンチに座り休んでいる人、どれの人も見るとは楽しそう。それぞれ人がたくさんいる中自分も一人ベンチに座らせてもらうことにした。

そんなことを思いながらふらふらしていると自動的に広場に転送させられた。チュートリアルだろうか、特に驚きもせずに広場内に降りた：のだが、明らかにその光景はおかしかった。人々が先ほど見た時と違い焦りや恐怖の顔になっている。広場内は転送されてきたプレイヤーたちによつてすぐ万条となつてしまった。広場のある所から声が聞こえた。

「ログアウトができないんだよ…このままだと俺たちこの世界に閉じ込められたままだぞ…」

細々しい声が聞こえる。聞き取るのに苦労はしたもののその情報はとても貴重なものとなつた。僕はすぐメニューを開きログアウトボタンを確認する。

ない。どこのメニューを探してもないのだ。隠しコマンドはないのか、とりあえずいろんな思いつく限り、いろんなポーズを試してみた。懇願する、土下座、雨乞い、倒れてみる、そしてメニューを覗いてみるがやっぱりない。さらなる手段は：僕はログアウトと叫ぼうとした。その直後、僕たちプレイヤーの背後に大きな影が現れる。その影はだんだん大きくなっていきやがて大きな人の形となつた。突然の登場に広場内は騒然に包まれた。その巨人はローブを着ており、顔も隠れ声も聞いたことのない声だった。その話は全く理解できなかったが、ただ一つ分かつたこと。

『HPが0になれば現実でも世界でも死んでしまう』

もちろん、普通に言われたら信じるわけない。そう、最初は僕はただの冗談だと思い、鼻で笑つたのだ。だが、それを現実的にした事実、それは生命の碑が語っていた。死んだプレイヤーの名前が続々と記録されていった。現実へ帰ろうとしたプレイヤーがこの浮遊城から飛び降りていったが、生命の碑に記録されていくだけでそのプレイヤーの姿を二度と目撃することはなかった。もしかしたら元の世界に帰っているのかもしれない…そこから、危険を感じこの世界にログインできなくなっているのかもしれない。デスゲームというのは最後の一人を選ぶための何かの策略なのかもしれない。いったいこれ

に何の意味があるのか…どう考えても分からなかった。

そして、数時間たった広場は先ほどより人が減り、大体30人ぐらいになっていた。その面々はやはり知らないプレイヤーばかりで、ほとんどが絶望と失望で膝まづき、空に祈り、命乞いをしていた。俺はデスゲーム開始直後より落ち着くことができ、今はとりあえず現実と対面することができた。だが、一つ問題があった…

「この後どうしよう…」

静かな広場に俺の声がひっそりと響いていった。結局、その日の夜は広場で眠る他することが考え付かなかった。

次の朝、広場の隅っこから目を覚ますと隣には昨日いなかったプレイヤーがいた。僕と同じぼろ布の上に鉄の胸当てを付けているプレイヤー。見た目から初心者に見える。そのプレイヤーは起きあがり、僕を見ると宝物でも見つけたように目をきらめかせさらに近寄ってきた。そして、僕の反応を待つことなく話しかけてきた。

「お前さ、どこにもギルド所属してないだろ？」

は？ギルド??ゲームをやるのがこの世界が初めての僕にそんな言葉皆目見当もつかない。ギルドって何なのか、何かの宗教団体なのだろうか。たぶん間違いはないだろう。うむ。そんな突っ込みを一人していると話を続けてくる。

「お前わからなさそうな顔しているけどな…ギルドってのは、一緒に戦う仲間みたいなものなんだ。あの子、いまギルメン募集しているんだけどよかつたらさ、入らないか？初心者大歓迎だしな！こんな関あ一緒に戦う仲間がいれば気楽だと思っぜ？」

そうなのか。裏切られるリスクがあるかもしれないが、みんな初心者なら強いプレイヤーもなんとかなるのかもしれない。魚だつて固まってでかい敵を逃がすことだつてある、軍狼戦術に頼るのもあり。ゲームはよくわからないけど…大人数は強い。たくさんいればいつでも信号も渡れる。世界を覆すほど数に頼る作戦は素晴らしい。結局二つ返事でギルドに加入することとなった。これからどうなるのだろうか…まだ、僕にはわかっていなかった。

登場人物：S A O 編

隣音弥（となりおとや）／リンネ（rinne）

身長172cm 体重60kg 年齢17歳（S A O開始直後15歳）

当時中学三年生で、ただ友達に誘われたという理由だけでS A Oにログインして友達を探した。特にゲームは持つておらず、友達の家で少し触らせてもらえる程度。名前の由来は自分の名前を音読みして丁度良さそうな名前だったから。また自分を変える（生まれ変わらせる）ためにつけた。（隣音⇨輪廻⇩リンネ）

ある事件により性格は気弱な自分から生き残るためなら何でもする貪欲な性格に変化した。戦闘スタイルは、攻撃されたら攻撃をするスタイルで、警告した後に攻撃を仕掛けてくれば手加減もなく自衛のために相手を倒す。その行為に最初は全く罪意識がなかったが、時が経つことに悩まされていく。元の動体視力と反射神経はいいために受け止めることと避けることはほぼ完璧といってもいいくらい。対人戦が得意だが、フィールドにポップするモンスターは大の苦手で、見た途端鳥肌が立ち逃げてしまう。特に虫系には恐怖を抱いており、姿も見たくないという。

武器は曲刀の『ファルシオン』とオーダーメイドの鎌（両手斧）『ギルティ・サクリファイズ』である。基本的に曲刀を使うが、ピンチになったときや、余裕のない時に鎌を使う。鎌の特殊能力は、相手の防御力に関係なくアーマーを貫通してダメージを与えることができる、でありレベル20の彼に丁度良い武器だったと思える。曲刀にはない。

本人の保有スキルは、両手斧（鎌）スキル、潜伏、体術、生存本能で、曲刀のスキルは途中で放棄した。体術と両手斧のおかげで攻撃力ほどのプレイヤーともそれなりに戦える程度になっている。最初は世界に怯えていたが、だんだんと耐性がつき、虫を見なければ大丈夫にまで成長した。

現実では友達もそれなりにいて、休日には集まって遊ぶ仲だった。

学校の授業もそれなりにこなす普通のの中の普通。成績も評定平均が4.0くらい(満点5点中)。恋愛などに全く興味がなく、コイバナにはいつも参加できない。

父は離婚して他の女性と再婚、母と二人で生活している。過去に捨てられたトラウマから強く生きないといけないと思つた母は音弥に暴力を振るい、飯を作つたり作らなかつたり。そのうち母が壊れてしまった。すでに家を後にした二歳上の兄がおり、配達業者で働いている。母はスーパーのレジで働いている。

趣味は武芸で、祖父が開いた居合切りの技術の鍛錬。3歳の頃からやっており、生徒の中では一番の集中力と技術を持ち、祖父からも認められている。また、部活は剣道をやっている。そのせいもあり、S A Oでも対人ができる。

好きなものはハンバーグとふかふかしたものの。ハンバーグは昔食べた外食の味が忘れられず、もう一度食べてみたいと思つているものの、どこで食べたか全く思い出せない。厳しい生活の中で布団でうづくまり心を落ち着けていたことからいつしか好きになつた。特にまくらと毛布が好き。嫌いなものは魚。特に刺身は食べられない。

根下愛花(ねもとあいか) / アモネ(amone)
身長153cm 体重? 年齢15歳(当時13歳)

当時中学一年で、女子友の誘いで始めた。すぐに合流するも、デスゲーム宣告によりすぐ行動することが出来なかつた。名前の由来は自分の名前と照らし合わせた花がこれだったために。(アネモネ↓アモネ)

友達を守ろうと一人夜な夜なレベリングを行うが、夜に行つたことから怪しまれ友達からも遠ざかられてしまう。後日、クエストの帰りに白装束のプレイヤー達に囲まれ、仲間を全員殺害された上にお金を要求される。これがきっかけでリンネと会うことになる。またこの出来事により、自分は仲間を殺したと罪を抱くことになる。

戦闘スタイルは真正面から自身を投げ込んで敵を倒す脳筋型。が、戦うと疲れるという理由から油断は潜伏と索敵を使って戦闘回避している。モンスターとの戦闘はそれなりにできるが、現実で人を殺し

てしまうことから対人戦が全くと言っていいほどできない。(リンネの時は死ぬことを覚悟して行った)だが、虫系のモンスターは嫌い。武器は短剣を使い、日によって変えるので決まって使っているものはない。保有スキルは、短剣、投擲、索敵、潜伏、料理で、やはり全てがレベルマックスではない。

性格は自称天真爛漫で少し独占欲が強め。そして飽きっぽい。ゲームが大好きで主に、アクションゲームやパズルゲーム、FPSはコツをすぐ掴み、三日ほどしたら別のゲームに変えてしまう。

現実でも同じように過ごしており、あまり外では体を動かさず静かに本を読んで生活する文化系。部活は料理部で時折家でも晩御飯を作っている。将来は立派な夫に料理を作ることが目標。

父も母もよくわからないほど難しい仕事をしており、子供は自分の下に四人いる。たまに母が帰ってくるのがアモネにとって安らぎの一時。一つ上に姉がおり、20歳になってからホテル嬢をしている。姉もまたゲームが得意であり、アモネは一度も姉に勝ったことはない。

好きなものは甘いものと一人の空間、嫌いなものは粉っぽい物と一人の空間を邪魔してくる者。一人でゲームをしたり料理をすることが自分らしさを出せて楽になれる時間らしい。

ミラ (m i r a) 22歳 (当時20歳)

好奇心に揺られやってみた結果、閉じ込められるが当初はイベントと思っていた。が、生命の礎にて生き返らないことが分かりデスクゲームを自覚した。リンネをギルドに誘うが、途中ギルドの全てを持って失踪されたために怒りを感じ、プレイヤーを利用しリンネの殺害を目論む。

性格は何をしてでも自分の欲望を達成する自己中。例え人も殺しても最後が良ければなんでもよいらしい。人を仕切るカリスマ性があるために自分あまりレベル上げをせず、随伴でレベルアップした程度。スキルも保有していない。

バトラー (b a t t l e r) 26歳 (当時24歳)

囚人の一人。オレンジプレイヤーの中で最も強いといわれる男。

決闘が好きで、勝った者の言うことしか聞かない。

バラ (v a r a) ? 歳

囚人をまとめる収容所の管理人。お姉さん気質であるバトラーです。すらも言うことを聞くぐらい怖いらしい。時に心優しい収容所の女将。

生贄の罪

この世界に幽閉されて早三か月、僕の体もこの世界に慣れつつあるのかもしれない。ギルドメンバーと行ったことのないカフェに行き、仮想世界のご飯を食べ、フワフワのベッドで寝る：時間になればギルドメンバーとともにモンスターを狩りに行き、皆で報酬を分け合い：歓喜する：非常に充実してい：

「おい、何妄想にふけているんだよ：」

机で日記を書き連ねる僕に声をかけてきたのはギルドメンバーのミラ。あの時、隣で眠りメンバーに誘ってきた男だ。彼は初心者だがサブリーダーでリーダーの忙しい時にまとめてくれるムードメーカー。ベータテストもやっていないが、リアルでやっている剣道で動体視力と攻撃を鍛え上げ、中堅プレイヤーにも引けを取らない。僕は慌てて日記を隠し、ミラと向き合う。相変わらず、女子みたいな名前だが顔がまだ若く大学生くらいに見える。装備もほかのメンバーに優先してお金を使っている。俺もその一人なのだが、まだ彼には何も返せていない。

「いつも日記を付けていないと毎日が過ぎた感覚がしないんだよ。日課ってやつ：君の毎朝行うメンバーへの強制ハグと同じだよ。」

ぐつ：とうめき声を漏らし、苦笑しながら目を逸らすミラ。中々される側からしたら毎日いい迷惑である。初めてハグの被害にあった日に聞いたのだが、「ハグしないと体がおかしくなりそうなんだ：」ととんでもないことを言われたが、これもギルド内で受け入れられている要因の一つなのかもしれない。

ここは僕らのギルド。そのギルドハウスは小さいログハウスの形をし、中には僕らのギルド「サクセス」のメンバーが三人で一つの部屋二つとちよつとしたリビングがある。リビングには丸机が一つ置いてあるだけで、特にそういったものはない。今ここにいるメンバーは僕とミラの他に二人いる。今日攻略するエリアを決めている最中だ。というのも、最近身を隠しているリーダーが出す場所を探索しているらしいが、もうそのコースを何度も攻略し、手詰まりの状態に

なっていた。と、その時戸をたたく音が。それと同時にドアを突き破り、柄の悪い二人が家の中に入ってきた。その男は、ミラの前に立ちミラの肩を掴み脅し始める。

「なあ、ミラさんよお…今日も同じところに回るんですかあ？いい加減飽きたんですお…」

「これは…リーダーから命令されていることで…」

「はあ…何が副リーダーだよ、たかがゲームなのにさ…マジになっちゃってさ…そろそろギルドやめてやろうか…」

「それは…」

ミラが困り果てていると、また後ろのドアが思い切り開いた。そこにいたのは、見たことのない大柄の男の姿。こいつらの仲間なのか。無言で入ってきて歩いて三人の近くに寄ってきた。その男は三人を抱きしめ始める。

「よー！ブラザー！！やつと帰ってきたぜえ…元気してたかあ…？」

返事をさせず、仲間を撫で続ける謎の男。その行動には柄の悪い二人も何も言い返せなかった。ただ、撫でられるままで、呆然と後ろの大男を見るしかなかった。部屋にいる全員が呆然とする中、大男は三人を解放し自分の名前を名乗った。

「ああ、俺の名前はメイカーだ。ここのギルドマスターをしている。レベルは一応50だ。よろしくな！」

メイカーと名乗るこの男。いきなりの真実に誰もが驚愕していた。ミラですらも驚いている。この様子から姿は初めて見たと思われる。僕も驚きが止まらない。レベルは高いが、これほどおらかな性格、初心者でも入れてくれる優しさがあるから人が信じることができる。こんなギルドが完成したんだ…つい、涙が流れてしまった。

「ところで…どうしてリーダーはしばらく留守にしてたのでしょうか…」

「ふ・ふ・ふ…よく聞いてくれたな！実はな…鍛冶レベルを極めたんだよ!!これで俺たちの武器を作ることができるのさ!!」

おお!!と歓声が上がる。どういふことかと困惑し、呆然とし続ける僕の元に解放されたミラが耳打ちする。

「このゲームでは様々な武器のスキル以外にも生活するためにスキルがあるんだけど、リーダーは僕たちに絆を繋げるために一つの武器を作り上げようとしていた。そのスキルを取得するために俺に素材集めを任せて、鍛冶スキルをあげていたんだよ！鍛冶スキルがあると：ゲーム内の武器を素材を集めると作ることができるのさー！」

うなづきながら、話を聞く。レベルを見るからにゲームのスキルを限界まで上げるのは至難の業だ。何故このようなことができるか：気にはなつたが突っ込むことをやめ、僕はこのギルドの雰囲気になじっていった。

「だが：倉庫を見る限り：まだたまっていないんだな：じゃあ、行くか：」

「ぐええ：助けて：：：死ぬ：」

柄の悪い二人がケラケラ笑う中、僕はスライムに押しつぶられそうになっていて、命の危機となっていた。HPバーも黄色から赤に変わろうとしており、明らかに死にそうな危機というのに、二人は全く助けようともしてくれなかった。突如、腹に謎の衝撃。ミラがスライムを真つ二つに切り裂いて倒していた。ミラの持つ斧の刃は腹に当たる寸前で止められていた。これもミラの強い証拠だろう。

「お前ら：ちよつとは助けてやれよ：」

「この世界はサバイバルだぜサブリーダー：襲われたこいつが悪いんだよ：」

「そうそう：襲われたときは自分で身を守れよ：これだから、初心者はおだめなんだよ：」

ミラの説教なんぞ無視し、柄の悪い二人は僕を見ながらケラケラ笑い続けた。メイカーを達はため息をつくミラを傍らに僕は、バツグに入っていたポジションを飲み体力を回復し、ギルドメンバーたちと狩り続けた。

スライムも狩れるようになり、狼を倒すサポートをし：動く植物に追いかけてまわされ：僕たちは不眠不休で一週間狩り続けた。

そして、僕たちのギルドの部屋の中心の丸机には、リーダーを除く

メンバー6人が集まっていた。リーダーによると狩りが終わったあ
の後から作業に入りさらに2日、ついに完成したという。そして、僕
たちはその武器披露会に集められたのだ。まだかまだかと待ちきれ
なきようなギルドメンバーたち。それは僕も同じだった。

ギルドの扉が開き、目線の先にはメイカーがいた。メイカーは鼻息
荒く部屋に走ってくる、丸机の前に立ち、アイテムパネルを触って
いた。そして、一つのアイテム名を触ると丸机の上に窯が現れ、ゆっ
くりと机に着地した。

「これが俺たちの武器、『ギルティ・サクリファイス』だ!!」
「ギルティ・サクリファイス?」

明らかに厨二病まっしぐらな名前だが、確かに名前の雰囲気と武器
の雰囲気はマッチしていて、黒く禍々しいその鎌は手に取った者の命
をも刈り取ってしまいそうな、まるで神話に現れる死の神ハデスの持
ちそうな鎌だった。武器の所持者はまだ決まっておらず、さらに武器
のステータスから特殊効果も見られない。どうしてこんな武器が生
まれてしまったのか。もしかしたらメイカーの趣味なのか、はたまた
気持ちが出てしまったのか。その真相はまだわかりそうになかった。

と、皆が見とれているうちに柄の悪い二人が鎌を触ろうとしたが、
システムメッセージとともに二人の手が赤い電撃によって阻まれた。
二人のHPバーには変化がないが、二人の指先からは煙が出ていた。
いきなりのことに二人も騒然としている。

「どうして使えないんだよ……このギルドの物だろう……」

「そうそう……これは話が違うんじゃないのかあ?」

「これは、このギルドがこのギルドであるためのものだ。俺はこの武
器を戦闘用として作ったつもりはないからな! まあ、これはギルドで
管理するから、誰もかまうなよ? 外でかまったらダメージが入るから
な!」

皆が、目を伏せ返事をした。触りたいのはみんな同じだったよう
だ。もちろん……僕も触りたいが……禍々しいデザイン、そしてこの武器
の名前、『ギルティ・サクリファイス』。意味は、生贄の罪。どうして
こんな名前になったのか……今の僕には考えられなかった。今は黙っ

てこの雰囲気に分れるしかなかった。

決別

SAOサービスが始まって早半年、ギルドの様子も変わらず平凡な日々が続いていた。正直僕はだれかがクリアするまで何もしなくてもいいのではないかと思った。自分はレベル5。今前線で戦っている攻略組と知り合っているわけではなく、僕にはそんな実力もなく到底及びそうでもなかった。

脳内でモンスターを切り倒す妄想を繰り返している中、今後のレベルリングのことを考えていた。自分の装備は初期の装備のままだし、お金はギルドの運営費に回していつからかん。挙句の果てに戦闘下手で経験値をあまりもらえず、Expポーションも後回しにされることばかり。結局ギルド内最弱…というか、アイングラッド内で最弱とも自分で思ってしまうほどステータスが低かった。現実でもけんかが弱い僕にはこのVR世界の先頭なんて到底慣れやしなかった。

ある日、僕は団長「メイカー」に呼び出され誰も来ないような屋敷に足を運んでいた。戦闘禁止区域と表示されているもののどこからでも出てきそうな雰囲気醸し出していた。もしかしたらここで僕を葬る戦略かもしれない。油断して武器も全く装備しておらず、いつもの普段着しか着ていなく、もってきたのは申し訳程度のポーションだけだった。メイカーは僕のレベルを軽々超えてきているはず…恐怖で今すぐ逃げ出したかった。その時メイカーが暗闇の中から現れた。その様子はいつもの陽気そうな雰囲気踊りながらの登場だった。

「メイカーさん…今日はいったいどうしたんですか？」

「いやいやーそんな険しい顔をしなくてもいいじゃないか！キルなんてしないさ!!」

恐怖交じりに声が出てしまう僕に対し特にメイカーさんは手を加えようとはしなかった。大きな手で撫でてくるが確かにその手からは殺意は全く感じられなかった。僕はおびえて声が出そうになかった。

「実はな…話というのは、お前にこのギルドを継いでほしいんだ。」

突然の告白とともに冷たい風が流れてきた、そんな気がした。半年たったアイングラッドには秋が訪れていた。

「秋、といえは狩りの秋だな！俺たち攻略組を目指してレベリングだ！」

所変わり何時ものギルドハウス。メイカーがギルメンに向かって叫ぶ。メイカーは乗り気だが、ギルメンは全くやる気の一文字も感じられなかった。半年でこの世界に慣れてもいい時期だが、慣れるのではなく慣れずに拒絶反応を起こしていたのである。一体あの三か月前の気合はどうなったのだろうか…

ギルメンは返事すら返せなかった。ミラも少し疲労がたまっていて返事を返せそうになさそうだ。が、その沈黙を破ったのはまさかの人たちだった。

「そうだな…攻略組を一泡吹かせてやろうぜ!!」
「よっ！ナイス兄貴!!」

不良の二人は珍しくメイカーをおだてあげ、しまいには紙吹雪をまき散らし始めた。何か裏がありそうだが、その勢いに飲まれ僕たちはモンスター狩りに同行することになってしまった。

どれほど時間がたったのだろうか…モンスター狩りをしギルメンは凄まじい成長を遂げ、レベル20を超え立派にスキルを得ていった…もちろん僕以外なのだが。安定で僕はモンスターが狩れずに、ギルメンにモンスターを横取りされ全くレベルが上がらない始末であった。が、このイベントを通してメンバーの士気が上がっていたような気がする。戦闘を通してこの世界の現実を知り、さらに戦闘の楽しさを知る機会になりある意味よかった…いや、もしくはこれが狙いだったのかもしれない。それには自分の実力が低く、もし低ければこうなってしまう、こいつよりましか、と思われたから僕のおかげでみんながやる気になっているのかもしれない。この士気高揚には自分も一役買っているのではないかと思ったり、思わなかったり。ため息をつきながら成長を嬉しく思っていた。が、次の瞬間だった。

メイカーが倒れた。真っ先に気付いたものは恐らく僕で、後ろを振

り返ったときには剣が突き刺さっていたのが見え、メイカーの体は青く光り粒子となり消滅してしまった。

唐突で：衝撃だった。いったい誰が：メイカーの周囲を探し、ギルドメンバーにも伝えた。が、犯人はすぐわかった。特徴的な蒼い曲刀。いつもこれを振り回しているのは、ギルドの先陣をいつも切り、やたら人を馬鹿にする：

「やったなあ…これで俺らが今日からギルマスだな。」

「流石っすー！こんなあつさり倒せるなんて流石っす!!」

曲刀を拾い高らかに笑う二人、そう、不良の二人組である。非常にベタな作戦だが、あの鈍感なメイカーにとってはしつかりとこの作戦は刺さった。ギルメンたちはリーダーを失い混乱に陥った。中には自決しようとする者もいた。この世界はHPが自分の命、もはや自分の命なんて考えることができない。僕も、どうすればいいか全くわからず、自分の中に謎の感情が芽生えていた。さらに、そこにモンスターが現れる。Lv30のダイアウルフ。さらに群れでの戦闘だった。そんな中、不良の二人は歩いてその場を逃げようとする。

「またな、クズども。俺たちはギルドのアイテムでも引き取っても来るさ…」

「また会えたらいいな…クズども！アバよ!!」

衝動的に俺は走り出していた。不良たちへの怒りが隠しきれなかった。何故善人のメイカーが死ななければいけなかったのか、全くわからない。自分がなぜ怒っているのかも分からない。モンスター一匹も倒せないのに、剣を構え飛びかかった。が、二人は転移結晶で転移してしまう。俺の手元に残ったのはダイアウルフと混乱したギルメンだった。その中ミラはたちあがる。彼はまだあきらめておらず味方を庇いつつ、敵を倒していた。が、俺はもうその姿見ることはなかった。俺はその戦闘を放棄した。また、それはギルドを捨てたことでもあった。その行動にミラは叫んでくる。

「お前も戦えよ！俺も一緒に戦う!!もう一度…!」

「…俺はもう道具じゃないんだよ…俺は一人のプレイヤーとして戦う。」

そう返し、俺は一步を歩みだした。ミラは何か言っていた気がするが全く聞こえなかった。俺は歩きながら武器「ギルティ・サクリファイス」を手に取り、月の光に照らす。改めてみてもやはり禍々しい。一人岸壁に座り、この大鎌を眺めていた。

「実はな…話というのは、お前にこのギルドを継いでほしいんだ。」

この一言を聞いたが、もちろん俺の口からはN Oの一点張りである。戦闘能力が低い俺にさせるということは、子のギルドを捨てるつもりかと思つた。が、メイカーからまた話される。

「謝らなければいけない…お前のことを全く考えれてなかった…俺らはお前を囮として扱っていたんだ。最初はちゃんとした、団結するギルドを作りたかつたが…命の保証がなかつた。だから、一人囮がいるという口実でギルドを作ってしまった。」

深々と頭を下げるメイカー。シヨックだった。単純に仲間として扱ってもらっていないことにシヨックだった。僕の頬からは涙がこぼれ落ちた。なら、ミラのあの言葉も全部嘘になるのか。そう思つた。

「俺だけ逃げるわけではないが…俺はもうすぐ誰かに殺されるだろう。誰かは分からない…お前かもしれない。が、俺は逃げない。無抵抗で殺されるつもりだ。だが…信じられないかもしれないが…お前のことを、俺は助けたかつた…だから、このギルドの核…金とアイテムを全てもって行ってほしい。」

信じられなかった。この後絶対僕が殺されるんだ。汚い人間にしか見えなかった。これで僕に対しての罪滅ぼしになんてなるわけがなかった。その言葉に信ぴょう性なんて一つも感じられなかった。なら、もういつそのこと今日の前のこいつと心中してやろうか。そう思う。

「後…困つたときに使ってくれ。」

手渡されたものは例の武器、ギルティサクリファイスと古ぼけた箱だった。その箱を開くととても暖かい光が僕を包んだ。

「その箱はスキルボックスだ。スキルを継承させるためのもの。その

鎌が使えるように鎌のスキルを上げておいた。好きに使ってくれ…」
頭に何か入ってくる。身に何か染み渡る感覚。そして、手の鎌を振ってみるが、先ほどよりも軽い。今まで使っていた短剣より軽く驚きの連続。ワクワクした。が、精神的に完全に立ち直ることは無理だった。僕はこの人たちに裏切られているんだ。その事実が喜びの感情に鍵をかけている。これが現実だ。

「僕は…どうしてもこのギルドにいなきやいけませんか…」

「いや、嫌なら脱退してもいいんだ。どうせ俺は死ぬんだからな。ここに縛られず、お前らしい生き方をしてくれ。こんなギルマスでごめんな。リンネ。」

思い出すとまたイラつきが止まらなかった。そう、俺の名前はリンネ。もちろんハンドルネームである。この名前には嫌な思い出しがなく、断ち切るために俺はこのゲームを始めた。が、やはり同じだった。現実での弱い自分を今回も変えることはできなかった。いや変えなかったのは自分だ。

「自分らしい生き方か…探してみるか。」

ふと呟き俺は立ち上がった。自分らしさなんてまだ模索する時期だろう…誰にも縛られない自分らしさ。俺は駆け出した。行き先はまだ決めていない。目的地なんてわからない、だから行き着いた場所で自分を見つけ出す！走り出した両足は止まらない。この高ぶる感情はなんだろう、怒りではない。この飛び跳ねたくなる感情は、俺が数年間忘れていた感情、喜びだった。

収容所

満月の夜、冷たい風の中暗い草原の中で赤い火花が飛び交う。片方は、威嚇するように大型の鎌を振り回し、相手に攻撃をさせない反面、もう一方は当たりそうにない鎌の攻撃を銀の片手剣で何とか防いでいる。が、片手剣はオレンジの火花を散らし、鎌が当たる度破片が飛んでいる。

その時、片手剣は鎌の薙ぎ払いを防いだ途端、真つ二つに砕け散り、青色の光となり消えていった。共に、片方のプレイヤーは武器をなくし、恐ろしさのあまり地面にへたり込んでしまった。鎌のプレイヤーは紫に光る鎌を大きく振り上げへたり込むプレイヤーへと振り下ろした。斬られたプレイヤーの顔にはもう生きる希望などなかった。

SAO：VRMMOで最も期待の高い…いや、高かったゲーム。このゲームの主軸となる世界、浮遊城アインクラッドは数百万人を幽閉する牢獄と化してしまった。HPは自分の命、尽きれば死ぬ単純なルール。この単純なルールの前に半年たったこの時点で死亡者は1万人を超えた。その中でも、死亡例にはいろいろあるが、その中でも「PK」すなわち「プレイヤーキル」での死亡者は1000人を超える数値となっていた。

「これで…36人目…懲りないな…」

相手が倒れていた場所からドロップアイテムを回収し、武器の耐久度をすぐに確認する。俺の相棒、「ギルティサクリフェイス」はあまり消耗もせず相変わらず怪しく黒光りしている。少し寒くなった草原の中、俺は白いコートを深く着込み寢床を探した。

また、PKをしてしまったために俺は「オレンジプレイヤー殺人者」のため町に入ることが出来ず、フィールドで一晩を過ごすことになる。普通ならそこでポップするモンスターに襲われお終いだだが、やむを得ない殺人をしてしまった人のための宿屋、またの名を収容所と呼ばれる場所があった。何故この名前かは大体察するだろうが、この建物内でPKがあるからだ。それが嫌なら、NPCから頼まれるクエストでカルマを回復し、ノーマルプレイヤー一般市民になるしかない。が、オレンジプレイヤーになった時点

でプレイヤーに知られるので、どうやっても一般市民ノーマルプレイヤーに戻れやしないのだ。

俺はあの日以来、不良二人をPKした。そしてギルドも脱退し、ソロプレイヤーとしてフィールドをかけることとなった。誰か密告をしたのか分からないが、日が経つにつれ俺にPKを仕掛けることも増えてきた。そのたび、俺は戦闘をするようになった。相手は人間、ここにポップする化け物ではなく自分と同じ人間なのだ。人を殺したことはないが襲ってくる相手の攻撃を避け、避け続け、殺す。誰も俺を見逃してくれなかった。俺が人を殺す度、襲ってくる人も増えた。何が目的かは全く分からないが、俺はその度相手が諦めるまで攻撃を避け結局殺害してしまう。この行為に特に思い入れもなく、罪悪感もなく、仲間も全くいなかった。

夜の間草原のフィールドを歩き続けたが、この層には収容所はなく、俺はモンスターのでなさそうなエリアを探し続けた。が、時は突然やってくる。

俺が歩く先には大きな木があり、流石に歩き続け疲れたのでその木に体を預けたが、その木は急に動き出し、俺はバランスを崩し後ろに大転倒してしまう。あまりの疲れに体をすぐ起こすことができず、寝ながらまわりの状況を確認した。まさか、他のプレイヤーの罠か…？そう思った矢先、俺の目線にはさっきの木が写っていた。が、その木は先程とは違い、鋭い黄色い眼光を飛ばし枝を腕のように振り回す化物と化としていた。俺は心の中から思い切り絶叫した。そして、転がりながら起き上がると行く当てもなく全力で逃げた。後ろを見ると、先ほどの木が全力で追ってきており時々、ツタをこちらに打ちのめしてくる。辛うじて避けることは出来ているが、追いつくのは時間の問題だった。どうしても、モンスターと闘うのがやっぱり無理だ。口のある巨大花、襲ってくる狼、群れてくるトカゲ兵、そして中でも…糸を出してくる巨大蜘蛛。俺は絶対あんな奴らと戦闘したくもないし、奴らに最期を決めてほしくない。ただひたすら全力で逃げた。

すると、横から声が聞こえてくる。その声の方向を向くと半袖の防弾チョッキに、シヨートパンツの女性が手を振ってこちらに何かを呼

び掛けている。声は聞こえなかったが、見る限りこっちに逃げてこいと言っているようだ。俺は最後の力を振り絞りその女性の元へと全力で走った。止まらないようにただひたすら走った。ツタが後ろをかすめ始めているがなんとか女性の元へたどり着いた。女性は短剣を片手に、木を何度も斬りつけた。あつという間に木のHPはゼロになり蒼い破片となり空気になっていった。女性は短剣をしまうと、俺の方へ近づいてきた。よく見ると、このプレイヤーもオレンジプレイヤーだった。

「大丈夫だったかい？あたいはバラだ。あんたはなんていうんだい？」

「俺は…リンネっていいいます。さつきはありがとうございました。」

「リンネかい…同じオレンジプレイヤー同士、仲良くしようや。」

俺に初めてここまで突っかかってきてくれたが、俺は正直なところ嫌だった。今までも、こんな風に構ってきて結局俺のもつアイテムが目当てだったことがほとんどだ。同じオレンジプレイヤーでもやはり同じプレイヤー同士で絡むのは嫌だった。

「あんた…あたいのところに泊まっていくかい？見たところ身寄りはないさそうだし、あたいの所は安心安全の収容所。命と寝床は保証するぜ？」

一晩だけなら…疲労が自然と俺をその気にさせてしまった。と、歩いていくとテントがいくつも重ねられ、集落に見える場所があった。そこには、たくさんのおレンジプレイヤーが騒いでいた。ある者は武器の素振り、ある者は、お酒を飲み、ある者は武器の手入れ。若者から、中年の男女がこの草原一帯に広がりそれぞれが何かをしていたが今までの宿と違うのは一つ、争い事が全くない。見る限り、刃物で語り合う者は一人も見当たらず、またどちらかという運動部の匂いがぶんぶんするのは気のせいではないだろう。俺はバラに突き出され、少しバランスを崩しつんのめって転倒してしまう。それに気づいた殺^{オレンジプレイヤー}人者達が俺の方を振り返る。その目は今までの宿屋で向けられた冷ややかな目ではなく、獲物を確実にとらえようとする殺し屋の目だった。

「お前たち！こいつは新入りのリンネだ。レベルが低いひよつ子だが、仲良くしてやりな!! 因みにこの子、モンスターがとつても苦手らしいから、いじめるなよ! いいかい!!」

おう!と野太い声が上がったと思うと、プレイヤーたちはそれぞれ持ち場に戻った。俺は弱点を公開されたことにより羞恥でいっぱいだったがりあえず寝たかったので、空いている場所に身を預けた。テントも何もない場所だったが、モンスターが出ないだけで安心感があつた。数秒経つまでは。

本当に数秒後すると、大柄の男が近づいてくる。メイカーほどではないが、タンクトップから浮き出るシックスパックが強さを物語っていた。そのほかにも部下と思われる人が三、四人近づいてきた。もちろんこの男たち、確実に俺を殺す目をしている。俺はサブ武器の曲刀を装備し、戦闘態勢についた。対して男は何も言わずに近づきながら何かをつぶやいている。その様子をバラは腕を組みながらやさしく見守っていた。

「おい、新入り。俺たちのところに来いよ。」

と、俺の許可を取らずに俺の体を抱き上げ、男たちが集まる焚火の前に座らされた。見る限り、どのプレイヤーもオレンジのタグが付いており完全に俺を歓迎している目をしていない。いくらオレンジプレイヤーと言えどこれだけ集まれば壮観だ：とつても怖い。例えるものはないが、強いて例えるならギルドにいた時にビッグスパイダー10頭に囲まれたときぐらい怖かった。一人の男が俺の肩を叩く。かなり痛かったが、どうやら彼らは俺に敵意はなさそうだ。と考える
と…

「俺の名はバトラー、こいつらは俺の仲間だ宿主は^{女将}バラだが宿泊者の中では俺がリーダーだ。争いは禁止、ここではルールを守れ。外では好きだけ殺つてもいいがここでは禁止、尚且つこの情報は外に漏えいしないこと。漏らした奴の命は保証しない。わかったな?」

「お頭…もうイイっすか?」

「…後は好きにしろ。ああ、今日は眠れないと思つてろ新入り。」

最後の言葉が全く意味が分からなかったが、バトラーは立って集落

外に出ていった。嫌われたかと思ったが、そんなことを思わせるより先にプレイヤー達は俺に酒を渡したり、話を聞きに来たり、関係なく奇妙な踊りを始めるものもいた。まるで何かの儀式だ…が、俺は一つ疑問に思う。

ここは本当にオレンジプレイヤーの溜まり場なのか。

疑ってしまうほど、この雰囲気は今までの収容所と違ったのだ。宣言された通りこの日は寝ることが出来ずに一日中他のプレイヤーと話した。

いつの間にか俺は眠りにつき、気づいたときにはもう朝になっていた。朝になれば、プレイヤーの数は当初の半分以下になっており荷物が置かれている場所もあった。俺は体を起こすと、意味もない準備体操を始め今日の戦闘に備えた。

このルールは争いなし、ギルド解放軍への密告なし、ギルドへの加入なし、宿泊費は0、窃盗禁止、さらにいつでもグリーンになって町に戻ってもよい、その他もろもろ…と、ギルドではない分拘束感がなくもはやこれはルールというか、ゲームをする上での当たり前なマナーだった。俺はここで仲間ができたわけではないと思う。外に出れば殺されてもおかしくないと、そう考えると少し寂しきを感じた。どうやらまだ自分らしきを見つけていないようで、ついため息が出てしまう。

バラもおらず一人になったこのフィールドで俺は眠った。目的が見つかるまでは…信用してみてもいいかな。俺は今まで持っていた荷物を全部地面に下し、久しぶりに欠伸をし伸びてみた。そこには仮想空間とは思えないほどの太陽が俺を思い切り照らしていた。届くはずもないが手を伸ばしてみる。が、もちろん届くはずもなく俺は思い切り地面に寝ころび眠りに落ちた。

決闘

集落に戻ってきた俺は疲れていた。無意味な殺しはあまりしたくもないのに：今日で45人目を記録した。ここに住む宿泊者の話によると殺しを100人すると、システム上では表記されれないが、勲章レッドプレイヤーとして指名手配人がもらえると聞いていた。リーダーのバトラーは72人で準レッドプレイヤーと呼ばれている。

別に俺はそんなものを全く狙っているわけではないし、本当なら争いだって穏便に収めたいと思っっている。が、俺が持っているアイテムがもしかしたらその争いの原因かもしれない。俺だっってアイテムを渡したりしたことはあるが、その後襲われかけたことがありそこから一般プレイヤーが全く信じられなくなってきた。最近俺の場所までが予測され、俺が行く先にプレイヤーが待ち受けているのだ。俺はこの世界でとりあえず生き延びる：どうしてでも。と、この目的が他のプレイヤーと利害の一致を果たすことなく戦闘に発展してしまう。これがメイカーによるシナリオなら少し怖い。

思い切り曲刀、「ファルシオン」を振り回しなんとかスライムを討伐。緑の液体が空気中に消えていった。いくらこれが復帰クエストとしても俺はこんなクエスト二度とやりたくないし、最近バラの收容所に済んでもいいとまで思っているほどだ。一応今のレベルは10、曲刀のスキルレベルはもうすぐスキルマックスになるが、これにモンスター討伐が付いてくるためやりたくない。服装はいままでと変わらない白のコート。この服装、中々目立つのだが今一番防御力の高い防具がこれしかないし、囚人の一人がこの装備を手入れしてくれるので少し思い入れがある。俺の相棒と色違いのため少々ミスマッチだが仕方ない。

クエストをクリアし表記がオレンジから緑に変わったことを確認しクエストクリアを確認、隠したくても隠せない喜びがガッツポーズを通して飛び出た。收容所の生活はとても楽しかったが、久しぶりにベッドで寝れることを考えると心が躍りだすようだった。俺は收容所に荷物を取りに帰った。が、その矢先何かを感じる。

後ろを向いたまま咄嗟にファルシオンを後ろに向けそのまま停止、数秒後には何か刺さる感触。振り向くと一人のプレイヤーの鎧腹にしっかりとファルシオンが刺さっていることを確認、そのプレイヤーの手には毒の塗られたダガーナイフが握られていた。そのプレイヤーの後ろから集団で仲間が近づいてくると俺がプレイヤーの顔を確認するのは同時、プレイヤーの体は持たず青い粒子に、俺は通算50人目のPK、尚且つオレンジプレイヤーに返り咲いた記録的な瞬間を迎えてしまったのだった。その様子を駆け付けたプレイヤー達が見てくるが、見覚えがあつた。同じ収容所で共に宿を取っている宿泊者、バトラーとその仲間たちである。どうやら、俺が殺したプレイヤーもこの宿泊者だったようで、俺に妬いてしまった拳句俺を殺す結論に至ってしまったようだ。全くオレンジプレイヤーは頭が固いからこんなことを続けるんだ。

「だがお前は襲われ、自分の命を守った。当たり前のことをしたお前に罪はないだろう。」

「そ、それをあんたが言いますか…」

どうも、バトラーがそんなこと言ってもしっくりこない。いったいこの人現実で何しているんだろう。考えるだけで身震いしてしまう。「しっし…お前中々強いと見た。今宵、俺と決闘デュエルで戦ってくれ。これは死なない、いわゆる見世物エキシビジョンさ。今日の昼三時、バラに許可を取った上で収容所内で待っているぞ。」

突然の言葉に全く反応できない俺。が、そんなことを気にせずバトラーは収容所内へ歩いていった。同じバトラーに同行していた宿泊者たちも唾然としていて、俺の顔を見た途端生易しい目で見てきたのである。察するに俺はビッグスパイダーを超えるこのゲーム最大の敵に決闘を挑まれたのかもしれない。まだ考えが追いつかない俺の顔を、傍観者たちはクスクス笑い気の抜けた俺の顔を面白おかしく笑っていた。

そして時は経ち、午後三時、収容所中心にある広場には呆れ顔のバラと個々の宿泊者100人、その中心には両手斧「ジャイアントアックス」を装備し上半身裸体、下半身をステンレスレッグに包んだバト

ラーと曲刀ファルシオンを持ち皮の胸当ての上に白いコート、まるでぼろきれ同然のズボンを装備した俺がいた。死なないのは知っているのだが、何かの間違いでHPがゼロにならないかとっても不安である。バトラーは相変わらず無表情でこちらを見つつ、時折大きなため息をはいている。俺はその気迫に押されつつも曲刀を真正面に構える。おそらくこの構図、クマと人間の喧嘩にも見えているのではないか…思うだけだが。

やがて、10カウントが進み始まりの時は刻一刻と過ぎる。一秒ごとに広がる緊張、バトラーも緊張しているのだろうか。が、バトルアックスを引きずる彼の姿からは緊張を何も見えなかった。

3…2…1…

『DUEL Start!』

ブザーが鳴り戦いは始まるはずだった…が、俺もバトラーも全く動く様子がなく、数秒前の盛り上がりは一気にダウン。が、彼からの気迫は全く収まっていない。俺は気づいてしまった。運が悪いことに、お互いプレイヤー狩りを好んでやっていない殺人者らしく、どちらも被害者だったのだ。その事実を知り俺は肩の力が抜け、つい曲刀を落とすようになってしまった。

相手も待つ、さらに72人を殺害したプレイヤーと考えると、手を出せば一瞬で勝負がついてしまう実力があるのだろう。が、俺は攻めることを決意した。まだどのプレイヤーにも全く見せていない特技で何とかするしかない。

俺はファルシオンを手に全力で駆けだした。バトラーを狙い降り降ろされたファルシオンは二秒後には弧を描き、俺が倒れた2mほど先に深々と突き刺さった。起き上がりつつバトラーを見ると、さっきまで地面に張り付いていたバトルアックスが片手で振り抜かれていたのである。この攻撃を一撃でも喰らえば負けることは間違いない。その矢先、顔色を変えずバトラーのバトルアックスが振り上げられる。バトラーが何か言った気がするが俺には聞こえず、俺は次の行動に出ていた。

倒れた状態から、腕で地面を思い切り押し上げバトラーの胸骨あた

りに蹴りを決め付けた。蹴られたバトラーは顔を歪め一度バランスを崩してしまう。その様子に野次馬からどよめきが起る。そう、まだ誰にも見せていないスキル：体術スキルである。体術スキルは取得が以上に面倒くさい代わりに武器以外の攻撃の攻撃を上げたり、身体的に能力を上げてくれるパッシブスキルである。まあ見つけたのはたまたまで、取得に二か月はかかった。その頃の格好といえば：相手がNPCで本当にラッキーだった。誰にも晒したくはない。

俺は手慣れた手つきでアイテムポーチを操作、バトラーの怯む間に素早く武器を持ち替えた。その武器は、今までプレイヤーを50人葬ってきた大鎌、ギルティサクリファイスを取り出した。その後すぐソードスキルの動作に入った。バトラーもそれと同時にソードスキル「スマッシュ」の挙動に入った。俺は飛び上がりながら三連続攻撃「クリムゾンブラッド」を使用、その攻撃は相手の攻撃を斧を弾き二撃目でバトルアックスを後ろに弾いた。そして、三撃目をバトラーの胴体に直撃させた。その威力はバトラーの体力をグリーンからイエローに持つて行った。

その時、終了のブザーが鳴り勝敗が決する。俺の体力もイエロー直前だが、なんとか止まり俺の目の前には勝ちを意味する『winner!』の文字が浮かび上がっていた。

俺は全く状況を分かっておらず、息を切らしながら呆然としていた。周りの人が何か言っているが俺には全く声が聞こえず、足は全く機能しておらず立ち尽くしている。気づかないうちに俺は胴上げされていて、ふと我に返った時には真上に放り投げられておりその第一声が絶叫だったのは言うまでもない。

騒ぎが収まったところ、過去最高の疲労により広場の隅で寝ころんでいる俺の元に傷の癒えたバトラーが歩いてくる。まさか：これが狙いだったか、すぐに腕が動かず寝ころんだままその不愛想な顔を見ることしか出来なかった。

「俺の負けだ。お前、虫が嫌いなのに人は好きなのか。ずいぶん変な奴だ。」

「よく言われるよ。で、何しに来た？この状態から俺をキルしに？」

「それも有りだな。いや別の話でな、俺みたいになってほしくなくてな。」

「俺はあんたみたいにガタイよくなりたいたいけどね?」

ふふつとお互い鼻で笑うが、すぐにバトラーの顔が険しくなった。どうやらふざけた話ではなさそうだ。何とか体を起こし、壁に体を預ける。あたりを見るとテントに灯が灯っており、空は紫色に覆われていた。

「俺は仲間を守れなかったんだ。とあるギルドに一度経験値を泥棒されて：気が立って報復した。その結果、奇襲を受けて俺のギルドは大半が死んでいった。俺はそのギルドを一人で片づけた。ただ怒りしかなく、PKも何も考えていなかった：人質も取られた。俺には関係なく、命も投げ一般市民のプライドも捨てきり、ギルドを一つ壊滅させた。残ったギルドメンバーは雲隠れ、俺の手元に残ったのはかつてギルドがあった土地と殺人者というレッテルだったのさ。俺は仲間も何も守れなかった。」

言葉が返せなかった。悪くいつてしまえば俺よりも酷かった。小規模だがギルドを捨てが、もしかしたら罪の重さだと俺と同等なのかもしれない。彼は信頼を殺した、俺はギルドを殺した。そう話すバトラーの顔はいつもと変りなく見えるが、声のトーンから明らかに心が動いていることが分かる。今までこんな話をしてくれることもなかった。

俺たちはデュエルを通して心を通い合わせることができたのかもしれない。今まで人から嫌われることでしかなかったPKがこの時からコミュニケーションの一つとして考えられるようになった。俺はバトラーに向き合い握手を求めた。バトラーが手を差し出す瞬間、宿泊者が慌てて走ってきたのはほぼ同時に準レッドプレイヤーとの歴史的握手はお預けになってしまった。

「お頭！大変だ!!ギルド解放軍が新米を公開指名手配しました!!」

「何…!?!解放軍はまずいな…!」

「解放軍…!」

ギルド『アイングラッド解放軍』はこのゲームをクリアするために

設立されたギルドだったが、噂によるとアイテムの横行、プレイヤーの酷使、さらにはプレイヤーの粛清を行っているとのこと。そのギルドについて目を付けられてしまった…

話によると、俺の抹殺で賞金100万コルが出されるらしいが、ギルド解放軍のことなのでいったい真実かどうかは全く分からない。が、オレンジの偵察組によると、俺の目撃情報が知れ渡っているせいか各層には、プレイヤーが危険を冒して野宿しているらしい。この件に関しては俺一人なら別に日常茶飯事で少し人が多くなるだけだが、今回は収容所の場所がバレてしまうかもしれない。それは収容所側も大問題だろう。

考え込む俺を二人が心配そうに見てくる。俺は決断した。

収容所を守る。

ここにいる人が全員悪者とは限らない。反対に普通のプレイヤーの中に悪者が潜んでいてもおかしくないこの環境。ここにいる全員が守られるなら…俺が悪になる。皆を本当の悪者と同じにしてほしくないのだ。

「と、いうわけで今までお世話になりました。俺をかくまってくれたり、仲良くしてくれてありがとう。この思い出…というか記憶は忘れません。」

収容所の宿泊者が集まり、ある者は涙目、ある者は拍手、ある者はいくつかアイテムをくれるものもいた。もちろん、その場にはいないものもいたが。宿泊者の中にはバラもいて、少しうつむいた表情で俺を見ていた。そして、我慢できなくなったのだろうか歩み寄ってきた。「リンネ…お前は面白かったよ。ここからいなくなるのがとっても残念だ。」

「バラ…あんたがいなかったら俺は虫に捕食されていたよ…感謝はしている。」

「虫やトカゲに怖がったり、身ぐるみはがされて帰ってきたり、ドツキりや色々…見てて楽しかったよ。」

俺は思った。こいつは悪者だ。俺は苦笑いを浮かべながら彼女を

憎んだ。わかってて止めなかったのは確実に罪だと思う。俺の中に怒りではなくイラつきがわいた瞬間だった。俺は歩いて収容所を後にした。デュエル直前にもう一度グリーンに戻った甲斐があり、とりあえず解放軍の拠点第一層を外し俺は十層辺りを拠点とすることにした。もうあいつらとは関係ない。これは俺の戦いだ。

俺は刀で語り合った相手と握手をし損ねた手をただじつと見た。現実で残るはずのその傷は、開いてみると傷跡は全く残っていないかった。

死神

真夜中、冬の寒さが体に刺さるこの頃。俺らは狙っている。石の上に座る残像、そこから漏れ出る感情、その背景に移る極上の獲物を俺たちは群れで狙っている。しかもその相手は俺ら50人に対し、たった一人だ。あんな狼一匹に何を苦戦したのかわからないが、この群狼戦術で絶対殺して見せる。仲間の一人がサインし、俺らは一斉に突撃した。月の光に映える狼に向かって。

俺は殺す。ただ切って斬って斬り殺した。慈悲も何もなくひたすらに切り捨てた。襲ってくる剣を避け鎌を振り、突いてくる槍は仲間同士打ち合わせ、なんどもやめろと言った。だが、やめてくれなかった。気づけば、俺の周りには遺品を意味するアイテムが散らばっていた。

收容所を出てから一週間、俺は『アイングラッド連合軍』から狙われ、解放された階層を飛び回っていた。お金にはまだ余裕があるものの実を言うと移動するための回路結晶が切れそうなのだ。アイテムを回収しながらため息を漏らしてしまう。ここ最近、毎日pkプレイヤーの対処に追われキル数は250人を達成、指名手配される理由が完全なものとなってしまい、正直メンタルが持たない。今收容所に戻ってもバラたちを巻き込んでしまう心配があった為に、やはり戻ることができない。アイテムを拾い終えた俺、リンネはまた、元の月の当たる石の上に座った。このまま、石の上で三年暮らしたい：意味が何だったか忘れたが。

石に座り相棒、ギルティサクリファイズを手入れしていると何か気配を感じた。ここはモンスターが偶々ポップしないレアな休息地であるので、気配がするといえば人間なのだがよく見ると驚きの物だった。

なんとそれは：中々遭遇しないレアな食材モンスターラグラビットだったのだ。暗闇に一筋の光が灯った瞬間だった。俺は腰からピックを取り狙いを定めてサイドスローからラグラビットに向

けて投射。が、惜しくも外れてしまいウサギは離脱してしまった。がつくり落ち込む俺にまた違う気配を感じた。が、何も見えない。気のせいと思ったその時、俺は最後のピックを先ほどウサギがいた場所に投げる。すると刺さったモーションが起こり、よく見るとピックが宙に浮いていた。

「…そろそろかくれんぼは終わりにして正々堂々出てきなよ。」

「…ばれたか…」

姿が現れ、森の中からプレイヤーが続々と出てきてその数は先程のギルドより少し多い80人ほどの人が俺を囲んだ。俺の後ろは崖でここから落ちれば命はない。

「また百万円で釣られたプレイヤーか…もうやめようよ、俺は殺したくて殺しているわけじゃないんだ。」

「嘘つけ…サブマスが言ってた。人の心が分からない殺人鬼だと。」

「なんだと…!?!」

そいつの顔をしっかりと拝んで、殺すならこのデマを吐いたクソサブマスをめつた刺しにして殺してやりたい…湧き上がる殺意を胸で押さえつける。

「お金が欲しいならいくらでもやるから帰ってくれ。」

「お金なんてなくても…全プレイヤーの敵なら関係ない。お前を殺す！」

すつごく意味がわからないが群れ達^{ハイエナ}は、俺に向かって一直線。が、いつものように、俺は剣を避け槍を避け時に人質を取り、時に鎌で斬りつけた。こんなことしか出来ないのかと、自分にも相手にも思ってしまう。俺はただ、静かにプレイヤーを狩っていく。四方八方から襲い掛かる武器を受け止め跳ね上げた上に薙ぎ払い全員の囲んできた10人のライフを一気にゼロにした。残ったプレイヤーは一斉に動きを止め、おびえた猫のようにこちらを見ている。

「お…お前…モンスターと闘えないのに…どうしてそんなに強いんだよ…!!化け物か!」

「よく言われるよ。俺はなーんにもないただのオレンジプレイヤーだし。俺は人間だ。ベータテスターでも何でも無いよ。」

「こいつはビーターなんかじゃ…し、死神だ…！この死神め…この世界から出ていけ!!」

上ずった声で男性プレイヤーが俺に叫ぶ、中にはアイテムを地面に置いて逃げようとする者もいる。

「死神…こつちの方がビーターよりも響きがいいかもな。」

つい笑いが込み上げてしまいその場で空を仰ぎ笑った。そうだ、ただゲームを始めただけなのに、人からものを受け継いだだけなのに、ただ楽しんでゲームやろうとしただけなのに、自分を変えたくてゲームを始めたのに、一体何が何だっというんだ。俺はただ笑い続けた。その間に他のプレイヤーが俺に襲ってくることはなかった。

「一度言っておく、武器を下して俺の前から退け。残った者は俺が抹殺する。それぐらいの覚悟があるなら残れ。」

全員に聞こえるように言った結果、全力で来た道を引き返していくプレイヤーの姿を拝むことになった。こんなこと言っただけで次はどうしようと思ったその時、プレイヤーが巻き上げた埃の中から一人プレイヤーが飛び出してきた。そのプレイヤーは短剣を俺に突いてきたのだが、隙があり過ぎた。使いなれない武器なのか、短剣なのに上から振り降ろしてきた。俺はそれを曲刀で弾き飛ばしそのプレイヤーを抱きとめた。面を確認しようとした顔を見つめ、まだ幼い少女だったのである。身長から見て小学6年生か、髪はショートカットでこちらをまだ睨んでいる。

「おい…お前じゃ俺を殺せないぜ。俺がその恐怖を味合わせてやるよ。」

その少女はひっ声を上げそのまま気絶してしまった。年齢差別とかそんなんじゃないが、流石にこの子を殺すことは出来ない。殺したら…何か殺人以外で罪が着せられる気がする。一度ぐらい、過ちを赦してやろう。大人かもしれないけど、子供なら教育しなきゃいけない。俺は気絶した少女を抱き上げ、第一層はじまりの街まで飛び正門前に降ろしてやった。ここだとモンスターも弱いし、この子のレベルからして二晩ぐらいなら耐えられるだろう。念のため残り少ない回路結晶を彼女のポーチに入れてやることにした。ちゃんと、仲間のとこ

ろ戻れるといいな。俺ははじまりの街を後にした。

死神になつてから一週間が過ぎ、俺の移動手段は徒歩しかなくなつていた。襲つてくるプレイヤーこそ減つたものの、実のところまともな食事がとれていない。毎日、調理スキルのない俺が作るスカペンジトードの生肉塩味を俺が食べる。とつてもまずい。現実でこんな生活してたら、下痢が止まらず死んでいるであらう…

そんな昼、俺に一通のメールが届いた。その送り主は…かつて共に戦っていた仲間のミラだった…

見放されたもの

その送り主は：かつて共に戦っていた仲間のミラだった：フレンドリストを確認すると、一人だけプレイヤーの名前が。メッセージはフレンドでない就送れないはずなのだ。まだ、つながりを得ていなかったことに軽い恐怖を感じる。メールの内容を確認してみた。

『お前と話がしたい。指名した場所に来い。』

メールには添付画像が書いてあり、そこには何もしかけもないフィールドが描かれていた。俺はいつでもオレンジプレイヤーなので一応配慮はしてくれたのか、俺は怪しみながらそこに向かうことにした。が、前回も言った通り回路結晶が尽きたために歩いて向かうしかなく、ゆつくりと向かうことにした。

はじまりの街から歩いて第十層の途中、第五層を歩いているとき、またモンスターに出会った。今は何とかスライムかりザードマンなら倒せるようになったが、目の前にいるのはその類ではなかった。目の前にポップされていたモンスターは：ビッグスパイダーとペネントだった。うねる触手と飛びつく糸、恐怖に俺は絶叫し、疲れたことを忘れ、フィールド内を全力で駆けまわった。朝早い出来事なので、運よくほかのプレイヤーに見られることがなく事を収めれると思う。モンスターのレベルを確認したら、多分俺より低いはずだが次奴らの姿を見れば、俺の体がマヒして暫く立ち上がれなくなるだろうモンスターが諦めるまで俺は全力で駆けた。

すると、後ろで何かはじけ飛ぶ音がした。プレイヤーも巻き込んだのだろうか：それならすまなかった。だが、これだけは俺の犯行じゃない。モンスターのせいなのだ。恐る恐る後ろを確認してみた。直後、俺は絶句する。俺の目に映ったのは俺の予想をはるかに超えていた。昨夜、俺をキルしようとした少女だったのである。

その少女は昨日と同じ目つきで立っていた。が、何故か殺意は全く感じられない。モンスターが消えたことに安心し、とりあえず呼吸を整え彼女を見た。暗くて見えなかったベージュのポンチョにショートパンツの装備、やっぱり低い身長、彼女は確実に大人ではない気が

する。彼女は俺に近づいてきた。殺すつもりならまた対応して逃がすつもりだが…彼女はそんなつもりはなさそうだった。

「き、昨日は…これ、ありがとうございました。その…」

「気にすんなって、俺はこんな事してんだから殺されそうになるのは当たり前だろ?」

「その…私仲間がいないんです…」

…ん?なんだって?急いで彼女のステータスを見てみるが、ギルドに所属していない。なんてこつたい、こいつは昨日あの集団ギルドのメンツではなく、はぐれで俺を殺しに来たのか…度胸はあるな。

「もしもの時に使えよ…これは俺からの和睦品だ。」

「ち、違います…その…私と一緒にパーティ組んでくれませんか?」

「い、いや…俺はオレンジプレイヤーだから、お前も狙われる…やめとけ。しかも俺には行く場所があるからな。」

「そんな…どこに行くんですか…?」

「ちよつと知り合いに呼び出されてな。第十層に。」

「だめです!!」

急に手を引つ張られ、俺はバランスを崩してしまう。何すんだと怒鳴りたかったが、相手は子供だ。一息飲んで我慢した。何故と聞き返すと。神妙な顔つきで俺に話してくる。

「この一週間のいづれかの日に第十層にレッドプレイヤーリンネを引きずりだす。ここで討伐に成功したら手配金を倍額払う!!っていうことがギルド解放軍から通知されているんです…送り主は?」

「ミラっていう普通のプレイヤーだけど…」

「その人…解放軍のサブリーダーなんです…!キバオウって人と二人で何かしている人なんです!!」

聞いたことがある…キバオウは確かビーターという単語を初めて発し、その後解放軍の前身、ギルド開放隊を設立した男…そこにミラは所属している…約束なんてはなつから守るつもりねえじゃねえか…が、彼女も怪しい。これがデマだったら俺はミラの怒りを買ひ、敵を増やしてしまうきっかけになってしまう。悩む。

「まだ、ミラさんにはリンネさんのメッセを受け取らない限り場所を

特定できていないと思います。返信せずにフレンドを解除した方がいいと思います。」

「本当か？腹いせで俺殺そうとしているんじゃないのか？」

二人だけのこのフィールド、お互い譲らず相手をじーっと見つめる。打開策はないものか…まともに休めていないためにため息がい漏れてしまった。

「あら…リンネじゃないか。平和にしているねえ…その子は」

「バラ！」「さん！」

そこに立っていたのはバラだった。不思議そうに俺らの顔を見てくすくす笑う。そんなに不思議なのだろうか…そんなことより俺は一つ気になり、第十層のことについて質問した。囚人達をまとめ上げているからもしかしたらと思いついて賭けてみた。

「第十層…ああ、解放軍だろう？リンネ、この少女が言っていることは本当だ。十層には様々なプレイヤーが配置されていて、まるで何か狙うような目つきだったよ。」

「なら、こいつは信用していいんだな？」

「私が言うんだ、いままでお前に嘘をついたことがあるか？」

それが嘘なんだけどな。とりあえずバラと彼女を信じ、ミラとのかわりを完全に切った。もちろん返事など返ってくることはないが、また俺から何かが消えていった気がした。

俺たちはバラと別れた後、歩いて第四層まで戻った。歩く途中に自己紹介をし、彼女の名前はアモネということが分かった。彼女が俺のカルマクエストを手伝ってくれたおかげで久しぶりにグリーンに戻る事ができた。が、町の観衆の目にはオレンジプレイヤーに映ったらしく誰も俺に返事してくれない。古びたカフェに入り、俺はコーヒー、彼女はココアを注文した。時刻は現実の休憩時間12時を指していた。

「ところでバラと知り合いなのか？」

「はい、あの人はだいたい20層で宿屋をやっているんです。ちょっと高いですけどたくさんの方が休めてとつてもいいですよ？」

「へえ…意外だな。後、何故俺を殺そうとした？」

「え、えっと…」

アモネは周りをきよろきよると見て、何か確信が持てたのか、俺に向き直った。

「元々、私は友達と一緒にこのゲームしていたんですよ。けどある日…白装束ギルドに殺されたんです。目障りだからと言われて…」

「白装束…だから俺を？」

「いや、白装束ギルドは私の仲間を殺して…街で合う度私を脅してくるんです。だから、やめてほしいって言ったら、100万コルで見逃してやるって言われて…そんな大金もっているはずないからクエストを探していたらリンネさんが指名手配されていたから…」

「だから俺を殺りにね…なるほど。」

かなり困った要件である。彼女は白装束のギルドに狙われている。一応彼女のレベルは50だが、考えるに体格やレベルでアモネを上回っているのだろう。が、俺がこの件に関与すると彼女の今後を狂わせてしまう。死神とも行動した死女神とか言われたらどうしよう。考えただけで頭が痛くなりそうだ。無駄な殺生を放っておけないが、放らないといけない事態に苦しんでいた。アモネはココアを飲みながら外を眺めた。その顔には先ほどまでなかった寂しさが浮き出ている。

このまま一日を過ごし、第四層で宿を取った。ここはなぜかベッドではなく布団だったのは不満があるが、スープやパンなど、久しぶりに生肉以外の食事をとることができ、非常に満足だ。

そしてその深夜アモネが寝たことを確認し、俺は宿を後にした。彼女の名誉を選択した。俺にはやっぱりだめだ…俺は仲間を失い、人望を失い、命を奪っているんだ。彼女を救うなんて、彼女を助けたら彼女に傷がついてしまう。死神なのに、心を傷つけることが出来ず胸につつかえる何かを持ちながら第四層を後にした。

夢い夢

アモネと別れ三か月、季節は冬を越そうとしており、徐々に穏やかな気候になってきた。俺はグリーンプレイヤーを維持しいろんな街を歩き来し何とか身を隠していた。その間には特に変化もなく、風の噂も俺のことは忘れていた。

ガムかよく分からない粘着質の物を噛み続けながら雪原を歩いてきた。今は特に目標もないのでここ最近、雪原のフィールドを歩きまわっている。未だフィールドのプレイヤーは俺を見ると足早にその場を離れていくのでいまだ俺のフレンドには知り合いはゼロ。お金はあるのに誰も近づいてこない…となると少し寂しい。雪原を歩き、草原を歩き、湿地を歩きまた草原、目的のない俺はまるで廃人のような行動をしていた。

と歩き続けることに疲れを感じず早三時間、運よくモンスターとの遭遇はなく俺はある所にたどり着いた。

それは俺が今まで何度も世話になったところ。俺が初めて気楽に思えた場所。時に罨にはめられ、いたずらをされた場所。

バラの収容所だった。

何故来たのかわからない。分からないが自然と俺の足はここを示していた。もしかしたら死に場所を求めてきたのかもしれない。暫く立ち尽くしていると、後ろから足音が聞こえた。それは俺も聞き覚えがある…地面にめり込む多数の足、不気味に笑う筋…恐る恐る後ろを見てみると…そこには収容所に入るきつかけとなった木型モンスタートレントが俺に向かって口を開いていた。俺は全力で駆けだす。そして間合いをとった。

「やはりどの季節でもお前は苦手だよ馬鹿野郎！」

と、逃げながら叫んでみるが、トレントは耳も貸さずに両枝のツタを俺に向けて叩きつけてくる。俺を掠めつい俺の口からは悲鳴が上がってしまう。が、このままだと死んでしまう。いくらリジエネが入ってもこのモンスターに捕食されてしまい結局HPはゼロになっ

てしまう。俺はどうしようもないこの状況で全力でどうにもならぬ
い子の状況を叫んだ。

「俺はまだ…死にたくない!!」

それと同時にどこかから大声をあげこちらに向かってくる何かを
確認した。誰かは全く分からなかったが…俺は覚悟した…モンズ
ターよりプレイヤーに殺されるならもう悔いはない…と思った刹那、
その群れはトレントに直撃し、攻撃を開始した。地面にへたり込んだ
俺はその姿をみて呆然とする。集団で一体の敵を襲うその姿はまる
でどこかのカードで見たような傭兵部隊のようだった。

トレントの抵抗むなく空気になっていったところでその集団は
俺のところに歩いてきた。が、俺は相手をする力も気力も何一つ残っ
ておらず、気づけば見覚えのあるベースキャンプに運ばれていた。

「ここは…夢か…?」

「お頭!新米が目覚めましたぜ!!」

「なんだと!?!そいつを逃がすな!!最悪の場合麻痺毒でも塗っとけ!!」

「なんでそうなるんだよ!逃げねえよ!!」

二十秒でわかった、これは夢じゃない。夢じゃなかったこの瞬間…
俺は跳ね起き突っ込みができるほどに体力が回復した。が、叫んだ直
後、俺に向かって何かの大群が土埃を上げ俺に近づきやむなく俺は逃
げることとなってしまった。わき目も振らず逃げ続け撒いたと思っ
たら俺は何かと衝突してしまった。それは絶妙に柔らかく、顔と左手
に触れるそれを右手で握った…柔らかい…

「私の手が後数センチ動くだけであんたは刑務所行きだよ。」

「もふ…ふあっ!?!ごめんさない!!」

いきなりの冷たい声にちゃんと謝ることもできず思い切り顔を上
げる。その声の主はバラだった。いつもの軽装備なのだが…武器と
上着が地面にドロップしており、下着だけというセクシーな状態に
なっていた。そのバラの顔はあまりにも恥ずかしかったのか頬を赤
らめている。普段息でもするように下品な言葉を使うバラが恥ずか
し狩っている光景はあまりにも新鮮だった。バラを起こして新しく

できたと思われる宿長室の小屋に二人だけで入った。その中には非常にシンプルに、木製の机とイスがあるだけだった。

「あんた…あの子はどうしたの？」

「置いてきた。俺といっても危険が及ぶだけだし、俺と一緒にいたら損しかないだろう。死神の近くにいっても何もいいことないさ。」

「…あんた馬鹿だね。」

「…は？」

バラは席を立つと小屋を飛び出し収容所外に飛び出していった。俺はバラの言った言葉の意味が全く分からず、ただその場に立つ尽くしていた。

目覚めると、昨日の小屋の中…そのまま寝てしまつたらしく机によだれが垂れている…だらしない。立ち上がり小屋の外に出てみる。そこには…囚人が群れており…その先頭には、俺が置いて行ったはずのアモネが立っていた。俺は絶句した…何故彼女がいるのか俺にはわからない…何故ここがばれたのかもわからない…俺が戸惑っていると、アモネは一步足を踏み出すと俺に向かってナイフを突きつける。

「リンネさん…何故置いて行つたんですか。」

「それは…お前を……」

「私は傷つきました…死神とか関係ないです。私は…：貴方を許しません。」

その直後目の前にはデュエルの申し込み画面が表示される。相手はアモネで、一撃決着モードでの対戦内容になっていた。

「もしこれで私が一撃でも攻撃を当てれたら…私とパーティー組んでください。貴方の特技の戦いで…私が勝ちます。」

「…やれるもんならやってみろ、クソガキが…！」

デュエルメッセージを受理し、カウントダウンが始まる。

3…2…1…

「DUELSTART！」

このルールでは相手の体力を黄色まで持っていけば勝ちだ。俺は

両手斧の最大威力を誇る「ダイナミックバイオレンス」のモーションに入る。それに対し彼女は正面からソードスキルのモーションなしに突進してくる。このままだとソードスキルをぶつけて俺の勝ちだが、俺は抑えきれない、黄色ゲージを越えた後も戦わなければ俺はどうにかなってしまふ……彼女の地点に俺は鎌を振り下ろした。が、そこに彼女はおらず釜は地面に炸裂、ソードスキルは空振りし、代わりに左腹にダガーナイフが刺さっていた。俺はとっさにナイフを引き抜こうとするが体全体が痺れ、手先から針に刺されるような痛みに襲われる。目の前を見れば俺のHPバーの下にはパラライズとポイズンの文字が表示されて……俺のHPバーを徐々に蝕んでいた。

アモネは俺に歩いて踏みよると、俺の腰から曲刀を奪い突きつける。後15秒もすれば……俺の麻痺は解け再び攻撃に入れる。だが俺はもう死んでもいい。彼女の攻撃を受けて負けても……もういい……全て俺が奪うんだ……

と、いきなり音が鳴りデュエルが終了する。結果を見ると俺の勝利になっている。俺は麻痺の体のままウィナー表示を見たがその先にあったのは、曲刀を片手に膝末いているアモネの姿だった。アモネの体力は黄色ゲージギリギリで止まっており、胸にはアーマーを貫通した傷跡が痛々しく残る。アモネは自分を刺して敗北したのである。

「俺……を……あの場で刺せばお前の勝ちなのに……」

「……出来るわけ……ないじゃないですか……」

「死神の俺が嫌なんだろう……俺は無防備なのに……」

「刺せるわけじゃないじゃないですか!!何故貴方を刺さないといけないんですか!!」

アモネは涙と共に曲刀を放り投げ俺から距離をとる。俺は麻痺と毒が治り、フラフラ立ち上がるとアモネをじっと見返す。アモネにはまだ涙が流れていた。野次馬も黙って見守る。

「私は……死神やオレンジの貴方じゃない、リンネというプレイヤーが純粋に好きになった……あの夜、貴方は私を見逃した……自暴自棄になっていた私をもう一度見つめ直させてくれた……そんな人を殺す理由なんて……私にはありません。」

アモネは笑顔で俺を見つめて来た。あの出会いの時のような殺意は一切なく、純粹に試合に満ちた目で俺を見ていた。その瞳を見てから俺の中からだんだん殺意が抜けて行く気がし、この戦いの意味が分からなくなり、そのまま地面にへたり込んだまま時間が経って行った。完全に俺の負けだった。

アモネに手を取られ立ち上がると、そのまま握手に変わって行く。お互い正面から顔を見るが何故か恥ずかしい。顔が熱く感じるが、恐らく彼女もそうなのだろう。頬が少し赤くなっている。周りから冷やかしが飛んで来るがこの後どうすりやいいか俺は全く分からない。とりあえず、今後のことを提案してみる。

「アモネ…お前は どうするんだ？俺はここにいてもいいけど。」

「リンネさんのそばに いさせてください…一応、自殺しないのとモンスターから守る用心棒として。」

「だがお前はグリーンだから…俺はここには入れなくなるな。」

「その心配は必要ありません！」

と、アモネはその笑顔のままナイフで俺の肩を斬りつけた。加減はしていると思うが、カッターナイフで指を切ってしまった感覚に似た痛みが肩に走る。血こそ出てないが、切られた部分が赤く残っている。周りがざわめく中アモネを見ると、アモネのステータスがオレンジ色になっていた。そう、アモネも…

犯罪者になってしまったのだ。

「これでリンネさん…いや、皆さんと一緒にですからこれからも宜しくお願ひしますね？」

彼女はナイフをしまいあどけない笑顔のまま頭を下げた。ざわめきが止まり、代わりに恐怖という戦慄が走る。バトラーやその手下たちもいつもとなく顔色が悪くなっていた。バラを見ると笑いをこらえながらこちらを見ている。ああ、殴りたいあの笑顔。アモネは俺の腕に抱きつき上目遣いで俺を見ている。バラを殴りに行くことはできず、俺は周りの冷やかな視線を受けることとなった。

やがて集団は解散し、無事収容所への復帰を果たしたところで、ベースキャンプのシートに横たわる。懐かしい草の香り、夜風の冷た

さ、燃える焚き火：最高だ。ただ一つ違うのは背中にアモネがひっついていてることだ。嫌ではないのだが、今まで一人っ子だった俺は慣れず、何度も体を揺すり引き離すがその度アモネもくっ付いてくる。何か視線を感じるのだが恐らく他の人から見られているのだろう。とても恥ずかしく、嫌だ。そして：寝にくい。

「なあアモネ：バラがいるんだろう。同じ女性だし、あっちの方がいいだろう？」

「私、人と一緒に寝たことがないしいじやないですか。これだったらリンネさんが襲われないし、索敵スキルを持つ私が先に気付けます。」

「流石にそれはな……」

「どうしても嫌って言うなら仕方ないです：離れて寝ますから……」

厄介なことを回避したのでとりあえず一緒に寝ることにした。丁度アモネがいる背中に風が当たらないのでそれでよしにしておう。いつもより安心して寝る子ことが：できたのかもしれない。気づけば朝になっていた

一時の休息

レベルがようやく20を超えフィールドも上階層になるにつれて春になっていくこの頃、今までとは違い俺とアモネはPKではなく陽気な天候の中旅をしていた。プレイヤーが誰も襲ってこない、アイテムも十分、これならこれだけそろっていたらもう困ることはなかった。これだけなら。だが季節は春：今まで冬の世界にいた時とは違くて…

「あ、アモネ！いい加減こいつ何とかしてくれよ!!気持ち悪い!!」

「まずは私を一人にした罰ゲームです♪一匹だけでいいんですよ♪」

虫に追いかけられる以外は最高なのだがな。一種のクエストとは言えいくらクエスト難易度が低かったとしても、虫が足されるだけで命の危機に死活問題と化するのだ。クエスト開始と同時に俺はこの草原に放り込まれ、それと同時に目覚めたカマキリのモンスターに追いかけまわされているのだ。マージンはあるのだが、振り向いたら最期だろう、捕食される。

恐らく五分くらい走っているのだろう、息が切れ捕食へのカウントダウンは一刻と迫る。俺は一つの可能性に欠けて実行した。走る向きを変え、アモネの方へ駆け込む。するとカマキリも方向尾を変え再びこちらに走りこんできた。アモネは俺よりレベルが高いからカマキリを倒してくれるだろう。そう思った。

しかし彼女は、先ほどまで笑っていたアモネも血の気が引き、真っ白の顔で絶叫しながら全力で駆けだした。

「ちよ、アモネまで逃げてどうするんだよ！あいつどうするんだよ!!」

「虫だけは無理なんです!!虫だけは絶対に無理です!!」

「お前のレベルだと攻撃当てるだけでこのクエスト終わるだろ！一回でいいから頼む!!」

「これはリンネさんのクエストなんですよ！お金は全部あげますからクリアしてください!!」

「俺は死神だ：俺の専門はプレイヤーだアーーーーー!!!」

この悲痛な叫びにより他のプレイヤーに助けてもらったもののおかげに『解放軍』に報告され、俺たちの休日是一日で潰れた。

「どうするんですか、あんなこと言うから寝床まで失ったじゃないですか。」

「知るか！自分もできないクエストを受理すんな!!」

他のプレイヤーが第50層が突破したことで始まりの街や25層の上をいくサービスを受けられることとなった。50層の料理は他の料理と比べ物にならないほど美味しく、街並みも綺麗。商品も安くより強いものが買え生活が楽になった：気がする。まあ、自分たちがやったわけではないがこの層をじっくりと愛した。

目の前のハンバーグを頬張るだけで先ほどの怒りが一瞬にして消え去り和やかな気持ちになる。彼女も同じようにパフェを食べるその顔に恨みの感情は一つも残っていないかった。結局このお題は俺が支払うことになり俺は不機嫌になってしまうのだが。

改めて、50層は広い。宿の数も格段と違う。ということでもめげずに宿を探し続けた。が、体は正直で走った筋肉痛が開始していた。そんなものはステータスに全く影響を与えないが、恐らく気の問題だ。宿がないのと虫に追いかけられたシヨックがダブルで俺の体にボディーブローをかます。前を見たら幻影か、虫と宿が俺を指さしてくすくす笑う：限界だった。

と、気づけばアモネがいなくなっている。フレンドを確認したが町の中にいることが分かる、だが現在地を見るまで俺の気力は残っておらず目の前の柱に頭を直撃させてしまう。もう、このどうしようもない気持ちはどうにかしたい：と思うと俺は泣いていた。泣きたいと思っていないのに泣いた。すすり泣き、感情高ぶり、わめき泣く。周りの目などどうでもよかった、ただこの気持ちを消化したかった。

と、その時間き覚えのある声が近づくことに気づく、幼げのある高い声、その方向を見るとポンチヨを見に纏うアモネが駆けてきた。続いて俺をおんぶして再び走り出した。

「見つかりましたよ！私たちを泊めてくれる宿！」

「どうせ：：キャンプとかいうんだろ：：今日は：：諦めて収容所行こう

……」

「違うんです！安くてベッドもあつて食事もついてきて尚且つ朝はお姉さんが起こしてくれるそうですよ!!」

「何!?それは…」

アモネの目の色がすぐに変わった。これは…俺を殺そうとしてきた時の目、要するに怒っている…今俺はアモネの背中の上。ダメージが入らないものの彼女の背負い投げは確実に俺のステータス外に影響を及ぼすだろう。

「…は…要らないな。ベッドに寝れるなら早くい…」

「ただし…少々訳ありで…」

というわけで層をいくつか飛び第5層、その宿に来てみたが…噂とは違い現実でのホテルと同じような構造になっていてや住み心地はありそうだと確信した。フロントはNPCがしており、掲示板にはいろんなプレイヤーのコメントや依頼が載っていた。

食事の時間となり昼に食べたものよりかは量は減ったものの、しっかりと食事をとることができ、満足して俺は部屋に戻り風呂の順番を待った。部屋は机とトイレ、ベッドだけという簡素なものだったがこれが安さの秘訣なのだろう。ログには感謝の言葉がたくさん記載されている。噂なんて忘れてベッドに横たわったのとアモネの悲鳴が聞こえたのは同時だった。

悲鳴が聞こえた方向へ向かうとそこは…風呂。アモネは入浴中だったのだ。風呂は四部屋で共有なので誰が入っているかわからなかったが…鍵でも閉め忘れて裸を見られたのか、真相を確認に許可をもらおうとしたがアモネの索敵能力は俺をあつさりとりえる。

「り、リンネさん、ついに人を殺すだけでなく…他の罪でも犯しに来たのですか…?!?」

「ち、違う！とりあえず今の悲鳴の理由を服替えて風呂上がって説明してくれ!!」

「は、裸を見るつもりですね！見たらこんどこそ貴方の命はないですよ!!生きても貴方は社会的に死にます！絶対死にます!!というかも今日今日に食われて死んでしまえばよかったですあーなん

で生き延びたのでしようこのような犯罪者を何故助けたのでしようこのようなやつはアリとかムカデなんか捕食されて死んでしまえこの」

「風呂の中で服装備したら問題なくないか？」

急にアモネの罵倒は泊まり風呂場の中が光ったと思うと、脱衣所を遮るドアから顔を赤らめたアモネがうつむきながら歩んできた。普通に見ていると恥ずかしがっている御年頃の少女に見えるのだが、それに加え体の周りには湯気とともに殺意を纏い、水の滴る髪の間から俺を一睨みしている。とつても怖い。

が、アモネは何か気付いたように俺を風呂の中に押し込む。抵抗もできず俺は風呂に入ってしまったが驚きの光景に俺は足を止めてしまう。シャワーとソファアールほどの大きさがある湯船があり風呂も狭くなく広すぎないどこにでもありそうな浴室だ。が、一つだけ見たことのないものがあつた。その部屋にある鏡にはステータスメッセージ：ではなくただのメッセージ。だが、それは赤く血のようなもので書かれていたためにダイニングメッセージにも見える。その内容は『今宵、貴方たち一人を殺す。どのようなことがあつても一人だけ殺す。搜索は無意味。命を神にささげよ』：こんなのに驚いたのか？まだまだ子供だな…」

「な、急にこんなことがあつたら誰だつて驚きますよ！しかもお風呂ですよ!!誰だつて体を守ろうとしたりしますよ!!」

「またまた…子供だな…」

「自分だつて同じことがあつたら絶対同じように驚きますから…賭けてもいいですよ。」

くすくす笑いアモネを馬鹿にして部屋に戻る。フラグでなければいいのだが…と思いい机に座った…瞬間目に赤い何かが飛び込んでくる。その勢いにただ叫び声しか出なかつた。その悲鳴を聞き、アモネが武装を終わらせ部屋に飛び込んできた。俺も叫び終わった後、深呼吸をし部屋を確認したところ誰もいない。そこには先ほどと同じように赤い字で同じことが書いてあつた。その様子を見たアモネは俺を笑うことなく呆然としていた。そう、この宿の噂とは…

『毎日プレイヤーが謎の不審死を遂げる呪われた宿』

宿の主はNPC、何物にも弄られた形跡もなく最初から宿屋として営業していて、他のプレイヤーの話によると宿全体が広くさらに安いためにギルドで使うことが多かった。が、毎日の晩にあるメッセージが届く。それは誰が送り主か分からないメッセージ。止まっているプレイヤー全員に届いた後夜が明け朝になる。次の朝、プレイヤーが一人いなくなっていたという。生命の礎を確認するとそのプレイヤーは死んでいたという…が手口は分からず運営にも連絡するももちろん返答はない。そしてその謎を求めてオカルトマニアや熟練のプレイヤーが泊まりに来るらしい。

そこに俺たちは泊まっている。今日の宿泊人数は8人。この八人のうち一人は死ぬ…吐きそうな気持の中…眠った。

次の日、何とかこの世界で目覚めることができ、フロントへ向かったところ昨日宿泊していたプレイヤー達だろうか、丸い机を囲んで何やら話し合いをしている。後ろを見ると寝起きのアモネがアイマスクをしたまま寝ぼけて歩いてきた。そんなアイテムがあるのかと突っ込みたいが、今はそんなことはどうでもいい。

机に座っている一人に目で呼ばれ急ぎ足でその会議に参加する。が、そこには赤い禍々しい字で見たことあるようなことが書いてあった。

『この中にお前たちを狩るプレイヤーがいる。もし命が欲しければ追いつて。』

何か身に覚えがある出来事だが思い出せない。この話し合いでまた一人仲間が消える。要するにこの中にプレイヤーの皮を被ったモンスターがいる…生き残りたければ自分の身の潔白を証明しモンスターを見破る。全員が敵、これじゃせっかく休みに来たのに心理的にまた闘わなくてはならない…あんまりのことにため息が出てしまった。

「リンネさん…これ私やったことあります!」

「バカ!お前が犯人でもここで言うな!!」

「違います!!これは…ゲームなんです!!現実でも遊びとしてやったこ

とがあるんです!!」

小声ながらすごいことを言おうとしている。俺もあと一步のところまで出ているのだが…と、そんなことを話していたら机の連合軍たちに睨まれてしまう。

「おい、お前がやったんだろう。元犯^{オレンジブレイヤー}罪者。どんな奴でも殺すことは知られている…」

「いや待ってくれよ！元々俺は自発的にキルはしてないし、最近はずっと穏に過ごしているし、もう一匹狼じゃない!!」

「狼…私わかりました!!」「俺も分かった…」

「二人狼ゲーム」

ただの戦略ゲームが…現実での平和な娯楽が、この世界で開催されること…平和な『遊び』は一瞬にして『殺人者』の遊びになってしまう…俺らは命をかけた遊びに挑む、自分たちの命を守るために。

白い真実

人狼ゲーム…とある村の村人の中に一人だけ人狼が混ざり…続々と人を食らい尽くしていく…その前に人狼を追い出せたら勝ち、食いつくされると負けという本来なら想像上で行われるゲーム…が、この世界では簡単に現実的なものとなってしまったのだ。

今俺たちは人狼ゲームという朝のフェイズで話し合いを進めている。この流れに仕向けたのも人狼だろう、いったい何を考えているか全くわからない。緊迫した宿屋の中で朝会は始まった。

「なんでこんなことに…！」と、仲間の死にかなり悔しがる細身の男シヤル。

「もうこんなところ出ていこうよ…！」恐怖でその場から動けない少女サラ。

「いや、確か過去の噂ではゲーム中に退席したプレイヤーは死ぬと言っていました。死んでもいいんですか？」冷静沈着な男性キンノ。

「アリスが殺られたんだ…きつと相当な手練れなんだ…!!」恐怖と落ち込みがよくわかる女性ボーイツシュな女性シューイ。

「なんなら…俺が出会ったらぶっ飛ばしてやるぜ!!」怒りでどうにかなってしまうた大柄の男ジムテ。

「まあ…最初は昨日の夜誰が何をしてたかお互い話し合おう？」とりあえず穏便に話を持っていきたい俺リンネ。

「そうですね…私から話します。」目つきが変わり、真剣な表情のアモネ。

ア「私は…あのメッセージの後、怖くて部屋に籠ってました。でも、その時にサラちゃんも部屋に駆け込むのを見たんです。」

サ「は、はい！もう出ていきたかったんです…死ぬような思いで、無事を祈って寝ました…」

リ「ふむ…他には？」

シヤ「俺は副リーダーのジムテと夜の街に繰り出していた、情報収集にな。」

ジ「そうだな…より多くの情報を集めるために夜の街で人と話し

た。ほとんど同じ情報だったがな。」

シユ「私はトイレで起きて、宿屋内を歩いたんだ。すると…大柄な男の人が見えたんだ。その後は知らないんだけど、トイレから出たらアリスちゃんの部屋が開いていたんだ。」

キ「アリスさんの動きが分かれば…犯人が分かるのかもしれないね…私は部屋で寝ていました。朝起きると、皆集まっっていて、この騒ぎになっていたんです。」

一通り情報は集めた。聞いたところ怪しいのは夜中に行動していた二人…シユーイの発言が本当なら二人は外に出たことが確定する。

シャ「おいお前、お前は証拠がないな…アリスを殺したのはお前だな？」

リ「い、いや…俺だってアリバイがある！俺も怖くてねたんだ!!」
…が、誰も肯定する様子は全くない。人狼ゲームではこの後一人住人を追い出し、運命の時を待つ…ということは今の流れだと信ぴょう性のない俺の発言は嘘と思われる俺が追い出されてしまう。この中に嘘をついている狼がいるんだ。万事休すか…

キ「…ログには二人が入った記録がありません。」

ジ「昨日は俺等は帰ってきていないな…」

シャ「確かにそうだ。他の階層にも情報を聞きに行ったからな。シユーイ…お前」

シユ「ま、まさか私だと思っているの？寝ぼけていたから私は…」
リ「けど、俺が来た時も扉は閉じたままだった、人狼は嘘しかつかない…シユーイ、お前じゃないのか？」

と、そこに不気味な通知音が鳴る。机の真ん中には『追い出スプレイヤーを一人選べ』と書いてある。空気は一段と冷たくなり緊張が走る。シャルの合図によって同時にプレイヤー達は指を指した。

俺は目を開けそれぞれの指を見る。俺の方向には指があつたが…一本だけ、他の六本は全てシユーイに向いていた。彼女は涙目で顔を隠し泣きじゃくる。

シユ「どうして私なの…！いままでみんなと冒険してきたじゃない！この死神が!!」

シャ「確かに死神も十分怪しいが、お前の発言が合わなかったんだ……すまない、先に外に出て待つていてくれ。絶対迎えに行く。」

顔色を変えずにシャルは言い切るが、その反面信じられないといった表情で皆を見ていくシューイ。特に俺をにらむときの目はとても憎悪が籠っていたのだろう、殺意が感じられた。

そしてその晩、荷造りをして外に出ようとすると通知音がした。いきなりのことで荷物をすべてドロップしてしまった挙句、しりもちもついてしまった。案の定部屋の机の上にメッセージウインドウが浮き上がっていたのだ。『ゲームはマダ終わらない……今宵モ夜がやつてくる……』

何故！間違いなくあいつは人狼だと思ったのに、インチキでもしているのだろうか。部屋で考え事をしているときにすごい勢いでノックされ、絶叫してしまった。ノックの主は分かるのだが、状況が状況なので心臓が爆破すると思った。

「リンネさん！ジムテさんが……」

あの大柄野郎か、俺はアイテムを適当に書き集め部屋を出た。朝話したテーブルにはジムテが座っている。俺はジムテの向かい側に座り、ココアを頼んだ。

「ジムテ……お前何するつもりだ……」

「俺が人狼でないことを証明する。俺が人狼を殺す」

「やめろ！このルールにお前は……！」

「俺はこのギルドのガーディアンだ、そんな簡単に死なないさ。接触したらリーダーにメッセを送ろう。そうしたら明日の朝にでもシューイを引き連れてここを去れる。」

決意は固かった。彼の装備は最大まで高めたヘビー系統の装備をしている。これはボスモンスターの攻撃を食らっても最悪体力を半分で止めることのできる特殊効果付きだ。大丈夫だと思うが……相手の……この主催者はどうやってプレイヤーをキルしているのか全く分からない。ここに居るのは女性二人と男性四人。ハラスメントコードに引つかからない女性なら男性をキルすることができるが……どちらとも発展途上のため男性を運ぶことはまず無理だろう。それなら男

性だが…先述の理由によりまず殺害は無理…となると一体なんなのか。

「俺は今日もここに残る…事を大きくしたくない。」

「そうか…もしプレイヤーを捕らえたら外の掲示板からお前たちに通知するよ。」

「わかった。無事を祈っている。」

お互いうなづき、それぞれの方向へ向かっていく。俺はジムテを信じている、それは彼も信頼しているのだろう。そうでなければここまですで俺に作戦を話してくれなかつたはずだ。ゆつくりと推理をしながら部屋に入り寝ころんだ。

最初のプレイヤー、アリスは夜中に殺害されたのに朝集まっていたプレイヤー達にはオレンジマークはなかつた。もともとここはオレンジ禁制のエリアだ、カルマ回復のクエストは最低でも半日かかる。ということは他殺、とも考えられるがここには夜チェックインしたプレイヤーしか入れない。と考えると人狼はこの5人の中にいる。そうならば、確実にジムテと遭遇する…この街はキル禁止エリア、だから仮に転移中でも時間は取れるだろう。俺たちは占い師となる人が生まれ勝利が確定…そして一人部屋で眠った。

次の日、悲鳴で起こされた。この悲鳴はアモネではない、もう一人の少女サラだった。サラは机の上で伏せており泣いていた。そこにいたのは…サラを慰めるシャルと泣きじゃくるサラ、昨日と変わらない顔をしたキノノ、呆然とこの状況を見守る俺とアモネだった。ジムテは殺されたのだ。ふと思いつき出しシャルに質問する。

「そういえばジムテからメッセは来てないか？」

「メッセ…ああ、鎌…でメッセが途切れている。ジムテは見たんだろう。」

彼なりに冷静を装っているのだろう、シャルの顔は真顔になっていたが目線がうろついているところを見ると明らかに動揺している。怪しい。

「キノノ、お前はどんなんだ？」

「私は見ました、ギルマスが彼を殺したのです。」

「や…やめろ…」

「彼はジムテに近づき少し話をした後転移していった、その後彼は殺害されたと仮定します。」

「殺される瞬間までは見ていないんだな？」

「ええ…転移したところまでは本当です。」

明らかにシヤムの動揺は大きくなってきている。相当な決断だったのだろう、ジムテは最後にどんな顔をしたのだろう、ひどすぎた。他にも聞いてみる。

「サラ、もし話せることがあつたら話してくれるか？」

「…シヤルは…私と、寝てた…からっ…シヤルは犯人じゃな…い…ジムテは優しかったから…私は、悲し…いい。」

「ふむ…なるほど。」

掲示板に情報をまとめていく、アモネは昨晩は一人で寝ていたらしいが索敵スキルには全く反応を示していないといい、なるべく犯人が見れるよう潜伏をしながらトイレで籠っていたらしいが寝てしまったという。だが、ジムテが持っていた剣がドロップしていたのを確認したらしい。そしてそのまま起きてロビーに一番最初に集まった。

「俺はジムテと話した。俺が囮になるからもし何かわかつたらメッセを送るとな。彼は一文字だが何か残したのだろう…お前にメッセを送つたんだシヤル。」

「……」

「その内容は『鎌』。一応だが俺たちの武器を確認させてほしい。」

全員が所持武器を距離を話しドロップした。なんと5人中4人アモネ以外が鎌使いだったのである。犯人は明らかにこのギルドを利用して滅ぼすとともに俺も殺しにかかっているのだろう。いい作戦だ。この結果によりシヤルの潔白は証明された、後は3人。だが…

「さつきキンノ、お前はシヤムが殺したといったがサラの証言が真実と仮定するとシヤルは犯人じゃない。しかもメッセージの内容が真実だ。二人は犯人じゃないと確定した。残るはお前と俺だけだ。」

「ふむ…もしかしたらあなたかもしれないね。」

「今更言い逃れでもする気か…俺はジムテと話した後寝てしまった。」

生憎言えることはこれだけなんだよ。」

「その内容から…貴方はまだ容疑者でしょう。」

「人狼は嘘しかつけない。昨日のトリックだってわかったよ。お前たちはそこで待機してな、俺が今からメッセージのトリックを再現する。」

俺は立ち上がり掲示板の方向へと歩を進めた。キンノは先程と変わらない雰囲気でシャムは犯人でもないのに様子がおかしく息苦しそうだ。俺は掲示板に適当に書き込みをし送信する。するとこの宿全体に不気味な着信音が鳴り響く。

「これがタネさ。昨日お前は何かを確認しに行った勢いでこれを起動させてシューイを追い出すよう仕向けた。タイミングは完璧だったな。」

「……」

「ただ一つ…どうやって人狼がマーカーを付けずにキルしているかがまだ解けない…」

キンノを除く三人が驚きの目をして俺を見ていた。これでキンノが人狼ということが完全に決まり、追放されるのはキンノになった。そこから夜にメッセージが来ることなく俺たちは解放された。生き残ったシャムとサラはシューイを迎えに行こうとメッセージで連絡を取り合っている。俺はため息をつき、今度こそ荷造りをして次の宿屋を探す準備をしていた。

「リンネさん、無事解決してよかったですね！」

「うーん……」

「まさかリンネさんが人狼だったんですか…!？」

「そこまで血に飢えていないわ!いや、まだ気になることがあつてな…」

そう、マーカーを付けずにどうやってキルするかどうやってアリスやジムテを運んだのか…何が目的か。去る前に聞きだせばよかったが、つい聞くのを忘れてしまった。

「…リンネさん?」

「あ、ああごめん。アモネ、明日何かおこるから今日あともう少し俺の

仕事を手伝つてくれないか？」

「えっ…まあいいですけど…う」

きよとんとするアモネを抱え俺は宿を出た。目標は一つ、シャルたちがシューイと合流する壊れ橋だ。

潜伏スキルを使い、二人を追いかけた。あたりはすっかり暗くなり数時間まった後シャムとサラの元にシューイが歩いて戻ってきたが、明らかに様子がおかしい。

「そいつから逃げる!!」

俺は駆けだし、シューイの上げた剣を両手で止めそのまま背負い投げた。もちろん戦闘エリア外なのでシューイは紫のウインドウに守られノーダメージ。そのまま戦闘エリアに連れていこうとしたその時、横から強い衝撃に襲われシューイを離してしまい壁のない場所から突き飛ばされた。そして下に何かあるわけでもなくこの下は永遠の…闇、俺はアインクラッドから突き落とされてしまったのである。死んでたまるかとアインクラッドの壁に曲刀と俺の手をぶち蹴るが中々引つかからず手と曲刀の耐久値がみるみる下がっていく。俺は足も利用して何とか地上に降りるための対策を取った。一体何階落ちたのだろうか、季節が早送りのように変わっていく。夏になったあたりで壁が低く、一部が展望スペースになっているエリアが見えた。見ている人には悪いけどここしかない。最後の力を振り絞り前の蹴りを入れた。体が横つ跳びになり降下する勢いによって地面に激突し、スライディングをする形で停止した。体術スキルマジスゲエ…。HPゲージは黄色になっでいてぎりぎり瀕死ラインにならなかつたものの、後ろを見ると一人が腹を抱えて倒れている。多分俺の体が直撃したのだろうか、だが時間はない。

「また出会った時に謝罪させてくれ」

その場に慰謝料1万コルを置いて再び55層へ移動した。

転移に時間がかかりたりどり着いた時には人が増えており逃げる三人に対して二人が追い回していた。もちろん追い回しているのはシューイとキノ、追い回されているのはシャル、サラ、アモネの三人だ。一度捕まれば永遠の闇に消えることは間違いない。ポーショ

ンを飲みほした俺は追い回す二人に決闘の申請を送る。血の気が立っている二人はもちろん承諾してくれた。

「二人まとめて相手してやるよ。戦略で負けても戦闘なら自信あるぜ」

「谷底に突き落としてやる…」

先にキンノが飛びかかり、シユーイは後方からピックを投げ、万全な攻撃態勢になっていた。が、俺はいくつもの戦地を駆け巡った身、こんなものなんて簡単に突破して見せよう。

シユーイの攻撃パターンを読みつつ俺はキンノをけん制するべく連続技『ランバー・ジャック』を打ち込む。どちらも防がれるが確実にキンノを後ろに後退させている。そこに鎌を思い切り振り降ろし最後の仕上げをするシユーイは俺とキンノが常に一線上にいるため攻撃ができない。押し切った後俺はフェイントをかけ、右手に持っていたピックを後ろにいたシユーイの首元に思いきり突き刺した。

すると、シユーイに *paralyze* の文字が浮かんだ。彼女はけいれんを始め震えたまま倒れてしまった。

「あつーそれ私のピック！なくしたと思ってたのに！」

そうだ、おんぶしたときにアモネの手から拝借させてもらったのである。凄そうな雰囲気醸し出していたが…暫くは麻痺は引きそうになさそうだ。これで相手はキンノだけになった。

「さて…死神を殺そうと計画したことは褒めてやるよ。殺しきれなかったこと後悔するんだな」

「貴様アア!!」

キンノはジャイアントアックスで斬りかかってくるが戦闘面は単純すぎた。レベルは高いのだろう一撃が強く、一撃を食らったら俺は死んでしまうと思う。この決闘は完全決着モードで設定してある。その名の通り、死ぬまで終わらないモードだ。このモードにしたから彼らは承諾してくれた。彼らは殺す気はあるが…殺される気などないだろう。

キンノの攻撃を避け腹に正拳突きを繰り返す。相手は一瞬スタンになりそこから背負い投げに移行し、ジャイアントアックスをドロツ

プすることに成功した。キンノは驚いた表情をしており、恐らく予想外の行動に動揺しているのだろう。そこから仕上げに入る。右の拳で頬を思い切りぶった。相手の体力はその力に比例して下がっていく。キンノは抑えられており攻撃ができず、ただ俺の拳を待つ体制になっていた。

右、左、左と見せかけて右、だが、相手の体力は赤ゲージのまま停止している。そう、俺は今体術スキルの峰打ちを使用している。某ゲームでもお世話になるこの技、ご存知相手の体力を一定量以上減らさない技。要するにこの技はこのデスゲームの世界では尋問の一種と化したのだ。体術スキルマジすごい。

「何故俺を殺そうとした…お前たちはどこのグループだ？」

「くっ…」

「…言え。言えよ！吐け!!」

何度も殴った、何度も殴り続けた。ダメージは入るがHPバーはっぴくりとも動かない、何度も何度も、何か話そうとしても殴り続けた。

「話せ!!!言え!!!」

「…ヴァイスヴァールハイト…我々は平和と真実を伝えるもの………」

「何!?!」

「シューイと私が人狼です…貴方の読み………侮っていた…。」

ぴたりと拳を止めるが、相手は全く反撃しようとしなない。観念したんだろうか目は虚ろとどこを向いているか分からない。

「黒を白に染めるもの…お前のような…白に別の色を塗るプレイヤーを粛清する存在」

「…どこだ…どこにある、リーダーは誰だ!!言え!!」

「…ミラ…様に………」

ミラ?聞いたことある名前だが…そういえば彼は俺をギルドに誘った人間。それがなぜ…聞けることは聞いたので胸ぐらを持ち、渾身の力で頬を殴った。キンノは吹っ飛び壁の直前で止まった。シューイは麻痺が治ったのか、立ちあがったが、俺を見ると一目散に逃げだしてしまった。キンノは唾を吐き起き上がると俺に指さして

くすくすと気味悪く笑いだす。

「リンネ……お前は滅びる。汚点は全て肅清される……神に栄光あれ……！」

と、飛び降りてしまった。皆で下を覗くがキンノの姿はどこにもなかった。

シャルとサラと別れ、再び宿を探し始めた……が、アモネの様子が変わっていた。アモネは何かにおびえるように俺にしがみ付いてきた。あれは少しやり過ぎただろうか、アモネを撫でてやるが全く反応を返さず目を伏せたままだ。何も言わずにおんぶをしてやると静かに口を開いた。

「彼らです……彼らなんです。私が負けた相手は。」

歩みを止めてしまった。どうやら俺たちのゴールが決まってきた。ヴァイスヴァールハイト……白い真実。いらだった足先は次の階層へと足を進めていた。

事後の静けさ

アモネの負けた相手…やっとそのしつぽがつかめたと思っただらまさかそれが元副リーダーでギルド解放軍にかかわる人間だった。その現実が俺のイラつきを加速させる。あれから一か月が経過し周りのプレイヤーはぱたりと俺たちに対して攻撃をしなくなった。怪しさが際立つがあえて突っ込まないようにいつも通り生活を続けた。もしかしたら監視されているかもしれない、無理に圏外にある収容所に向かうことができない。スカベンジトードの塩焼きを食べながら60層を歩いていた。監視されていて収容所に行けない…毎日宿に通っていたらお金だけが減っていきお金の供給が難しい俺たちは飢え死ぬことはないが、次ミラたちとあつたら間違はなく死んでしまうだろう。どうしたことがか。

「リンネさん家建てましょう」

「!?」

いきなりの提案に食べていた肉を吹きだしてしまう。床についた肉は無惨にも破片となり消えていってしまった。

「お前いきなりなんてこと言うんだ!!せつかくのカエル肉が…!」

「家ですよ!私たちの基地があれば食費だけで済むんですよ!もう殺人事件に巻き込まれなくていいんです!」

確かに、家だと収容所に行かなくても寝る場所は確保できますしまずPKされることがない。お金も大半失ってしまうが、食費も節約すれば何とかかなりそうで今一番の案として立候補された。が…

「少し問題もあるんじゃないか?」

「そんな、PKもされないし何も問題なんも…」

「成人もしていない男女が家を買って同居するということが俺はどうしても気になる…」

「ど、同居ですか…!!」

顔を赤らめたものの少し興奮して俺を見るアモネ。その顔はおもちゃコーナーで興味のあるおもちゃを見つけ、『いつもお利口になっているから買って欲しいな♪』と言いたげな子供の様子とバツチリ一致

した。だが、その計画は俺が強引に購入した回廊結晶により却下せざるを得なくなった。

長いこと二人で旅をしているがさつきまでアモネとの関係なんて全く考えていなかった。ただの冒険者としてしか見ていなかったの。でさっきの発言は少し現実を見るきつかけとなり少し気が楽になった。考えてもいいかな、と隠し持っているお金を確認しながら不機嫌に頬を膨らます彼女を慰めていた。押し付けられたカタログを見る限り持っているお金で払っても十分余裕はある。遺品から手に入れたお金を使うのは少々気が引けるが仕方ない。誰も襲ってこないならばアモネのご機嫌取りでもしよう。

「アモネ、家以外で何か欲しいものはないか？」

「ないですよーだ。」

「そんな怒るなよ…悪かったから、せめてもののお詫びするつて。」

「…ラグーラビット。」

「はっ!？」

「とは言わないから、買い物に付き合ってください。」

食べ物か、なら持ち物が増えることがないので少し安心した…一時間前までは。アモネは転移門をくぐると食べ物の店を通り過ぎ服屋に直行する。急ぎ足で俺もついていき店内に入ると服をまじまじと見つめ自分の体に服を合わせている。現実でも彼女ができず家族であまり買い物に行ったことはないが大体わかった…この買い物…

「リンネさん、これ買ってください！会計終わったら次行きますよ!!」

「は、はい…」

と、次々に服屋を回り俺が購入し荷物を持たされたまま次のエリアに飛んで行く。辛いこと限りなし、さりげなく彼女にお仕置きされているらしい。非常に悔しかった。

20着ほど買い、時刻は昼過ぎ。一日が終わるまでまだまだだったが、彼女の足は止まることを知らずそのまま駆けていきフィールドに出た。そこにはかなり興奮している様子の色違いフレンジーボアが三匹こちらを見て大きな息を吐いていた。あれだけやって俺を殺す気なのか、彼女を少し疑ったがボアの後ろから作業服のようなものを

着た男性が走って近づいてきた。

「こんにちは、フレンジー牧場へ！この子たちと戯れていきますか？」

…は？モンスターと戯れる??冗談だと思ひ説明を聞こうとしたら相方が興奮気味で返事を返してしまふ。そこから俺とアモネは柵の中に入れられフレンジーボアは男性プレイヤーにより解放されたのである。その勢いは始まりの街付近にいた部類とは違ふく、とても早くともでかかった…そしてそのおっかけてくるボアに対し俺は全力疾走で柵の中を逃げ回った。出入口は男性プレイヤーが愉快に笑いながら締めている。対してアモネを見ると一匹のボアに懐かれておりfrisbeeをするなど楽しく遊んでいる…俺は二匹のボアと追いかけてっこをしていた。

「止まってあげればボアさんも止まって懐いてくれますよ!!」

信ぴよう性はないが、ワンチャンスその場で停止してみたがボアたちの勢いは止まらずそのまま体当たりされてしまった。ダメージはほぼゼロなのだが…それ以上に何故か身体に衝撃が襲ってきた。その後もボアたちは優しくしてくれることなく俺を突き飛ばすなどおもちやにして遊んでおり、アモネはその様子を男性プレイヤーとともに腹を抱えて笑っていた。

休憩して柵の外でへたり込んでいると牧場の管理者は水分を俺に渡してきた。

「いい運動になりましたか？」

「なわけないだろ…こちとら死にかけたよ…いい商売しているよなお前…」

「すみません、このモンスターをタイムしたときにどうすればいいかって考えたらこれが…」

「次俺が使うときはもつと控えめなモンスターにしてくれととてもうれしいよ。」

くすくすと笑う管理人。久しぶりにアモネ以外の人を笑顔にした気がする。少しうれしかった。

「ところであなたはよかったんですか？75層に行かなくて？」

「75層？」

「はい、あのKOBのヒースクリフ団長と黒の剣士が決闘したらしいのですが」

「黒の剣士？」

KOB、血盟騎士団の団長ヒースクリフ。見たことはないが何やら決闘では無敗神話を持つすごいプレイヤーということを知っていた。が、黒の剣士を俺はよく知らない。

「最初はびっくりしましたよー、私のボアが切刻まれるんですから…あはは」

とつてもあははで済む要件じゃなさそうだが、そこはあえて突っ込まないでおこう。が、無敗神話を持つ伝説のプレイヤーと闘う黒の剣士…白い死神と呼ばれた俺と真反対なところから少し気になった。今度バラに聞いてみよう、突き飛ばされ悔しかった俺は休憩を終え再びボアたちに立ち向かうのだった。

「あのモンスター本当なんだよ…あれだけ突き飛ばすのに何でダメージが2しか…」

「リンネさんにくらべちゃまだマシだと思えますよ」

57層に戻りご飯を食べながら話す俺たち。最近また肉ばかりだったので二人でとことんサラダを頼みキャベツが山もり乗ったサラダを食していた。因みにこのメニュー、料理を作った際に使わなかったキャベツの部位を適当に切って乗せただけの残飯処理メニューである。全部食べたなら無料にしてくれるらしい。

「実はな…家のことなんだけど」

「買ってくれるんですか!?!」

椅子を突き飛ばし体を前のめりに聞いてくるアモネ。そうだ、実は家を購入したのである。隠し金もかなり残り、食費に困らないことを述べた。その話を聞いてからアモネはテンションが上がりっぱなしで、残飯処理を終えた後ラーメンとカレーを平らげてしまった。

食事が終了し、どうしても家が気になるとのことだったので彼女を連れて家に向かった。ついたのは50層から離れた15層辺りにある小屋。アモネはここについても意味が分かっていなかった。

「ここってバラさんの家じゃないですか？ここに家を建てるんですか？」

「いえ…これが家ですアモネさん。」

「…えっ」

歡喜の表情から一変、表情が固まったまま地面にへたり込んでしまった。実は買い物に付き合っている途中、たくさん別荘を持っているバラと連絡を取り合い安い物件がないか相談していたが、広告に載っている一番安い物件よりもバラの別荘の方が安く、金額によゆうができた。だから今回のご機嫌取りもすることができたのだ。ここならPKもなく町も近い、完璧な環境で安い…買うしかなかった。

「お前が欲しかった家だぞ？ほらもつと喜べよ」

「思ってたのと違う…」

馬小屋ほどの大きさの建物は俺たちの家となり、ここから俺たちの旅が始まる…そんな気がした。穴あきの天井から見える二つの星は俺らの門出を祝うかのようにいつもより強く光っていた。

罪の重さ

小屋をもらって二週間。嵐の前の静けさはやはり本当で、急にプレイヤーが襲い掛かるようになってきた。が、プレイヤーも一筋縄ではいかなかった。装備やスキル、ハイエナも減りギルド単位で攻撃するようになったのである。この一年、昨年よりも襲撃された回数は減ったがその分俺の研究をして死神を抹殺する作戦でも立てていたのかもしれない。うぬぼれているわけではないがそんな気がする。そんなことをするぐらいならボス攻略の会議でも参加すればいいのに、暇すぎる。今も小規模ギルドの攻撃に対して迎撃しているところだ。

一年前とは明らかに違う動きを取ってきて、俺を困んだ上に連続して攻撃してきて俺に攻撃の隙を与えない。一度でも防御をミスれば俺は槍で串刺しにされて死んでしまう。

「どっけ!!」

一刺しを覚悟し、一人のプレイヤーを切り刻んだ。そこに一瞬穴が開きそこを使い群れの中から抜け出し10人のプレイヤーを一掃した。現場には剣や鎧がドロップされており、明らかに戦争があっただろう状態だ。俺には幻覚か何か知らないがいろんなところに血がこびりついているように見える。その場を後にし溪谷を超えカルマクエストを探す。とそのとき、別行動をとっていたアモネからメッセーヂが入ってくる。

『拘束されました…。ギルド解放軍を名乗る者たちです。命が欲しければ50層まで降りてこいと伝えます』

「アモネ…!!」

走って引き返し、第50層まで全速力で戻った。そこには先ほどのギルドの3倍はあろう人数のプレイヤーと二人の女性プレイヤーに羽交い締めにされたアモネが心配そうにこちらを見ていた。すぐにプレイヤーを倒してアモネを救いたいがこの人数は恐らく俺も耐えきれず、アモネも処刑されバッドエンド。俺の身を差し出してもアモネを開放することはないだろう。その状態のまま拮抗状態が続き時間だけが経って行く。そこに一人のプレイヤーが群れの中から現れ

た。気品のあるコートを着て髪形を整え見たことのある顔。

「ミラ…!!」

「随分と汚くなつたじゃないカリンネ。見ているだけで吐き気がする」

あの頃のミラとは違い、装備は豪華になつたものの俺を見るなりゴミ扱いしてくる。流石にゴミ扱いは腹が立ち、背中にある鎌、ギルティサクリファイズを取り出すがその瞬間周りのプレイヤーは俺に襲い掛かつてきた。さつきとほぼ同じ状況だが解放軍のプレイヤーの動きは明らかに違う。盾を持つプレイヤーの突進により俺の進行範囲を狭めその後ろに長槍部隊が控え俺を攻撃し俺も拘束されてしまった。その時ミラは全く動かさず俺のことをただにやにやして見ていた。何とか拘束を解こうと振り回した手が解放軍兵士の顔面にヒットしたらしく、一瞬だけ拘束が解ける。このチャンス逃さず渾身の力を込めてミラに斬りかかったが、次の瞬間強い衝撃が腹に伝わり再び元いた場所まで飛ばされてしまった。気持ち致死量を超えるダメージと思われたが、俺のHPは丁度半分削られておりその横にはパラライズの表記が増えていた。再び拘束されてしまうが、もう俺には抵抗する力が残っていなかった。その様子を見たミラは拍手しながら歩いて近づいてくる。その隣にはさつきまでいなかった巨大なプレイヤーがハンマーを持って威圧するようにゆっくり歩いている。二人は俺の前で歩みを止めミラは俺をまじまじと見つめ話してくる。

「どうだ…今の気持ちは？…こんなの…俺が味わつた苦しみにも至らんけどな」

「…っ！」

「そういえば自己紹介を忘れていたね。俺はヴァイスヴァールハイト団長兼、ギルド解放軍副団長ミラだ。こちら俺の参謀ゴールドレム。とても怪力で前までは前線にいたバリバリのプレイヤーだ」

紹介をされたゴールドレムはフンツと大きく息を吐き俺を見てくる。

顔は強面で何を考えているか全く分からない。HP…すなわち生命が半分を切っているせいか目の前の空間が歪んで見える。そんな俺

の前にまたミラがたち、今度は片手に持つ剣で俺を斬り始めた。何故かダメージ量が少ないがダメージは積み重ねられ、徐々に俺のHPバーは減少を進める。ミラが斬りながら俺に小さな声で呟いてくる。希望を持って話を聞いたが全く希望の持てる話でもなかった。

「もうすぐ解放軍は解散するだろう…俺は脱退するつもりだ。が、このギルドはその続きだ、俺の野望だ」

「…何を言っているかわからないな」

「俺はあの襲撃があつてから一人になったよ。辛かった、悲しかった。そして俺が仲間になったプレイヤー、仲間にするプレイヤーをお前が…奪つていったんだ…!!」

「俺は自分から…殺しを…しない」

「そんなことは知らない、殺したらそれは罪なんだ。仲間を売って一人で歩いた神気取った生活は楽しかったか？その背景でお前に仲間を殺されたプレイヤーがどれだけ悲しんでいるか知っているのか？本当にお前に殺される罪を犯したのか…?」

斬撃は威力を増し、俺のHPバーは赤いゲージまで減ってきた。ここまで来ると空間どころか、意識は朦朧とし、声すらも響いて聞こえるようになった来た。

「考えてみる、お前の悲しみとここにいるプレイヤー達の悲しみ、どちらの方が大きいと思う?」
「……………」

「そりゃあ、人間一人の悲しみより多数の人間の方が悲しみが大きい！この問題はお前や、この世界にいるオレンジプレイヤーを抹殺すれば終わるんだ!!俺たちはその被害者で集まり、黒い汚濁を白に染め直す白い真実へと書き換えるんだ…!オレンジプレイヤーの戦意を削ぐにはまず死神のお前の殺害が重要となる。お前も平和を望んでいるんだろう?」

「…ああ、俺が死ねば、すべて終わるんだな」

「そうだ、だから今ここで俺に殺されて全てを……………」

「もうやめてください!!」

冷たい空気を一つの声が砕いた。声を出したのは拘束されていた

アモネだった。

「私を連れていいです。そのかわりリンネさんを解放してください」

「アモネ!?お前…!!」

うつすらとした意識の中で彼女の名前を叫んだ。信頼してくれた相手を裏切りたくはなかった。仲間ではないけれど…友達でも家族でもないけれど…失いたくなかった。が、その声は届かず遠くに彼女は連れていかれ兵士は俺を投げ捨てた拳句何度も蹴り飛ばしてその場を去っていった。何もできない自分が悔しかった。レベルも低い、スキルもない、仲間もいない。

「もう……殺してくれ…俺には…何………も…」

いきなりの頭痛と極度の疲労でその場から体が動かず、ただ寝ころぶことしか出来なかった。これが死なのだろうか、体が軽くなりすぎてがどうしてもよくなってくる。周りには何もなくなっただの草原。俺は眠ることにした。瞼を閉じると目の前は青白くなっていて何かに吸い込まれていく感覚。俺はしばらく眠ることにした。こんな自分を赦してと懺悔しながら。

仲間

目が覚めるとそこは俺の家の中だった。頭についたナーヴギアはあつさりと外れ俺は自由を手に入れた。ふと考えるとさつきまで俺はゲームの世界にいた。HPがゼロになれば死ぬデスゲームの世界に俺はいたんだ。だが、あの後…ミラに逆襲を食らい、俺は死んでしまったはずだった。が、脳は焼き切られず俺は生きている。この装置は夢を見せるための機械にしか過ぎなかつたんだ。死んだのに生きているという現実がここにあるのだ。ふと、耳を澄ましてみるとドアの先から声が聞こえる。聞き覚えのある声。俺が殺した男、女、モンスターが俺の名前を呼んでいる。俺を祝福してくれている。俺は戸を思い切りこじ開けた…が、その先は青白い電子の海だった。俺は一生この海の中に落ちていくのだろうか。それが俺の罪なら…それもいい。なにも抵抗せずただ落ちていった。途端目の前は白で埋められていき俺は意識を失った。

背中への大きな衝撃で俺は目覚めた。目の前は以前にも見たことのあるような世界。馬小屋ほどの大きさの木造建築、真ん中に机、床を見れば食糧庫が開きっぱなしになっている。俺は一度自分を思い切り殴った。が、そこには紫のウインドウが現れ俺は一瞬怯んでしまふ。そう、俺がさつきまで見ていたのは夢で、ここが現実である。そうだった、仮に現実に戻ったとしても俺に平和な生活なんて待っていないに違いない。ここも向こうもう場所がないと思うと死にたくなってきた。

「あんた…さつきまでぐったりしてたのに、何がどうなっているのよ…!？」

「お前は…」

そこにはしりもちをついて俺を見上げているバラがいたのである。今回は装備がドロップすることなく健全な装備で俺と対面することとなった。恐らく置いていかれた後、彼女がここに入れてくれたのだろう。

「す、すまない…」

「それで済めばいいんだけどあんたにも言っておかないといけないことがある。」

「…?」

「収容所が見つかったんだ。あんたが追尾されてギルド解放軍から攻撃された。」

最悪だった。俺はアモネどころか、収容所のみんなまで裏切ってしまったのである。

「所の皆は全員避難して無事だったよ。皆、あんたの家の前で待っているから何か言ってきたらどうだい?」

神妙な顔をしてバラが言う。彼女はいつもへらへらしていたが、今回はそんな表情をしていない。仮にこれがドツキリだったとしても彼女はこんな表情を俺に見せたことがなかった。本当の感情らしく、俺はバラの冷たい目線を受けながら家の外に出た。

バラの言う通り、外には収容所のメンバーが一人もかけず集まっていた。体の大きなバトラー、その手下たち、俺をにらんできたプレイヤー達。懐かしい顔ぶれだったが久しぶりだからといって俺に笑いかけてくれる奴は一人もおらず、冷ややかに俺を見つめていた。囚人の先頭に立っていたバトラーが俺に近づいてきた。

「…おいリンネ、どうしてくれるんだ」

「…すまない」

「違うだろう」

「すまない」

「違う」

「ごめんなさい」

「俺はお前の謝罪を聞きに来たんじゃねえ」

胸ぐらを掴まれ思い切り殴られる。ここも圏外なため俺は紫のウインドウで守られるが、バトラーのかなりの怪力で俺はぶっ飛ばされ家の壁に叩きつけられた。HPには影響はないものの背中に鈍痛が襲い掛かる。バトラーは俺の首を持ちあげ俺を軽々持ち上げた。

「いいか、俺たちはお前のそんな姿を拝みに来たんじゃねえ。確認したかったんだ、俺らのことをどう思ってたのかを。」

「…お前たちは…同じ収容所の宿泊者だ。」

「それだけか？」

「ああ…」

それを聞くと呆れたのか、俺を投げ捨てた。が、正直なところこいつらは俺を殺さないだろう。今の俺は殺す意味がないただの屍だというのだろう。俺の子の気持ちがいっただい誰にわかるのか、そんな奴は一人もいないはずだ。

「あそこで過ぐした日々は…俺のわずかな光だった。俺はそれを失いたくなかったんだ。だからお前たちと関係を切ってお前たちだけでも守ろうとした。ただの宿泊者だけどそれでも大切だったんだ」

「…それならなおさら俺たちに相談してくればよかつただろう？」

壁にすがり心が虚無にある俺をさつきと変らない目でみんな見ていた。いったい何のつもりなのだろうか。

「ただの宿泊者だけどそれでも俺らのこと大切なんだってよ。そういうのをなんていうっけなお前ら？」

「仲間じゃねーのか？」「仲間しかねーだろ！」「仲間だと思います…」

「仲間ってやつか？」「最初から仲間だろう？」

「仲間…」

「不器用だなお前。今まで仲間の意味が分からなかつたろ？」

そこにいた群衆はいきなり大声で笑いだし、俺を囲う。俺の知っている仲間は一緒に共通の目的を持って共にその目標へ歩む集団であって、さつきの開放軍のようなものだと思っていた。

「忘れちゃったのか？俺たちにもあいつらに負けない共通点があるだろ？俺ら全員にある勲章がよ」

そうだった、俺とこいつらの唯一の共通点、それぞれいろんな境遇があつただろう、いろんなギルドにいたり最初からソロプレイヤーだったりしたんだろう。だが、それでも俺には、俺たちには、オレンジプレイヤーという勲章があるじゃないか。それは解放軍のオレンジプレイヤーの抹殺に匹敵する目的意識、『自分が殺されるのなら最大限の力を使い生き続ける努力をする。』殺されない、自分の意思ならば絶対負けないだろう。そう思う度俺の中から力がみなぎりその溢

れる力は俺の雄たけびによって解放された。叫び終わった俺はバトルに近づき、軽く胸をたたいた。

「お前たちの力…貸してくれないか？」

「報酬は通常に5割増しにしてくれよう？」「リンネは金が余っているらしいし奢ってもらおうぜ！」

「流石リンネは太っ腹だな！」「今度は俺たちが反撃する番だ!!」

俺は囚人に持ちあげられ、胴上げされてしまう。それと同時にリンネコールが止まってくれない。初めてで照れくさいものの、何か心が軽くなった気がした。しばらくして胴上げが終わり、俺の家の前では囚人たちによる作戦会議が始まった。

「やつらのアジトの位置は大体わかるが、そこにはアモネがとらえられている。俺のフレンドリストにまだ名前はあるから生存していることは分かるけれど、奇襲でもしようものならアモネが死んでしまう。」

「そうか…だが、あの集団なら俺らで何とかなる。お前はあの二人を何とかできるのか？」

「正直に言えば…ミラはあれからレベルが全く上がっていない。俺と同じ20なんだ。だから問題はあの巨大な怪物ゴルドレムだな。」

ゴルドレムのスキルの内容からやつはレベルがかなり上と思われる。さらにあの体力半減攻撃、あれ体術スキルの一種なのだろう、自分のレベルが相手より上の場合体力を半分にする『ハーフブレイク』という技だ。相手が同じ体術スキル使いといっても俺もそうなのだから大体の動きは分かる。正気が見えてきた。その後も話し合いは進み。いつの間にか皆が俺の家で泊まり始め、道具も買い込み相手の情報も集めた。その時間は昔の何かを思い出さしてくれるような…そんな感覚に浸らせてくれた。だからこそいつらを、この『仲間』を守りたい、そう思わせてくれる。俺は大きな敵の前に立ちはだかつている。相手はギルド、俺たちは同じ肩書を持った犯罪者。ピーターの黒の剣士が戦った、聖騎士ヒースクリフなんて比べ物にならないのだろう。黒の剣士と俺たちを同じにしてはいけないかもしれないが、関係上はどちらも同じだ。正義に対してそれを俺たちは真っ向から否

定するのだ。

「俺たちは今日11月7日、中ギルド『ヴァイスヴァールハイト』を襲撃する。目標はアモネの救出だ。それ以外はどうでもいい。もし抵抗されたら…殺る気で相手してやってくれ。いいな!」

「おう!!」

時は来た。11月7日…ミラの言う通り解放軍は解散してしまった。が、彼のギルドは残っているようで、アモネもまだ生存している。今日はメンバー全員の参加が可能で、さらに天候も曇りという完璧なコンディション。彼らに見せるのだ、そして否定するのだ。白が全てではないと。俺らは歩を進め13層の奴らのアジトへと向かう。俺は初めてミラと同じ立場に立ち戦うことになる。そんなことを考えていると誰かに猫だましを食らう。バトラーの手下だった。驚いてしりもちをつく俺に声をかけてくる。やめろよ、と言いつつ後に同じ立場なんてどうでもよくなり俺の気持ちを全力でぶつけなければいいと決心した。気づけばアジトの門は目の前、俺は突入のカウントダウンを始めた。

終焉の正義

アインクラッド第13層、ここにミラが所属しアモネがとらわれている『ヴァイスヴールハイト』のアジトがある。そうとは言えこの街の中にどっしりと建てているところ、かなり目を引く白く独特な形、本当にアジトか疑うところも少しある。今は俺一人。収容所のメソバーで突撃してもよかったが、アモネの危険も考え俺単独の侵入となった。普通の家でありそうな門を叩き、自分の名を名乗る。

「無所属のリンネだ。アモネを迎えに来た。」
「…入れ。」

どこかから門番だろうか、ミラではない声が俺に反応しそれに合わせ門が開く。門は日悪的軽い様子で開いており襲撃に対してガバガバと思える。門をくぐり周りを確認する。少し先にステージがあり、その上には玉座に座るミラ。その横にはおびえながら座るアモネの姿があった。ミラとアモネの位置を確認すると俺は走り出した。すぐに兵士が俺を取り押さえようとするが追いつかず、50mほどあった距離はすぐに縮み手を伸ばせばアモネに届く距離となっていた。が、後ろから何者かの気配を感じ俺は横っ飛びをし、間一髪で避けることができた。地面に倒れこみ起き上がると、先ほど俺がいた場所にはゴルドレムがハンマーを振り降ろした状態でこちらを見ていた。今回の彼の装備は鉄製の仮面を被り全身も鉄に覆われまるで装甲車でも連想させるような格好だ。他の連中の服は皆綺麗な白で染められており少々気持ち悪い。純白すぎて気持ち悪くなってくる。さほどダメージを食らわなかった俺は砂ぼこりを落としながら立ちあがり二人を見る。が、相変わらずミラは余裕そうな態度だ。

「ふ、ふふ…さっきの攻撃はよく避けたね。君の伝言は彼女から聞き動きは完全にわかっていたのにな…新しいスキルを？」

「そんなわけないじゃん、アモネを見ていればわかったんだよ。」

「そんな戯言を…」

「アモネは潜伏スキルと索敵スキルを極めててな、彼女から少し情報をもらえば体術スキルと生存本能を持っている俺が避けることなん

て簡単だ。それに、昨日送ったメッセージは嘘だからな。」

「なんだと…!?」

ミラの反応が思った以上に面白く、思わず笑いが込み上げる。確かに俺は彼女と連絡を取っていたが、それをあいつが見ないわけがない。俺はアモネを信じてこんなメッセージを送ったのだ。

『Dear amone』

もし周りに人がいなければ読んで欲しい。指定した日にお前を助けに行く。今収容所のメンバーで計画中だ。ミラのアジトに皆で突撃してもみくちゃの中お前を助ける。ゴルドレムの動きは大体わかった。俺は皆を信じることにした。ダメ元でお前を助けに行く。お前も信じていたはずだ…なのにごめんな。こんな俺を赦して欲しい。二度と許されないかもしれない。嘘になるかもしれないけれど俺はお前たちのためなら命を捧げられる。続きは助けた後に話して欲しい。

11月7日最初の一ゲキでタオす。文がヘンですまない。字もヘンカンできていないかもしれない。また。rinne』

「正直あのメッセージはばれると思ってかなり冷や冷やしたよ。11と7の一字目を合わせてみな。」

「嘘…ダ……？リンネエエエエエエエエエエ！クソが!!」

「お前のことだから見ないわけではないだろうと思つてな。まあ見られてもプランはいっぱいあるし…そもそもそもそも今回アモネをさらったのは俺をここに招待してくれるためだろう？」

「ああ、我らが神聖の地でお前をお前を倒すためにな。死神の殺害、それがこの世界の平和にどれほど近づけるか…この範囲が決められた場所でお前は死ぬんだ…!」

何が神聖だ。こいつの中の神聖とは何かを知りたい。本当に人を殺しているのはどっちなんだろうか。俺はあの夜言った、『武器を下して俺の前から退け。残った者は俺が抹殺する。それぐらいの覚悟があるなら残れ。』と宣言したのにそれでも俺に襲い掛かってくるプレイヤー。俺を殺すように仕向けたのは大体ミラだ…多くのプレイヤーに俺の殺害を指示して結局誰一人俺を殺せず立ち向かったプレ

イヤーは死んでいる。が、ミラが襲ってきたことはない。自分は指示するだけ指示し、他人にすべて押し付ける。直接的に罪はないが、この世界のこの一件は俺だけでなく彼にも罪がある。そんな気がした。「神聖の地で神を殺すのは少し疑問だが、アモネは助けさせてもらうからな。」

「おつとお前がこいつに近づけば…おい、出番だ！」

ミラが玉座に踏ん反りがえりながら叫ぶと、見たことある二人が戦闘態勢で立ちはだかる。そう、人狼ゲームでお世話になった二人、シューイとキンノだった。シューイはともかく、キンノはアインクラッドから飛び降りて生きていたのかとただ絶句するのだがさらに絶句したのは、その二人を待機していたゴルドレムがハンマーでぶつ飛ばし一気にHPをゼロにし殺したのである。いくらなんでもこれは最低だと思う。見世物にするために彼らは生き残ったのか。あまりにも酷すぎて敵ながら彼らに味方したくなってきた。

ミラを殺す

初めて俺が殺意を直接向けた瞬間だった。

「謝つてもお前は許さない…！」

「まだそんなことを言うには早いんじゃないか？こいつらを倒してから言うんだな！やっつけてしまえ!!」

「…プランBだな」

周りにいたプレイヤー達が一斉に走り出し俺の方へ向かってくる。ゴルドレムは全く動く様子がないし、俺も動く必要はなかった。まわりのプレイヤー達は雄たけびを上げながら走っていたが、それを超える叫び声のようなものを出しながら門から多数のプレイヤーが立ち向かってきた。それは…収容所のオレンジプレイヤー百人と、その管理人バラだった。確かにミラのギルドのプレイヤー達の団結力は高く、束にしたらめんどくさい。が、俺たちオレンジプレイヤーは個々に戦える能力がある。数には数、がっちりまいった作戦だった。

俺はまっすぐ歩み寄り一つのコマンドを相手に申請する。そう、ゴルドレムに対しての決闘申請である。

「ゴルドレム、俺は逃げも隠れもしない。真正面からお前に立ち向

かつてお前から勝利を手に入れる。お前がモードを選択するとい
よ。」

「……」

一言もしゃべらないまま彼(?)は完全決着モードを選択した。相
手も俺を殺す気なのだろうか…ミラへの殺意は後回しにしゴルドレ
ムとの戦いにハラハラ、久しぶりに正面から一対一で対決することに
ドキドキしていた。

しばらくし、カウントダウンが始まる。が、先ほども言った通りゴ
ルドレムの弱点は見抜いている。後は相手の新しい能力がなければ
なお良いのだが…

3…2…1…

『DUEL Start!』

ブザーとともにお互い相手に向かって走りだす。俺は鎌を、ゴル
ドレムはハンマーを手に渾身の力をぶつけた。凄まじい衝撃が、俺の両
腕に襲い掛かり鎌の刃でハンマーを滑らせ攻撃を回避し距離をとる。
やはり思い通りに行かない。弾いてソードスキルをぶつけてやろう
としたが、レベルの差かパワー負けしてしまう。

「二筋縄ではいかないな…痛え」

俺の小さな眩きも届かず、ゴルドレムはハンマーを叩きつけ、距離
を縮めてくる。あれに一度でも当たれば即死クラスのダメージを食
らう無理ゲーに近いことだろう。だけれど、策はまだある。俺は相手
の攻撃を避け続けた。避ければベストだが、攻撃を受け止めること
が多く地道にダメージが蓄積され、HPバーが緑から黄色に変わる。
が、だんだん相手の動きを読むことができ徐々にダメージを与える。
そう、ゴルドレムは先日や今日、俺を襲った時みたいに気づかれずに
相手を襲う暗殺者的な動きをしてくる。俺はスキルを3〜4個しか
覚えていないが恐らく彼のステータスを見る限りレベルは87、10
個以上のスキルを身に着けているのだろう。今俺が把握しているス
キルは5個程度、だからこそ何が来るか怖いのだ。

ゴルドレムの体力が黄色になったところで勝負を決めに行く。
ソードスキル、『ダイナミック・バイオレンス』を発動。斬りかかるが、

相手も同じソードスキルを発動してきた。ソードスキルはキャンセルできず、お互いのソードスキルが衝突しぶつ飛ばされる。何とか耐えきり、体力ゲージはまた赤くなっていた。決闘中は回復ができず俺の命は風前の灯火となっていた。再び距離を取り何とか立ちあがる。ゴルドレムも様子ではわからないが、ダメージが入っているのかふらついている。そして、仮面が真つ二つに割れ強面が再び出てくるが変な違和感があった。俺はこの顔を見たことがある。似た顔ではなく全く同じ顔を見たことがある。そんな気がしたのだ。改めてプレイヤー名を見てみる。

彼のプレイヤー名はゴルドレムなんかじゃない。彼の名前は、

「メ、メイカー…!?死んだはずじゃ…!?」

「そうだ、今までお前が戦っていたのは紛れもないメイカーさ。どうだ、以前のギルドマスターと闘う気分は？」

「なんで…どうなっているんだ!!」

「ギルマスはな、飽きたんだってよ。初心者がいるあのギルドが。そりやお前みたいなのがいたら誰だって手放したくなる。だからメイカーはお前にギルドのすべてを投げてより強いギルドにしようとしたんだ。だが、お前が生き残って全て計画が崩れてしまった。」

そんなことを考えていたなんて、俺がああ聞いた話とは全然違う。ならあの裏切ったプレイヤー達もメイカーの刺客だったのか。そう考えるとズキズキと胸が痛い。

「やがて…死ななかつたお前を憎み、俺と組んで連合軍に入ったんだ。そしてそこで死神を倒す仲間を募った。リンネはギルド一つを裏切り俺たちを殺そうとした卑劣なプレイヤーだと。殺すことを楽しんでいるとな。お前が死ねばここまで事が大きくならず、犠牲者も出なかつたのになあ…連合軍でも仲間を募って中ギルドに匹敵するほどの人員を得た。メイカーはお前と闘うために俺が改造したんだ。毎日お前の卑劣な行動を流し込んでやった。そうしたらこれだ…死神に匹敵する魔人と化した…!」

「…つまんねえなお前。本当につまらない…人の力を使ってクリアするゲームは楽しいか？」

話を聞いていく度にメイカーのショックは薄れていき、ミラへの怒りが倍増していく。自分の力で俺を殺すならまだしも自分の力すら上げず、表面だけの名声なんて何の価値もなく、むしろ副団長していたときのほうが輝いていた気がする。

「俺も……」最近までは人に頼ることが出来なかった。なんでも俺だけが何かすれば俺のせいになって全て何とかなると考えていた。だけど違った。一人で背負ったところで周りに迷惑がかかることだつてある。ならお互い協力し合ってやってけばいいだろうってオレンジブレイヤーが教えてくれた。お前と俺、足して二で割ったら丁度良かったかもしれないな。」

「俺は俺の力で……!!」

「さて、ゴルドレム……違うな、メイカーさん。俺との勝負、最後まで付き合ってくれ。」

相手もハンマーを構え直す。一言も話していないが、恐らく承諾してくれたのだろう。ミラなんてどうでもいい、相手が元ギルマスだろうがもうどうでもよくなってきた。俺は今日の前の敵と戦っている、なら最期まで……最後まで全力でぶつかろう、命が尽きてもそれならいい。そんな薄い覚悟を胸に鎌を構え直す。メイカーの武器もきつと自分で作った特注品なのだろう。俺の鎌の耐久値をはるかに上回っている。持てる力を両腕に込め前進する。

待ち構えるメイカーは棍のソードスキル、『ヴァリアブル・ブロー』の挙動に入る。ここしかない！俺は突進し、初期のスキル『ワール・ウインド』をハンマーの持ち手めがけて繰り出した。すると、お互いの武器は拉げるような悲鳴を上げ、やがてメイカーのハンマーを破壊した。そしてすぐ、『スマッシュ』の挙動に入るがハンマーが折れてもメイカーは諦めず俺のスマッシュを受け止める。が、さらに俺はどのソードスキルにもない動きでメイカーを四回斬りつけ、最後は鎌の先端で突き、メイカーの横を勢いよく通り過ぎた。

「ドゥームズ………グアイ」

静かに俺は呟いた。しばらくしブザーが鳴り響く。前を見ると『winner!』の表示がありこの表示と、バトラーたちの歓声がすべ

ての戦いをここで終えたことを物語っていた。

勝敗を確認し、すぐにメイカーの元へ向かう。メイカーはあの時と同じように体が少しずつ蒼白くなっていった。

「…メイカーさん…俺…」

「泣くなりリンネ。お前は仲間の死を気にしないんじゃないやなかったのか？」

「だけど…俺はギルマスを…！俺の命の恩人を…この手で殺した…！！」

「お前は強くなった…こんなに積極的に攻撃もしなかったし、俺に話しかけてもくれなかった。お前は変わったよ。お前らしくなったさ…」

と、弱弱しく撫でてくるメイカー。自然と俺の目には涙が浮かびメイカーの表情が全く見えない。久しぶりにあった命の恩人を殺す…この人は何をしたんだ…俺には全く分からない。泣きながら首を振る俺にメイカーは話す。

「俺は…決闘が大好きなんだ。力試しが好きだった…お互いの全力を出し合い勝敗を決める…今回はお互い死ぬ気でやって最大限戦った。俺の最期に相応しい…いい決闘だった…」

「カッコつけないでください…！メイカーさん!!」

「お前は俺と闘って…俺に勝った。こんな当たり前なことに罪はない。」

やめてほしかった、信じたくなかった。死にゆく相手を思い切り抱きしめた。こうして生命が戻ることもないが…最後まで俺を信じてくれた最初の人に、ただ一緒にいてもらいたかった。やがて、数分がたちメイカーの体は粒子となり体の感覚は全くなくなった。同時に役目を終えたかのように『ギルティサクリファイズ』がぼきりと折れ消滅した。メイカーへの悲しみを処理すると同時に最高を超えた怒りが込み上げてくる。

「ミラ…!!次はお前の番だ…降りてこい!!」

「い、いや、待てよ…俺にはこいつがいるんだ…」

ミラがずっと座っているアモネを指さし何か言う途中に横にいた

兵士が倒され、謎の二人によってアモネは救出された。その二人は…あの時世話になったシャルとサラがいたのである。

「シャル…サラも…どうして?」

「あの時、あなたがいなければ俺たちは死んでいたからな。少ないが、借りを返しにな。」

「アモネちゃんに連絡送っても返事がないし、不安になってサーチしたら変なところにいたから来てみたらこうなって…」

「すごく感謝しているよ…ありがとうな」

「しかし、そいつは俺がすっかり洗脳してな…!!」

「ごめんなさい、全く洗脳されていなんだよね。体もピンピンだし毎日何話しているか意味わからなかったよ。気味悪かったから殺そうにも殺せなかっただけであつて…あ、メイカーさんもそうだと思うよ」

アモネの発言の後、皆笑った。可笑しすぎたのだ、今まで自分の思い通り進んでいたと思っていた計画は進んですらいなかったことが滑稽すぎる。俺もばかばかしくなり大声で笑ってしまった。囚人たちも笑い、バトラーはよく分からないが勢いよく仲間を投げ飛ばし、バラに関しては腹を抱えて過呼吸にならないばかに大笑い。後から来た二人も笑い、アモネもクスクス笑う。さっきまでの空気はどこに行つたのだろうか。そんなこと誰も考えてすらなかった。

「さて…忘れてたけどもう一つ。お前のその価値観に黒色を塗り付けてやる…そのために俺はここに来た。覚悟しろ…!」

確かにミラは社会的に半殺しになった。が、それだけでは済まないのが今回の案件だ。今までの怒りをあいつにすべてぶつけることですべて終わる。俺はポジションを飲みほし自らが着ている白いコートを脱ぎ捨てると久しぶりに持つ曲刀『ファルシオン』を右手に全力でミラに近づく。表情を見るが俺が近づく度恐怖に染まっていく顔色…最高だった。が、そこに最後のイベントが待ち受ける。

『11月7日14時55分 ゲームはクリアされましたーゲームはクリアされましたーゲームは…』

最悪だ。このタイピングでゲームクリアなんて誰が考えた。俺は

急いでミラの元へ向かうがもうミラは動かない。ミラは高笑いを上げながら俺を見下してくる。そして後ろを向くと、俺に手を伸ばすアモネがいたのである。他のみんなも何か言っているが、俺には全く聞こえない。心の迷いか、俺の足は停止してしまい動けなくなってしまふ。やがて、足から転移と同じように消えていく、そしてミラとの距離は後数m、が運命はそれを許さずミラをログアウトさせてしまった。

「くそっ！くそっ！！クソオオオオオオオオオオオオ！おい！俺と、俺と闘えよ！ミラアアアアアアアアアア！」

無慈悲なことにその声は届かず、ひとりだけのこの建物に響き渡り、俺は意識を放棄した。

A L O

登場人物：A L O編

相原風音（あいはらかぎね）／カザネ

身長165cm 体重??? 年齢22歳

最初はあまりA L Oに興味はなかったものの、流行りに乗り始めたところハマってしまった。種族はシルフ。名前の由来はそのまんま。
（風音↓カザネ）

性格は強気であり、年齢に関係なく場を弁えた上で意見するほど自信家。成績も常に上位に入る程で、自分に足りないものといえれば後、女子力が足りないと思っっている。気が強いのは自分を強く見せるためであって、気が抜けると弱い一面も見せることも。

魔法、武器でのどちらでも戦えるが、あまり戦いは放棄していきたくはない。特に対人戦は嫌な思い出があるためになるべくしない。武器は緑色の槍『フェアリー・ド・スピア』を使い、やや魔法寄りのビルドを組む。風属性魔法と回復魔法を得意とし、支援に回ることが多い。

現実では立候補して自分からリーダーに立つことが多い。勉強もする反面、遊びもきちんとなす。

家族は父母と弟妹が一人ずつ、さらに祖父祖母も住む七人家族。ペットに柴犬の『ミーナ』を飼っている。大人はそれぞれ自営業や農業などいろんな仕事をしており、地域では有名な家。二つ上野兄がいたが、兄はS A O事件で死に、その日以来から兄を殺害したオレンジプレイヤーを嫌い、心から人を信じられなくなってしまった。

好きなものは、煎餅、読書、釣り、カラオケで、嫌いなものは、犯罪者、団子である。体が少し弱いために硬いものを好む。また、読書ではライトノベルや参考書、エッセイや文庫本など様々な種類の本を読み、時間があつたり、心を落ち着ける時は大体読書をしている。最近近はネット小説にも目を付けるようになり、現実ではあり得ないこと

や設定に興奮してしまう。

ローベ／ローベ (rove)

身長175cm 体重69kg 年齢31歳

自分の勝ち場所を求めてALOにログインした。男は黙って種族はサラマンダー。名前は自分がリングネームとして使っている名前。

性格はとにかく明るく、体育会系。サラマンダーのせいではないと思うが、彼の周りにいると少し暑くなっていく。戦闘スタイルはとにかく真正面から突っ込む。ボクサーらしく逃げも隠れもせず、自分の力を信じて戦うスポーツマン。そのせいか人型でないモンスターとの戦闘が苦手であり、とくに空を飛ぶモンスターは相手ができない。

武器は自分の拳で、他の武器スキルを全く持たない。それどころか、戦闘時にはローブを脱ぎ捨てるため防具もない。攻撃力と物理攻撃に特化したビルドとなっており、炎魔法も一切使えない。

現実では一人暮らしをしており、稼いだお金を親に送ったりしている。仕事はボクサーをしており、全国区ではないが、地方大会なら必ず上位に行く実力者。が、昔事件を起こしてからは少し人気は下がっており、年俸も下がっている。

好きなことは情報収集、人間観察で嫌いなことは飲み会。相手を知るために始めたことだったが、いろんな人がいることに興味が湧き始めるようになった。ALOを始めるにあたりいろいろ調べたため、S A Oプレイヤーのことをリンネたちより知っている。集団にいることが苦手なために、現実もゲームも基本的にソロ。

??? / カミュ (Camus)

カザネと行動を共にする謎のプレイヤー。種族はプーカ族。

カザネや他のプレイヤーには言っていないが、ALOを監視するためにログインしているらしい。性格はマイペースで、「……」と語尾を伸ばすことが多い。が、本人はいたって真面目。

戦闘スタイルは、全ての属性の魔法を使い、敵に近づかれる前に倒してしまう戦術。六色の魔法に加え歌を使用し、味方を支援することができる。が、本人は天性の音痴で、人が聞くと倒れてしまう。

現実では仮想課に勤めているというが、それ以外の情報は全く公開

されておらず、謎の存在となっている。昔、『軍人』として育てられ子供の時から銃を持ち大人と一緒に戦っていました。ある日私たちは負け、その国から追放されてしまいました。その時、誰か忘れましたが『その力を人を殺すことではなく人を守ることに使ってくれ』と言われてここに来たらしい。

趣味はALOをプレイすること。嫌いなことは残業。

隣音弥（となりおとや）／リンネ（rinne）

SAOから帰還し、部屋に隔離されたプレイヤー。SAO学校に宿泊し、毎日リハビリと学問にはげむ。口調と性格が変わり、以前より世界を楽しめるようになった。種族はインプ。

武器は片手剣と鎌（両手斧）を使用。SAOの頃の鎌より軽いらしく、両手斧を片手斧として扱っている。が、技は両手斧の技を繰り出す。SAO時代にはたくさんの襲いかかるプレイヤーを始末し、帰還する姿から『死神』と呼ばれたときがあった。

アモネは自分が一番安心できるパートナーとっており、彼女に殺されることは選択肢として正解と思っている。時に自分の妹のように思い、絶対に守ってやらないといけないと思ったり思わなかったり。彼女が弄ってくることも、また楽しみとしている。まだ好意はない。

ミラは、最初こそすごいやつだと思っていたが結局何もできないことを知り、ただ威張ってプレイヤーを支配する態度がむかつく。ただ、それだけである。

カザネは自分を止めてくれるストッパーだと思っている。とある一件から共に行動するようになり、その時は怖いと思っていたものの、正直に意見を言ってくれるいいやつだとリンネは思っている。彼女のきつい性格が抜けた時に弄るのがまた面白い。だが、好意はない。

ローベは戦う友として仲良くしている。が、時折熱が冷めない時があるので自分が止めないといけないという使命感に駆られることも、また、自分には父の思い出がないので時折少し抜けている父親として慕っている。

根下愛花（ねもとあいか）／アモネ（amone）

SAOから帰還し、日常生活に戻ったプレイヤー。SAOの学校に入学し、現実の世界も楽しんでる。種族はケットシー。

武器は短剣を使用。ここでも飽きっぽい性格は健在で、いつも使う短剣が変わっている。しかし、どのナイフもあまり攻撃力が変わらならしい。

リンネは命の恩人であり、自分の目標である。一度自分見失った自分を見逃してくれた上、許してくれたことに尊敬と愛情が芽生え、一緒にいたいと思ってる。彼ができないことを自分が支え、生き会おう：といたいはまだ言えずにいる。

カザネはとりあえず嫌い。ストレートすぎるのが嫌い。リンネを狙っているが見え見えなので早いところ勝負を付けないといけないと思ってる。

ミラ（mira）

好奇心に揺られやってみた結果、閉じ込められるが当初はイベントと思っていた。が、生命の礎にて生き返らないことが分かりデスマゲームを自覚した。リンネをギルドに誘うが、途中ギルドの全てを持って失踪されたために怒りを感じ、ギルド解放軍でリンネの殺害を目論む。

性格は何をしてでも自分の欲望を達成する自己中。例え人も殺しても最後が良ければなんでもよいらしい。人を仕切るカリスマ性があるために自分はあまりレベル上げをせず、随伴でレベルアップした程度。スキルも保有していない。

現実ではIT系の会社に勤めていたが、SAO事件の後規約に違反したとして解雇される。

復帰

目を覚ます。目の前は少し黒く歪んだ空間が広がり、体には全く力が入らない。何とか力を入れ頭に装着する何かを取り外す。少し頭がくらくつとするが何とか腕に力を入れ体を起き上がらせる。そこは以前いた木の小屋でもなく、自分が住んでいた家の部屋でもなかった。一見ビジネスホテルにありそうな一部屋だがそこには点滴や心拍数を測る医療器具など病院の一部屋に見えた。が、出口だろうドア付近にある大きな窓から覗く光景が病院だということのを否定する。窓の向こうには学校の教室のようなものが見え、その直後授業のチャイムが鳴ったのだ。もしここが病院なら患者たちが黙っていないだろう。肩で息をしながら姿勢を保つが、突如部屋のブザーが鳴りまたベッドに倒れてしまう。窓の外を見ると二人の男性がこちらを見て何かを言っている。二人の男がジェスチャーを送ってくるので、それ通りに近くの黒いボタンを押す。そうすると自分の声がエコーになり外に聞こえるようになった。

「ここは…どこ…です…か?」

「ここは学校だ。君たちが通うことになった学校だ。」

「でも…ここは…教室でも…保健室…でもないですが…」

「そうだ、君がいるのは君のために特別に改装されたvipルームだ。」

何故俺がvip扱いされているのか全く分からないが、不気味に思いつらふらと立ちあがり部屋のドアを開けようとした。が、ドアは鍵がかかっており開かない。押しても引いても開かないのだ。

「君は、SAOの世界にて大量殺人を行い現実での猟奇的な殺人に通じるものとし保護観察でここに拘束することとなった。仮想空間で人を殺しているプレイヤーを世間に出したら問題を起こしかねないという理由でな。知っておいてくれ。」

「待ってくれ…他の、プレイヤーは…」

「とつくに目覚めて学生のもものはここに通い、社会人たちは普通に生活をしている。ほとんどの人間がカウンセリングやりハビリを行い

普通に暮らしている。」

なるほど、つまり自分は被告人としてここに捕縛されている。罪が晴れるまで俺はここで牢獄ライフを送るのか。いくらオレンジプレイヤーだからといえ、待遇が悪すぎやしないか。不公平を訴えたかったがそもそもキルを行ったのは事実であり、実際にログが残っているかは定かではない。いまのところ俺の勝利はほぼ皆無に等しいというわけだ。だが、ここに閉じ込められるとはいえ何も食べたり飲んだりしなければ人間せいぜい一週間で死んでしまう。特に俺は仮想空間から帰ってきたばかりでただですら弱っているのに。どうにもならない事実のため息をつくしかなかった。

「食べ物や飲み物、風呂や服は全てそこに用意してある。また、監視員に要件を言ってもらえれば脱獄以外のことならほとんどしてくれる。おそらくこまることはないだろう。紹介が遅れた、総務省通信ネットワーク内仮想空間管理課職員の菊岡誠二郎だ。隣にいるのは君の監視人となる人物、吹田新警備員だ。」

「よろしく願います。何でも言ってくれ。」

警官のような制服を着た男性が敬礼をする。どうやら俺は猟奇的な頭がものすごくイカれてしまった犯罪者として見られてしまっている。もはやただの容疑者や被告人とは違う。部屋を見渡せば監視カメラが隅に一つずつ、さらに変なアンテナもある。俺は監視されている、なんだが言葉で表せないが最悪の状況だった。

菊岡がどこかに行った後も吹田はずっと扉の前で座っている。そして暇そうに雑誌を読みたまにこちらを覗いてくる。正直俺は今までスポーツ等があまりできなく、勉強も微妙で唯一できることとすればおじいちゃんが教えてくれた居合切りくらいしか出来ない。まあ、それが今回のデスゲームでも役に立ったのだが。俺はとりあえず立ちあがる練習からしてみたが、案の定倒れてしまう。その音を聞きつけてか吹田は窓から俺を覗くが、無論助けてくれるはずもなくにやにやしながら俺を見てくる。

「笑ってたら助けてほしいんですが」

「誰がお前なんか助けるか。伝説の犯罪者なら自分で立てるだろ。こ

んな任務についたのが不幸だったぜ」

このやろう：俺は何か込上がる感情で何とか立ちあがることのできた。久しぶりに感じる感情、怒りである。最後の戦いの時が最高期だったが、今はそれに匹敵するぐらい怒っている。何も知らないのに俺のことを馬鹿にしたことがどうしても許せないが今の自分には全く対抗できる力がない。腹いせに窓を殴ってやった。すると突然思い出す。

「吹田さん、今って何年何月何日？」

「そんなことも分からないとは：仕方ないな、2025年7月20日だ」

「…2025年…七月…!?!」

ゲームがクリアされたのは2024年11月7日だったはず。そうなると俺はこの半年間眠りについていたということになる。いやゲームを始めたところから数えると3年近く寝たきりの状態となる。衝撃だった。まずはなんとかして生活を取り戻していかないといけないが、何かをしようとするミラの顔が浮かんでどうにも動けない。吹っ切るため、ナーヴギアを取り外しベッドの下に隠した。

そこから二か月が経ち、夏休みが終わり生徒たちが登校するようになった。いろんな生徒が俺の部屋の前を通り過ぎるが、誰も反応を返してくる人はいなかった。もしかしたら外からは俺の姿は見えていないのかもしれない。俺はなんとかリハビリをすることで歩けるまで回復し、ほとんどの生活は何とかできるようになった。が、俺は何か足りないものを感じるようになった、いや感じていた。やはり、ミラと決着を付けていないこと、黒の剣士に会えていないこと。この二つが脳内から消えてくれないのだ。が、SAOはもうサービスを終了してしまい俺が彼らに会うことはほぼ不可能だと考えていた。

そんな思いにとらわれてポストに学校からの手紙を確認しに行くと、いつもはない黒い四角い箱が手紙と一緒に置いてあった。とても怪しいが、箱の側面には本人の手書きで菊岡と名前が書いてあることに安心し。中身を開けてみる。中には見覚えのあるものが入っていた。SAOと同じソフトの形をしたもの：名前を見るとALOと書

いてある。同封してあった手紙を読みながら中を開けていく。

『これは総務省からのプレゼントだ。ナーヴギアで起動できSAOと同じ仮想空間で行動できるソフト、ただ、SAOと違う点がある。ログアウトが任意ででき、プレイヤーをキルしても現実世界では死なない。安心してプレイするといい。ただし、学校中のプレイなどが確認された場合没収する。健闘を祈る。』

あの人は親か。ここまで来ると…彼にはお母さん気質があるのかもしれない。今日のリハビリも終えたころなのでさっそくALOをプレイしてみることにした。ベッドの下のナーヴギアにソフトをセットして、三年前と同じように頭に装着する。そして、ベッドに横たわりこう叫んだ。

「リンク・スタート!!」

俺の意識は電腦世界に飛ばされていった。

SAOの時と同じように設定から始まるが、以前と同じような状態がいいのでそれっぽいものを選択してゲームをスタートする。結局自分の容姿なんて見ていないけれどどうにかなるだろう。そう思っていた。目の前が真っ暗になったと思うと、洞窟のような場所に転移させられた。俺が一步踏み出すと、その空間は張り裂け俺は落下していった。いきなりなんなのかと思えば遺跡のようなものは俺の前から消え、現れたのは草しかない平原。俺は何をすればいいのかわからず何か方法を模索したが、メニューを開いてもオプションボタンを押すことが出来ない。そして気づけば地面と思い切り衝突していた。そしまわりがぼやけ始め俺の目の前には死を意味する(you are dead)の文字が。俺のALOデビューは早速落下して死んでしまうことから始まってしまった。

守るべきもの

これがこの世界で言う死というものなのか。特にSAOのデスゲームの世界ではこれが現実での死亡宣告だったために、この表記を見た瞬間どれくらいの人が絶望を見たのだろう。そんな絶望を俺は見せていたと考えるととても心が痛い。これが罪なら受け入れよう。蘇生時間がカウントされていくが正直どうでもよかった。いくら不死の世界でもこのように永遠と死んでいくのなら生きていては意味がない。蘇生したら二人の搜索を諦めこのゲームをやめてやろうと思った。

そんなことを思っていると急に体に力が入り気づいた時には俺の体は元に戻っていた。寝ている状態から手の握りの確認、視界の確認、しっかりとそれぞれの能力を確認した後頭の後ろにある柔らかい物が気になる。上を向いてみると誰だかよく分からない女性とバツチリ目が合い、女性は顔を真っ赤に染めた。俺は慌てて起き上がり正座で彼女と対面する。相手は顔を赤らめ目を逸らしている。とりあえず御礼は言っておくことにした。

「あの…ありがとう。俺まだ飛行が上手くできなくてさ、ログインしたら墜落してこのざままで…」

「……」

「俺はリンネって言うんだけど…お前は？」

「…」

彼女は飛び立ってしまった。緑の羽を広げ消えてしまったのだ。後追いをしようとは思ってはいるが、こんな別れ方をしたのが何か残念な気分になってしまふ。また逢えることを信じて自らの拠点を目指すことにした。

しばらく歩いていると暗い空のかなたから何かを感じ慌てて回避する。すると先ほど俺がいたい地には火の玉が直撃し大爆発。いきなりこの世界の洗礼だろうか、これがこの世界で新たに入ってきた技、魔法だろうか。そして炎の魔法と考えると…後ろを向くと先ほどの魔法の主が着陸し俺を見据えてくる。

「お前、ニュービーか。こんなところで一人で居るなんて殺して欲しいのか？」

「あ、いや…ちょっと空を飛ぶことができなくて歩いて拠点にね…」
「あのな、この世界はSAOと違ってプレイヤーはキルしてもいい、むしろキル推奨のゲームだ。ここで一人でいて殺されても自分の責任で罪はないんだぜ？」

「罪…か」

罪のワードに俺の思考は再び思考を開始する。何が罪なのか、俺がここにいたらそれは全て俺が悪いのか…キル推奨のこの世界で彼らが俺を殺したらそれは罪になるのだろうか。この世界もまた…弱肉強食の世界なのだろうか。そうならばなおさら背いてやりたくなかった。裁かれる事がないのならまんべんなく「殺し返し」でもいいということだ。俺は装備していた片手剣を手にサラマンダーの兵士と対峙する。すると奴の仲間なのだろうか、空から二人ほど甲冑をかぶった兵士が降りてきた。この感覚、久しぶりだ。昔と同じ、一人対多数の対決だ。

甲冑の二人が俺に向かって剣を振りかぎすが、俺も真正面から突進し剣を振りかぎした。お互いもといった場所と逆の方向になり、まるでアニメのワンシーンのようだ。その後お互いが振り向いてどちらかが倒れるという流れだったが、俺は剣を鞘に納める。カチンと完全にロックがかかった瞬間爆発。後ろを確認すると、サラマンダーの兵士が一人減っているのである。そう、二つの剣を避けて通り際に一人のサラマンダーを切り裂いた。おそらくこのゲームを始めたばかりではキルすらできないだろうが、勢い任せにやったせいか何かを切断する確かな感触があった。残る二人に対しにやけてやるとボスらしいサラマンダーは露骨に悔しそうな顔をする。後ろから残るサラマンダー兵士が襲い掛かってくるが、剣を後ろに構えることで自然と赤い装甲を貫きサラマンダー兵士は爆発した。そこには赤い炎が残っていたが、どうでもよかった。

「お、お前は…なんなんだ…まさかサバイバー…!？」

「帰還者ってそう呼ばれているんだ。確かに、俺はSAOから帰還し

たプレイヤーだけだ。」

「ま、まさか攻略組…！」

「残念だけど俺はそんな強くないんだ。もしよければさ、シルフ領まで案内してくれたら嬉しいんだけど？」

「わ、わかった…！だ、だから見逃してくれ!!」

実力では及ばないと思ったからか、あつさり言うことを聞いてくれわざわざ徒歩で案内してくれた。暑い砂漠を通り抜け、暗い森を抜けるとそこには日本の街のように明るい街が見えた。とりあえずこのサラマンダーに御礼を言うことにした。

「ここまでありがとう、サラマンダーだよな。隣同士、また出会った時は勝負してくれよ？」

「あ、ああ…」

力なく返事をした彼はすぐに赤い羽根を広げ飛び立った。逃げられてしまったのだろうか。一体それほどのことをしたのか、自分には疑問だった。

改めてシルフの街を見ると夜なものにも関わらず、にぎやかで何より緑。風の妖精がたくさん集まっているんだろうか。それが正解なら、あの時助けてくれた彼女はシルフ領にいるはずだ。徹夜を覚悟でシルフ領に入ろうとした、その時横から強烈な衝撃が襲い掛かる。ぶつかられた俺はそのまま倒れるが、その感覚に久しぶりに安心した。

「リンネさん、生きていたんですね！私ですよ！」

「わかっているよ、アモネだろ？久しぶりだな。」

そう、S A O時代とともに冒険をした仲間アモネだった。が、S A O時代と違い、アモネの髪は黒で全身の格好も黒基調の服装になっている。装備もあまり変わらず短剣を装備しており少し色が変わった程度の変化となっていた。が、久しぶりの再会にかかわらずアモネは神妙な顔で俺に話しかけてくる。ミラのことかと思ったが、それとは全く違った話だった。

「リンネさん、別の領にその領のプレイヤーなしで入ったら即死ですよ」

「そんな理不尽なシステムなのかよ…」

「いえ、システムじゃないです。プレイヤーがそれぞれの領でやっている自衛行為です。」

自分の身を守るゲームの次は自分の陣地を守る防衛ゲームに来てしまったのか。正直そんなゲームならば、俺はどこの世界にも就きたくない。無理やりにも入れられるならこんな世界なんて後にして二つの目的を諦めようと思った。ここまで情けない人間たちの本性を見ているとなんだか俺の心も飽きてきてしまう。アモネに陣地に返ってこのゲームをやめると言おうとした時だった。あのシルフの少女がシルフの領地から歩いて出てきたのである。そして俺たちを見るとそのまま立ち尽くしてしまった。

「あ、あの時の…キラ…」

アモネもすぐに口が出せず、夏なのにも関わらずその場は冬のように冷たくなり、騒然となった。

ロスト・プライド

「あ、あの時の…キラー……」

シルフの少女にそう言われ呆然とする俺リンネ。その隣にいる元パートナーのアモネも何が何だかわかっていない。見間違いなのではないかと言葉での接触を試みるが彼女は何かを感じたのかシルフ領へと戻っていった。そのままシルフ領に入っただろうとしたが、アモネに腰をつかまれ静止させられたので仕方なく諦めることにした。正直この後に起こることが悪いことだということを予想しながらシルフ領を後にした。

「リンネさんはインプを選んだんですね」

「ああ、その種族ってそれぞれ何か違うのか？」

「はい。まず種族は9つあり、リンネさんが所属するインプは暗闇の中でも行動がしやすいいわゆる夜行性な種族…です。私はモンスターテイミングがしやすいケットシーを選びました」

「なんか…猫みたいだな。」

「はい、ケットシーは妖精の猫らしいです。インプは悪魔らしいですよ。その設定が羽にも反映されています」

俺は悪魔だったのか…だが、そんなことで俺は落ち込むことがなくむしろランクが下がったことに安堵していた。なんせ、今まで死神だなんて呼ばれて毎日のように呼ばれていたのだから。今までの仮想空間の出来事が一気に俺の中からなくなり、気楽になった。そんなことを思っているとミラのことなんてどうでもよくなり、黒の剣士と会いたいという思いが大きくなっていく。とりあえず情報を集めるためにすべての領地を回ろう、とアモネに提案した。

「いや…リンネさんいくらリンネさんが強くても多種族のプレイヤーにはこの前の開放軍みたいに集団で攻めてきますよ…」

「それならすべての領地に一人ずつ知り合いを作ればいいだろう？」

「でもどうやって…」

「え、領地を通過すればすぐには襲ってこないだろうしその間に話し合えば…」

と、自信満々に作戦を発表するとアモネは呆れたように頭をポリポリと掻き、ため息をつく。が、俺にはわかっていた。この動作でアモネは『しようがないですね』と表したいのだろう。ありがたく笑い笑いかける。が、そんな俺たちの後ろからはそれをよく思わないシルフのプレイヤーが並んでいた。振り向くと、おお緑の甲冑を付けたプレイヤーの他に気弱そうな男性プレイヤーと雰囲気からかなり強そうな女性プレイヤーがいたことに少し驚き、同時に今俺たちは危機に陥っているのだろうかということはこの状況から察した。

「あのさ…アモネ、逃げた方がいいよな」

「…ですね!!」

アモネはとっさに羽を広げ飛ぼうとするが、俺は生憎飛ぶことが出来ない。シルフ達も戦闘態勢が整っているらしくデスペナルティーを受ける覚悟で俺も剣を手に取りうとするが、アモネが俺を持ちあげ逃走を図る。急すぎて俺は持っていた剣を落としてしまった。アモネは急にスピードを上げ全力で退避する。

「リンネさん飛んでください！そろそろ私の腕が限界なんですけど!!」

「俺跳べないんだよ！どうやって飛ぶか教えてくれよ!!」

「えっと、初心者の人なんか念じればコントローラーが出てくるのでそれを手に持って…ギヤツ！」

「カザネちゃんを泣かせたのは君たちでしょ！因みに私、スピードなら誰にも負けないからね！」

先ほどのシルフの女性プレイヤーがアモネに追いつく。このプレイヤー、どつちかといえば俺らをキルするよりもこの飛行を楽しんでいる気がする。シルフの顔を覗き込むと、彼女の緑色の目が俺を完全にとらえていた。

その時だった。アモネの手は限界を迎え、俺を手放した上にアモネは墜落していく。シルフのプレイヤーも俺たちを見た後、どこかに飛んで行ってしまった。横を見ると遠くだが赤い群れがこちらに迫っており、これが理由でシルフの彼女は逃げたのではないかと思う。そして俺たちは砂漠に不時着した。

少しダメージは入っているが、森林地帯に不時着するより痛くはなかった。アモネも無事そうですぐに起き上がりあたりを見渡している。そして何かに気付いたのか、俺の手を引き岩に隠れた。

「リンネさん、ここはサラマンダーの領地です！」

「なんかまずいのか？」

「サラマンダーは攻撃力が高めで、主にシルフに対してプレイヤーを攻撃するらしいです！」

「だから俺は狙われたのか…っ!?!」

アモネに頭を押さえられ伏せるが、丁度サラマンダーたちが俺らの上を通り過ぎていったらしい。なんとかばれずにすんだが俺らの目の前には広大な砂漠が広がっており歩いて逃げるのは難しそうだ。だからと言って飛ぼうとしても俺が飛べないため万事休すとなっていた。ここをまつすぐ突っ切ると間違いなく見つかり死ぬし、シルフ領も恐らく警戒態勢と仮定し、とりあえず唯一脱出できるであろうルグルー回廊を目指すことにした。もちろん徒歩で。

アモネが周りを確認しながら慎重に進んでいく、がサラマンダーは見つからず割とあっさり領の北側まで移動することができた。が、ルグルー回廊の前にはサラマンダーのプレイヤーが一人何やらシャドーボクシングをしているのだろう、回廊の出口付近でうろろうろしていた。

「…やっぱり、サラマンダーは脳筋がたくさんなのでしようか…?」

「いや多分ゲームの脳筋ってこういう意味じゃないと思う」

「…多分あれは私たちに手を振っていますよね…こっちに來いって手招きしてます」

アモネが俺に呪文を唱え、目を開けてみると遠くまでいろんなものが見える。確かに赤い短髪の男がこちらに手招きしているように見える。もしこれが罠ならば剣がない俺は間違いなく即死、アモネも対人戦闘ができないので死亡で全滅である。が、ワンチャンスかけてみることに歩いて彼の元へ向かうことにした。

改めて近くで見ると、赤い短髪で細身の筋肉質…いわゆる細マツチヨで手には何も装備していない。ジムにいそうな人物だった。そ

の男は俺を見ると元気に声をかけてくる。

「俺はローベ、現実でボクサーやっててな。この世界でも素手で戦えるようなプレイヤー目指してやっているぜ！」

「素手か…俺はリンネ、こちらはアモネだ。さっきシルフ領から門前払いされてサラマンダー領に迷い込んで…助かったよ」

「それはよかったぜ！なんなら助けたお礼で俺の願いを一ついいか？」

「まあできることなら…」

俺にその命をよこせとかいうんじゃないかと予想する。その証拠に赤い三角眼は急に目つきが鋭くなったのである。そして俺たちをまじまじと見つめた後叫んだ。

「俺と一対一で決闘しろ！」

「やっぱサラマンダーは脳筋だな…だが俺は生憎武器をもつてなくてな」

「それなら尚更いい。拳と拳で語り合おうじゃないか！決まりだ…燃えてきたぜ!!」

一人勝手に燃えているローベを見ながら呆然と立ち尽くす俺たち一行。アモネを見るが、アモネはジト目で俺のことを見つめ目伏せで『戦えよ』とサインしてくる。泣く泣く俺は脳筋ボクサーと対決せざるを得なくなってしまうた。

この世界でも決闘のシステムはあり、相手から送られてきたメツセージウインドウから初撃決着モードが選択される。このモードは相手の体力を黄色まで持つて行けば勝ちなのでキルの心配はない。全ての設定が決まった後、カウントダウンが始まった。するとローベは上半身のトীগらしき装備を外しバトラーを彷彿とさせるようなバトルモードになる。

3…2…1…

『DUEL Start!』

ブザーが鳴ると同時にお互いが、前進し自らの拳を繰り出す。その拳がぶつかり俺は元い場所より遠く飛ばされることとなった。そして右手に激痛が走る。体力はあまり減っていないものの武器なしで

も十分な威力と推定される。そんな俺に比べローベはまだピンピンしている。流石ボクサーといったところか。俺は拳を構え直しよう一度立ち向かった。今度は一発ではなく連続して攻撃してみるが、彼は全てその場から動かず避け相手も攻撃をしてくる。ローベのワンツ―は早く、一発が重い。体に殴られる感触が伝わりもう駄目だと思っただけの時だった。ローベの動きが止まっていたのだった。燃え尽きたかのか目には全く光が入っておらず、口はがくがくと何かをつぶやいている。俺は体術スキルを思い出しながら飛び蹴りをかました。ローベは俺を見上げるとおびえたように俺を見揚げ無抵抗に蹴りを食らい地面に倒れた。彼はまだ体力が残っていたものの右手を上げ、降参した。途端ブザーが鳴り俺の勝利が表示された。

事後、ルグラー回廊を通りながら三人で冒険を続ける俺たち。先ほどまで意気消沈していたローベは立ち直り少し低めのテンションで行動を共にしている。が、少し気になった。もしローベの攻撃をものに食らっていたら確実に俺は負けていた。なぜ攻撃しなかったのか…と思うとアモネが質問する。

「ローベさんは何故最後呆然としたんですか？」

「ああ…少し嫌な思い出を思い出してしまっただけ。こんなことが昔にもあったんだ。」

「相当大きいショックだったんですね…」

「少し話をしてもいいか？」

勿論と二人で承諾する。その話はローベの過去の話だった。

ローベは昔、現実でボクサーだったららしい。彼はボクシングのクラブで一番強かった、県大会や地方大会でも抜群の成績を見せていたらしい。が、何階目の全国大会。相手はいつも彼を馬鹿にし続け、いつも全国大会で彼を負かしているボクサーだった。そのボクサーにどうしても勝ちたいと思っただけローベはグラブを硬くし、その中にはメリケンを仕込み彼との戦いに臨んだ。ローベは勝ちにこだわり、ボクサーとしてのプライドを捨てたのだ。そして戦った彼は体への負傷が大きくローベは初めて彼に勝った。が、のちに不正がバレて勝利もボクサーのプライドも失った。

「毎日、俺の罪を消すためにここで一人練習に励んでいるんだ。お前と闘っているとき脳裏に浮かんでしまつて…まだまだだ俺は…」

「…そんなこと考えているから今回も勝てなかったんだ。お前、ただ練習するの詰まらないだろ？」

「な、なんで…」

「そりゃあ、押し付けて自分の罪をなかったことにしようとしているからだな。やったことはもうなくならないし、ずっと忘れないことも大事だけのため込み過ぎると体の内側からダメになる。」

俺だつてそうだ。最初、大切な人を殺され怒りで人を殺し次々に命を奪つていった。最初の頃は人を殺す、殺したと考えすぎて体が思うように動かなかつた。時に殺した人の幻影すら見える時があつた。が、あるときから思うことをやめた。俺は人を殺しているんじゃない。この世界を生きているんだと。その途端、再び俺の世界は光輝いた。

「現実でのことを忘れるためのこの世界だろ？ だつたらここにいて時ぐらい気楽にしてもいいんじゃないかなーと俺は思う。」

「なる…ほど……」

「ちよつと難しいかもしれませんが、時間をかけて…あまり意識しない方がいいと思いますよ」

ローベは頷きよしと言うと両手を空に上げ雄たけびを上げる。どうやら少しエンジンが入つた模様だ。

「よし、俺はこの世界にいる時だけでも楽しむーモンスターを倒して、この世界で一番強くなつてみせる!! リンネ、たまには俺と冒険して強いモンスターのところに連れていってくれ!!」

「見つければな…というか、サラマンダーは群れるだろう？」

「実は俺、レゲネイドなんだ。大勢で多種族を襲うのはどうも嫌だな。せめてタイムマンだと思つて脱領した！」

なんとなくわかる気もしながらとりあえず連絡先を交換しておいた。これでサラマンダーの知り合いができたが、レゲネイドのために多分あそこの敷地には入れないだろう。が、無事に自領地に向かえることと新たに仲間ができたことにほつとしてため息が出た。それぞ

れ自分の領地に近くなつたところで別れ、俺はやっと自分の領地に入ることができた。洞窟の中に町はあり、真つ暗だが俺らインプには問題はない。しつかりと街を見渡し、なんとか宿を取った。そしてログアウトした。明日もいい冒険ができますように。そう祈り目を閉じた。

死神の再来 前編

ぶつかり合う剣の音、俺リンネは今戦闘を行っている。が、これは忌々しいいつものPKではない。今俺の前で戦っているのは同じ種族のインプでとてつもない強さから絶剣と呼ばれている少女、ユウキだった。

「ふふん…中々やるね。だけど、ボクの本気はこれからだよ!!」

「本気で相手してもらって光栄だな!いくぞ!!」

俺はソードスキルを発動させようとモーションに入るが、その間に彼女は俺に急接近し右手に持つ剣で刺突してくる。なんとかモーションをキャンセルし、攻撃を防ぎきるが俺の持つ鎌は弾かれ手から離れてしまう。その後、何度か斬りつけ、俺の胸が十字に斬られ最後にもう一撃斬り裂かれた。速すぎて斬られている俺は何回斬られたのか全く分からない。これが彼女のOSS…『マザーズ・ロザリオ』である。

もちろん、俺は負けてしまった。が、あまり悔しくなかった。この絶剣と戦えたことがまず嬉しく、さらにOSSまで見ることができたことで満足だった。もちろん勝ちたかったが、ここまで真剣に勝負してもらい俺は嬉しかった。負けてしりもちをつく俺に対しユウキは勝ちを喜んでいる。そして俺の元に近づき、手を差し伸べる。

「楽しい決闘だったよ!もし次があればまた戦いたいな!」

「俺も…戦ってもらえるだけですごくうれしかった。こちらからもまた決闘させてほしいな」

「うんうん!君の楽しそうな気持ち伝わってきてボクも楽しくなってきたっちゃったもん…!」

「同じ種族同士、これからもよろしくな」

お互い、固い握手を交わし決闘を終了した。時刻は夜7時だったがインプのプレイヤー達が集まっており黄色い声援が飛び交っている。もう今日はログアウトしてもいい気分だった。が、俺にはもう一つ仕事があった。

歩いて向かうこと数分、俺はとあるクエストを受ける準備を進めて

いた。これから行われるというクエスト、『死神の再来』だ。このクエストはアモネと同じケットシーの情報屋のアルゴから聞いたといい、信頼できるか不安だったがアルゴ曰く「オレっちの情報はいつとも真実だぜ」と言っていたらしい：本人に会って話がしたいものだが。

このクエストとはある場所に特殊ダンジョンが現れ、最深部に待つ死神にを倒すと記念の武器が手に入るという。が、アモネは学校祭の準備でログインができず、ローベは武器イベントには興味はないとのこと。仕方なく一人で挑戦することにした。が、この情報はまだ他の人には公開されておらず、とある場所に行くと言われるらしい。アモネから聞いた話だと、クエストの開始位置しか聞けなかったらしいがそれだけでも結構だ。この特殊ダンジョンは洞窟なのでインプのスキルを使えば簡単にボスフロアまで行くことができる。そこでボスさえ何とか出来れば武器が手に入るのである。が、何故俺がここまでこのクエストにこだわるのか…

そう、過去の俺と決別するためだ。このクエストの報酬：確実に俺が使っていたあの武器だろう。ということは昔の俺が最下層に待っている。昔の俺と対決できるということだ。それは俺自身と戦える楽しみと、俺のSAOを終わらせるための思いがごちゃ混ぜになり居ても立ってもいられなくなったということだ。

「こんな時にアモネがいたらな…：すげえ不安」

独り言を呟いているとそこに一人プレイヤーが現れる。緑色の半袖の服に若草色の腰巻き、黄緑のサイドテールの女の子が一人：以前俺が助けてもらった少女が何か汚いものを見るかのようにこちらを見ていた。目元はつりあがっており、殺意で満ちているような気がした。

「この前はありがとう。それを伝えようとしてシルフ領に入ろうとしたことは謝る」

「…別に助けようと思っただけじゃないの、死んでいる光景を見たくなかっただけ。いつも私はこうだから」

すぐに視線を逸らしその場に座りこむ彼女。そういえば前にシルフの女性プレイヤーが言っていたような…

『カザネちゃんを泣かせたのは君たちでしょ！因みに私、スピードなら誰にも負けないからね！』

この少女：カザネというのか。名前が彼女の種族とぴったり合っていて少しすごいなと驚く。もしかしたらこれが本当の名前でもないかもしれないが。一体彼女はどんな気持ちでこのクエストに臨むのだろう、そんなことを考えていると、コールと同時にメニュー画面のinformationの欄に赤く臨時の文字。そう、クエストが始まったのだ。それを告げるように俺たちがいる目の前に小さな洞窟が現れる。カザネも俺も現れた瞬間同時にスタートを切った。そして洞窟内を駆けていくのであった…

俺はモンスターを避けながら暗い洞窟を颯爽と駆けていき、カザネは魔法で辺りを照らしながら進んでいく。両社譲らず今地下5階である。クエスト情報を見る限り最下層まではニブルヘイムに至るとまで書いてある。そこまでどちらが先に息絶えるか…忍耐力の勝負も始まっていた。

が、俺たちが進む先に一つの石の壁が立ちはだかる。どうやら一定時間その場にいることによって開く扉のようだった。そんな扉の前では俺たちの戦いは急背せざるを得ない。大人しく座り扉の開放を待った。

「どうせ…貴方もPKなんでしょ…そんな臭いがする」

「前はそうだったけど今はそうでも…」

「私、PKが大嫌いなもの」

そう言われた途端扉は解放され次なる階へのスタートが切られた。一体彼女の過去に一体何があったのかは知らないがとりあえずクエストを進めることにした。後ろには人がおらずこのクエストの存在が全く公にされていないことがよく分かる。もしかしたら人気がないだけなのかもしれないが。階を増していくごとにモンスターの種類も変わっていきすべて戦闘回避というわけにもいなくなってきた。地下20層、二人してサイクロプス相手に足止めを食らってしまった。大型すぎて通路が塞がれているのだ。ここで彼女と共闘してサイクロプスを倒すのもいいが…生憎自分にモンスターとの戦闘能力

はない。が、人が他のためまだ何とかなる。

「カザネ、俺がここを引き付けるから先に行ってくれ」

「じゃ、遠慮なく。」

俺がサイクロプスを斬りつけると、巨人は立ち上がり俺に棍棒を振り降ろしてくる。その時、立ちあがった為に隙間が空き人間一人は入れそうな空間ができた。いくら借りとはいえ、自分は死ぬんじゃないかと少し後悔しているような気がした。

なんとか、巨人をすり抜けてきたものの俺の前にはカザネはもういなかった。先に死神を倒されてしまうかもしれない、競争に負けることを覚悟に後を追った。が、追いつくのには時間はさほどかからなかった。二階ほど降りた場所でカザネはモンスターに囲まれていた。相手はリザードマン、SAOの個体とほぼ同じものだろう。カザネは攻撃を避けリザードマン5体に対して善戦していたように見えたが、だんだんさばききれずにリザードマンの一撃を受けてしまう。俺は居ても立つてもいられなくなりすかさずその先頭に介入しリザードマン二体を片づけた。が、カザネはとて不機嫌そうに俺を見てくる。「私が戦闘してたんだから…無視すればよかったじゃない」「そんな話は後だ！来るぞ!!」

残る二体がそれぞれ俺たちに攻撃を仕掛けてくるが、無事に俺たちはリザードマンを討伐し何とか戦闘を終了した。カザネは後ろから人が追ってきてないことを確認すると俺の胸ぐらを掴み壁に叩きつける。目を見ると涙が流れていた。

「借りとかいらさないから…私に関わってこないで……!」

「……………」

元はといえば彼女から介入してきたことなのだが、あえて言及することをやめ黙って罵詈雑言を受け続けた。どうやらPKに対して相当拘りがあるようだ。彼女は俺を開放すると黙って次の階層に行ってしまった。俺もあとを追いついて無心に進んでいくことに階層は40階を超えていた。

40層以降も敵が強くなっており、ノーダメージで切り抜けることが難しくなっていく。買い込んだポーションも少しずつ減っており

元々持っていた数の3分の1はなくなつたのではないかと予想する。そんな戦いの中、カザネも槍で戦っている。が、お互い体力は黄色まで減りどちらが先に倒れてもおかしくない状況だった。そして階層地下46層目、リザードマンの他にゴースト種も出るようになりさらに攻略が難しくなる。ゴースト種は回避が高く中々攻撃が当たらないからだ。俺も手一杯なのだ。彼女もギリギリのところまで戦闘を切り抜けている。シルフの彼女は回復魔法が使えるからいいが、俺にはそんなものはない。俺にあるのは少量の支援魔法と、この手に宿っている敵を倒す力だけだ。

47層目、モンスターに攻撃が通らなくなり、さらに小型のドラゴンが追加され戦闘はより悪化していく。が、その時だった。カザネの武器がリザードナイトに破壊されてしまう。ナイトはリザードマンの上位種で武器は界のスキルを持っている厄介者だ。そしてカザネは今その攻撃を受けて死にかけている。俺は一瞬葛藤した、仲間でもないのに俺は助けるのか…一度かかわった人を見逃すわけにはいかない。後者の意見が勝り、おれは全力でナイトにタックルした。そしてナイトの腹に剣を突き刺すが変な感触を腹に感じる。ナイトの剣も俺の腹に突き刺さっていたのだ。ナイトは光の粒子となり消えていくが、俺はなんとか赤ゲージながらHPは残っていた。因みにこのクエスト、普段のデスペナが二倍になり、受けるダメージ量も二倍になる特殊仕様で普段腹に刺されるのとは全く違い、今まで感じたことのないような痛みが体全体に響いていく。つい力が抜け倒れてしまった。何故か急に眠くなり俺は静かに眠った…

『…音也、これから生きる上で大事なことを教えてあげるわ』

『うん!!教えて!!』

『人生は…勝ちが全てなのよ。何をしても勝つことが全てなのよ』
『勝つこと…?』

『ええ、お母さんはねお父さんに負けてこんなになっちゃったからお父さんに教えてもらったの。負けるとお前の持つものが失われるってね』

本当のことだところ最近まで思っていた。お母さんが言っていることは正解だと思っていた。だから頑張つて勝とうとして負けると殺されそうになった…少し違うんじゃないかと思つた…けど最後まで否定することが出来なかった。僕には…俺には力なんても…

変な夢を見て俺は起き上がった。が、そこは部屋のベッドではなくごつごつの石だらけの地面でクエスト中だということに俺に思い出させた。HPバーを見ると体力は満タンになっており腹の傷も癒えていた。隣を見るとカザネが無防備に寝ておりすうすうと寝息を立てている。まだ人は来てなさそうなので起きるのを待った。3分ほどたつた頃、彼女は目を覚まし俺を見るとビククリしたのか目を見開き肩をビクつかせる。が、すぐにするどい目線に戻り俺から視線を背けた。そして彼女は鼻をすすするような音を立て始め、ううと小さな声で泣き始めた。

「なんで…私の言うことを聞いてくれるのよ…関わらないでつて」

「二度かかわつてしまつたら事が終わるまで関わらないと無責任だろ？」

「くどつ…何だよ…なんでオレンジプレイヤーなのにそんなこと言ってくるのよ…そう言つて私を殺すつもりでしょ…!!」

「俺はお前を殺さない。何があつても絶対お前は殺さない。」

急に黙り込んだカザネ、涙を流しながらこちらを見ている。何故泣くのか…俺は脅した覚えもないし何故か見ると俺まで涙をそそられてしまう。彼女は俺をしっかりと見て口を開く。

「…私は、SAOで兄を殺されたの。家族も人に殺された…だから私は悲しみを一番よく知つていると思うの」

重かった。学校ではこの世界での自分のリアルな状況を教えるのはタブーなのだが、我慢の限界なのだろうか信頼してくれたのか、カザネは話を続ける。

「今回、このクエストに参加して死神を倒して敵を取ろうとしたの。兄は死神に殺されたつてログから聞いたから…」

「死神……に……」

まさかだった、俺が殺したのだ。どんなプレイヤーだったかなんて覚えておらず話を聞いても全く分からなかった。あの世界では誰もが恐慌状態に陥り、何人ものプレイヤーが俺に攻撃をしてきた。その中に彼もいたのだろう、俺は現実のことなど全く考えずにカザネの兄をキルしたのだ。今なら攻撃を防いで撤退ということもできたかもしれないが、死ねば命が散るあの世界では……やはり無理だったのかもしれない。どう思おうが、その事実には俺の脳内は真っ白になり、ただ落胆するしかなかった。

死神の再来 後編

昔、SAOの世界で死神と呼ばれていた俺。襲ってくる敵を自衛のため殺害していたところ、殺されたプレイヤーの妹と今俺は対峙している。いくら相手が襲ってきたとしても、ふと我に返れば相手の命を散らし現実でも殺害しているのだ。改めて現実に思うと牢屋に閉じ込められる理由も分かる。そして…俺は目的を果たすことができずここにいる俺はまだSAO死神の魂を引きずっているのだ。殺した相手を思い出す度胸が痛い。そんな中俺は何か言葉を絞りだす。

「俺は…過去の自分を捨てるためにここに来たんだ。以前の俺をここで捨て去って戦いを終わらせたい…俺との戦いで命を落とした者を…ここで供養するんだ」

もちろんそんなことを全く思っていない。正直に言えば俺から襲わずに相手から襲い掛かってきているのだから、俺には罪なんてないと思っっている。まだ残っている死神の考えを引き出しなんとか答えたものの、俺の心はすでに限界を迎えていた。その話を聞いたカザネは変なものでも見るような目で俺を見ながら装備の入れ替えをしていた。

「あんた…どつかのギルドでも入ってんの？その考え気持ち悪いわ！オレンジプレイヤーなのに」

「全員がそうじゃないんだよ。殺したくて殺しをしている奴ばかりではないんだ」

俺はそう言うのと立ちあがり次の階層へのドアを開けた。何か俺の胸がひものようなもので縛られているような感覚に陥り、初めての感覚に胸を押さえてしまう。が、何とか我慢して階段を下っていった。

そして戦闘を続け…なんとか地下50層手前までたどり着いた。カザネも無事無傷でここまで来ることが出来て、二人でボスに挑むこととなった。

「まさか…あんたがここまで来るとはね。」

「まあ…死神に勝ちたい思いは俺も変わらないからな。」

お互い笑顔なしで地下50層の扉を開く、そこには黒いオーラで覆

われ古びた布らしきもので包まれた巨大な人型の影が立ちはだかつている。あれがこのボス、死神だろう。袖から覗く手は全て骨で右手には鎌、左手には骨の頭蓋骨、さらに右手の鎌は以前俺が使っていた鎌と酷似していた。その瞬間、忌まわしいあの世界の記憶がフラッシュバックするように脳内で再生され吐き気に襲われる。俺は平然を装うのも限界で地面に倒れてしまう。それに反応しカザネはこちらを見るが、すぐに死神の方向へ見向く。死神もこちらを向きこちらの様子を確認してくる。フードから覗く顔はやはり人間の骨でその様子から死を管理していることが伺える。

『よく来たな妖精共…我は死を管理せしもの……お前たちもすぐに楽にしてやろう…』

吐き気を収め死神の様子を見計らうが、そんなこと関係なくカザネは装備しなおした槍で攻撃していく。が、死神はそれに反応するようにカザネを素手で吹き飛ばした。カザネは叩きつけられた後、うめき声をあげ苦しそうに息を荒げる。この動きからそうだ…モチーフは完全に俺だ。有名人になったわけではないが、もしかするとこのゲームの関係者は俺というオレンジプレーヤーが生き延びたことが問題であり、間接的にでも俺を殺害する計画ではないかと判断する。何故このイベントが作られ、どんなものがモチーフになっていることを言わないゲームの世界だからこそできるこの業だ、非常に良くできているが汚い。俺は死神に飛びかかるがもちろん死神はその攻撃を防ぎ鎌を振り回す。この動きは俺の初期のころ、まだ俺が死神となっていない頃の動き…ここしかないと思ひ攻め込む。

「これが終わったら運営に文句でも言つてやろうかな。まあ俺の言うことなんて聞く耳すら立ててくれない気がするけどな…」

独り言を呟き一気に懐まで突っ込む。流石、初期の頃でも反応速度はよかったので死神は懐を必要に守ろうとする。が、俺は守りに入っている腕を蹴り顔に鎌で四連撃を食らわす。その攻撃によってボスの横に表示されている体力はグリーンからイエローに急速に減る。さらに下の方ではカザネが槍で脚部を何度も突きボスはバランスを崩し膝まついてしまう。ボスなのに体力ゲージが一本なのは俺のレ

ベルが低いということを表したいのだろうか。

イエローになった途端死神は姿を変え、俺たちと同じ大きさになりさらにその顔は髑髏から白黒の怪しげな仮面を被った容姿になる。流石に人の顔を見せたら人権侵害になるのか、個々の配慮はよくできているが先ほどからの仕打ちは十分な仕打ちだと思う。

「カザネ、距離を取れ！近づかれたら終わりと思え：俺が攻撃を受け止めるから隙を見つけたら槍で突いてくれ！」

「わ、わかったわ！」

そう言い、俺自身へと姿を変えた死神の様子をうかがう。やはり俺のAIなのか、あちらから攻撃を仕掛けてくることはなく、挑発をするように人差し指でこちらにこいと示してくる。その挑発に乗るように俺は前進していき、死神から2、3歩離れたところに武器を振り降ろす。彼はそれに反応して攻撃をしてくる。このAI、本当に俺と同じ考えならば相手の攻撃行動に対して攻撃を仕掛けると予想して攻撃を仕掛ける。何故なら俺は殺される前に殺す思考だ、一撃でも食らいたくないため相手の攻撃によって俺は今まで動いていた。やはり、このクエストを考えた相手は俺のことをよく知っている相手！

そんなことも考えさせてくれず、怒涛のラッシュを続ける死神。その一振りは一度でも当たってしまえば本当に地獄に連れていかれそうな気さえする。そして攻撃を受け止めるたびに脳裏にあの世界の光景が流れていく。なんとかその攻撃の間をぬって攻撃しようとするが近づけない。

「ちよつと、私はもう我慢の限界なんですけど…そつち行くわ…！」

「そこから動くな！死ぬぞ!!」

が、そんな声が届くはずもなくカザネが全速で前進するが、死神はそれに反応し俺の前から消えカザネの前へと移動する。それを好機にカザネは槍のソードスキル『リヴオーブ・アーツ』を放つ。が、全て鎌で受けられあの世界ではなかった風の魔法ですらも防いでしまった。カザネは呆然として下がろうとするが下がる度死神は距離を詰め今にもカザネを殺そうと全力で鎌を振り回す。もう我慢できず俺も限界に来ていた。俺は走り出し死神に抱き着く形で拘束する。

俺はカザネに賭けた。

「カザネ！このままとどめを刺せ!!俺事刺し殺せ!!」

「えっ!?私には…プレイヤーなんてっ刺せない…!殺しは…」

「ここでお前がやらなきゃ俺もお前もおじゃんだ!!選べ!!」

「っ…!!」

覚悟を決めたのか、カザネは槍を構え直しソードスキルのモーシヨンに入る。死神は俺の腕を振り払おうと力を込めるが、ここで離れたら子のクエストの特殊ルールで増幅した痛みで俺が彼女を殺してしまうことになってしまう…これ以上俺の問題で命を奪いたくなかった。カザネは接近し、もう一度槍の五連撃『リヴオーブ・アーツ』を放った。死神にダメージが入るが、俺にもダメージが入り激痛が走る。そして拘束を解いた後、両手斧で切り上げて振り降ろす。その瞬間だった。

『お前の行動は罪だ…お前の存在がこの世界を変えた。この平和な世界を変えたんだ』

胸がズキンと痛くなると同時に耳元から俺自身の声が聞こえ、死神は後ろに下がり雄たけびを上げながら蒼いポリゴンへと変貌していく。

『お前は…自分で自分を殺すのだ…お前の存在はお前の周りにいるプレイヤーに影響させ、悪夢へと…誘……ウ……』

ガラスの割れる音が鳴り死神は四散していった。その直後だった、緊張が解けたのか体に力が入らず無抵抗のまま地面にひれ伏してしまう。起き上がるという気もせず、何を考えていたかすらわからなくなる。自分は今まで何をしていたかどうしてここに存在するのか。俺の頭は真っ白に染められ、目を開けているのに目の前が真っ黒になっていく。何か声が聞こえてくるがなんて言っているかわからない。自然と俺は意識を失い、虚無の世界へと足を踏み入れたのだった。

拡散する鼓動

気づけば現実に帰ってきていた。が、体は重く全身に筋肉痛が広がり起き上がることも一苦労だった。ナーヴギアを外しても頭がクラクラする。正直に言えば先ほどまでの記憶が全て抜けきっていたのである。あつちで俺は一体何をしていたのか、どうなったのかもさっぱりだ。時計は午前9時を指していた。

「おい死神、そこに朝食が置いてある。早く食って授業に参加しろ」

窓の外から監視人、吹田が舌打ちをして椅子に座る。が、俺にはどう返していいのかわからなかった。朝ご飯を食べ服を着替えてベツドの横にある大型モニターを起動しクラスで行われている授業に参加、ノートをとろうとするが、手に持とうとした鉛筆は地面に落ちていく。自分の手を見ると震えており何が何だかわからなくなりベツドの上で塞ぎ込んでしまう。いったん呼吸を落ち着けて顔を上げるとALOの俺が死神と同じ格好をして俺をあざ笑うようににやけている。終いにはナーヴギアを見た瞬間にすべて思い出してしまった。『お前の行動は罪だ…お前の存在がこの世界を変えた。この平和な世界を変えたんだ』

『お前は…自分で自分を殺すのだ…お前の存在はお前の周りにいるプレイヤーに影響させ、悪夢へと…誘…ウ……………』

『考えてみる、お前の悲しみとここにいるプレイヤー達の悲しみ、どちらの方が大きいと思う？そりやあ、人間一人の悲しみより多数の人間の方が悲しみが大きい！この問題はお前や、この世界にいるオレンジプレイヤーを抹殺すれば終わるんだ!!俺たちはその被害者で集まり、黒い汚濁を白に染め直す白い真実へと書き換えるんだ…！オレンジプレイヤーの戦意を削ぐにはまず死神のお前の殺害が重要となる。お前も平和を望んでいるんだろう?』

「やめろ!!消えろ…どっか行け!!俺に纏わりつくんじゃない!!」

周りを見るが誰もいない。いないのにミラの声が耳元で聞こえ、俺は何も考えられなかった。ひたすら周りにあるものを振り払い破壊した。グラスや花瓶、グラスやプラスチックの何かが割れていくが、

止められなかった。そして手元に何もなくなり布団を殴る。

「……僕には…力なんて……なかったんだ」

周りを改めて確認すると部屋にあったものがほとんど破壊されており地面には破片が散らばっている。あのナーヴギアも力尽きたのか、モニターとなるディスプレイ部分がひび割れ、充電器となるコードが千切れている。まるで地獄絵図。が、こんな世界から僕は出ることは出来ない。何をしても罪は消えずこの記憶は生きて居る限り残り続ける。いくら現実で何もしていなくてもあの世界での出来事が俺のすべてを変えてしまった。こんな閉じ込められた世界にいるなんて……理不尽だった。

……

リンネが意気消沈している時、何も知らないアモネは風呂から上がりALOにログインする。そして同種族のアルゴに教えられた場所に向かうが、そこにはリンネの姿はなかった。不思議に思いアモネはリンネにメッセージを送るが、まずリンネはログインすらしていなかったのだ。現在の時刻はPM9:00、いつものリンネなら食事も終え、午後七時にはログインしているのにいない、アモネは焦りローベに連絡を取り、しばらくしてローベが走って現場に到着した。

「ローベさん…昨日のダンジョンのことなんですが…」

「知っているぜ！リンネが誘ってきた死神のクエストのことだろう！！」

「そ、そうなんですけど…何かあったらログアウトする前に私たちにメッセージ送ってくれるじゃないですか…」

「うむ！けどなかったな!!…何かあったのか!？」

「今気づきました!?!…でリンネさんはおとといにこのクエストの話をした後、明日向かうって言ってそれっきりなんですよ。しかも今日はログインしてないんですよ…」

「い、いやーもしかしたら昨日はログインできなかったとか、アモネちゃんに合わせたのかもしれないぞ…?」

アモネはそう考えたいが、嫌な予感しかしない。まさかこの世界でキルされて死んでしまったのか、そう考えると心が張り裂けそうで自

然と足の力が抜けてしまった。

「違いわ、昨日私とそのクエストをクリアしたのよ」

「貴方はこの前の…」

アモネたちと反対側にクエストのドロップ品、『セイグリッド・デスライサー』を持つカザネが二人を睨みながら立ちはだかる。アモネは無意識にカザネに突進していき胸ぐらを掴む。特に抵抗もせずにと目でアモネを睨むカザネ、そんな態度の彼女をアモネは許すはずもなかった。

「リンネさんをどうしたんですか…場合によつたら貴方を絶対許さないです…！何があつたんですか!!」

「こつちだつてあなたの仲間は一切何があつたのか聞きたいわ。昨日一緒にクエストに行つただけで、ボスを倒した時に急に倒れたのよ。こつちが大迷惑だつたわよ…！」

「リンネさんはあのクエストに命を賭けていたんですよ…」

「別にあいつのためのクエストでもないし、私はしたいことをしたただけであいつのことなんてどうでもいいことだからあいつがどうなるうが私は知らないわ。」

「このクソアマ…私が黙っていたら好き勝手言つて…：タイムンでボコボコにしてやります！」

「類は友を呼ぶつて本当なんだ…私はそういうの嫌いだからパスね。」

怒りに震えるアモネは速攻でデュエルメツセージを送るが即答で拒否され、短刀で襲い掛かると槍で起用にアモネをさばいてくる。対立する二人を蚊帳の外から見ているローベはどうかして止められないか考える。だが、よく見るとカザネは攻撃をするのではなくアモネの攻撃を弾いているだけで、これ以上に戦闘が酷くなることはなさそう。とりあえず撤退することを考え、ローベは様子をうかがう。が、どうも収集はつきそうになかった。

「なんでリンネさんを…！」

「それを聞きたきや普通に聞けばいいじゃない。戦いが全てのオレンジプレイヤーは怖いわ…」

「この…：八つ裂きにしてやr…」

「最後にリンネはどうなったか教えてくれれば俺たちは帰るー！それだけ教えてくれー！」

「勝手にログアウトしたわよ…あ、死なれるのは嫌だしこっちで身柄預かっているから。」

カザネは冷めた表情でアモネに槍を寸止めし、睨んだ後シルフの街へ飛んで行ってしまった。アモネは後追いをしようとするがローベが止めに入りこの勝負は終幕となった。アモネはどうも納得がいかないようで、短刀を何度も振り降ろし、ぶつぶつと文句を言う。

「あの女…絶対一回はキルしてやります。あんな女、リンネさんには害にしかありません！」

「まあ落ち着こうぞ…とりあえずリンネがいつ帰ってきてても大丈夫なように俺たちも状態を万全にしておこう、な？」

「は…はい！私がいることでケットシー領には入れると思うので、ここでクエストや種族の情報を集めましょう！」

おう！と言った後にローベは走ってルグルー回廊へ消えていった。それを見てアモネは苦笑するが、その反面本当に帰ってくるか不安だった。アモネは横に首を振りリンネの帰還を信じ大空へ飛び立った。

………

シルフの街に入りとある宿屋でチェックインをし、部屋に入るカザネ。4, 5畳ほどの部屋にはベッドくらいしかない。そのベッドの上に人影が一つ、カザネはため息をつきながらその陰に話しかける。

「あんた…今日もここにいるのね…カミュ」

「だって〜カザネちゃん来るって信じていたからっいつい〜」
「まったくあんたって本当ストーカーよね……」

ため息をつくカザネの前には、にへらと笑うプーカ族の少女カミュがいた。今日はパジヤマになっており、ピンクのフリフリのパジヤマを着ている。カミュは笑ったまま両手を広げカザネを自分の胸へと誘う。カザネは最初は渋るものの、だんだんと目が潤み始め先程とは全く違う弱い声を立ててカミュに飛び込んだ。うわーんと胸の中で泣きわめき、それを何も言わずに背中をさする。

「カミュ：私怖かったからまた強く当たってしまつて……一人のパ
ーティメンバーが倒れたのに：しかもドロップアイテムは私が持つ
ているの……」

「うんうん：他には？」

「その：仲間の女の子にも、ひどいこと言つちやつた……」

「そつかあ、また出会つたら次謝ろうね。そのドロップアイテムつ
て、武器なんだよね？」

「え、ええ……この鎌なんだけど……」

カザネが差し出した鎌『セイグリッド・デスライサー』は禍々しく、
月光に照らされ怪しく紫に光る。その大きさは例えると：道路標識
ほどだろうか、身長が170cmほどあるカザネが持つても大きめの
サイズだ。カミュは腕を組んで考えて何かひらめくと手をポンと叩
く。

「私の知り合いにラプラコーンの知り合いがいるんだ。その子は武器
の声が聴けるんだよ。」

「ぶ、武器の声？何かのスキルなの？」

「いいやく誰にあつているかとか武器の気持ち分かるんだつて
。死神のことも調べられるかもしれないじゃない？」

確かにと手を叩き再びカミュを抱きしめる。そして一日、今後の予
定を立てログアウトした。その後の寝室、緑と黄緑の炎がベッドの上
に燃えている横で、紫の炎が弱弱しく消えかかっていた。

貴方を絶対離さない

死神と会って5日が経った。リンネは相変わらず魂が抜けた状態でベッドの上に横たわっていた。用意された食事5日分が放置され、腐敗臭が部屋全体に広がっているがリンネは全く反応を示さない。カウンセラーがきても意思疎通ができずメンタルケアができない。これにはさすがの菊岡も引いたような目でリンネを見ていた。

「吹田、リンネ君に何があつた?」

「知らないですよ、一週間ほど前からいきなり魂を抜かれたようになっていたんですよ。話すら通じないです。」

「…逆にこの方が抵抗がなくていいか。もうしばらく観察を続けてくれ。」

それだけ言うと菊岡は歩いて行ってしまった。吹田には菊岡の言っていることがいまいちわからず、リンネも話していることが理解できてなく、部屋の隅で膝を抱えてうずくまっていた。吹田は流石に苛立ち、窓ガラスを殴り叫ぶ。

「おい死神! いい加減飯食えや…気味が悪いんだよ! ずっと見ねえといけないこつちの気持ちにもなれや…」

「…あ…う…」

「いい加減目を覚ませよ…!」

それでもリンネはベッドから窓を見るだけで、死にかけた顔は変わらず口をパクパクさせているだけだった。今すぐにも部屋に入りリンネを殴ってやりたい。この部屋から解放したいと思っただが、これが演技ならば開けた途端に襲われてしまい自分が死んでしまう。自分がそう考えてしまうことが吹田は悔しく、あまりの怒りから誰もいない夜の学校で吠えた。時刻は午後9時を指していた。

…

「これなんだけどく何かわかることはないかしら?」

栗色の神髪をお団子にし、ベレー帽をかぶるプーカ族の女性カミュがラプラコーンの女性に鎌を渡す。紫のセミロングにし顔には眼鏡をかけ知的に見える。華奢な身体を黄色主体の服で包んでおり、少し

子供にも見える。彼女は鎌を撫でたり抱きしめたりと不可解な行動をはじめ、鎌を置き目を閉じて頷き始める。その行動にシルフの少女カザネが引き気味に見ていた。

「ほ、本当にこの人が武器の心が分かるっていうの…?」

「ええ、彼女はクラウ。ちよつと不思議だけど鍛冶のスキルはものすごく高いのよ」

「は、はあ…で、何かわかったのかしら…?」

しばらくしてクラウは目を開けると二人に向き合い、鎌を手渡す。その表情は先程から全く変わらないけだるそうな表情。だが、目からは熱心な様子がうかがえる。

「この鎌…前の世界の持ち主を探している。前の使用人はどこかって言ってるね。」

「前の世界…?まさかこの鎌は別のゲームの亡霊…?だから死神って言ってたのかしら?」

「他のことはわかる?」

「ううん何も、何も話してくれないな。でも一人で怖がっている様子…きみのことは怖いらしいね」

「はあ…えっ私!?ちよつとどうゆうことよ!!」

憤慨するカザネ。カミュはそんな彼女の肩に手を当て「そこだと思おう」といい、どうどうと落ち着ける。そしてクラウから武器を受け取るとお金を渡してカザネをつれラプラコーンの街を後にした。

戻ることいつものシルフの宿屋104号室。時刻は9:30を指しており自然とカザネの口からは欠伸が出てそれにつられカミュも欠伸をしてしまう。

「…この炎ってさ、ログインしてない状態なんだよね?」

「まあそう言われているしそうなんじゃないのかな。どうしたの?」

「今の私たちを見てないのかなって少し心配なのよ…もしこいつが本当はログインしていたら私たちの下着とかが見られているのよ?」

「なら捨てちやえばいいじゃないの?どうなろうが知らないならいいじゃない?」

「なっ／＼／!? あんた何言って!? そんなことできるわけないじゃない! バカ!!」

以前に自分の言ったことを今更後悔するカザネ。聞かれていたのだろうかと思うとカミュが一体何なのかますます怪しくなってくる。カザネは炎となったりリンネを持ってみる。炎は熱くなく重くもない。紫に燃える炎は以前より弱くなっており、息を吹きかければ消えてしまいうさそうだった。

「私に謝らせず死ぬんじゃないわよ…責任取らせなさいよ…バカ」

ぼそつと呟き炎を抱きしめる。その後も特に炎の強さが変わらさず机の上で消えかかっているが、まだ燃えていた。その近くにはドロップした鎌、『セイグリッド・デスライサー』が炎を守るように置かれた。そして二人はベッドに寝て自然にログアウトしていった。その間、鎌は炎が燃えるたび共鳴するように紫色に光っていたのだった…

.....

午後十時、仕事に嫌気がさした吹田は辞表を書いていた。この仕事をやめてもいい、自分自身を守るためならこれしかなかったのだ。ここ五日、思い出す度に吐き気がして何度もリンネをぶちたくなかった。が、この壁がどうしても邪魔をする。そう考えるとここをやめるしかなかったのである。窓の外を見ると相変わらずひきこもるリンネの姿が見えた。やはり見るとイライラする…吹田は辞表を書き終わり深呼吸をするとリンネに向かった怒鳴った。

「おいーいい加減目エ覚ませや!! お前がやってんのはたかがゲームだろうが! 昔のことをまだ引きずってんのか…そんなんだからお前は弱いんだよ!」

「……」

「今日でお前のお目付け役は終わるからな…今日言いたいことをすべて言わせてもらうぜ」

だが、リンネから反応はなく聞く耳も持たずなきそうだったが、ストレスが限界に達した吹田に取っては関係なく、全ての不満をぶちまけていく。

「いつまでうじうじしているんだ…またお前は一人で勝手に背負って

落ち込んでいる…それがまた腹が立つんだよ！それが全て大人だと思っただけじゃねえ！お前、あの世界にいる時仲間ができたって聞いたがその仲間には見捨てられたのか？」

「……」

「その仲間をお前は頼らず…お前はある意味仲間を殺した。それでよく死神なんて名乗っていられるな。」

「…僕は……」

「今のお前は屍だ。死神の頃のお前はどこに行っただ…俺はお前が死神としてあの世界で生きて、お前が活躍したクソむかつく話を毎日聞かされるのが俺の唯一の楽しみだったんだがな！非常に残念だ！！お前が落ち込む暇があったらまずはその元仲間をどうにか説得させてから落ち込めよこのエセ死神！」

リンネは目を見開き窓を見て今の状況を把握しようとする。周りの状況を見ている。が、その光景は今まで住んでいた部屋ではなく、ガラスや破片が飛散した地獄のような状態。リンネからはまた頭を抱え唸り声が出てしまい胸の中から何かがせりあがってくる…その時だった。

「ここは立ち入り禁止だぞ！お前は誰だ！」

「リンネさん！リンネさんですよね！！私です！アモネです！！」

「ア…モネ…？」

そう、アモネと同じ顔の少女がリンネの閉じ込められた窓を叩いているのだ。が、窓は一向に割れる気配を見せず学校の中にたたく音が響く。吹田は止めようとするが、突き飛ばされてしまい啞然とする。アモネは消火器に立ててある使用説明が記載された棒を手に取り窓ガラスを思い切り叩いた。が、ガラスはヒビが入るだけで割れてくれない。そこから何度も叩き、ある程度ヒビが入ると棒を捨ててガラスを殴り始めた。

「リンネさん…私は貴方が見逃してくれた日を覚えています。私のわがままを聞いてくれた日も…私を受け入れてくれた日も。その時から私は決めていました、貴方を守るって決めてたんです…！」

「あの日…俺と…アモネが…繋がったあの日……」

「貴方はあのギルドに負けても諦めなかった。私を助けに来てくれた。だから…私も諦めたくないんです！手を差し出してください！！絶対離しません！」

が、何度殴つても割れない。そんなガラスに強い衝撃が加わる。アモネが後ろを見ると吹田が警棒でガラスを殴っていたのだ。その後、近くにあったヘルメットをアモネに渡し、自分も被りガラスを叩く。「これは貸しだからな死神。お前がここから出たら何でも言うことを一つ聞いてもらう」

「リンネさん…いや、音弥さん！手を…伸ばしてください！！」

ガラスが割れ、破片が床に飛び散る。その上をじやりじやりと音を鳴らす物が一つ。リンネは床に這いつくばりながら窓へ向かって手を伸ばす。そして伸ばした手は、アモネの小さな手を弱弱しく握りもう一本の手は体を支え立ちあがる。アモネは両手でリンネの手を包みその手を胸に持つて行った。その手には…苦労を物語るアモネの血と涙が流れていた。リンネが手を開くとそこには星のキーホルダーの破片があつた。アモネの片手にもキーホルダーの破片がある。「アモネ…ごめんな……」

「貴方を…もう離しません。」

隔てられた壁は破壊され、二人は再び繋がった。その様子を吹田が苦笑しながら見守っていた。

その日以降リンネの体は浄化されたかのように活気に溢れ、以前の生活に戻っていった。モニターだが学校の授業に参加し、終了すれば食事を済ませALOの世界へと飛び立つようになった。修理されたナーヴギアにはアモネからもらったキーホルダーの破片が紐を新調してしっかりと結び付けられていた。

明と闇の激突

「……僕には…力なんて…：…なかったんだ」

僕？なぜ自分がこんな口調を使っているのだろうか。元々俺は何なのか。先ほどのショックから気づけば白い空間に来ていた。周りを見ると先ほどまでの破壊された物々がなくなつただ、何も無い白い空間だった。そこには私服を着た自分自身が存在し、下を見ると白い服とスラックスを履いている姿が写っている。

「ここは…俺はどうなっている…？」

「君は僕であり…僕でない。今体のコントロールは返してもらつたよ」

急に現れたのはALOの姿をした俺自身だ。彼は俺を見てくすくすと笑い、俺の武器だつた鎌『ギルティ・サクリファイズ』を手に持っている。

「お前は…俺に何の目的だ！」

「ここは僕の心の中だ。今までの君はSAOで作られた偽りの僕だつた…だから消えてもらうことにしたんだ」

俺が偽りの自分…？そんなことはあり得ない。今まで俺は俺らしく生活してきたし、あの世界でできた人格ではないはずだ。俺がSAOに行く前の記憶を引き出すようにするが、全く思い出せない。

「お前…俺の記憶に…！」

「何を言っているんだ…だから、僕が本当の隣音弥（となりおとや）の人格で、君はSAOあの世界で生まれた殺人鬼『リンネ』なんだ…」

そうだ、俺の名前は音弥…昔からそう呼ばれていたはずなのに…：何故俺はここまでの記憶が抜けている？考えていると突然頭痛が襲い掛かる。音弥と呼ぶ声が頭に響き、ガンガンと頭を刺激するように俺を襲う。あまりの痛さに頭を抱え唸り声を上げてしまう。そこに何かの気配を感じ俺は素早く回避した。さっきまで俺がいた場所には音弥が持つていた鎌が振り降ろされていた。舌打ちをしながら俺を見てニヤリと笑う音弥。俺は一人しかいないはずなのに昔にあんな顔を見たことあるような気がする。

「この声は…誰なん…だッ…！頭が…!!」

「じつとしていなよ…僕が楽に終わらせてあげる。あの世界のようにね。」

「何を…!!」

「君は僕の母の邪魔になるんだ。」

鎌を振り回す音弥。俺も身構えると私服からSAOの姿に変わり、彼と同じ鎌で俺も応戦するが、時折頭痛が俺の邪魔をしてまともに攻撃できない。この痛みは何だろう…俺の名前を呼ばれるたび頭に響き、俺を行動不能に陥れる。その間にも彼は攻撃をやめずその一撃は俺の右腕を刈り取ることに成功した。SAOと同じように血は流れずポリゴンとなって消えるが、死神の時と同じ痛みが全身に伝わり、足の力がなくなってしまう。ポケットにはピックが入っており、投げると音弥は後退し距離をとる。その時、外から声が聞こえた。

『おい死神、そこに朝食が置いてある。早く食って授業に参加しろ』

「吹田…！俺は…ここだ！助けてくれ!!」

「無駄だよ。」

一度動きを止め、音弥はケラケラ笑いながら俺に言う。

「さっきも言った通り、この体は今僕の支配下だよ。だからそんな声は聞こえず…今頃の僕は話も聞こえていない、廃人の状態だね。」

「お前…!!」

「でも、もう時間の問題かな。自分の体を見てごらんよ?」

言われて自分の体を見るが、俺の手が薄くなっており指の上からでも持っている鎌が確認できる。これも俺の存在が消えている証拠だろうか。薄くなった左腕を振るい音弥の攻撃を防ぐ。俺は一つの可能性に賭けてみた。

「俺の母って…どんな奴なんだ…!」

「僕の母だ！僕の母は全て真実を教えてくれる。この世に必要なものを身を持って教えてくれる…僕のために僕の神であってくれるんだ…!」

「俺の…神……ッ!!」

再び頭が痛くなる。もしかしたら俺の体も彼に操られているのか

もしれない……が、せめて意思だけでも。残す、俺は思い切り雄たけびを上げるがどうも手ごたえがない。俺は鎌を捨て音弥に突進して首をつかむ。それと同時にどこからか誰かの声が聞こえる。

『……僕には……力がない……』『……僕には……力がない……』

「ツ……誰……まさかお前の！」

『僕には力がない……力が欲しい……』『僕には力がない……力が欲しい……』

そう、彼が言う言葉を現実の俺は繰り返していたのである。俺は音弥を突き飛ばし、右腕が再生したところで体制を整える。受け身を取り50m飛んだ音弥はゆっくりと起き上がり不気味に笑う。そして鎌を拾い上げ構え直す。

「そうだよ……今のは僕の本心……現実では何もできない僕の本心さ。君はSAOで強さを手に入れた気になっているつもりだろうけど、そんなものSAOの世界での力で現実で役に立つ力でも何でもない。君も力なんて持ってない……」

「現実で役に立つ力か……確かにSAOの世界で手に入れた力に意味はないな」

「君はその力を悪用して……多くの人間を殺したこの力は無駄なんだ。ということでも何も君は力を持っていない。」

力……か。確かに俺には力がないのかもしれないし、全くないのかもしれない。だが考えてみると、そもそも力が必要なのか。確かに認められるためには力が必要なのかもしれないがそれだけではない気がするのだ。権力を持っていても嫌われる人間だっているし、何か特化した力がなく普通に生活する人が好かれることだってある。なら……力を持ってなくてもいいんじゃないか。

「そんなに力に拘らなくても、いいんじゃないか？」

「ダメなんだ……力が必要なければ勝てない！勝ちが全てなんだ……何をしても勝つことが全てなんだ！」

勝ちが全て……そう言いはる彼は鎌を振り回し俺に襲い掛かるが、その攻撃は俺に全く当たらない。相当心が落ち着かなくなっているのだろう。だって、俺だってそうなのだから。しかも彼の言ったフ

レーズ：聞き覚えがある…勝つことが全て…勝つことが…母…
『負けるとお前の持つものが失われる』…僕の母が教えてくれた…だから僕は力を手に入れて…!』

「…原因は大体分かった。お前のおかげで思い出せて…俺が…いや、お前が生まれてしまったことが大体分かったよ。」

「僕は…僕だ…!最初から…」

「まず一つ、ここにいる俺たちはどちらも音弥の人格だ。そう、俺は二重人格だったんだ。生憎俺の母親の最後の記憶が勝ちの話なんだ。そこで二つ、俺はいつしか無意識に怒られない、母親に対して『母親にとつての理想の隣音弥』を作り上げてしまい、常に隣にいる母親が怖くいつしか俺はお前に人格を奪われてしまっていた。お前はそれを分かって俺が作られた人格だと言った。そうだろうか?」

そう、彼の言った言葉は俺が死神のダンジョンにいる時に見た夢と全く同じ夢だった。あの時…俺はお母さんの言うことが違うと否定し、「勝ちからも学ぶことがある…」なんて変なことを言ったんだっけ。その後の記憶が曖昧過ぎて仮説に近いことになってしまうのだが。音弥にはがつつりダメージが入っているようで、この様子なら体のコントロールを奪うことができるかもしれない。外界の声に耳を傾けるとまた吹田の声が聞こえた。

『おい死神! いい加減飯食えや…気味が悪いんだよ! ずっと見ねえといけないこつちの気持ちにもなれや…』

『…あ…う…』「悪いな! もうすぐそつちに戻る!! 少し待っている!!」
『いい加減目を覚ませよ…!』

さて…伝えることは伝えましたし…偽りの俺に裁きを下すときが来た。なんだろう、俺の体に再び力があふれあの世界の世界の感覚が戻ってくる。あの死神は自分で自分を殺すと言った、このことなんだろうか。クスツと笑いながら鎌を持ち、『スマッシュ』を繰り出した。音弥は動きが遅くなっており、先ほどまで避けられた攻撃が当たるようになってきた。

「その力は…人をまた傷つける…無意味な力…」

「この力のおかげでいろんなことを学んだから、俺は無意味ではない

と思うな。これがなきやアモネとも出会えなかったし、罪も知れた。俺が知らなかった世界を教えてくれたんだ。」

「やめろ…僕が…！…僕が消えてしまう…！！」

俺の鎌が彼を斬りつけると、彼の体はヴェールのように色が薄くなっていき、その度音弥は叫び体をねじ曲げる。が、そこを黒い物が埋めていき先程より音弥は雰囲気からしてヤバそうな状態に変貌、埋められた部分からは黒いトゲのような物が飛び出ている。

「僕に…力を…！！」

「一つ言うとならば、俺には信じる心なら負けなと思うているな。俺の後ろには仲間がいると考えると…安心しているんなことが出来る。後、その気持ちは時に人を動かせる時があるんだぜ？」

「そんな形でもない力…他の人に勝てない！」

「まあ…お前はそう言つてそのままなんだな…勿体無いな。俺より長く生きているのに。」

「そんな戯言を…ほざくなア!!」

「すまない、俺今も合わせて四年しか生きてないからな。子供なところは許してくれよっ…！」

大きく振りかぶり、釜を振り落とす。俺の鎌は音弥の持つ鎌を真っ二つに砕き、大きく相手にダメージを与える。武器を失った彼は爪を出して飛びかかって来た。その時だった。

『リンネさん！リンネさんですよね!!私です！アモネです!!』

『ア……モネ……』『アモネ！やつぱり来てくれた！』

『リンネさん…私は貴方が見逃してくれた日を覚えています。私のわがままを聞いてくれた日も…私を受け入れてくれた日も。その時から私は決めていました、貴方を守るって決めてたんです…!!』

『あの日…俺と…アモネが…繋がったあの日……』『そうだ…俺も覚えている。あの出会った日のこと…!』

『貴方はあのギルドに負けても諦めなかった。私を助けに来てくれた。だから…私も諦めたくないんです！手を差し出してください!!絶対離しません!』

最後の力を使い、手を伸ばす。が、後ろからは俺の肩を掴み消えか

かっている音弥が鬼のような形相で睨んでいる。が、そんなこと関係なく、俺が信じて差し出した手をアモネは…握ってくれた。

「リンネさん…いや、音弥さん…手を…伸ばしてください!!」

俺を音弥として認めてくれた彼女に引つ張られ、俺はリンネという人格から隣音弥になったのだった。

「ただいま…アモネ。」

その後何があつたのかは記憶になく、気づけばベッドの上で朝を迎えていた。部屋は昨日のような色んなものの破片が飛び散った空き巣後の状態でなく、ガラスやモニターは新調され破片も一つ残らず落ちていなかった。窓の外を見ると珍しく吹田がいびきをたてて寝ていた。俺も学校に登校する時間だったので用意された卵焼きとおにぎりを食べた後窓を叩いて起こしてやる。すると、機嫌悪そうに起きて俺を向いて何か言っている。

「お前…部屋掃除が以上に面倒だったし、どれだけ菊岡さんに怒られたら思ってたんだ!しかも修繕費はお前の後払いで俺の財布から払われたんだぞ!」

「そ、それは…ごめん」

「部屋から出たら絶対払ってもらうからな!後…つまらない話を聞かせたら今度は知らないからな。」

部屋の隅をよく見ると、辞表がビリビリに破られていた。こんなことを言っている…心配をかけたなら恩返しをしないとイケないな。

「少し刺激が強いかもしれないが、我慢しろよ?」

笑いが込み上げながら俺は机に向かい、俺は学校の授業に臨んだ。

やがて放課後になり、ALOに久しぶりにログインする。俺は確か死神のダンジョンでログアウトしているはず…と思ったら、そこはどこか見覚えのあるホテルの一室みたいな部屋。しかも俺は机の上で寝ており気づいた途端腰に鈍痛が走る。慌てて立ちあがり辺りを見るとベッドの上には…緑と黄緑色の炎が燃え上がっていた。まずいと思い、部屋から出ようとするも鍵が開かない。すると緑の炎が突然光りだし…ベッドの上にはパジャマ姿のカザネが出現したのであった。

竜使いの少女

ベッドに座るカザネを見てさらにそこから帰りたくなる。が、運悪くカザネも気づいてしまい俺を見るや顔が赤くなりスペルモーションに入る。俺は攻撃呪文を持ってはいるが、防御する呪文を持たない。しかもここはシルフ領だ、ここでカザネを仕方なく攻撃したところで落とされるのがオチだろう。さらにカザネには見せてはいけない俺の一面もある…

「さ…さっさとこれを持って…出ていきなさい！この変態!!」

机にあった鎌をこちらに投げられた挙句、風属性魔法をぶつけられ窓から吹き飛ばされながらシルフ領を後にした。その後何とか夜だったために潜伏呪文でホームタウンに帰ったのだった。

数時間し晴れあがった青空。時刻はAM10:00。今日は土曜日であり、学校の宿題もなく縛りのない一日を俺たちはこの世界に費やしている。モンスターポップしないケットシー領付近の小さなフィールド、ここでは俺とローベはアモネの監視下羽の使い方を練習していた。アモネ曰く肩甲骨に力を入れるとのことだが…何故かできない。

「もうっ…なんでだろう…?」

「元々人間は飛ぶ生き物じゃないだろ…俺走るから許してくれ…!」

「ダメです！走るのには随意飛行に負けます。例えばこんな感じです」

走って逃亡するローベに向かってアモネは飛び立つ。そして30秒も経たないうちに彼を捕まえ抱え込みながら帰ってきた。ローベのステータスには睡眠状態を意味する『Sleep』が表示されており、ローベはいびきを立てて眠っている。恐らくアモネが状態異常の魔法をかけたのだろう。走りより速いなら確かに飛べてもいいのかもしれない。俺はローベはその後何とかビル二階分程度は飛べるようにはなったが、そのおかげで肩付近が筋肉痛になってしまった。

二時間ほど経ち、息を切らせながら俺とローベはアモネとともにケットシー領へ入っていく。そこは言うまでもなく猫の楽園。ここ

にいるプレイヤー全員に尻尾と耳が付いているのだ。また中には、猫になり切るプレイヤーまで存在し、精霊の世界というか不思議の国の世界に入ってしまったような気がする。生憎このパーティーに主人公を務められる人物はいなさそうなのだが。

と、そこで俺のパーティー全員の腹の虫は鳴き声を上げその音を聞いた途端個々の空気も相まってかちからが抜けた。

「アモネ…俺一旦ログアウトしてご飯食べてくる…:」

「俺もご飯を食べてくるぞ！三分だけ待っていてくれ!!」

「えっ…ちよっ…二人とも…せめて宿屋に入ってからに…」

アモネが何か言ったのは分かったが、空腹が勝っていた俺にはそんな言葉は届かずすぐ現実世界に戻り、休日も出勤している吹田を見ながら支給飯のチャーハンをローベの宣言通り三分で平らげる。そしておなか一杯になったところすぐにALOに戻る。すると、目を開けた先にはアモネの顔が近くにあり、目を閉じている彼女はまだ気づいていない。

「ただいま」

「わつきやああああああつ!」

突然目を開けて驚きのあまりベンチから滑り落ちるアモネ。その光景は非常に滑稽で尻尾と耳がピンと伸びきり驚いた顔のままこちらを見て硬直している。一体何をしようとしていたのだろうか…そう考えると身震いが起こり怖い。数分後、ローベも起き上がり次はアモネの食事タイムとなった。

しかし、ベンチの上に寝ているアモネの両側に座る俺たちは多分外の目から見たら不審者に見えるのだろう。通る目が少し痛い。鎌を装備したインプと上半身半裸のサラマンダーが未発達少女の横に座る…アモネめ、まるで俺たちを警察に突き出すためにやった確信的行動にしか思えない。呪ってやる…さらにローベも眠ってしまった手間が二倍になって…ため息しか出ない。昼ごはんのせいなのだろうか、少し欠伸の出るそんな時間。数分後、アモネが起こされてしまったことは言うまでもない。

「というか…俺のこの武器と俺の衣装、色合いが反対過ぎてきている

俺も気持ち悪いな……」

「仕方ないじゃないですか……白い種族がいらないんですから」

「白い種族といえば昔、アルフという光の上位種族がいるってことを聞いたことがあるな……まあ、誰も見たことはなくて、街が建つ前の世界樹の頂上にたどり着く『グラランド・クエスト』をクリアした種族のみ見ることが出来る……らしいのだがな！」

「今はないってことは、誰かがクリアしたということなんですかね？」

「ヒースクリフ辺りがクリアしてそうだがな……ヒースクリフが羽生やして飛ぶ……ふふっ……はははっ！」

そのイメージ図がツボにはまり笑っていられなくともいれなくなった。それが現実ならばぜひ見せてほしい……そして俺と戦ってほしかった。笑って勝負にならなさそうだが……現時点で笑いが止まらないのもう駄目な気がする。隣を見るとアモネもくすくす笑っており、ローベは？マークを浮かべているような不思議な表情になった。

「あ、アモネちゃん！」

「その声は……シリカちゃんだ！」

アモネが後ろを振り向くとそこには栗色の髪を二つに結び、紺主体の服を着たケットシーの少女がにこつと笑いながら話しかける。彼女の頭にはタイムされたであろうモンスター、フェザーリドラがじつとこちらを見つめてくる。

「こちら同種族の友達シリカちゃん。こっちはインプのリンネさんとサラマンダーのローベさん。」

「はじめまして……リンネだ。」

「シリカです……よろしくお願ひしますね！」

固い握手を交え、簡単に挨拶を済ませますがローベの様子がおかしく表情を見ると驚きの表情から止まったままだ。タイムラグだろうか？すると全速力で近づきシリカの手を握る。

「こ、こんにちは……俺はローベと言います!!シリカさんのことは前から存じ上げて、その………」

シリカの頭に止まっていたリドラが飛びあがりブレスを吐きだす。

そのプレスに当たったローベは倒れて麻痺になった。申し訳なくなり、俺とアモネでシリカに謝るが、シリカは何が起こったかあまり理解しておらず俺たちの対応に慌てている。

ローベの麻痺が治り、四人で近くのカフェで軽食を取りながら談話をした。シリカもSAOからの帰還者らしく昔のことを話し合う。それぞれの恐怖した話に共感し、関係が深まっているような気がした。シリカは話が終わった後、一つの依頼を出してきた。

「実は…アモネちゃんに折り入って頼みごとがあるんだけど…」

「何？何か困っていることだったら私たちが手伝うよ！」「い、いや…俺はそんなこと一度も」

「ありがとうございます！実は…新しい武器を作ってもらうためにあるモンスターからドロップするアイテムが手に入らないんですよ…」

「ふむふむ…」

「モンスターが強くて、私一人じゃどうも…お礼はします！」

「リンネさんもこれを機にモンスターとの戦闘に慣れたらいいんじゃないですか？」

確かに。この世界では死んでもデメリットで何とかなる世界だ。だからあの世界みたいに命の危険を感じなくても気楽にモンスターへの体制を得ることができるのでないのだろうか。この依頼をよいことと考え簡単に受けた。今日は良い日になると考えていた…

「確かに。これで俺は死神のイメージを払拭する…！」

「なんでこんなことになるんだよオオオオオオオオオオ!!」

「り、リンネさん！ほらいい機会ですから!!」「そういうアモネも逃げてるじゃねえか！なんでこの世界にもペネントがいるんだよ!」

「私は少しこのモンスターにはいい思い出がなくて一緒なら倒せると思ってたんですけど…私のせいですみません！」

四人でペネントから全力で逃走する。が、ペネントは俺たちを執拗に追いかけて時折ツタで攻撃を仕掛けてくる。俺はモンスター自体に非耐性なので×、シリカもこのモンスターにいい思い出なく×、アモネは植物と虫が嫌いで×。ならローベは…と思えば探すが一

緒に逃げていないのだ。逃げる直後は一緒にいたのにいったいなぜ：後ろを向くとローベはツタで拘束されペネントに捕食されかけていた。なぜ逃げない！と思えばステータスを確認すると、案の定麻痺を意味する『paralyze』の文字が表記されていた。

「お前体弱すぎるだろ!!ローベを助けないと…!」

「わ、わかりました：私がいき：きやーっ!」

「アモネちゃん!ピナ、二人が縛られているツタに攻撃して!」

シリカは羽で飛び上がり、ペネントのツタに攻撃する。が、ペネントの体力は二本あり、ツタも何本斬っても再び生えきりがない。俺も攻撃しようとするがツタの攻撃に回避だけで精いっぱい。ゲージが一本減ったことで様子が変わり、さらに動きが俊敏になった上、シリカも拘束されてしまった。

なんとということでしょう：俺のツレはあつさりとツタに拘束されてしまい、残されたプレイヤーはこのメンバーで一番モンスター耐性のない俺だけになってしまった。恐怖で怯えるが、ペネントは三人を捕食するためか動きを止めたのである。チャンスだった。俺は真正面から斬り体勢を崩したところで三人を助け出す。そう思い飛びかろうとしたその時だった。女性陣の悲鳴が聞こえる。

「リンネさん!見ないでください!」

「向いたら後でワンキルさせてもらいますよ…!!」

状況は悪くなる一方だ。ピナの攻撃では恐らく倒しきれないし：むしろ上を向かずに倒すのは無理がある。どうするべきだろうか：そんな時、俺の頭に一つ良いアイデアが思い浮かぶ。

考えれば俺は闇属性の精霊インプだ。そしてインプといえば：闇属性魔法がある。闇魔法はスペルも長い時に自身の命すら削る強力な魔法。それを俺は唱えられることに気づき説明を読みながらスペルを唱えていく。その間、さらに悲鳴は大きくなる。

「ふ、服が溶けてます!?!」

「リンネさん!助けてください!!」

「シリカ!後でみんなに回復魔法をかけてくれ!!」

「は、はい~!!」

俺はスペルを唱え終わり、目を閉じまっすぐペネントに飛び込んでいく。そこで目を見開き両手を前に突き出す。すると、闇がペネントを包み、その後大爆発。俺はその爆風に巻き込まれ一気にHPがゼロになる。まあ、元々自信のライフと引き換えに敵に大ダメージの魔法なのだが。俺は全身炎に包まれた。

三人は解放され、それぞれ一部服が溶けているがなんとかペネントからとあるアイテムをドロップすることに成功した。炎となっている俺と後の二人をシリカが回復魔法をかけ回復する。俺は蘇生魔法をかけてもらい生き返るが、最悪のタイミングで蘇生してしまった。

「…いい、いや…その…これは事故であって…な？」

「…リンネさん…」「ねえシリカちゃん…こいつどうしてやりましようか…ねえ？」

「す、すまない！見る気はな…！」

「リンネさんのバカあ!!」

二人に鉄拳制裁を食らい再び俺の目の前には(You are dead)の文字がうかびあがり、体は炎に包まれて蘇生時間が表示されてしまうのだった。

目を覚ますと昼にいたベンチに眠っていた。起きあがり右を見るとアモネが頬を膨らませこちらをジト目で睨み、左を見るとシリカが恥ずかしそうにこちらを見ていた。

「あの…昼のことはすみませんでした…俺の不注意で…」

「わざとではないんですよね？全く…シリカちゃんが、帰り道守ってくれなかったらリンネさんデスペナ受ける所だったんですよ？」

「深く反省はしています…」

「いえ、私もできないことを押し付けてしまったものですし…私も悪いですよ…ごめんなさい」

皆で和解の握手を行い、とりあえず仲を崩さず今日の一件は解決した。報酬は、ケットシー領のレストランを一食奢ってくれるそうで俺ら三人は歓喜に包まれていた。と、ここで閑話休題。SAO出身の彼女に一つ聞きたいことがあった。

「シリカは黒の騎士のこと知ってるか？」

「黒の騎士…キリトさんのことですね！この世界でもたまに一緒にクエストに行ったり…」

「知り合いなのか!?ぜひそのキリトってやつに俺は会いたい…!会える場所を教えてください!」

つい、進展が早く懇願するようにシリカに話してしまい、シリカもいきなりの俺の反応に苦笑している。まあ、俺の中身は四歳なのでそこは許して欲しいが…もうすぐ会えるかもしれないと思うだけでウキウキし頭がおかしくなってしまうそうだ。が、今日はまだログアウトはしない。時刻はPM20:00を指していた。

妖精の羽休め

ユグドラシルシティは相変わらず広い…改めてそう思う。ここでは一つではなく多種族のプレイヤーが集まりそれぞれが街を作っている。ここに来れば種族同士の戦争なんてないように思われるが現実はその甘くない。下を見れば、赤と緑の光がぶつかる様子が見られる。シリカに連れられ街に入り、ある部屋の一角にお邪魔する。そこには今まで見たことのないプレイヤーが集まっていた。

「あらシリカちゃん、こんにちは」

「こんにちはアスナさん！リズさん、エギルさんも！」

「お、そいつらは…お前は、リンネじゃないか？」

「エギルさん！あつちの世界ではお世話になりました！」

久しぶりの再会に喜ぶ俺とエギル。実はSAO時代、武器や防具の相談を身の上を打ち明けた上で受けてもらっていた。俺は彼の存在なしでこの世界を生きることはできなかったであろう。俺が周りを見ると、シリカとエギル以外全く見たことのないプレイヤーがたくさんいた。その光景にはアモネも少したじろいしてしまう。ローベの姿を確認しようとするとな彼は驚愕の表情で部屋の人物を見る。そして確信が持てたのか、俺を外に連れだした。

「ちよつ…いきなり何すんだよ…」「リンネ…あの世界にいて、あの人が分からないのか!？」

「ま、まあ…人なんて覚える余裕なかったからな…」

「まずはな…」「あ、あのローベさん…人前にして失礼なので一度部屋に戻りましょう…?」

ローベは興奮のあまり、そんなことも忘れてしまっていたようだ。すまない、と軽い謝罪をした後再び部屋に入る。シリカは苦笑を浮かべていたが、ピンクの髪のラプラコーンはものすごく怪しく俺たちを凝視していた。とりあえず失礼なことをしたので、俺たちから自己紹介を始めることにした。

「先ほどはすみません。インプのリンネです」

「私はケットシーのアモネです」

「俺はサラマンダーのローベです!」おら、頭下げろ…」

頭を押さえ、ローベの頭を無理やり下げさせる。この男には礼儀というものが無いのだろうか。将来が軽く心配になる。すると、シリカは水色の女性に何か補足をしているようでその話を聞いた後、なるほどと頷き俺たちに体を向ける。

「改めて、この方はリンネさんです。今日私のクエストを手伝ってくれて…少し知りたいことがあると言ったので来てもらいました。」

「こんにちは、アスナです。よろしくお願ひします」

「い、いえ、こちらこそよろしくお願ひします!いきなりすみませんが…黒の剣士、キリトを知りませんか!?!」

「えっ!?!」

急な事だったのか、驚いて顔を赤くするアスナ。まずいことを聞いてしまったかと思うが、すぐピンク髪の女性が訂正してくれる。

「あー、ごめんね。アスナはキリトと結婚しているのよ…」

「えっ!?!それはすみません!」

「ちよつりズ!誤解されることを言わないの!」

「あははー、でも同じようなものじゃないの?私はリズペットよ。よろしくね」

「よろしくお願ひします!でも…今日はキリトは来てないんですか…」

「うん…キリトくんは今少しね…」

心配そうにモニターを見つめるアスナ。何があったか知りたいが、非常に聞きにくい。モニターを見ると別のゲームだろうか、銃で戦闘が行われている様子が表示される。どれも迫力と緊迫感が伝わり、この世界とはまた違う面白さが伝わる。が、一人異様なプレイヤーが地面を駆けていた。銃弾を光剣で斬り前進していく女性プレイヤー。先ほどから見るに、モニターの世界では女性プレイヤーがあまり見られず、華奢な体ながら男性に引けを取らない動きがまた美しく見える。

「しっかし、キリトは銃の世界でも剣しか握れないのかねえ…」

「あはは…まあ…」キリトさんですから…」

「…この女性が、キリト…?」

「そうです、この剣を使っているプレイヤーがキリトさんです!」

信じられなかった。このプレイヤーは、デスゲームで生活を続け女性特有のセクハラにも負けずどの世界でも剣を振り抜き走り続けてきた。その意志に改めて尊敬する俺。思わず惚れてしまう…さてよ、さつきリズはアスナとキリトは結婚していると言った…:すごく不穏になった為に考えるのはやめた。

「そういえばエギルさんはまたお店やっているんですか?」

「いや、本業が忙しくてな…あまりこちらには顔を出せていないんだ。」

「カフェですか…また、ぜひ行ってみたいです!」「私も!!」

「わかった。住所はメールで送っておくからいつでも来てくれ。」
「はい」

キリトへのショックを無理やり押しつけ、いつかカフェに行きたいと思いつつこの場を後にすることにした。正直なところローベが空気に同然になつていたがあまり気にしないでもいい。

ふと気づけば、俺は森の中に墜落していた。目を覚ますとローベとアモネが心配そうに俺を見ている。何があつたのか全く覚えていないのだ。ユグドラシルシテイ飛んだあたりから記憶が薄れていき何をしてここまで来たのか覚えていなかったのだ。

「リンネさん…急に受け身も取らずに空中から地面に垂直落下したんですよ?」

「うむ…もしかしたらお前、最近いろんなことがあつて休みがとれていないだろう!今日は解散して、皆ゆつくり休もうじゃないか!!」

「ローベ…わかった。ログアウトするよ。おやすみなさい。」

俺は立ち上がり、森の中を歩いてルグルー回廊へ足を進めようとした…その時気づいたのだ。ここが森ということとは…シルフ領。ということは…俺は森林地帯とスイルペーンの境界線上で待機することにした。すると、俺の思惑通り一人の女性がシルフ領から出てきた。彼女は俺に気づくと槍を構えこちらに近づく。着地した後、5mほど距離を取り俺を睨む。

「あんた…どうせキル目的でしょ？知ってる、私が無理やり追い出したからよね。殺せばいいじゃない。」

「だから殺す気なんてないって…」

「そうやって焦らされるのが嫌なの。ここは何度だって生き返れるし、別にやられる時は逃げたりしないわ。それでおあいこ……」

「なあ…決闘しよう。勝った方の言うことを一つだけ聞く。どうだ？」

「わ、私傷つけ合うのは嫌だし…人間同士……」

「お前の予想通り、俺はPKをする。そんな奴人間じゃない、ただのモンスター同然さ。」

手をひらひらさせ言い放つと、カザネは目の色を変え槍をもう一度構え直す。送信されたメッセージは受理され、カウントダウンが始まる。

『3…2…1…』『DUEL START!!?』

スタートと同時に槍でついてくる彼女。凄まじい連撃に身がたじろぎ後退ばかり繰り返す俺。が、彼女の攻撃は当たりそうに当たらない。なので俺は槍を弾き彼女の体に二撃切り込みを入れた。すると、彼女はスペルを唱え始めたが俺にはわかってしまう。あれは闇魔法で、俺ごと巻き込んでしまう呪文…決闘だろうが体力がゼロになればお陀仏、俺どころか彼女もペナルティーを受けてしまう。さらに闇魔法でのペナルティーは二倍になるため相当の覚悟が必要。が、彼女にはそんなものは見えない。俺を葬る？自分が逃げる？そんなものしか見えなかった。俺はとっさに彼女に近づき…闇魔法で自らの身を削りながら、魔法をキャンセルした。

そして、彼女を抱きしめた。

「あんた…私になんてことするの…!?慈悲のつもりだろうけどそういうの……」

「簡単に死のうとするんじゃないな…俺だって救えなかった命がある。大切な人が消えてしまったことがある…そんな人がいるのに…簡単に命を捨てよう……!」

「うるさいわよ！あんたに私の何が……」

「わかるわけがない!!」

思ったことをはつきり言うと、彼女はきよとんとこちらを見て呆然としている。そりやそうだ、読心なんて出来るわけがないんだけど、彼女に伝えたかった。

「お前が俺を殺しても…俺はお前を恨まない。あの時何も言わずに俺を助けてくれたこと、とても感謝している。その見返りとは言えないと思うけど俺は…もうお前を死なせはしないよ。俺が守る」

「…バカ！バカバカバカ!!このバカ！」

拘束が解かれ、彼女は俺の腹を槍で突き刺し俺のHPを一気に赤に減らす。腹が疼く感覚に見舞われるが俺はそれでも逃げない。彼女の思いを今ここで全て受け止めるからだ。

「大嫌い！最初に会った時から変だと思つたわ!!かつこいいとかでも見せようとしたのか知らないけれど、かつこ悪いところかダサすぎるわよ!!もう二度と…！二度と…！！」

「二度と…？？」

「…死なないで…私の前からいなくならないで…！このバカ…」

俺のHPが底をつき、決闘は終了。俺は炎になる予定だったが、カザネの回復魔法で何とか生き残ることができた。

決闘終了後、カザネとフレンド交換を行いカザネはシルフ領、スイルペーンへと帰っていった。俺は謎の達成感に満たされもう何もしなくていいやとシルフ領の森林のその場で大の字になって寝てみた。星空は綺麗に光り、そこに時々妖精が通過していく。いつか…彼女も加えていつしよに飛んでみたいとふと思つた。

「現実では…どうなんだろう…」

大空に手を伸ばしたが何も取れず、ため息を吐いてしまう。世界が広がったらしいな。そんなことを思いながら、今日はログアウトすることにした。

生けとし謎の原石

どうも、友達が増えました隣音弥です。今俺は隔離部屋越しに心理カウンセラーの先生と対面して心理ケアを行っています。これは俺がここに来てから一週間ごとにある恒例行事であり狂気的な性格の俺を何とかケアして、社会生活に復帰させるそうさ。それが真意かは全く分からないが。が、正直疲れる。先生が可愛いから目の保養を…とはならずいつもカウンセリング終了後は床にひれ伏している。

今日もベッドまでたどり着くことなく残り1mほど届かず眠ってしまった。起きると時計は午後7時を指しており、冷めないうちに食事を食べる。珍しく今日の食事はオムレツだった。

「どーかね、いつもの俺の手作りの食事は？」

「お前起用なんだな…というか、いつも作ってくれていたのか!!どこで!？」

「学校の家庭科室を使って料理しているんだ。最近では根下さんも手伝ってくれててな。」

根下さんというのはアモネの名字で、『根下愛花(ねもとあいか)』という。あの日以来俺と面会してくれる時がありリアルであったことを話してくれ、今では俺の癒しの一時の一部になった。現実でも彼女は相変わらずショートヘアで背が低く、気持ち小学六年生に見える。そんな彼女のおすそ分けは毎回おいしく特にお菓子屋デザートのは一度だけ食べたことのある高級レストランのデザートに似てとてもおいしい。食事の時間も面会の時間と同じくらい待ち遠しかった。

「今日はアモネは来なかったんだな…?」

「今日は忙しいらしく、料理だけ作ってあとはよろしくって言われてな…」

「なるほど。なら俺も今日はALOは休みかな。ゆっくり寝ると…」

「音弥!音弥!!会いに来たわよ!!ここからでましよう!!」

突然の訪問、俺は含んでいたお茶を窓ガラスにぶちまけてしまい、その勢いで窓ガラスの外を見る。訪問者は、顔に少ししわがあり茶色

の髪にも白髪が混じっている。SAOの中でも見かけなかった人物だが：なぜ俺の名前を知っているのだろう。そのお婆さんは俺が隔離されているドアを何度も開こうとするがドアは一向に開く様子がなく頑丈なロックによって閉じられている。お婆さんは顔を真っ赤にして斧でドアを殴るが結局開かず、吹田が止めようにも斧を持つために止められない。

「あの：俺に何の用事が」

「あなたを！あなたを迎えに来たのよ！！この狭い世界から救いに来たの！！私がたくさん愛してあげる！！」

「：！！」

思い出してしまった。この声この姿：この愛。この前聞いた声と瓜二つだった。フラッシュバックされる記憶はすべて鬼の形相で俺に手を挙げる女性の姿。俺を見るたびイライラするといひ殴り蹴り、時に斬られ時に焼かれた。それが俺は嫌でその女性にとって理想の僕を：俺は作り出した。その元凶の母親、『栗島照美（あわしまてるみ）』が目の前にいたのだ。

「あんたからもここを出るって言いなさいよ！ほら早く！！いつもお母さんのいうことを聞いてたでしょう！！」

「嫌なこった！俺はもうあんたの言いなりになんて：」

「音弥、あんた少し黙ってなさい。ちよつと警備員さんここにに入れて。鍵持っているんでしよう？ほら早く」

吹田が首を絞められ悶絶する。母の手は筋肉が張っておりものすごい力がかかっていることがわかる。が、吹田も簡単に離しそうになく母はあきらめて吹田をぐみのように投げ捨てた。そして置いた斧で窓ガラスを破壊する。その顔は狂気染みており、まるであの世界にいたミラと同じ顔のようにも見える。また俺は負けるのか：残りの窓ガラスを割りきり、ゆっくりと部屋に侵入する母。ブザーが鳴るもののこんな数秒じゃ警備員なんて来ないし、たとえ外で待ち伏せしていても母なら抜けてしまうのだろう。絶望に落ち切ろうとしている俺を母は抱えて窓から脱走した。吹田は倒れながらどこかに電話しているが：その助けはたぶん受けずに終わるのだろう。さらに

俺は絶望した。

「もうすぐ家に帰れるからね。もうあのゲーム囚われることなんてないわ。お母さんがきちんと育ててあげる。貴方が生きている間ずっと、死んでもね」

「…」

案の定学校の外に特殊部隊らしき鎧をまとった人が並んで俺たちを待ち受けるが、母は難なく潜り抜け校門外に連れ出す。学校を超えて街っぽい場所にも特殊部隊のような人たちが立ちはだかるが、俺を持っていくからか母親に銃弾を放てず受け止める特殊部隊を母親は足だけで突き飛ばし突破する。そして残った左手で銃を拾い上げ弾丸を周辺に散らす。悲鳴を上げて倒れていく人たち。あの時の思い出がフラッシュバックし、俺の精神を蝕んでくる。今ぶら下がっている俺ができることは母を蹴ることだが、怖くて蹴られない。突如、母親から俺の体が離れ逆方向へ進んでいくものすごい力が腹に伝わり腹を抱えて悶絶する俺。母親は俺を追いかけて追ってくるが母が手を伸ばしたところで俺は意識を放棄してしまった。

気づけば部屋の中、目を覚ますと畳に寝ころんでいた。母の別荘だろうか、と思った時奥から緑色迷彩の戦闘服らしき服を着た人がこちらに近づき俺のバイタルをチェックする。指先や腕に機械が取りつけられその検査が終わったと思ったらおかゆを持ってきてくれた。

「あ、あの…ありがとうございます。貴方は誰ですか？」

「私には名前はありません。菊岡さんから命を受けALLOの監視をしている者…〈仮想課〉監視兼潜入担当。VR—047KRS、コードネーム『クリスマス』」

「く、クリスマスさん…ですか。外国とかに??」

「日本には住んでいませんでしたね。元々は紛争の地域に住んでいた者です。」

勧められたおかゆを息をかけながら食べる。味は少し塩味が強めで適度にご飯も柔らかかく今まで食べたおかゆでは一番おいしい。以前はところどころ焦げており、拳句の果てには適当に味付けされた真っ黒なおかゆを食べていたのでこれを食べている俺の口とお腹は

幸せに包まれ目からは涙が流れる。

しかしこのクリスという人、男か女かわからないのだ。顔は見る限り女性に見える。刈上げにされた髪の上から髪が垂れており、声も女性にしては少しハスキー……というか低めであり筋肉質な体がまたどちらかわからなく、この状況を無駄に混乱させる。するとクリスは一緒におかゆを食べ縁側に座り口を開く。

「私に性別などありません。任務中では性別なんて関係ありませんから。ですが私自身もどちらが本当の性別なのかわからず……任務外では少し困るときもあります。興味があるのですか？」

「い、いや……知らない人だからちよつと気になって……」

「私は生まれた時から『男』『女』らしく育ててもらわず、『軍人』として育てられ子供の時から銃を持ち大人と一緒に戦っていました。ある日私たちは負け、その国から追放されてしまいました。その時、誰か忘れましたが『その力を人を殺すことではなく人を守ることに使ってくれ』と言われて子の国で学校に行き学んで……今に至ります。その時に人を守るために、お前はこれから美しい石となる……という意味からクリスと名前を付けてもらいました。今はA L Oで監視官として働いています」

国の状況など子供の俺には全く分からないが、またクリスも俺と同じように閉鎖された育てられ方をしたのかもしれない。似た境遇を持つクリスに対し俺はすんなりと納得してしまう。と、今更ながら俺は何故どうやってここまで来て、しかも今はどういう状況でここはどこなのか……聞こうとすると全て見透かしたかのようにクリスは淡々と話す。

「先ほどか仮想課から観察対象の貴方が盗まれたと連絡を受け、粟島照美に盗まれた貴方を通りすがりに取り返しました。その後、私が住んでいた某住所の一戸建ての家で貴方を保護しています。粟島照美はもちろん取り返しに来ようとはしましたがそれを利用して罠にはめました。今頃拘束され、特殊な牢屋に投獄されていると思います。なお、明日には貴方の身柄を学校に返そうと思います。」

「なぜ俺をそこまでして閉じ込める……これじゃ昔と変わらない生活

じゃないか……！さつきから俺が盗まれたとか取り返すとか……一体俺のことなんだと思っっているんだよ！」

「それは……貴方がS A Oあの世界にて大量殺人を行った結果であり、貴方を保護している状態で……」

「俺にそんなことできるわけないだろ！現実で凶器なんて振れるわけがないよ……どうせ信じてくれないと思うけどさ、俺だって外で暮らしてみたいよ。皆この部屋の外では何しているんだろうって考えたりするし、俺の前を通り過ぎる生徒は皆二人以上で集まって笑って何か話している……そんなことを仮想空間だけじゃなくて現実でもしてみたいんだよ！なんでみんな俺の言うことを信じてくれないんだよ！どうせあんたも俺のことを殺人鬼としてしか見ていなんだろ！だから……だから……！」

感情が抑えられなくなった俺は泣きながらクリスの腹を何度も殴った。クリスの腹筋は硬く、俺の弱い拳は簡単に弾き返されてしまう。何もわからない俺はこうすることしか考えることが出来なかった。すると、いつの間にかクリスの両手は俺を包みこみ背中をさすってくれていた。

「盗まれたと言ったことは訂正します。ですが……貴方はもうじき自由の身となります。」

「えっ……どういうこと……？」

「もうじきS A O事件に関連し貴方に乗っている殺人容疑についての裁判が行われます。弁護士もS A Oの世界に行ったことのある人物で、私たちは勝訴することがほぼ確定です。心理状態も良好で暴れる様子もないのですでに出所条件は満たしています。」

「本当に……？」

「はい。どの道貴方に公表しないといけない情報でしたので先行して報告します。」

嬉しかったが心から叫ぼうにも元気がない。そんな俺の顔の頬をクリスは指でつまんで伸ばしてくる。うへつと変な声が出てしまったがその顔を見てクリスは少し口角を上げて笑った。始めてみる顔に少し驚きつつも、俺の表情は自然と笑顔になっていた。

「これが…守るべき者…なのででしょうか…ね？」

「クリスさん何か言いました？」

「いえ…もしALOで会った時はよろしくお願いします。後、ALO中に寝ぼけることは現実世界とのバランスが崩れている兆しらしいです。貴方に最近そのような様子が見られるので考えすぎず休むことをお勧めします。」

正座のまま礼をして立ちあがり部屋の奥へと行ってしまった。彼女の本心が見えず終始恐怖にしか思えなかった。とりあえず俺の安全は確保されたらしいので裁判の日まで安心して過ごせるらしい。この日はこの家で普通のような生活をし、翌日ふと気づけばまたあの部屋のベッドで寝ていた。昨日のように窓ガラスは散っておらず吹田もいつもと変わらず俺をジト目で観察していた。少し違うといえ…吹田の首にコルセットが付いていることくらいか。

「昨日は…その…」

「ああ喋んな。首が痛いんだよ。寝ぼけるのは大概にしておけよ…」

首を押さえながら席に戻る吹田。少し異常な光景だが何故かそんな空間を俺は受け入れているのかもしれない、彼のせいで。そんなことを思い普段の生活に戻っていった。

その日の放課後、いつも通りALOにログインした俺。この後、あんなことになろうとは誰も思っていなかった。

覚醒する不死の神

リンネが誘拐されている間、ALOの夜の中でアモネ、ローベはカザネ達と合流するためにシルフ領へ向かっていた。ローベは相手が女性ということから胸がドキドキしていつも以上にテンションがハイになっていた。そんなローベもいることからかアモネの気分は最悪だった。

「なんであんな奴とクエストなんかに…！私とローベさんだけで十分だったじゃないですか!!」

「い、いやつい…目が輝いていてあんなに行きたそうに見られるとな…誘わないと泣かれるだろう…苦渋の決断だったのだ!」

「嘘つけです!私ならNoの一点張りです!!」

.....

それは数日前に遡る…リンネたちがユグドラシルシティから帰り、リンネが自分の領へ帰ったのを見計らいローベとアモネはケットシー領へ集まっていた。アモネが呼び集めたその理由、それはリンネに疲労がたまっていることだという。そしてアモネは一つの意見を提案した。

「リンネさんにオーダーメイド品をプレゼントするんですよ!リンネさんの防具は初期装備のまま敵からの攻撃を食らえば危険です…ですから、何かレアアイテムと防具をプレゼントすればもう少し頭を使わなくてもいいじゃと思いました!」

「確かに…耐久値が増えればリンネがギリギリで戦う必要はなくなるからな!行ってみようか!!で、何か考えはあるのか?」

「はい。アイテムの方はレアなアロマが手に入ったのでこれで休んでもらい…防具はSAO時代と同じような白を基調にした…」

アモネが何かを話していると、シルフ領の境界あたりにある森から謎の視線が飛ぶ。その視線は何か物欲しげな子供のような弱弱しさが漏れ出る目線。アモネは先程から気づいてはいたものの、怪しいのでほおっておきローベとともに予定を立てていく。すると、一人ケットシー領へプレイヤーが降りてきた。そのプレイヤーは栗色の髪を

肩まで伸ばし、頭に装備したベレー帽が白黒のワンピースと合いピアノのように見える：自分が楽器のような服装をしていた。

「貴方は…？」

「こんにちは、私はプーカ族のカミュと言います。先日はリンネさんを保護していました。勝手にしてしまつたので謝罪しに来ました。」

アモネは腰にある短刀を手に取ろうとしたが、ローベがすかさず間に入りアモネは腰から手を離す。カミュは少し焦る様子を見せながら慌てて謝罪を続ける。

「ごめんなさい。リンネさんの知り合いを知らなかつたですし、あの場所で倒れたままならキルされると思つたので、復活するまで部屋で保護していました。」

「…本当に他の目的はないんですね？」

「もちろんです。意識が戻つたのか、私が今日ログインしたらいなくなっていました。それを言いに来ました。本当にすみませんでした。」

「な、なんだか…つかみどころのない相手だな…？」

カミュのペースに飲まれ、困惑する二人の前にもう一人客人が増えた。緑色の羽に動きやすそうなドレス、黄緑色の髪をサイドテールにまとめた女性プレイヤー、カザネが不機嫌そうな顔で着地した。カザネの顔を見た瞬間にアモネは再び担当に手をかけるがカミュとローベが二人がかりで止める。その様子を見てカザネはため息を漏らし、そんな態度にアモネの中のボルテージはどんどん上がっていく。

「貴方は…事情はカミュさんから聞きました。ですが、そうならもつと優しく伝えてくれてもいいじゃないですか。」

「知らないわよ…私はこう話すことをならつたんだから今さらあんた達に合わせるなんて…バカみたい。」

「おい今なんていいましたか…！バカつて言いましたね！一泡吹かせてやりますよ…この弱虫シルフ！」

「ふん…負け犬は吠えているといいわ。いや、犬じゃなくてネコか。でもどちらにしろ迷惑だから、捨て猫は私の近くからさっさと消えて

くれるとありがたいんですけど?」

「貴方が最初に来たんでしよう!? 全く…こんな自己虫なんて置いて明日のクエストに備えましょう!!」

怒り心頭でローベを引つ張りアモネはケツトシー領へ歩いていく。カザネはその二人を見ていると急に涙が流れ始め、罵倒することなく救済の目らしきものを飛ばしている。それに気付いたローベが驚いた表情でカザネを見てアモネにも見せようとする。が、アモネが見たのは鋭いいつも通りのカザネの厳しい眼光だった。先ほどより離れているが、再び火花が散りそうな雰囲気。その間をカミュは歩いていきローベの元へ行くと頭を下げる。

「もしよければ素材集めを私たちにもお手伝いさせてもらえませんか? お礼がしたいです」

「ま、まあ…邪魔しないならいいと思うが…」
「ローベさん! カミュさんはいいですがあの虫は絶対私は反対です」

「だ、だが…流石にあんな目をされちゃ…」
「自業自得ですよ!」

ローベには耐えられなかった。もしこれを承諾してあの二人が喧嘩してパーティが全滅したら最悪…だが意外に限界を突破し、仲良くなるのかもしれない。ショック療法だか何だかというやつになることを望み、ローベは冷や冷やしながら了承した。

・・・

そして今、シルフ領に入りとある宿屋の104号室の前に二人は立っていた。アモネがノックをして部屋に入る。そこには半袖半ズボンのカミュと緑のジャージを着たカザネがベッドの上に座っていた。カミュは相変わらずにこにこと笑い手を振っているが、カザネも相変わらずきつい目線を二人に浴びせている。そんな態度にアモネは気分が悪くなる。最悪だ。ふと自然に呟いてしまった。

四人は新生アインクラッドに足を運び、上階層ではなくアインクラッド地下に足を進めた。ここは元々牢獄や隠しダンジョンだった場所だったが、今この場所は地下の公式ダンジョンとして解放されていた。そこにリンネの新装備を作るための素材が眠っているといわれている。地下一階へ進む階段を前にして、カミュが一つ提案を上げ

た。

「今回の作戦…申し訳ありませんが、私に指揮を執らせてもらえませんか？」

「えっ…それはどうしてですか…？」

「私はプーカなので魔法系統は得意です、ですが近接戦はできなくてどちらかといえば支援中心になります。常に全体を見ているので三人は近接攻撃に専念してもらいたいのですが…どうでしょう？」

「わかりました…ですが少々不安です…」

「なら、今日の前にいる蝙蝠たち相手に私たちを指揮してみなさいよ？」

地下一階、暗闇の中の赤い目は羽を鳴らしながら4人へ近づいていく。どこかで聞いた蛇のような鳴き声を鳴らしながら徐々に距離を詰めるモンスターたち。洞窟は四人が横並びになるのが精一杯な狭さであり月光がないため飛行することもできない厳しいコースとなっていた。

「二度円陣を組んでください。私は背後から支援魔法をかけます。カザネはあたりを照らした後に風属性魔法で攻撃、うち漏らした敵をローベさんが引き寄せて最後にアモネさんが仕留めてください…できますね？」

『…了解！』

カミュの指令を聞き三人は円陣をときそれぞれの持ち場につく。この狭い中での風属性魔法は蝙蝠を次々に仕留め、ローベとアモネは捕らえ損ねた余りを残さずに倒す。戦闘が終了した後は全員が満足した様子でお互いを見ていた。カザネとアモネのみやり取りはなかったが。

その後も順調に歩を進めていき目的の階まで後二階層となった。が、敵も強くなり蝙蝠の他に蛇らしきモンスターも出るようになってきた。その度カミュは作戦を変えるが敵の高度な動きに、通用しなくなっていた。

「どうしましょうか…ここで強魔法は打つことは出来ません…」

「とりあえず私が引き寄せます！皆さんは先に行ってください!!」「……!」

カザネは納得いかないのか、その場に立ち尽くすもカミュに連れられローベとともにその場を後にする。アモネは短刀を握りしめるが、焦りを感じていた。

「リンネさんは…SAOで死と隣り合わせでやっていた。しかも対多数こほんの環境で…」

ここでは…この世界では死ぬわけではないのに…この緊張は何だろう。感じることはないはずの汗が手に滲み、うっかり武器を落とすようになってしまうアモネ。それを合図に蝙蝠が襲い掛かる。いつものように交わしながら襲ってくる3匹の敵を同時に倒す。が、後六匹ほど残っておりうち一匹は巨大蛇、アモネはデスペナを受ける覚悟でいた。

「リンネさんのためにも…死ねない！私は勝ってみせる!!」

まず大蛇を攻撃しスタン状態にすることができ、その後残る蝙蝠をSSを使いながら綺麗に片づける。が、蝙蝠は死に際に超音波を出してくる。先ほどまでは遠くに飛んでいたため超音波を食らうことはなかったが、足元に倒れた蝙蝠はアモネの顔めがけて超音波を浴びせ、怯んだアモネに大蛇は赤い光線を浴びせた。

いきなりの攻撃にたじろぐアモネ。気づけば体に力が入らなくなっておりHPバーを見るとバーの上にドロクロマークが表示され、その横にPOISONの文字が表記されていた。その後、襲い掛かってきた大蛇を何とか撃退しなんとか被害を抑えることができた。

が、アモネの体力はみるみるうちに黄色から赤になっていく。うつろうつろと自らの靴を探るアモネだが解毒アイテムを一つも持っていない上に解毒魔法も覚えていなかったのだ。ただこの現実には絶望するしかなかった。が、その時だった、アモネの体力が赤ゲージで止まっているのだ。その横にドロクロマークもなく全身に力を入れアモネは立ちあがった。が、目の前にはあのにつくきカザネが腕を組みながら立っていたのである。

「まさか…貴方が助けたのですか…?」

「…そりゃ、き。パーティーメンバーが死にそうになっていたら助けるのが基本でしょ？何言ってるのよ」

「…すごく嫌な気分です。それなら死んでもよかった…」

『一度かかわってしまったら事が終わるまで関わらないと無責任』でしよう？嫌でもパーティーメンバーは殺したくない。これが私のやり方よ。つつ立つてないで早く追いつきなさいよ」

一瞬リンネの声が耳に聞こえアモネは動揺したが、そんなことを知らずにカザネは回復魔法をかけその場を去り先へ向かう。リンネのおかげでこのメンバーができたことに少し笑いがこぼれてしまう。このご縁を大切にしようと思いつながら、アモネは洞窟の奥へと足を進めた。

その後アモネがパーティーに合流し順調に攻略していき四人はついに目的の部屋の扉目の前にまで来た。そこは他の階層ボス部屋と変わらない大きな扉、だがその奥から感じるオーラは一段と重い。カミュはパーティーの動きを変え、カザネを回復に回し自分は遠距離から砲台となり敵を狙撃する戦法を説明した。パーティーはこれを承諾しボス部屋へと進んだ。ボスは体中が鉱石でできている『ジュエル・ゴーレム』という名前のボスで4mほどある体は暗闇を体の鉱石で照らしている。先陣のローベ、アモネは真正面から立ち向かっていき斬りこむが肌が硬く攻撃が全く通らない。ローベは素手という打撃系の攻撃をするのでダメージが入るが、アモネの斬撃とカミュの魔法攻撃は全身宝玉の肌に弾かれ全く攻略の穴が見えてこない。するとカミュは杖をマイクのように持ちローベの方向へと向く。

「今から『唄』でローベさんのステータスアップを図ります〜アモネさんは巨人の動きを止めてください〜」

「了解しました！」「おう!!助かるな!!」

「行きます〜」

と、カミュの口から歌われる曲はローベの耳に届きステータスがアップするが、ローベは目を見開き耳を塞ぎながら前線を撤退する。そして、カザネのいるところへ全力疾走で戻っていった。

「どうゆうことだよ！なんか頭がガンガンしたが…本当に唄をうたっ

たのか!？」

「ま、まあ…確かに彼女はプーカで唄を扱えるけれど…音痴なのよ。ステータスはアップするから作戦通り行きなさいよ」

「な、なんでそうなるんだ…うおっ!？」

ゴーレムが二人を襲うが何とかローベとカザネは回避し、ローベはそのまま足元を攻撃していく。巨人のHPが4分の1を切ったところで左足が決壊し、地面に倒れる。それを好機にローベはラッシュをするがその数秒後にゴーレムは全身を光らせ、メンバー全員に自らの鉱石を飛ばし攻撃する。その攻撃を予測できずカミュの張る防御魔法が送れ軽減できず4人は吹き飛んだ。

「これは…かなりまずいかもしれないかもしれませんが…」

「そんな…でも私は諦めません…!!」「行くわよアモネ…体を分断して攻撃力を下げるわ」「俺も行くぜ!」

4人は再び立ち上がるがゴーレムはカミュを吹き飛ばす。壁に打ち付けられた彼女は体が少しずつ薄くなっていく。HPは風前の灯火同然赤ゲージ。ローベが庇いに行く中、二人は体を張り巨人に体当たりする。が、それで怯むはずもなくゴーレムは右腕を振り回す。その攻撃をアモネが庇いスタン状態になってしまい、地面に倒れる。もう一撃がアモネに振り落とされる時今度はカザネが受け止め攻撃を遮断するが、馬力は明らかにゴーレムの方が強く、押されるカザネ。私にもっと戦える力があれば…カザネが上を見ればゴーレムのもう片方の腕が飛んできたのだった。が、その腕は二人を攻撃せず地面に墜落し、ゴーレムは怯んで後ろに下がる。そして、二人の目の前には見慣れた姿があった。

「リンネ…さん…!？」「あんたが…どうしてここに…?…」

「二人の場所がここを示していたからな…しかも体力が残り少ないからおかしいと思つて来てみたら…俺も誘つてくれよ…!」

ニヤリと笑った後に飛んで行きゴーレムのもう片方の腕を切り裂く。すると亀裂が入り、ゴーレムは後ろへ下がる。するとアモネは閃いたように目を見開き、カミュに叫ぶ。

「カミュさん、リンネさんに属性魔法をお願いします!!」「了解しまし

た!!」

カミュの魔法がリンネの鎌に宿り虹色に輝く。その鎌は巨人の胴体を半分に切り裂きその後の爆発からの沈黙が、4人を安心させる。巨人は倒されたのだ。4人が最も予想しなかった最悪の状況で。カミュは何とか起き上がりリンネの元へ向かうがリンネは戦いが終わっていないことに気づき、近寄ってきたカミュを突き飛ばす。その後、後ろから牙のようなものがリンネを貫いた。そして、リンネの体が紫の炎に包まれ地面に墜落する。その牙の主は先ほど飛んだ腕が変異した、『ジュエル・ビースト』が天を仰ぎ吠える。カザネが蘇生しようとするがある変化に気づく。

「あのバカ…生きてるわ…!?!」

「ウオオオオオオオ!!ガアア、ウオアアアアアアア!!」

リンネのHPバーが赤ゲージのまま半分回復していたのだ。が、様子は先ほどまでとは違い、両目は赤く肌は紫色に染まりこの空間が張り裂けるような叫び声を上げ、目の前の獣に立ち向かっていった。その姿はまるで狂人であり、手に持つ鎌を片手で振り回し硬い獣の肌を削っていく。そしてあつという間に獣の体力はゼロになり大爆発。その後また叫び声を上げ笑い声を上げる。が、カミュを見つけるとリンネは走って彼女の元へ向かう。流石に危機を感じたかカミュは回避魔法を使い、リンネから距離を取る。さっきまでカミュがいた場所はリンネが何度も攻撃しその地形に穴が開いてしまうほどの威力を披露する。

「リンネさん…私が行けば止まるかも…」

「バカ言うなアモネさん!今のあいつに俺たちが見えていると思うか?ここは撤退したほうがいいと思うぞ!」

「だけど…リンネさんが一人に…」

「ここは撤退したほうがいいですね。今後のこともあるのでカザネちゃんに追尾してもらおうと思います」

「あいつは…もう……」 「私達を知るあいつじゃないわ……」

「…でも私が……!」

「あんたが今あいつにやられて、後に自分がやったことを知ったらど

うなると思う!?これはあのバカのためでもあるのよ!逃げるわよ!」泣きじやくりながら抵抗するアモネを二人掛かりで持ち上げ撤退した。アインクラッド入り口まで来たところで体がボロボロになったリンネが後からついて来たのだった。すぐに介抱し、第一層の宿屋に入った。アモネは感極まり部屋に入ると誰よりも先にリンネを抱きしめた。カザネが何か言おうとするも、カミュに制止され俯く。

「リンネさん……ごめんなさい……助けられなくて……」

「仕方ないと思うよ……俺が切り落とした場所が悪くてカミュさんがやられそうだったからな。ところで……なんでお前たちはこのダンジョンに?」

「ああ……それはですね……」

場所変わりユグドラシルシティ。その街にある装備屋では男の鍛冶職人とピンク髪の女性リズペットが自信気に笑いながらリンネを見る。リンネは身にまとった服をまじまじと見ながら少し動作を確認する。そして、動きやすいことを確信しにこつと二人に笑い返した。

「動きやすさを追求し、動きに支障が出ないように最大限防御力を上げた、『サンライズ・デイ・ローズ』です。」

「私も手伝って作ったけれど……今まで作ったコート系統の防具はこれが最高ね。こちらからもお礼が言いたいわ」

「ちよくちよく整備しに来るようにするよリズ、ホルカ。お礼が言いたいのはこつちだから……」

そんな三人のやり取りを遠くから四人で眺めていた。ローベはうんうんと頷き和やかに見ていたが、カザネ、アモネの二人は口喧嘩をし喜んでいるリンネの様子を見てはいなかった。そしてもう一人、カミュは今日の一連の流れを考えていた。なぜ復活したのか……あのスキルはなんだったのか……リンネの背中にしまわれた鎌が怪しく紫に光る。その光り方は考えるカミュを嘲笑するかのような光に見えた。

Mを探せ

新しい朝が来た、希望の朝のはずだった。今日の天気は生憎曇りであり窓から日は差さずおまけに頭が痛い。言うところガンガンした痛みが痛かったり体がだるいわけでもなく、ただ頭が痛く手元にある朝食をゆっくりとただ食べ続ける。それを見たのか、吹田は驚いた表情を見せ俺を凝視してくる。そして飽きたのか近くの椅子に座った。

「お前…ゲームのやり過ぎじゃないのか？頭痛いなら偶には休むのもありだぞ？」

「ああ…そうするよ…連日いろんなことがあったし脳みそが休まっていけないのかもしれないなあ…」

「後でホットアイマスク入れておくから…ゆつくり休むといい」

「…お前最初よりだいぶ優しくなったな」「…気のせいだ」

歩いて何かを取りに行く吹田。ありがたいと思いつつながら俺はベッドに倒れこんだ。最近は本当にいろんなことがあり過ぎる。帰還後に隔離され、もう一人の僕的な存在が俺の体を乗っ取り、挙句の果てに狂人化した母親が俺を誘拐しに来る…流星に後述二つが一週間以内に起こっているとどこか疲れる。運よく今日は休日のため、早めに休むことにした。

その夜、頭の痛さこそなくなったものの窓の向こうにはいつもの威圧する吹田ではなく、頭を抱え椅子に座りこむ怯えた吹田を拝むことができた。気になりアイマスクを取りに行くついでに彼に話しかけてみることにした。が、振り向いた吹田の顔は汗まみれで俺を化け物を見る目で見ていた。

「吹田…何があつた？まさか変な人に絡まれたのか？」「……」

「そんな首を振るだけで俺が分かるわけないだろ…ちゃんと喋って」

「…」

「…？菊岡さんに連絡とってみるか…」

部屋内の受話器を持ち、机に貼つてある菊岡の連絡先をうち応答を待つ。二階ほどコールした後、菊岡は電話に出た。久しぶりだからか

意外そうに驚いた声が聞こえる。

「菊岡さん、吹田の様子が変なんだけど…何があつたと思う?」

「そんなことで電話してきたのか…それは今日だけなのかい?」

「ああ…俺が寝ている間に何があつたかカメラとか何かで教えてくれよ」「わかつた、君のパソコンに転送する」

そこで連絡を終了し、改めて返信が来るまで待機することにした。待つて三時間、パソコンを開くと着信が一時前前に入っており、送り主は菊岡と書かれている。メールに添付されたファイルを開くとそこには一つ、今日の日付と時刻が表記されたビデオがあつた。ビデオを開き映像が流れ始めるが、その映像は先ほどまでの俺の部屋の映像とはかけ離れていた。

ベッドに寝ている俺は急に立ちあがるとナーヴギアを被り、リンク・スタートと叫びそのまま意識を失う。その後昼の三時ごろまで寝たままだつた。その後起き上がると、ナーヴギアを付けたまま帰ってきて俺の部屋にアイマスクを入れ終えて椅子に座る吹田に向かって大声を荒げる。そして窓を何度も叩きひたすらに発狂する。

「開ける…この僕が…僕こそがア!本物だ!母親に合わせろオ!!」

その姿には自分である俺ですら身震いしてしまう。これは俺じゃない、あの時生きていたもう一つの人格…僕。あの日以来前面に出ていないと思つたが…俺が意識を放棄している間にのつとつていたとは…原因が大体分かつた。これはどうにかしないといけない…まず俺は俺に異常が出始めたあの死神のクエストをパソコンで検索する。ALOではクエストを生成・拡張するカーディナルシステムというのが存在するらしいが、それに加え運営はユーザーにもつと楽しんでもらえるように人間自らが考えたクエストを導入している。普通なら匿名なのだが、今の時代なんでも解析され誰がどんなクエストを作つたかなんて簡単にばれてしまう。

「えつと…『死神の再来 作者』で検索つと…作成者M?」

M…ニツクネームなのだろうか、本名は全く分かつておらずこの英語一文字な部分がまた怪しさをにじませる。他にもMが作つたクエストはないのかを検索すると、意外にも10件ほどヒットしそのうち

5件は最近出たばかりで残りの5件は他のプレイヤーによくプレイされ人気を集めている。その中に目を引くものがあった。

「妖精王との邂逅：アインクラッド4層にて妖精王が待っている。そこへ向かい妖精王の命令を聞こう…なるほど。誘えそうなやつ連れていってみるか」

頭痛は治ったのでとりあえずナーヴギアを被り妖精世界へ飛び口グイン状況を確認してみた。流石に休日ともあれ深夜前の23時：アモネとローベはログインしていない…が、カザネはログインしているようなのでとりあえず誘ってみることにした。すると数分で返事が帰ってきた。

『カザネ、もしよければ少しクエスト手伝ってほしいんだけどいいかな？報酬はカザネ7：3俺でいいからお願いします！』
『大丈夫よ、けど今私も取り込み中だから10分後に104号室で待ってる。』

あっさり乗ってくれて少し安心したところで三十分かけてシルフ領へと飛んで行った。

空を飛行し、空に浮かぶアインクラッドを目指す俺とカザネ。時折カザネの方を向くと驚いた表情で俺を見る。その後飛行のバランスが少し崩れるのでその後から見るのをやめた。彼女は俺のことをどう思っているのだろうか、まだ殺人鬼として俺のことを恨んでいるのだろうか。それでも仕方ないし、過去は消すことは出来ない。俺は永遠に死神の名前を背負わないといけないのだから。そんなことを思っているアインクラッドにたどり着く。今更とカザネは俺に話しかけてくる。

「でも…あんた、どうしていきなりクエストなんかに？あんた確かモンスター嫌いなはずじゃないの」

「嫌いだからカザネに手伝ってもらっているんだよ。クエストの名前見て興味湧いたから」

「なるほど…そんなことなら手伝ってあげなくもないわ」

そんなことを話しながら、アインクラッドの街へと入っていく。第一層はリメイクされているものの初期と同じ、始まりの街が再現され

ていた。ベンチや噴水、いろんな店が並び本当にあの世界に帰ってきてしまった気分で懐かしい。二人で休憩としてベンチに座る。カザネはずつと下を向いたままこちらに顔を向けてくれない。嫌だったのだろうか、険しい顔をしてうつむいている。

「あの…カザネ、嫌なら…」

「あつ!? いや、その…カミュ以外と話すのが苦手で…」

「わかる、俺もSAOの頃の知り合い以外とはあまり話せなくてさ…よくわかる」

「い、いや…そういうことじゃなくて…その」

もじもじするカザネ。考えてみると彼女の年はどのくらいなのだろうか? 見た目からして大学生のように見えるが…こう見えて俺より年下かもしれない…ゲームの世界だろうが、目の前に女性がいると流石に照れてしまう。目の前を通り過ぎていくプレイヤーが冷ややかな目線をぶつける中、お互い顔を真っ赤にしてうつむいていた。

十分休憩した後、俺たちは第四層へと足を進め、目的の場所に到着する。レンガの建物の前には緑のフードを被った怪しいプレイヤーが壁にすがっていた。まるで俺たちを待ち受けていたかのように俺たちを見て話しかけてくる。

「君たちが僕の言うことを聞いてくれる者か…待っていたぞ」

「ああ…で、何をすればいいんだ?」

「実は…私に足りないものを探して欲しいのだ。私には…Mが足りない。」

「M…? このクエストの製作者…?」

「M…ゲームとかのMといえばあれじゃないでしょう…!」

カザネが少し興奮気味に息を荒げ俺の肩を叩く。NPCは全く反応を返さないが、これがプレイヤーなら確実に惹かれるレベルだろう。それくらい普段とのキャラが崩れていた。

「M…といえば無敵の存在、メアリー・シー! きつとこれはこのゲームを危機に追い込むほど重要なクエストなのよ!」

「メアリーシー…か、わかった。それらしきものを倒したらいいんだな。」

「ああ、それを見つけることで僕が完成する。健闘を祈ろう。」

初めて聞くことなのだが後に彼女に聞こう。謎に思いながら第四層迷宮区に足を進めた。

フィールドを歩くものあまりモンスターがポップせず、ただ時間が経って行く。天気は晴れで、秋なものにもかかわらず日差しはぼかぼかと俺たちを包む。メアリーシーとはなんなのか気になりカザネに聞こうとするが、同時に何か話そうとしましたお互い顔を赤らめて別の方向を見る。が、やっぱり気になるので俺から話しかけてみた。

「あ、あのさ…メアリーシーについて詳しく教えてくれないか？」

「なら、私も好きなこと一つあんたに質問してもいいという条件付きでならいいわ。」「よ、よかろう」

「私は本やネットで小説読むのが好きなんだけど、その時にあまり作品に登場してはいけない存在や設定というものがあるのよ。主に二次創作に多いのだけど原作の世界をぶち壊したり、その世界で神のように強くなり無敵の強さを誇ってしまったり…いろいろ種類はあるけど、人によって賛否両論の存在よ。」

「なるほど…カザネは妖精王にはその力が足りないと考えたんだな？」

「ええ…まあ、言ってしまうとあんたも十分そんな部類にいそうだけどね…ゾンビになる所とか」

「ゾンビ?というか俺は」

「冗談よ、まああってもおかしくないから、あまり気にしなくてもいいわ」

くすくす笑いながら答えてくるカザネ。からかわれた感じで少し悔しいが、なおさらこの世界にメアリーシーなんて存在するのが疑問になってきた。俺がMは存在しないのではないかと言おうとする。と怪しげな笑みを浮かべ、カザネがこちらを見ている。嫌な予感しかしせず背筋に悪寒が走る。

「さて…私は、あんたの過去の話を書かせてもらおうよ」

十分ほどMを探索しながら話をしたが、カザネの反応は意外にもアモネよりオーバーで、最初のギルドを脱退した話から『なんでそんな

ことに…』と驚き、ミラがアモネを人質に取った話では、手を握りしめ怒りを感じている。そんなカザネの反応を見てると何故か知らないが俺も楽しくなる。現実でも会いたい…そんなことを思った矢先、その話の中に出てきそうな野蛮なサラマンダープレイヤーが三人俺たちの前に立ちはだかった。俺に向けてくるその目は明らかになめきつっている目をしている。

「おいそのインプ…お前どこかで見たことあるな。」「こいつ…死神だ…あの世界で虐殺を繰り返した…!」

「あのな、すごく誤解されるからやめてほしいんだけどさ…何か用?」「へへ…実はその鎌に新しいスキルが導入されているって聞いてな。もらいに来たんだよ」

「生憎これはわらしべ用ではなくてね」「なら、奪うまでだ」

知ってるならこのくだけは要らないだろと心で突っ込みながら戦闘態勢をとる。この世界の対多数戦闘は久しぶりで、相手は地上に二人と空に一人ずつ。二人が襲い掛かってきたので背中の鎌を取り出し受け止めるが、二人分の力が感じられず受け止めながら後ろを確認すると、一人はカザネの元へ全力疾走し大剣を振り降ろす。が、カザネには全く当たっておらず、むしろやる気だ。槍を構え直し攻撃を避け続ける。

俺も受け止めた大剣を受け流し、重攻撃『クレセント・アバランシュ』をお見舞いした。相手は三発食らった後に炎と化し、リメインライトとしてその場に残る。

「避けて!魔法よ!」

後ろからカザネの声。カザネと戦うサラマンダーが背後から魔法を唱え、炎の塊がこちらに飛んでくる。大きさは小さいが恐らく追尾魔法だろう。火炎は野球の球のようにまっすぐ俺に向かってくる。俺は鎌を構え、大きく切り上げた。二つに分裂した魔法は行き場を失い近くの地面へと墜落、大爆発した。これには相手のサラマンダーも驚きが隠せていない様子で、少し俺も決まってから誇りたい気分になった。

「結構練習したから最高だよ…!魔法を斬るなんて誰にも」

「それが…あんたが探している黒の剣士も魔法を斬ることができそうよ。それもあんたより先に。」

「エツ…マジか…なんで先にそんなことをするんだ…!!」

せっかくの個人的な技術だったのに、一気に気分が墮落した。もう正直Mなんてどうでもよく、この気持ちを一瞬も早く消化したくなり、空から奇襲を仕掛けるサラマンダーの魔法を全て斬りふせ一刀両断、腹から切り裂いた。すぐに燃え尽きカザネが対決しているサラマンダーはカザネから離れ俺に向かって土下座をし始めた。

「襲い掛かったことは謝罪するからどうか命だけは！お許しください!!」

「わかった。俺の噂を、虐殺する死神から関わると危険なプレイヤーに変えてほしい。それなら今回は見逃す」

「わ、わかった！いや、ありがとうございます!!」

サラマンダーは羽を広げ、大急ぎで飛んで行った。その様子を見ていたカザネが驚いた表情で見てきて、俺の元へ駆けてくる。だが、さつきより距離をとって俺に話しかける。

「…まさかあんたが死神だったとはね。だから死神を倒しに来てたのね」

「…お前の兄を殺したのは…俺かもしれない。もつと、戦闘以外になんとかする方法があったかもしれない。こんなことしか出来なかったことは…たとえ相手が襲い掛かってきても俺が悪い。」

「…本当にそう思ってる?」「本当だよ。何をしたら信用して…」

「さつきの戦い見たらわかるわ。私もいきなりきつく言ってしまったから悪いと思ってる…その、ごめんなさい」

二人頭を下げるタイミングが合い、顔を持ちあげた時お互いが同じ行動をしていることが少しおかしくなってあははと笑った。もし俺はあの世界に行っていなければ…俺はカザネやアモネ、ローベやカミュさんのような人と出会っていたのだろうか。もしかしたらまた別の世界が俺を待っていたのかもしれない。あの世界であの時こうできれば…考えると限らないのだが、そんな世界もまた見てみたい。そしてきつとこう思うのだろう、今の世界が一番よかったと。いつか

カザネともあってみたいと思ひ連絡先を交換しようとしたが…ふと気づく。クエスト一覧に先ほどのクエストがないのだ。しかも前の世界のことを考えると、一つの名が引つかかる。やはり彼女も気づいたらしく、顔を見合わせる。

「このクエストのMってメアリーシーじゃなく……」「俺も思った、これはまさか……」

そう、名前の頭文字M。俺を死神に仕立て上げ、自分で決着を付かず合法的に始末して闇に葬り去ろうとした卑怯でもう〇ズ同然の男……ミラの名前が浮上したのだった。

暴走する欲

某会社に連絡をしとある人物を呼び出す。が、そいつは電話口に出ることなく俺をALOを経営する本社に呼び出し、話をしたいと言い始める。これを菊岡に相談したところ、警備員二人を連れて上、拘束した状態なら外出しても良いという許可が下りた。決してこれは菊岡の令でなく、上司の決断らしい。

「すごいです！これって、最初で最後のゲーム会社見学ですよ！しかもそれがALOを管理する会社だなんて…！」

「それはよかった…俺のストッパー役として来てもらったけど、楽しめそうならそれはそれでな。」

「記念に何かもらって来ましょうか…二人お揃いの何か」

「あいあい。そんな話をしているなら根下もリンネも緊張感を持ってみてはどうだ？」

「こうしないと緊張して話せなくなるんだよ」

まさか捕まってから初めての外出がお出かけではなく、よく知らない人との面談、しかもALOの会社でなんて一生味わうことはないだろう。外の空気もあまり吸えず気が重かった。

会社の中は、会社で匂う独特のにおいが俺の鼻を刺激しさらに気分を悪くする。特にオフィスも見せてもらえず俺たちは警備員に連れられ、とある部屋の前に連れてこられた。俺の代わりに吹田がノックすると入れとの声が聞こえる。ドアを開けてもらい椅子に向かうが、その椅子の真正面にはSAOで対立し、お互い命を削り合う関係だったミラこと『M』が座っていた。

「今日はわざわざここまで来てくれてありがとう。私の名前はMこと…『ミラ』だ。君たちならわかると思うがね…リンネとアモネちゃん。」

「お前…やっぱり生きていたのか…」「リンネさん…一瞬で気分悪くなりました」「ああ、俺もだ」

相変わらず彼はにやにやと笑い、立場が違うせいか俺たちを見下すように椅子にふんぞり返って向き合う。あの世界で見なかったのが

よかつただろう、もしあの世界だったら間違いないく鎌を振り上げキルしていたが。

改めて目の前のMことミラはSAOのころに俺をギルドに誘った一人であり、俺のSAOどころか俺の人生に大きな影響を与え、俺に怒りを残したまま自分は戦わずログアウトしていった男。全てが悪かったというわけではなく、言ってしまうえば今の人格『俺』がいるのはギルドの件があったからで、それがなければずっと『僕』のままだった。全てが悪いというわけではないが俺とアモネの評価は基本的に悪く、基本的に10/0の判定が満場一致で出せるほどである。

ミラは座りなおすと、俺の目を正面からじっと見つめてくる。その目つきは何かよからぬことを考えている目であり嫌な予感しかしない。

「さて：君は僕のクエストをプレイしてくれた結果ここにいるはずだ。クエストの感想は？」

「最悪だよ。特に最初のクエストなんてVR世界がトラウマになりかけたんだぞ：皮肉ってんのか知らねえけど俺と同じステータスで容姿も似せた挙句、俺は死に際に人を呪うこと言わねえよ。何が：お前は自分で自分を殺すだ。これを報告したらお前はどうなることかな。」

「まあ落ち着いたまえよ。これがなければ君は僕と会うことは出来なかった。こうやってゆっくり話すのもあの日以来じゃないか。」

「この人：何も反省してないです：リンネさんが死神って呼ばれてどれだけ苦しんでいたのかも知らないのに、なぜあなたはそこに塩を塗るような行動をするのですか！貴方は全く苦しんでいない、周りの人が苦しんでばかりいるのに!!」

「僕だってな：と、怒鳴りたいところだがこんな争いはやめよう。当時の僕も生きるために精一杯だった。君があの世界で生き続ける理由と同じなんだ：それであいこにはならないが：悪いと思っっている。この通り」

ミラが急に立ちあがり自分の頭を下げたのだ。それも地面に頭をこすりつけるほど。彼に何があったかは全く分からないが、あのミラ

が頭を下げるのだきつと今までのことを相当反省しているのだろう。顔上げろよ、と言おうとすると彼は下から俺の顔を覗き込むように見ており少しにやけている。ダメだこいつ、早く何とかしてやらないと今後大変なことになる。全く反省している様子などなかった。

彼が席に座り直したところで今回、何故俺たちをここまで導いたかを聞いてみることにする。が、それ読んだのかミラは先に口を開く。「さて…君たち、というかりンネ君を呼び出したのは理由がある。あのMの意味、君にはどう見えた?」

「最初は全く分からなくて、同行した一人の女性プレイヤー…」「んんんんんう…!」

「…が考えた、『メアリー・シー』という無敵の設定が足りないと考えた。」

「その娘に称賛を送りたいなあ、僕の考えを読み取ってくれたことに。確かに間違つてはいない。僕はメアリー・シーの設定は大好きだ、自分がそうなればよいと何度思ったことか。だから僕は今なろうとしている。」

「…は?」

「僕に足りないもの…それは『マスター・アカウント』だ!」

もう、しょうもなさ過ぎてある意味ぐうの音も出ない。それを手に入れるために俺はわざわざここまで来たのか…時間の無駄だと思い、黙って荷物の整理を始めてもらう。アモネを見ると、やはりクズでも見るような目でミラを見ていた。しかも口からは、『あー』と、規制音のようなものまで漏れてしまっている。が、そんなことではミラは動じておらず次の話題に入る。

「君はまだ捕まった身だと聞いた。そしてもうじき裁判があるのかないとか。」

「何故それを…」それは…旧友がどうなっているか気になるじゃないか。当たり前だろう」

「人間観察とは、趣味が気持ち悪いな。」

「そこでだ…僕は君の裁判を手助けしたいと思っている。このままだと本当の刑務所行きになりそうだからね」

なんだと？今までの話と彼の話すことが矛盾しさらに頭が混乱する。クリスさんの話だと、勝ちが確実だって聞いていたのに一体何故…と思うとアモネが気づいたように携帯をいじり始め何かを調べると俺とミラに見せてきた。

「これです！『旧SAOプレイヤーの元オレンジプレイヤーが証言！ログとも一致しR氏は敗北確実か!?複数の男が警察に自首をし、今までの経緯を提供した。これは過去に旧SAOで行動を共にし、寝泊りも一緒に…』収容所のプレイヤーに違いありません！ネットニュースでも話題になっています!!」

「まさかそんな近くに刺客がいたとはな…」「どうだ、状況が分かっただろう？」「まあ…で、何がしたい？」

「僕も証人として呼ばれている。名前は僕の本名を明かし、この会社のMとは別人という扱いで出るからあまり心配しなくてもいい。僕は君に対してかなりの憎悪を持っていると見られ、この裁判を決定的にする力がある。」

「また権力か…」

パワー厨は全部これだ。自分の力を誇示して自分のおかげで何とかなったと自慢する。決してすべての人間がそうではないだろうが、こういう人間は集団に属した時一人はいる。呆れて言葉も出ない。

「で…マスターなんとかと裁判の何が関係あるんだ？」

「この裁判でお前が勝訴すれば…僕はクエストを管理する課の部長になれるというわけだ。」「…？」

「つまりこの人を通してクエストが配信されていくということです。」「ふーん…」

複雑な心境だ。こいつがいなければ裁判に負け刑務所行きだ。しかもよくは分からないが恐らくただ刑務所に入るだけでは済まないだろう。死んでいったプレイヤー達と同じように脳を焼き切られたり…斬られたり…それを考えると胸が何かに押される恐怖感覚が襲い掛かる。汗が垂れ周りが見えなくなる。死んでいくプレイヤー達の顔が思い浮かび、俺のまわりを飛び回りあざ笑うようににやける。それだと選択は一つに絞られるが、決断ができない。こいつの出世を

手助けして自分は普通の生活に戻るか…自分の人生を捨てるか。目の前は暗闇だった。

「音弥さん！私が付いています。力にはなれないけれど…貴方がどの選択をしても私は貴方を信じます。こいつに魂を売ってしまったても、親どもに負けても…私は貴方の味方です。貴方が決めてください」「こいつって…」

「っ…ありがとうアモネ。俺は…」

そうだ、こいつが出世しても俺の生活には…関わってしまうかもしれないが、俺にはあの時と同じ仲間が待っていてくれるはず。自分が絶対必要…ではないと思うけれど、かかわった思い出に穴を開けて自分だけいなくなるなんて…無責任にもほどがある。クエストが悪ければ周りの人がこいつを倒すだろう。ならば…

「…証人として一緒に戦ってくれ」「ふむ…懸命な判断だよ。なら当日に会おう。」

俺は自分が生きるという選択をした。これでよかったのかなんて俺には全く分からない。分かるのは天の上にいる神だけで、俺たちは運命に従って歩くしかない。会社を出てため息を吐きながら道を歩く。

「ため息…ですか」「…ごめん、幸せが逃げてしまっつていうからな」「いや…ため息は体を調節するための自然な行動なんですよ。ため息をつくとか抜けていくでしょ？」

「ああ…確かにな」「吹田さん、ちよつとそこのカフェに私と音弥さんだけにしてくれませんか？」

「まあ信用したいが…危ないだろ」「…お願い」

アモネが吹田さんに抱き着き下から覗き込むように吹田を見ている。吹田は顔を真っ赤にし、数秒でデレデレになり菊岡さんに報告することを条件に俺とアモネはカフェに入ることができた。二人のテーブル席に座らせてもらい、それぞれの目の前には水が置かれる。目の前に座るアモネを見ていると不意に涙が流れだす。俺が年上なのに…俺が守らないといけないのに…嗚咽が漏れテーブルに涙が落ちる。気づけばアモネが抱きしめてくれていた。

「俺は…人を殺して…人を裏切って…今回も俺はお前たちを一瞬でも信じない時があった…ミラ頼りたくないって思ってた俺は…自分を殺すことですら…」

「…いいんです。音弥さんが今回決めた選択は…きつと正解です。きつと私たちのことを考えての結果…プライドを捨ててこの先のことを取ったんです。リンネさんは悪くないです。泣いてください…全部ここを出してしまってください…人間は誰だって人間を傷つけるんです」

「…今俺は…自分自身と戦っているんだ。本当に…自分自身に、俺の母親に負けてしまいそうで怖い。」

「そんなことが…」

「でもあの時、アモネが助けてくれたから俺は今ここにいます。こんなこと…気持ち悪いのかもしれないけど、お前に助けてもらった時嬉しかった。待っている人がいるんだって思った。特にアモネと一緒にいたいって…俺が絶対守るって…そう思ったんだ」

「音弥さん…」

「だから…もし俺がああの部屋から出たら…世界樹の根元で待っていてくれ…絶対迎えに行く」

抱かれた俺の頭に何か落ちる。そして俺の声でない嗚咽。上を見るとアモネも泣いていたのである。今度は俺が立ち上がりアモネを抱きしめた。アモネは俺の胸に顔を押し当て10分ほど泣き続けた。ただただ泣き続けた。

「こんな弱い俺で…ごめんな」

人を殺したのに自信が持てず、昔のことをずっと引きずって、自分の意見を考えられなくて、人の人生を狂わしてしまつて…ごめんなさい。この日はただ心の中で誰と指名することのない謝罪をただただ繰り返す…それしか俺にはできなかった。

「あんたいつまで落ち込んでんのよ…こっちまで気が重くなるでしょ？」

「…あ、ああ、悪い。」

「誰かさんは言ったわよね…ゲームの世界くらい楽にしる、現実でないだからつてき。本当その通りよ…」

ローベを抜いた四人で今日も小遣い稼ぎに向かう。そう、巨大モンスター狩りだ。ドラゴンの希少部位などは大きく希少なことから高価に取引されるらしく、ローベが掴んだ情報『近日、第22層にログハウスを作るたちができるとの事なのでそこを俺たちのホームタウンにしよう!』とのこと。確かに毎回シルフ領に侵入していればいつか彼女もレネゲイド扱いとして追い出されるかもしれない。それを警戒し、家を建てる算段となった。そして俺たちは今小銭稼ぎをしている。俺も今日は乗り気じゃなかったが、アモネに気分転換と言われ参加している。

ケットシー領の近くの山、ここにはドラゴン種が多く潜んでおりケットシー達もタイム差に来る場所だそう。ケットシーには悪いが、渋々ドラゴンを狩らせてもらおうことにした。

出現ポイント付近に立つとドラゴンが二匹ポップする。中型だがレアドロップを狙い俺たちは何匹も狩り続けた。アモネの短剣が敵を斬り、カミュの魔法が焼き、カザネの槍が敵を刺し、俺の攻撃で一気に刈り取る。普通なら惨殺だがゲームはゲームだ、仕方がない。俺達は何匹も数え切れないほどドラゴンを狩り続けた。その時一つの悲鳴が聞こえ、その方向を見るとケットシーの女性プレイヤーが怯えた表情でドラゴンを見る。そのドラゴンは今にも女性を食べそうだ。俺は止めるべく彼女の元へ向かったが…その直後ドラゴンは俺に攻撃を始め、ケットシーは醜い笑顔を見せるとドラゴンは命令をかけ飛び去って行った。そしてドラゴンは巨大化し俺に襲いかかる。人型モンスターでもないモンスターなんて一人で狩れるはずもなく、俺はまた鋭い牙の餌食となってしまう。尖った歯が俺の腹を貫通し、微量の痛みが全身を襲う。三人が気づいたのは俺の体力が半分を持っていかれた後のドラゴンの咆哮、すぐさま攻撃を仕掛けようとしたが、時すでに遅し俺の体力はゼロになった。目の前には赤い画面に You are dead の文字が浮かんだが、その文字はすぐ消え再び体に力が戻る。画面の隅を見ると俺のHPは半分回復し状態異常

を見ると、そこには『n e c r o』と表示されていた。ネクロの文字に気付いた時、俺の体は勝手に動き出しなぜだかよくわからない怒りに襲われる。この感覚は：そう、俺の意識はまた心の底に押しつけられ今は『僕』が体を支配していた。

『僕』はドラゴンを完膚なきまでに叩きのめし、抹殺した。それだけでは済まず、三人の方向を見るとそれぞれにも攻撃を仕掛け始めた。もちろん受け止めることはなくそれぞれ撤退したが、『僕』の目線に入ったのは：アモネだった。闇属性魔法を連発し、アモネの戦闘体型を悪くした後、暴君な俺は鎌を振り回す。心から俺は制御することを試みるが全く止まらない。転がり避けるアモネの足に鎌の斬撃がヒット、彼女は右足を手で押さえダメージがHPの半分をえぐる。『僕』は鎌を振り上げた。最悪な場面を俺は阻止しようと抑えようとするが止まらず鎌が振り下ろされる。が、カミュの魔法がアモネを守る。その横からカザネが俺めがけて飛んできた。『僕』はニヤリと笑うとカザネの体を一斬りし蹴り飛ばす。苦痛の表情で俺を見るカザネ。また鎌を振り上げる俺に思い切り叫ぶ。

「あんたは！あんたはその子を守るんでしょ！私たちよりもっと大事な存在なんですよ!!あんたが守らないといけない者を：あんたが傷つけてどうすんのよ！あんたが一度守るって言ってここまで来たのなら：最愛の人を守れよこのバカ死神！」

その言葉を聞き、ふと我に帰ると俺の体は重くなり目の前には怯えるアモネ。俺の両手には俺の愛用する鎌が握られていた。その鎌を放り投げ、俺はアモネを抱きしめる。無事でよかった：俺のせいだ：：彼女はそのことを責めずにボロボロ崩れていく俺の体をただひたすらに抱きしめていた。

解き放たれた闇

ふと気づくと午前七時。天気は曇天で、部屋の中は少し冷えてきたこの頃。俺は昨日、謎のスキル『ネクロ』によって復活した挙句暴走し、止まったと思えば体が自壊して…そのまま寝てしまったらしい。死体処理を三人に任せてしまったことを申し訳なく思う。

カレンダーを見ると終わった日付に棒線が引いてある。そして今日の日付11月13日には…裁判と似文字の漢字が書かれそこからいつまで続くかわからない横棒が11月の最終日30日まで引かれていた。そう、今日からしばらくの間俺の罪に対しどのくらいの裁きかを決める闘いが始まるのだ。時刻はまだ6:30、いつもより一時間早く起き一度も着たことのないスーツに身を通していった。そうすると驚くように外で吹田がこちらを見ていた。

「あー吹田さん、おはよう。」「お、おう…今日はずいぶん早いじゃないか?」

「…緊張して眠れなかったんだよ。もしかしたらこれが外出最後になるかもだし」

「まあ…そういうな。お前はいいやつだ。きつと元の生活…いや、お前らしい生活に戻ることができるといい」

自身はなかったがだまされたと思いつつその思いを信じる。スーツを着終えたところで、部屋の扉がブザー音とともに開かれる。必ず帰る、そう呟き扉の外に出た。

そうは言ったものの…裁判は意外と暇だった。被告人…という役の俺はずっと座っているか、机の前に立たされて本当のことを言わせるだけであった。じつとしてしていると眠くなりそうで、動くとブーイングが起きすぎくやる気が起きない。しかもミラは会場に現れておらず、元S A Oプレイヤーの家族はまんべんなく俺に罵声を浴びせる。

「…から、被告人に禁錮20年を要求します」

「被告人は、私の愛する子を無慈悲に殺しました。一体被告人には命の重みがわかっているのでしょいか?命の重みを知るため、重罪を希

望します」

「今じゃあの顔ですが、VR世界で殺人を行ったということは現実でもきつと殺人を起こします。なので重い刑で罪を償ってほしいです！」

「死ぬ隣音哉！死んでしまえ!!お前は人間の恥だ!!」

信じられないと思った。こんなものドラマだけだと思っていたが、まさか本当にこんなことを言われるとは思っていなかった。検察も俺の戦闘の結果ばかりを挙げ、これだと俺が一方的に殺したみたいになり傍聴席の人にも誤解させてしまうことになってしまう。そしてまた一人、証人として台上り話す者が一人。そいつはやはりバトラーについていた下っ端で、いつもイベントごとには乗り気にならなかった荒くれものである。

「彼は…行き場を失った俺たちを力でねじ伏せ…いつしか俺たちを殺すつもりでした。俺たちのリーダーもその力に怯え抵抗することがなくなっていました。二年の間俺たちは支配され、時に人を殺すよう命じられた時もありました。嫌気が刺し、ここから逃げようとするものなら彼は直接俺を殺そうとして脅してきました。そして最後には中ギルドを一つ滅ぼすといい、俺たちをそのギルドのアジトに突撃させ多くの命を奪いました。そして彼自身も敵のボスを八つ裂きにして、相手の死ぬ間際には『死ぬな、ここで死なれたら俺がお前を攻撃できなくなる。起きろよ、俺を楽しませてくれよ』と残忍な言葉をかけていました。私は彼が重罪であることを証言します。」

あいつ…！かなりねつ造されており、まずバラに連れられてここに来て、集団でたかっているオレンジプレイヤーを見れば当時の俺なんてまだ怖くなかっただろう。しかも嫌気がさしたエピソードは、ある日の夜寝ているときに彼が俺に奇襲をかけ逆に俺が殺されかけたのであつて、まったく俺は殺す側ではなかったはず。結局返り討ちにして逃がした覚えがある。最後のギルドの件は殺せとは言っていない。襲ってきたら殺る気でやれとは言ったが、殺せとは一言も言っていない。検察も分かっているのだろう、会話のログは全く出してこないのである。ミラは最終日まで来ないといい全く顔を見せない。なりた

くないが、だんだんと不安となっていく。近くのホテルに泊まりながら一人で部屋で寝る：怖い。でもこれは俺が決めた道だから、俺はどんな道でも最後まで渡り切ろう：そう祈るしかなかった。

「証人は前へ。」

裁判最終日、その声とともに現れたのは黒いスーツをしつかり着こなしきびきびとした足並みで台へ向かうミラことMの姿だった。Mは台に乗り宣誓をすると静かに口を開いた。

「僕の名前は久野未来で、プレイヤーネームはミラです。彼はこの世界に來た時初めて仲間になった男です。この頃は今とは違い、もつと気弱な男でモンスターとこころか人ですら倒せない男でした。ある日、ギルド内でクーデターが起こり僕たちのギルドマスターが殺害されました。それを機に彼はギルドを脱退し、ギルドの全てのアイテムお金を持って逃げました。そこから彼はオレンジプレイヤーへとなっています。僕も自分のギルドが襲われたとき持ち逃げしたことに怒りを感じ、何度も彼を殺そうとしました。」

完全に彼は相手の味方をするような発言であり、これだとこの前言った事とは全く反対の結果となってしまう。俺も戻りたいが、彼もこれだと失脚して職を失うはずだ。

：もしかしたらこの前の出世は嘘で、俺を上げて落とす作戦なのかもしれない。もつとも彼らしくて最悪だ、顔を見ると吐き気がする。それに関係なく彼の発言は続く。

「：最後に彼は私の殺害に失敗し、怒りを覚えながら彼はSAOからログアウトしました。が、これは間違いでしょうか？彼がしていることは本当に狂氣的なサイコパスがやっている行動でしょうか？違います、彼は間違いなく人間です。」

「えっ……」

「まず、SAOにログインして何もなかった世界にいきなりのデスゲーム宣告。これを聞いて落ち着いていられたプレイヤーはいったい何人いたのでしょうか？冷静さを失い何をすればいいかわからなくなったプレイヤーはゼロだったでしょうか？そんな人間に襲われて黙って殺されるプレイヤーはどこにいるでしょうか？死をつきつけ

られたらそれを否認して抗うものがほとんどです。弁護人、資料のB—1から3を出してください。」

すると会場は騒めきだし、モニターに表示される資料は先程検察が出したログ資料とプレイヤーの音声資料、そして命からがら逃げてきたプレイヤーの映像資料である。確かに彼なら入手するのも簡単だろう：今こそ俺の見方をしているがなんせ表面は俺の敵をしていたのだから：元々俺を殺すための幹部からもらったデータが残っていたらそりゃこうなる。真実を知る俺はすごいと思えないが、裁判所内はどよめきが起こる。

「彼は基本的に戦闘能力はありません。しかも資料から見ると自発的に殺人を行った形跡は全くありません。殺意で人を殺そうとしたのは、僕が彼に嫉妬し皮肉を言った時くらいしかありません：彼は、一人になった後自分の道を切り開き、自分の道を走り抜けたのです。その道の途中に彼は何度も敵に襲われ、そして僕も邪魔をした：それでも彼は前を見続けた。自分の力で障害を取り除き生存したのです。彼には何も罪はない、襲ってくるプレイヤーから生き延びるために殺し続けた：死神ではなく彼は：白い罪人：そうと、僕は思います。以上です」

振り返り彼は壇上から降りて後ろの席に座る。その顔はいつもの成功した顔ではなくミラの表情では始めて見る敗北した、暗い：落ち込んだ表情だ。本心は何を思っているのか、この場の人間は誰にも分からない。

時は経ちやがて判決の日がやってきた。場内はがやがやし、裁判長の声があるまでざわざわが静まらなかった。俺も吹田も相手の顔も：緊張をしているが、相手の顔は勝ちを確信したような顔だ。恐らく、『いくらあんなことを言われても殺人をしていることには変わりはないから処刑されて当然、さもなければ私たちが殺す：』といった顔をしている。被告人の俺が言うのも何だが：襲ってきた方が悪いと思う。幼稚園で習ったことがあるが先に手を出した方の負けと聞いたことがある。俺は相手の攻撃を防いだうえで命の危険を感じ殺している。今でも他の方法なんてすぐ考えることが出来ないのに、当

時の俺が殺さずに何とかするなんてできるわけがない。つい自然に机を殴ってしまい隣の吹田が俺の背中をつねった。

「判決を下す…被告人は無罪。被告人隣音弥を…保護観察とする。検察側の証拠不十分、また被告人側の証拠が被告人の行動と一致し、事件性はないとし無罪！」

勝った、本当に勝ったのだ。SAOの忌々しい死神の呪縛から解放たれ、俺はやつとあの世界から解放されたのだった。裁判所を出た後俺は車に乗り足早にその場を後にした。マスコミは車にたかりフラッシュをはなつてくるが、それは前にいた車を追いかけていき俺たちはゆっくり学校に戻っていった。だが、俺は勝利をしたとは言えその余韻に浸ることが出来ない…あいつの力を狩りついているせいかな…喜べない。彼への感謝の言葉も…喉が手でふさがれているように出ない。

「今日は…あ…りが…」

「まあそんなことを言わずに。僕だって悪いと思っている。あの時、君がギルドマスターに選ばれたことは知っていたんだ。何故僕じゃないんだって嫉妬して、君が羨ましくなって…そんなことを思っ君を殺そうとした。」

「…本当にさつき言ったことを思っているんだろうな？」

「ああ。君は自分の力でこのゲームを生き抜こうと努力した。だが、僕は自分の力ではなく他人の力ばかりで…僕は全く成長しなかった。本当ならあの場で僕は死ぬべきだったんだ。だから…僕はこの世界に帰ってきた時、二度とゲームで人を悲しませたくないと思い、ALOのクエスト管理をする部署にSAO帰還者というツテで入った。僕のクエストで君を傷つけたのは悪いと思っっている…これくらいしなければ君は気づいてくれる気がしなかったから…本当に…本当に…」

彼は泣き始めた。正直慰めると彼は簡単に裏切ってくる気がするのであえて慰めてやらなかった。黙ってただ見守ると五分くらいいた後、何かに気付いたように目を見開く。

「そういえば君が持っている『セイグリット・デスライサー』は特殊な

スキルがあつてな…それはプレイヤーの心理状態で、この武器の固有スキルが決まる。つまりこの武器を持った時に君が何を思ったかで武器のスキルが決定するのだ。」

「武器のスキル…？最近忙しくてな、よく見れていなんだ…明日は引越しの準備で忙しいし、またよく見ておくよ。」

「うん、君の道の可能性がとても楽しみだ。もしよければ、また僕のクエストをプレイしてくれ。」

その言葉を聞き自然と苦笑してしまう俺。車のドアを開け吹田とともに学校へと帰っていった。これから、部屋の私物を片づけ、二日後にはこの牢屋を出るのだ。だが、俺の指名はあと一つ残っている。そう、あの木の下で彼女が待っている。ナーヴギアを持ち今までを思い返すといろんなことがあった。いろんな人と出会い、笑い泣き、怒り楽しんだ。現実では見られないものがたくさん見れた…時に事が荒立ち、時に何かを失う時だってあった。それが全てこのナーヴギアに詰まっている。

現実で感じられなかったのが少し悔やまれるが、その分を取り返すため俺は現実で生きることを決めた。何があっても、何が起ころうとも、自分の力で切り開く。限界が来れば仲間と協力し、共に喜びを分かち合うと。新たなスタートを沈みかける夕日が照らしてくれた。

さよならはまた明日

部屋は綺麗に片付き、残ったベッドや医療器具が寂しそうに残る。最初ここに来た時は衝撃で、閉じ込められることに抵抗を覚えたが今となると少し寂しい気持ちになる。窓ガラスも防弾加工されているはずなのに二回も割られて、完全隔離のはずなのに三回も外出して、少し異常なのかもしれないがこの異常な空間に少し満足感を覚えていた。俺は俺なりに生きて、周りの人と合流できるところまで来たからである。今は夜の7時だが、出発は明日の3時で時間があつたので少しALOにログインすることにした。

予想通りシルフ領の104号室からスタートした。ベッドには緑の今回はカザネと遭遇することもなくシルフ領を後にでき、急いで世界樹の元に向かう。久しぶりに跳ぶ空は冷えており、季節は冬だということを感じさせる。フィールドにはちらほら雪が積もっており、プレイヤーが通る度足跡が残りましたこれが冬を感じさせる。ルグルー回廊に入ると、多数のプレイヤーがモンスターを狩っていた。俺はそれは艦弁なので闇に紛れながら世界樹を目指す。

回廊を出ると、首都アルンに到着する。そこにはユグドラシルシティよりは小さいがいろんな種族が集まり、まわりの領の主都より一段と明るい。そこを歩いて抜け…世界樹の根元にたどり着く。目の前には昔使われたのか古びた門があり、草で浸食されていた。そこに一人のプレイヤー。そのプレイヤーは背が低く、猫耳が生えたプレイヤーアモネだった。降り立ち声をかけようとする…振り返った姿は彼女じゃない、俺の顔だった。

「やあ…久しぶりだね。僕のこと…覚えているかい？」「お前は…『僕』！」

後ろに下がろうとするが、肩を掴まれ俺の何かを抜き取ると突き飛ばし体を発光させる。その光は闇に変わり、アモネの姿をした『僕』を包み込む。そしてその闇は徐々に大きくなり巨大な何かを作り上げた。

「ふふん…君を乗っ取るのはやめたよ。なんせ僕は僕の体を手に入れ

たからね！見るんだ…僕はこの世界の神となる！！フハハハハハハハ…！！」

「なんだと…どうなっているんだ！」

「僕は君のログインや君の睡眠を利用して…ログイン情報をコピー…そして僕はこの世界にプログラムを残すことに成功した。そして今、君のプログラムを完全にコピーすることで…僕は完全に僕としての存在を残すことに成功した！！もう僕を止めることは出来ない！！」

彼は闇とブロックノイズで体を生成し、巨人の姿となって俺を襲う。名前はアモネから『Unknown』に変わり、ゲージも四本に増加した。巨大な上半身に合わない下半身、その上半身にはさらに巨大な二本の腕、背中からはドラゴンの首が二本飛び出ており顔は阿修羅のような三つの頭。一番前にある阿修羅の顔の額から『僕』は現れた。大きな右腕はあり得ないほど早く振り降ろされ、俺は急いで攻撃を避ける。そして、闇属性魔法をぶつけるが、その瞬間死神のクエストの時と同じ痛みが襲い掛かる。その巨人の様子に気づいたのか、他のプレイヤーも近づくと俺はそれを制止し、からの攻撃もろに食らう。

「近づくな…ここにいと危ないから世界樹はしばらく後にツ…!？」

「ふふ…勇敢だな。かつこいいなあ。」

「…どうなっている…痛みが…」

「あー、言い忘れていたが君のナーヴギアを再起動し、ペインアブソーバを5にした上、脳に強力な電磁パルスを撃てるように設定しておいた。君のHPがゼロになった瞬間…君は脳を焼き切られ死ぬ。楽しみだよ…僕が君を殺せる日が来るなんて…」

「っ…なんてことを…い…」そんなことさせません!!」

ペインアブソーバとは、この世界の痛みを吸収し軽減する機能のことだ。普通は10なのだが、5になると実際に受ける痛みに近い衝撃が襲ってくる。特に0〜3にされた時は現実にも影響を及ぼすらしい。不意にアモネが横から巨人に攻撃をぶつける。巨人の攻撃を華麗にかわし大きな肩に確実に攻撃をぶつけていく。が、その度俺の体に激痛が走る…痛すぎて思わず叫び声をあげてしまった。その傷を

後から来たカザネとカミュに癒してもらうものの、攻略法がつかめない。ログアウトボタンは薄くなっていて機能しなく、再び俺はデスゲームの世界に隔離されたのである。

「君には逃げ場はない…僕には体はあるもの…君のアカウントで口グインしている状態だ…。つまりどういう意味か分かるかな？」

「…まさか…：あんたが死んだら、あのバカもデス扱いで死ぬ…!？」

「そう、『俺』と僕は一心同体。体が違って心は一緒。そうならば体も一緒…というわけだ。」

「そんなことってあるのかよ…!?!リンネに何がしたい!？」

「…偽物を抹消したいのさ。たった四年しか生きていないその『俺』という人格を消して、僕こそが本物だということをお願いしらせる!今まで暴れていたのは全部僕なのさ!!」

まるで意味が分からない。まとめると、俺が死んだら俺だけが死に…：『僕』が死んだら…：道ずれで俺も死んでしまう、というわけであつて…：前代未聞のDEADENDに向かって俺の物語は進んでいるというわけだ。

せつかくここまで来たのに…：ここで死ぬのか。人の力を借りたものの…：やつと自分の力も使つて呪縛を振り払ったのに…：結局自分にやられるのか…。まさかミラは、『お前は…：自分で自分を殺すのだ』と死神に言わせたのはこれを見据えていたのかなのだろうか…：何もかもミラのせいだろうと思いたい。とりあえず俺は攻撃を避けようとするが…：彼は闇魔法を唱える。すると魔法のデメリットが俺と『僕』を襲い、激痛に襲われる。その魔法攻撃を庇い…：ローベが吹き飛ばされ、アモネも太い腕に投げ飛ばされた。カミュの魔法攻撃で足場を減らしカザネのSSが炸裂する…：はずだったが、それさえも防ぎ殴られたカザネはカミュに直撃し二人まとめて地面に投げ出された。傷つく俺と四人は、『僕』の前に刃がたたず、巨人は容赦なく攻撃を続ける。

火属性魔法が俺に直撃し、死を覚悟したその時だった。続々と爆発音が鳴り、『僕』の動きが止まる。煙の中巨人の腕が振り降ろされるが、その腕も弾かれ巨人は怯み動きを止める。煙が晴れ…：そこにいたのは、黒いコートを着て両手には二本の剣、短い髪がなびき、ニヤリ

と笑う童顔。あれこそ俺が今まで探していた…

「見たことないモンスターだな…俺も混ぜてくれないかな？」

「黒の剣士…キリト…！嘘だろ…!？」

そう、彼のHPバーの上に書かれたプレイヤーネームは…『Kirito』、確かにそう書かれていた。

「どうか…相当強そうだが…倒してしまってもいいのかわ？」

「待ってください！そのまま倒すとリンネさんが!!」「リンネ…?」「実は…かくかくしかじかで…」

キリトはアモネの説明を聞いた後、小さな妖精を呼び何かを話している。その後妖精はどこかに飛んで行き、キリトは俺たちの方を向くと説明を始めた。

「まずはこいつを食い止めるんだ！俺たちが動きを止めている間にカミュは支援魔法で巨人の動きを制限してくれ！相手の様子を見て隙をつく!!行くぞ！」

「任せてくださいい〜！」

カミュは飛び立ち、わざと攻撃を外しながら魔法のタイミングを計る。巨人は腕を振り回す他に、口から火炎を吐きだす。このパーティにはタンクがおらず俺が魔法を受け止めようとしたが、キリトが俺の前に飛んできて飛んでくる火炎を切り裂く。それを見てローベが右足を集中攻撃し、アモネも攻撃に加わる。キリト跳び職人のように飛び回り魔法や火炎攻撃を防ぐ。タイミングは完璧で、HPは一つも減っていない。が、黒の剣士でもプレイヤーが人実にかかっているとどうしようもなく。事が一向に収まる気がしない。すると一つの言葉を思い出す。

『そういえば君が持っている『セイグリット・デスライサー』は特殊なスキルがあつてな…それはプレイヤーの心理状態で、この武器の固有スキルが決まる。つまりこの武器を持った時に君が何を思ったかで武器のスキルが決定するのだ。』

鎌…！俺は武器を確認し、スキル情報をしっかりと確認する。するとそこには『necro』の文字が。これのおかげで俺は前回デスペナルティーを受けなくて済んだものの…バーサク状態になつてしま

うデメリットがある。仮にこれで俺が彼を殺しても俺が生き残れるかもしれないが…と、次に小さな妖精が帰ってくる。

「わかりましたパパ！あのモンスターは確かにリンネさんと共有のアカウントです！ですが、彼はプログラムの存在でバックアップがないために…ここで彼を倒したら消滅します！」

「それならキリトさん…俺からこの作戦を…」：「わかった、本当にいいんだな。でかしたぞユイ！」

「本部に異変がバレないように私が時間を稼ぎます！パパたちで彼を止めてください!!」

それぞれが散らばり、巨人の動きを制限する。俺も攻撃に参加し、痛みを耐えながら巨人を攻撃する。まさかの行動だったのだろうか。巨人の動きはのろくなる。手をつこうと降りてくる巨人の手の下にはアモネがいた。祖のアモネをローベが助け出しそのまま巨人に向かって投げつける。アモネは巨人の肩を切り裂き、巨人に聞いたのか悲痛な咆哮を上げる。腹には涙を流しながらカザネがSSをぶつけていく。そう、この部分はそれぞれ初めて攻撃された時の古傷であり、触られるだけでダメージが来る場所だ。そして正面からキリトが、両手の剣を光らせ交互にSSを発動させる。

「これで…決める…！」

この技は…聞いたことがある。伝説の十六連撃の二刀流スキル：『スター・バースト・ストリーム』である。その動きは軽やかで…美しかった。腹に激痛が走る中、俺は走り出す。『僕』はキリトの連撃のおかげでまったく気いていない。十六連撃が終わった直後にキリトは叫んだ。

「リンネ！スイッチだ!!」「わかった！これで決めてやる!!」

入れ替わるように俺が前に出て、鎌を光らせSSの挙動に入る。彼は俺を見ると動こうとするもののキリトの攻撃が効いているせいか体が起き上がらない。それは俺にも分かっていた…鎌を分回し十字とXを描くように相手を切り裂き自分の足で傷口の真ん中に蹴りを入れる。そしてその勢いで蹴り上げ上空に飛び、鎌を前に突き出しながら巨人の腹目掛け突撃する。切り裂いた後、地面に着地し…名乗

る。

ドゥームズ・デイ

『最後の審判』…これで終わりだ!」

「バカな…僕が倒されるなんて…!だが君の命もここで終わりだ!!」

「…残念ながら…俺はこれからも生き続ける。自分のために…自分の命で!俺の手で…未来を掴むんだ!!」

そういうと、スキルが発動し…俺の体を再び激痛が襲う。何か俺を包んでいく感覚、体が勝手に動き…襲い掛かる恐怖、周りにいるプレイヤーを襲いたくなる衝動…今にも襲い掛かりそうなきとき…俺は決めたのだ。

「この命を…俺は…殺してしまった人たちの分まで燃やし続ける…!!自分の明日を捨てたお前に未来なんてない!!」

その時ネクロ表示は消え、俺のHPは半分回復した状態でその場に立っていた。体も崩壊せず…武器『セイグリッド・デスライサー』も健在だ。彼は雄たけびを上げて白いポリゴンとなり…大空へ消えていった。ポリゴンが消えたことを皆確認し、俺の元へ近づいてくる。妖精ユイも笑顔でこちらに飛んでくる。

『Unknown』の消滅を確認しました…私たちの勝ちです!」

「リンネさん!」「リンネ!」「やったわね…」「流石です」

「やったな…リンネ。」「ありがとう…キリトさん…!!」

改めて皆と勝ちを噛みしめ、目の前にいるキリトに驚愕する。見ていれば普通のプレイヤーだが、彼にもいろんな物語があったのだろう、自信に満ちた笑顔だ。

「あの…キリトさん。俺は貴方に会いたかった…もしよければ、俺と…フレンドになつてくれませんか?」

「えっ…ああ、いいよ。」「噂通り人付き合いが苦手そうだな…!」

戸惑いながらもキリトはフレンド認証をしてくれる。その後、俺たちとそれぞれスキルのことやチームのことを話してあつという間に時間が経って行った。俺はこの時間を満喫した…彼と決闘を行い、今度仲間と合う約束をして、昔の話で盛り上がった。彼のすべてでもなかったが、一緒にあの世界にいた人がここにいるだけで…俺は安心してしまった。その後、キリトと別れアモネ以外の仲間と別れた。世界

樹の下には俺とアモネだけになった。

「…全てが…：終わつたな。」「そうですね…：あつという間でしたね。」

「…アモネは俺と会つた時のこと覚えてるか？」

「もちろんです…：その時の気持ちも顔も覚えていますよ」

「あの時は…：気持ちも分からなくて最初はぶつかった。でもそれがきつかけでアモネと会えた。」

「…あの時、どうして私を殺さなかつたんですか？」

「うーむ…：決意が半端だつたと言うか…：まだ助けられるって思って、お前に殺しの世界に来て欲しくなかつた俺の勝手な思い…：だな。」「…大好きです」

アモネが小さな腕で抱きしめてくる。後ろまで手が回らないが、それがまた俺を安心させる。嘘じゃない優しさ、これが俺に必要なのだのかもしれない。どんな時でもアモネは俺と一緒にいてくれた、あの笑顔があつたから…：俺はここまで生きてこられた。だから彼女が捕まつた時、助けたいと思つた。俺が生きる上で…：彼女は必要なのだ。

「…アモネ、俺はお前と一緒にいたい。だから…：その…：…：なんで言えればいいか…：お前のその優しさが好きだ！その笑顔も…：お前の考えも」

「…リンネさん…：…」

「ずっと一緒にいてくれ…」

俺は何を言っているのだろうか…：自分でもよく分からない。アモネを傷つけたと思ひ慌てて彼女を見るが、アモネは顔を赤らめ恥ずかしそうに見ていた。アモネは俺に飛びかかりそのまま押し倒す。そしてあげた顔にはとびきりの笑顔が浮かぶ。その笑顔からは…：彼女の溢れる…：何かが浮かんでいた。

「愛しています…：リンネさん」

.....

ある日の晴れた昼下がりに、一人の男を複数のパーティが襲う。白いローブがなびき、片手には大きな鎌を持つ。囲まれたからは全く動かず、くすりと笑う。そらにつられ一人のプレイヤーが斬りかかるが、彼は避けた後そのプレイヤーを炎に変える。集団は驚愕し武器を構える。

「お、お前は一体…誰なんだ!!」

「…俺はリンネ。襲わなければ襲わない…死ぬ覚悟があるだけやつだけこい!!」

彼の持つ鎌が怪しく光り集団にさらなる恐怖を植え付ける。そして、動かないことを確認すると彼はその場を後にした。その姿はだんだんと遠のき、砂漠の先へと消えてしまった。彼の名前はリンネ、何度も殺し、何度も死んだ男。やむなくPKを続けたその姿から、白い死神と呼ばれた。そんな彼は毎日を噛みしめるように生き続ける。自分が奪った命とともに。

白い死神に、明日はあるか。

IF（イモータル・フロンティア）編

IF編 登場人物

登場人物：IF（イモータル・フロンティア）編

隣音弥（となりおとや）／リンネ（rinne）

身長172cm 体重60kg 年齢18歳

当時中学三年生で、ただ友達に誘われたという理由だけでSAOにログインして友達を探した。特にゲームは持つておらず、友達の家で少し触らせてもらえる程度。名前の由来は自分の名前を音読みして丁度良さそうな名前だったから。また自分を変える（僕の人格を完全にする）ためにつけた。（隣音＝輪廻↓リンネ）僕の人格は死に、今の口調と人格は俺だが、名前を変えるつもりはあまりないらしい。

性格は少し幼く、少しずつ元気を取り戻しており仲間を茶化すのが楽しい。過去にSAOやALOでの出来事を乗り越え、IF世界でも気楽に過ごせるような余裕がある。戦闘スタイルは、攻撃されたら攻撃をするスタイルで、警告した後に攻撃を仕掛けてくれば手加減もなく自衛のために相手を倒す。対人戦が得意だが、フィールドにポップするモンスターもそこそこ戦える。だが、虫系には恐怖を抱いており、姿も見たくないという。

武器は曲刀の『ファルシオン』とオーダーメイドの鎌（両手斧）『ギルティ・サクリフェイス』である。基本的に曲刀を使うが、ピンチになったときや、余裕のない時に鎌を使う。鎌の特殊能力は、相手の防御力に関係なくアーマーを貫通してダメージを与えることができる、でありレベル20の彼に丁度良い武器だったと思える。曲刀にはない。

本人の保有スキルは、両手斧（鎌）スキル、潜伏、体術、生存本能で、曲刀のスキルは途中で放棄した。体術と両手斧のおかげで攻撃力ほどのプレイヤーともそれなりに戦える程度になっている。最初は世界に怯えていたが、だんだんと耐性がつき、虫を見なければ大丈夫にまで成長した。

ひよんなことからIFの世界に引き込まれ、とある時間までタイムスリップしてしまう。今度は死神でないルートを歩もうとするが…

根下愛花（ねもとあいか）／アモネ（amone）

身長153cm 体重？ 年齢16歳

当時中学一年で、女子友の誘いで始めた。すぐに合流するも、デスゲーム宣告によりすぐ行動することが出来なかった。名前の由来は自分の名前と照らし合わせた花がこれだったために。（アネモネ↓アモネ）

戦闘スタイルは真正面から自身を投げ込んで敵を倒す脳筋型。が、戦うと疲れるという理由から普段は潜伏と索敵を使って戦闘回避している。モンスターとの戦闘はそれなりにできるが、現実で人を殺してしまうことから対人戦が全くと言っていいほどできない。（リンネの時は死ぬことを覚悟して行った）虫系のモンスターは嫌い。

武器は短剣を使い、日によって変えるので決まって使っているものはない。保有スキルは、短剣、投擲、索敵、潜伏、料理で、やはり全てがレベルマックスではない。

性格は自称天真爛漫で少し独占欲が強め。そして飽きっぽい。ゲームが大好きで主に、アクションゲームやパズルゲーム、FPSはコツをすぐ掴み、三日ほどしたら別のゲームに変えてしまう。

一つ上に姉がおり、20歳になってからホテル嬢をしている。姉もまたゲームが得意であり、アモネは一度も姉に勝ったことはない。

IFの世界ではスキルをきちんとマックスにし、今度はリンネとの関係を縮めることを目標としているが：

相原風音（あいはらかぎね）／カザネ

身長165cm 体重??? 年齢17歳

最初はあまりALOに興味はなかったものの、流行りに乗り始めたところハマってしまった。名前の由来はそのまんま。（風音↓カザネ）

性格は強気であり、年齢に関係なく場を弁えた上で意見するほど自

信家。成績も常に上位に入る程で、自分に足りないものといえば後、女子力が足りないと思っっている。気が強いのは自分を強く見せるためであって、気が抜けると弱い一面も見せることも。

武器でのどちらでも戦えるが、あまり戦いは放棄していきたくないと思っっている。特に対人戦は嫌な思い出があるためになるべくしたくない。

武器は鉄製の槍『ハルバード』を使い、防具は軽めに取り回避に専念した装備となっている。ALOでは魔法剣士で支援に回ることが多かったが、SAOではヒット&アウェイを胸にアタッカーとして活躍する。

二つ上の兄がいたが、兄はSAO事件で死に、その日以来から兄を殺害したオレンジプレイヤーを嫌い、心から人を信じられなくいた。が、今はリンネたちに心を開いている。

初めてのSAOの世界では、兄の救出とリンネとの接近を目標としているが：

ローベ／ローベ (rove)

身長175cm 体重69kg 年齢31歳

自分の勝ち場所を求めてALOにログインした。名前は自分がリングネームとして使っている名前。

性格はとにかく明るく、体育会系で彼の周りにいると少し暑くなっっていく。戦闘スタイルはとにかく真正面から突っ込む。ボクサーらしく逃げも隠れもせず、自分の力を信じて戦うスポーツマン。そのせいか人型でないモンスターとの戦闘が苦手であり、とくに空を飛ぶモンスターは相手ができない。

武器は自分の拳で、他の武器スキルを全く持たない。それどころか、戦闘時にはローブを脱ぎ捨てるため防具もない。SAOでは仕方なく大剣を使ったり、防具を装着したタンクとして働くことがある。

ALOを始めるにあたりいろいろ調べたため、SAOプレイヤーのことをリンネたちより知っっている。集団にすることが苦手なために、現実もゲームも基本的にソロだが、IFの世界はリンネたちと集団行

動をとる。

SAOの世界では仲間とはぐれてしまう。

久野未来／ミラ (mirra) 22歳

リンネをギルドに誘うが、途中ギルドの全てを持って失踪されたために怒りを感じ、プレイヤーを利用しリンネの殺害を目論む。

性格は何をしてでも自分の欲望を達成する自己中。例え人も殺しても最後が良ければなんでもよいらしい。人を仕切るカリスマ性があるために自分あまりレベル上げをせず、随伴でレベルアップした程度。スキルも保有していない。

IFの世界でも相変わらずリンネを殺そうとしている。あの戦いの後の彼の行方は：

錦敬一郎／ナデイ (nady) 14歳 (SAO開始直後12歳)

ゲームファンで、初めてのVRゲームSAOに期待を込めてログインする。最初は普通に満喫していたが、あるときに大切な人を失い死神にあこがれを持つようになる。名前の由来は適当に思いついた自分のハンドルネーム。(甘えん坊で撫でてほしい↓なでなで↓なでい↓ナデイ)

大切な人間を失い、罪のある人間を殺すうちに本当の殺人者となつてしまった。最初は死神ことリンネや、笑う棺桶のpohに憧れるが、殺すうちにあこがれがなくなってしまう。とある場所からリンネと行動を共にする。性格は無邪気で年上のリンネにもタメ口で話しかけ、師匠のように慕う。

潜伏スキルを主体に武器は短刀、敵に気づかれないうちに殺す、暗殺スタイルを主としている。正直に对人戦闘は得意としていない。殺す際も全く罪に思わず、そこで会ってしまったのが悪いと言いはるほど自由。

現実では父母と弟が一人の四大家族。だが、親が基本的に忙しく話を聞いてもらえず自分の中のため込むことが多くなりストレスをため込んでいた。

好きなものは静かな空間、嫌いなものは裏切りと慈悲。誰にも言えない秘密で、誰にも甘えられないので誰かに甘えたいと思っている。

ナデイの大切な人／???

ナデイがSAOの際に一緒に行動していた女性。70層付近にてオレンジプレイヤーに殺害され、ナデイにトラウマを植え付ける。

再会

A L Oで「僕」と戦って約半年、俺リンネは警察の保護から解放され、アモネの家に居候させてもらっていた。家に帰ればよいと思つた人もいただろうが、今家に帰ったり、俺が警察から解放された情報が洩れようものならおそらく命がない。とはいえ、外出は必要な時があり今日がその一例だ。今日は帰還者対象の定期健診で、以前入院していた病院へ向かわなければならなかった。

病院から帰っている途中、俺は車の中で転寝していた。隣に座るカミュさんが寝そうになるたび体をゆすり中途半端な覚醒を促していく。そのたび、彼女の方を向き睨むが表情一つ変えずに前を向いたまま。眠気がやってくる度体のゆすりが増えるがそれに反して体はだんだん重くなる。頭がカクリと下りた時、頭に強めの痛みが起こつた。

壁か棚に頭をぶつけたかあまりの痛さに頭をさする、気づけば朝が来ていた。起き上がり周りを見てみると周りが丸太だらけで見覚えのある光景と出会った。もしかするところは…本当にS A Oの世界に戻って来てしまったのではないだろうか？指でサインをしてステータス画面を開き、装備画面を開く。そこには俺が以前使っていた武器『ギルティサクリファイア』の文字が浮かび上がる。それだけではない、フレンドを確認するとぽつんとアモネの文字が表記される。そして現在の時刻を確認すると、11月1日の午後1時をお知らせしていた。これは俺たちがミラに反抗するまで5日前である。

「…タイムスリップした…？S A Oの世界に」

不意に、ドンドンと扉が叩かれる音を聞き、俺は飛び起きてあたりを確認する。家は全くと言っていいほど何もなく敵の姿もない。恐る恐る扉を開けるとそこには顔を赤らめたサイドテールの少女、カザネが立っていたのである。そして俺を確認すると懇願するように接近し手を握る。急なこと過ぎて俺は恐怖に思い動けない。カザネは

とても気持ちよさそうな顔をしているがすぐに真面目な顔になり俺を一緒に床へ座らせた。

「前にも話したと思うけれどこの日は…私の兄さんがやられた日なの。だからそれを止めに来た。」

「えーと…俺は確かこの日…あいつらに逆襲するために部屋でシミュレーションをしていたはず…俺は七日まで家の外に出ていないな」

「なら誰って言うのよ…あんたが死神ってここで呼ばれてて、その死神がここにいるってことは他に死神いたっていうことじゃない？」

「そういうことになるな」「…」「…」

「なら早く止めに行かないといけないじゃない!!あんた今すぐ出発よ! 事件現場は私が知っている!!」

引っ張りだされた俺は無抵抗に引っ張られ家から連れ出された。まず思えば、何故ALOで出会った彼女がここに存在するのか…なら夢なのかもしれない。

転移結晶を使い56層に飛びさらに走っていくと広場に到着する。そこには多くの人が行きかい賑わっていた。その中でも彼女が指さした先には鎧を着た背の高い青年が歩いていたのである。そう、彼こそこれから殺される予定のプレイヤー、カザネの兄である。今ここにいるということは恐らくもう少して事件は起こるはず…と思った矢先、後ろからナイフを構えた小柄な少年の姿が見られる。その少年の手は少し震えており殺すことを躊躇しているように見えた。が、一つ頷くと目の前のカザネの兄に向かって走り出す。少年は恐る恐る目を開けるが、目の前に広がる光景が違うことに驚いたのだろう、少年は驚き後ろに倒れてしまう。少年が見た光景、それはアモネの兄の亡骸ではなく俺の武器が少年のナイフを弾き飛ばし、仁王立ちする俺の姿だったのだから。少年は逃げだそうとするが、カザネが許すはずがなくすぐに摘み上げそのまま地面に投げつけ手に持つ槍を彼の頭の近くにつき刺した。ヒツと声上がり少年は震えだした。

「さて、なんで兄さんを狙ったのかしら?理由によつてはあんたを生

かしておくわけにいかないわ」

「そ、それは…認められるためだよ！力がないとこの世界は生きていけないだろ!!そこにこいつがいたから悪いんだ!!」

「人殺して力なんて上がらないわよ…死んで償え、この人殺し!!」「待てカザネ!!」

カザネの振りかぶった槍を鎌で受け止め少年への攻撃を防ぐ。その隙について少年は逃げようとするが、先ほどのカザネと同じように鎌を地面につき刺した。

「こ、殺すなら殺せよ…俺はあんたに憧れて人を殺そうと思ったんだ…!!」

「俺のせいかよ…ま、前の俺なら間違いなく解体していたが今回は目を瞑ってやろう。俺は人殺しを好んでしていない。この世界を生きるために仕方なくやっていたことであって俺は正気なんだ。」

「で、でも…強いじゃないか！俺はそんな力もないし…もしあいつが襲われたら俺が守らなきゃ…」

「お前は昔の俺と似ている。俺は仲間を失ってこんなんになってしまったが、お前はまだ間に合う。こつちの世界に踏み込まずに、お前の世界を守った方がいい。」

「…俺は罪人を許せないんだ。だからあんたのような力が欲しくて…!!」

少年は跳ね起き俺をナイフで突き刺そうとするが、俺はナイフを蹴りで跳ねのけ拳で少年を殴り飛ばす。正直、傷つけずに回避することもできたが、これくらいしないと彼は諦めてくれないだろう。殺さず生かして恐怖を与える…納得はいかなかったがこれしかないと思い、罪悪感を押し殺した。少年は頬を押さえて立ちあがりどこかに走っていった。安心するとため息が自然と出てしまい、後ろを向くとカザネが兄と抱き合った状態で泣いていた。つい俺も釣られて目から涙が流れてしまった。何故こんな涙が流れてしまったのかわからない。が、ただひたすら泣くことしか出来なかった。

「ありがとうございます。私はギルドを脱退して静かに街で暮らします」

「本当に無事でよかった…兄さんを救ってくれてありがとう。本当はあんたが犯人じゃなかったのね」

「俺もスツキリしたよ。お前と会った日以来ずっともやもやしていたからな…兄さんが無事で何より。」

「風音は…行ってしまうのか?」

「ごめん、私この人と色々やることがあるの。でも…絶対この人とのゲームをクリアして開放してあげるから、それまでずっと待ってほしいな。」

「そうか…強くなつたな、風音。昔はこんなに積極的じゃなかったのに…なんか安心したぜ。風音を頼んだよ、リンネ君」

複雑だったが、任せてくださいと返事を返し握手をした。兄さんが歩いていく刹那眩きが耳に入る。

『妹がどうして…?』

その数秒後、カザネは俺に抱き着き下から目線で俺を見つめてくるが…またそれが恐怖にしか思えない。アモネにでも見つかったら俺は…あんなことまで言ったのに…思い出すととても恥ずかしくなってきた。そんなことを知らずに彼女はさらに体を寄せて肌を密着させる。万事休すか、と思つた時間き覚えのある声が聞こえた。カザネをおんぶしその声の元へ向かうと…そこには、拳で斧を振り回すバトラーと互角に戦うローベの姿があつた。バトラーは俺に気づくとデュエルを中断して、ローベと近づいてきた。

「ようリンネ…その女はなんだ?お前には救うやつがいるのに二股とは…のんきだな」

「いや、バトラー…これはその…事情があつて…!!」

「あら、あららら…お前ら知り合いだったのかよ…!?世界は狭すぎますなあ…!」

ローベが感心して頷く。確かにこの光景を見たバトラーからすれば確かに浮気しているように見える。だが、違う。断じて違う。これはどう頑張っても回避することのできなかつた事故なのである。とりあえず状況を適当に説明し二人もこの作戦に参加することになつ

た。が、バトラーやこの世界の人間にはさすがにタイムスリップしてきたなんて言えないので、昔からの知り合いということにしておいた。その時にカザネが喜々とした目でこちらを見ていたことは言うまでもない。

それから、俺の家を拠点にし俺とカザネとローベの三人は今後の予定を考えなおす。アモネを救出した後、この世界が本当に100層クリアするまで終わらなければ…そのこともあり、実践能力アップを第一の目標とした。とりあえずそこまで立てた後、それぞれが家の木の板に就寝した。が、俺はずっと考えていた。なぜあの天使は俺をこんな世界に連れてきたのか。それが不安だった。もし本当にクリアしたいのならキリトやシリカでもよかったはずなのに一体何故俺らは…が、何日も経てば分かるが…とりあえず近日に迫った彼女の救出を一番に考えることにした。一度外に出て崖から世界を見るが、何度見てもそこは俺が二年間生活したデスゲームの世界、SAOの仮想世界が見せる朝日が昇っていた。

死神に憧れた

「無所属のリンネだ。アモネを迎えに来た。」
「…入れ。」

どこかから門番だろうか、ミラではない声が俺に反応しそれに合わせ門が開く。門は比較的軽い様子で開いており襲撃に対してガバガバと思える。門をくぐり周りを確認する。少し先にステージがあり、その上には玉座に座るミラ。その横にはおびえながら座るアモネの姿があった。ミラとアモネの位置を確認すると俺は走り出した。すぐに兵士が俺を取り押さえようとするが追いつかず、50mほどあった距離はすぐに縮み手を伸ばせばアモネに届く距離となっていた。ここで、ゴルドレムが俺を妨害することは知っていた、だからおれは敢えてゴルドレム押さええに行く。この予想外の動きはゴルドレムのバランスを大きく崩すことに成功し、時間を稼ぐことに成功した。巨神兵のいない無防備な二人にカザネが切り込み、慌ててミラが剣で応戦、ただ彼の当時のレベルは俺と同じくらい弱く、戦闘能力なんて皆無に等しい。怒涛の突きにたじろぎ防ぐことが精一杯のミラ。カザネはアモネを保護しクラツカーで爆音を響かせる。すると、アジトの裏門から大量の囚人が侵入しアジトを数秒で占拠する。おれはゴルドレムを囚人と来たローベに任せ、ミラの元へと向かう。ミラは状況を把握できておらず啞然としていた。

「…何故、何故こんな動きが……」

「…ミラ、お前は本来ここで俺から逃げてこの物語を終えるはずだった」

「は、はあ…？君は一体何を言ってる…!？」

「俺は…お前を殺す。お前を殺して…おれの死神としての働きはここで終わるんだ」

「や、やめてくれ…俺が悪かった、一度話し合おう…!」

返事も聞かず鎌を思い切り振り下ろしミラを一刀両断、盾に真っ二つになったミラは断末魔を残してポリゴンとなり消えて行った。その光景を誰もが言葉をなくしてみるしかなく、数分間誰も動くことが

できなかった。そう、俺は本来はあり得なかった歴史をこの手で塗り替えたのであった。

時間が経ち夕日が上がる頃、小屋みたいな俺の家では久しぶりに四人で食事を行っていた。ご馳走、とまではいかなもののアモネの料理スキルで大盛りのチャーハンがそれぞれの前に置かれていた。もりもりと食べながら家を見渡すが…やはり懐かしい。と、ふと気になることがありふと呟く俺であった。

「そういえばゴルドレムはどうなったんだ？」

「ああ…確かゴルドレムさんなら旅に出ましたね…そのまま残ってくれたら嬉しかったのですが…」

「それより、ここって本当のSAOの世界なんだよなあ!!まさかこれかと思っていなかったが本当に!!」

「あ、ああ…とりあえず落ち着いてご飯食べようローベ」

「動きはALOとそっくりで気にしなんだけど、SAOってどんなゲームなのかしら？」

元々カザネはALO出身のプレイヤーで、SAOの世界のことを全く知らない新米プレイヤーだったのだ。ローベはSAOを購入することができず、運良くデスゲームに巻き込まれなかったらしい。俺はデスゲームの世界、ソードアートオンラインを説明した。ログアウト不可能、魔法や飛行の要素がないこと、そしてなにより一番の違いはHPがゼロになると現実でも死んでしまうデメリットだろう。この世界は剣が全て、俺も何度もその世界を目の当たりにして来た。しっかりとルールとして当てはまった異常な世界なのだ。

「あんたすごいわねそんな世界で…ま、まあとりあえずわかったわ。でも私たちはどうしてこの世界に来たのかしら…」

「きづいたらここにいてよう、俺更衣所で休憩していたはずなんだよな」

俺も、帰っている途中だった気がするが思い出した映像はぼんやりともやがやかかったようにはつきりせず確信がない。そもそもそうだったとしてナーヴギアを外先にもっていなかった俺はどのよう
にログインしているのだろうか、不思議であり不気味である。だが、こ
こが本当に過去にさかのぼっているのならここをクリアして脱出し
なければならぬ。メニュー画面にログアウトの文字がないことを
確認した俺は一つ決心した。

「…俺、攻略組に入れるように…いや、攻略組に入るよ」

「…えっ!?」「リンネ…」「あんた…流石にそれは無茶よ!そんなレベル
で…」

「そんなすぐにはこの世界はクリアされないはずだ、アインクラッド
も残り15層とは言え…もう上層だから時間はあると思う。だから
俺は…純粹にこの世界を楽しみたいんだ」

「リンネさん…いいですよ、その希望私も相乗りします!」

「俺もだ!なんか戦いが増えるって楽しいしな!!」

「しつかないわね…死なれるのが嫌なだけなんだからね!」

「あの…それ、俺にも手伝わせてくれない!」

ドアの外から聞こえる少年の声。俺の「入れ」の声で俺たちは戦闘
準備を整え身構える。予想通り、声の主はこの前カザネの兄を襲った
少年だったのだ。身構える俺達、だが少年は腕を組み半笑いのまま小
屋へと入る。何かおかしいか分からないが手で口元を押さえながら
肩を震わせている。今にもとびかかりそうな女性二人を鎌で制止し
つつ相手の様子をうかがった。我慢できないカザネが口を開く。

「あんた…この場で私たちを殺そうものなら…:…今度は容赦しないわ
!」

「ま、まあカザネ…話だけでも聞こう」

「そうだよ、短気な女はモテないよ?おばさん」

「…で、手伝うとは具体的に…どうゆうことでしょうか?」

「お、お前ら…技術はあってもレベルがなきゃこの先大変だから…俺

の狩場を教えてあげてもいいなーって…」

「あんたの狩場なんて行かなくても…私たちは強く」

「いいかもしれないな、何もなければいいから行こう」

「ばかなのあんた!?この前まで人殺そうとしてた子よ!」

「俺もそうだったから…俺はこいつを信じる」

「決まりだな!ちなみに俺レベル70はあるから、俺が先輩だから!

ナデイ様と呼ぶように!!わかったか…死神、筋肉マッチョ、チビ、お

ばさん!明日の朝、この家の前で待ってるからな!感謝しろよ!」

「…また、大変な人が仲間になりましたね…」

低い身長ながらタメ語で横柄な態度をとるナデイ。カザネはアモネとローベに抑えられ大噴火直前の状態だが、俺としてはいい機会になるため行きたいと思っている。三人を何とか宥め、ナデイのレベル上げに同行させてもらうことになった。

俺達が思っていた以上にレベル上げは大変だった。襲い来るリザードマンの群れ、神出鬼没な植物、そして極めつけは多種混合、いろんな昆虫が集まる巨大な巣窟、記憶から消し去りたい血のにじむような訓練を超えレベルは50まで上げることができた。他の三人も70近くまでレベルアップに成功し、ここまではナデイの機嫌を損ねることなく、むしろ喜ぶという最高の形で強力を続けた。他の三人も最初のころにつ比バナデイと打ち解けているように見える。ほっと溜息をつき今の階層76まではマジンが足りないが、引き続き今はレベル上げに専念していくことにした。自分が前線で活躍する姿を思い浮かべると少し照れくさくて四人に顔を合わせられない。ナデイに続いて俺は全速力で次の階層へと駆けていくのだった。

豹変

立場は突如として入れ替わる。強者が権力を失い弱者に代わり、大富豪が革命で大貧民になることだってある。逆を言えば弱きものが強大な力を得ることだってある。彼も突如力を得た一人だろう。だが、それぞれその後その力をどう使うかは…皆一緒ではなくまたそれも数奇な運命だ。

狩場を教えてもらい俺のレベルは60、他の三人も70前後までレベルアップした。が、相変わらずナデイの態度は傲慢で俺らを下に見てくる。今日も狩場の提供報酬として、バラからもらった俺の家に勝手に住み着き、その上朝ごはんの提供を要求してくる。俺としてはもう慣れたものだが、どうしても相方の方がそうでもないようだ。

「ちよつと強いくらいで調子乗りすぎじゃありませんか？リンネさんも許可してないですし」

「これくらいされて当然だ、なんせ俺はお前らに強くなる場所を提供したんだからな！それなのに感謝の言葉もないのか…失敬な女だな、結婚出来ないよ？」

「このガキ…!!」

「まあまあ…ナデイの朝飯は俺がおごるから、アモネ達は先にご飯食べさせてよ」

「お前たちこそさ、俺のおかげで攻略しやすくなったんだから感謝して欲しいよね。感謝が足りないっていうか…」

「…」馳走様でした」

静かにカザネが食事を終え外に出て行く。流石に負けたのか、ナデイは少し不満そうに食事を始めた。まだ怒られるで済むだけマシである、この世界では一つの動きが死に左右される。その前に本当にダメな人間は相手にもされないのだから。

少し遅れて食事を終わらせるとナデイが外で待ちくたびれたのか、地面に寝そべっている。俺は頭を下げ謝罪ながら彼に接近した。

「戦闘しかできないなんて…本職は犯罪者？それともギャング??」

「ナデイ！あんた言っていることと悪いことがあるわよ!!いい加減に…!!」

「まあいつか…この世界では勝ち残ればそれでいいもんね」

「…」

大量のワードに俺は返答できない。過去を話したいのは事実なのだが、何にせよまだ日が浅く、ナデイがなぜ俺らに接触したのかも分からない。俺は苦笑いをしてナデイの言葉に頷いた。

「ごめんな、少し疲れててさ」

「まあ関係ないんだけど、今日も死なないといいな！」

「ああ…死ぬ訳にはいかない…!!」

目の前に巨大なゴリラ型のモンスターが立ちはだかる。俺たちはフィールドに駆け出した。

「流石に疲れたわね…」

「俺たち戦闘力は前より上がっているけどなあ…疲れだけは抜けてくれないな、ハハハ！」

「お前たちののはただの歳だろ…こんなまだまだ序の口だし」

「っていうナデイさんも息が切れているじゃないですか…」

「あーやめよう！喧嘩しても士気が下がるだけだから…」

「やつぱまともなのは死神だけじゃん、他もちゃんと動いて倒せばこんなに疲れることもないんだよ！もつとちゃんと動けよ！」

戦闘がひと段落し、モンスターのポップが少ない木陰で休憩する。そこで一人だけ立ち上がりナデイが息を荒げて俺たちを睨む。確かにナデイが動いて仕留めていることは事実だ。だが俺たちは元々モンスターを狩っているメンバーでもなく、ローベとカザネはALLO出身で戦闘方式もまったく違う。全てが悪いわけではないと思うが、今

それを言ったところでナデイが納得するわけがない。黙って小言を聞いた。俺以外の三人も怒られるが、自然と目が細くなり不機嫌になっっている。今日はいつもと何か違う。自然と俺の胸はざわついていた。

「そうだ、なら気分転換にさデュエルでもしよう！お前らの実力も見たいし…死神のプレイングも見たいし！」

「うーん…ナデイ、悪いけど俺はそんなにデュエルしたい！ってわけでもないし、そろそろ死神呼びもやめてほし…」

「何言ってるの？お前はさ、いろんな人にちやほやされてさ気づいてなんでしょ、自分がすごいってことにさ。だったらもつとその力を使って強い仲間を集めればいいじゃん。こんなポンコツな仲間じゃなくてさ！」

「…」

「あ、もしくは前から弱い仲間で釣るんで強く見せるのが好きとか？そっちの方が弱そうだしやめた方がいいよ？あ、後その武器の効果さすごく強い知ってるし！そんなに使わないなら俺が代わりに使いたいからさ、この特訓の報酬として頂戴よ!!後…」

「黙れ!!」

気づくと俺は立ち上がり怒鳴っていた。なぜ怒ったのか俺には分からない、ナデイの発言の何が引き金になったのかも分からない、ただ一つ分かるのはナデイの機嫌を損ねた事だけだ。一度深呼吸をしてあたまを頭を下げるが正面から聞こえる荒い息遣いはますます悪化する。三人も驚いた表情で俺を見ていた。目の前に立つナデイは涙を流しながら叫ぶ。何を言っているか理解が不能だったが、一通り何かを言い終えると俺の方を向き再び怒鳴る。

「お前はいいよな!!力を手に入れてこの世界で有利に生きているんだからな！お前らもこいつに守ってもらって楽しいか!?ああ死なない

「からいいよな!!」

「あ、貴方だつてレベルが高いじゃないですか…」

「やめろアモネ!!とりあえず、落ち着けナデイ!一旦深呼吸を…!」

「あ?レベルが高い??この世界じゃそんなもの関係ないんだよ!最終的には強い武器…それが全てなんだツ!!だから俺は…死神お前が憎い!力を持っているのにまんべんに使わないお前に腹が立ってしようがない!」

ナデイはピックを投擲する。反射的に大鎌をだしピックを防ぐが、その行動がナデイの逆鱗を逆なでする行為とは考えられず、短剣を右手に俺に襲いかかってきた。鎌の持ち手で受け止めるがモンスターと違い生身の人間の一撃は重く感じた。

「リンネさん!」「あの野郎…」

「三人は下がつてろ!きたら危ない!!」

「ほら…俺を殺してみろよ!力をもつと使えよ!!死神なんだろう!!」

「俺はこの力をむやみに使いたくない…!」

「なら俺に…その方が武器も喜ぶはずだから!」

「これは…これはそんなものじゃない!殺しをするための武器じゃない…半端な気持ちで言うな!」

「…その力がない俺にそんなことを言うな!ならよこせよその鎌を!!」

小回りの効くナイフをさばき切ることができず、小刻みな攻撃は俺のHPを徐々に削つていく。ナデイは俺を蹴り後方へ宙返り、その後体制を整えナイフを指の上で回す。後ろにステップをしたナデイは姿を消す、ぼんやりした空間から俺たちに語り掛ける。

「…あの日俺は一つの命を守れなかった…俺を初めて正面から見てくれた人…俺が初めて惹かれたもの誰も好きになれなかった俺が好きになったもの…けどそれは!俺の目の前で碎け散った!!なんで奪われないといけなかったんだ…僕には守る力がなかった…僕には力が

なかった…だから守れなかった！」

「…それは違う。武器や実力じゃない、気持ちが足りなかったと俺は思う」

「…黙れ！失ったものなんて僕より少なくせに…そんなことを言うな!!」

潜伏スキルの一部で姿を消していることはわかる、数秒後に現れるの不意を突く戦闘技術の合わせ技ということも容易に予想できるが、全くと言っていいほどどこにいるか分からない。俺は攻撃に備えガードを固めるが、数秒立っても俺の前には現れない。まさかと思いき木陰の方を見ると、アモネめがけて走るナデイが見えた。

俺は走り出すが攻撃を防ぐの間に間に合いそうになかった。

「だったら…お前にも同じ思いをさせてやる！」

「アモネツ!!」

アモネを突き飛ばし攻撃をかばった。

すごく痛い。壁にもたれかかるのがやっとだ、体に空いた穴からは血が滲んだようにブロックノイズが散りノイズとともに俺の体から力が抜けて行く。ナデイはどこに行つたのだろう、ゲージも見る余裕はなく、視界はぼやけて今や表情も見えない。

「リンネさん…しっかりしてください！」

「あんた…何で避けなかったのよ…!?!」

「…痛い…苦しいな」

「何言ってるんですか…消えないでください！今回復結晶を…」

「…アモネ、もう手遅れよ。こいつの体力はもうゼロ、この世界では死んだのよ」

「そんな……」

「ごめ…ん…な。結構痛くて…力も…入んねえわ」

「…あんたの意思は私たちが受け継ぐ。絶対攻略組でボスを倒してみ

せるわ」

「…それは頼もし…いい……………」

鎌が手から離れ、地面に刺さる。目を閉じると意識は消えた。消える刹那、俺の頬に冷たい何か零れたような、そんな気がした。

地下の世界

「この度はSAOをプレイしてすれて感謝する。だが、君たちはHPが0になり消滅してしまった。君たちは一度死んだのだ」

「二度どころか死んだら終わりなんだろ!! だったら何の…!」

「このままいけば、100層までに皆息絶えSAOは前人未到のゲームとして完結するだろう。これだと私の世界は完成しない、そこでだ…君たちにはもう一度この世界を生きてもらいたい」

突然のことにどよめきが走り、辺りのプレイヤーは自分の身体をペタペタと触る。自分の身体を見ると、以前の防具を装備した自分がいた。

「ここはアインクラッドとはまた違うSAOの世界。この世界の最上層にはアインクラッドに戻れる道がある。参加は自由だ、だがここでHPが0になれば…」

その直後、赤ローブは消えてしまった。分かっていた、その言葉の最後が。俺は立ち上がり周りの様子を確認した。ステータス画面はバグを起こしており文字が化けている、位置情報もアインクラッドにあるものではなかった。あの赤ローブの言葉から考えるに本当に別世界に飛ばされてしまったことを受け入れざるを得なかった。ただですら現代にいるわけでもないことで妙に納得しており、少し落ち着いている。ふと思いつき人込みをかき分ける。もしかしてと思った事はやはり起こっていた。

「リンネ…君…?」

「…やっぱり…」

ため息をつきながら彼を見る。そう、かつて俺を全力で始末しようとした男ミラが驚いた顔で広場に立っていた。彼は俺を見るに顔色

を変え後ずさる。なんとかなだめようにも周りの人間に助けを求めようとする。俺は一つ実験がてらポシエットに入っていた石ころを軽く投擲する。投擲スキルの低い威力の石ころはミラにあたるとHPを2削り硬直を与える。その間にミラに接近し口をふさぐことで黙らせることに成功した。俺は静かにするようナイフで脅し壁によりかかり質問した。

「ミラはここがどこかわかるか？」

「そ、そんなわけないだろ…ここまで来て僕を殺そうとしているのかい!？」

「そんなつもりじゃないけどさ…俺、殺されたんだ」

「…リンネが…殺された…？」

唾然とするミラ。その反応を見て自信が強く見られていたことを実感しさらに落ち着くが、ミラはどうやらそれどころではなさそうだ。壁に向かって何かを発している。以前のような覇気は全くみられず、完全に戦意喪失しているようだ。俺はミラの耳元に「一緒に来ないか」と呟く、頷いてくれたものの顔色は悪く額には汗をかいていた。こうして二人のパーティーメンバーが完成したのだった。

どよめく人の中、広場を出ていくとどこかで見たことのある光景が広がっていた。人はいないが店が立ち並ぶ商店街、町の中心にそびえる宮殿、死者が書かれた生命の礎。

「リンネ君…これまさか…」

「これは…はじまりの街……なのか……一体俺たちは今どこにいるんだ…？」

「人は僕らしかいないな…そっか…」

「…ミラ、まさかお前が作った世界じゃないだろうな？」

へ？と声を上げるミラの胸ぐらを掴み問いたです。ミラは顔を白

くし何かを唱えて十字架を切り始めた。現実の俺は死んでいない、こいつの何かだと思っていたが、一つ疑問がわいた。胸ぐらをつかんだままミラに質問する。

「…俺の裁判の時、どうして俺に協力した？」

「は？裁判??リンネ君がどうして裁判に参加しているのさ…ここ出会ったのが初めてだろう？」

「なら…正直に答えてくれ、今は何年？」

「2024年の…11月7日だろう…君に殺られた日じゃないのか!？」

何かが引つ掛かり周りのプレイヤーにも話を聞いていく。あるものは今年の10月や4月、あるものは開始直後の10月31日などバラバラだった。中には収容所のプレイヤーだったものもあり、生命の碑で確認したところその日付はインククラウドから消滅した日時だった。空はずつと赤黒く雷でも落ちてきそうな雲行き、ミラも白い真実の元部下メンバーから情報を得たところやはり誰も現実の時間を述べる者はいなかった。ミラはゲーム会社に勤めているが、ここまで正確に人の消滅日時と時刻を鮮明に書き起こすことは難しいだろうしあの反応から暫定現実にいるミラはここには関わっていないと仮定することにし、隣にいるミラは恐らくこの世界のミラということとしておいた。と、俺が推理しているとミラが走って俺のもとへきた。

「リンネ君ここやっぱりおかしいよ！一緒に来てくれ！」

思いつきり手を引つ張られバランスを崩しながら、黒鉄宮の中心部に向かう。そこには先の見えないくらいながい階段がそびえていた。

「本当ならここは地下迷宮になっているはずなんだ…」

「どうしてそんなこと…」

「俺が一時いたインククラウド解放軍は、こここの地下にダンジョンを

発見した。アインクラッドが攻略されるたび地下の迷宮区が解放されていったんだ…でもこれは…」

「下じゃなく、上に向かってるな…」

これが赤ロープの言っていた戻れる道かもしれない。俺は階段を駆け上がった。ミラも何かごねながら走ってついてくる。白い光景は薄くなり目の前に広がったのは…やはり迷宮区につながる森の道だった…

俺、あの時から成長できているか。どこかで見守ってくれているか。またこんなところに来ちまって人間以外と戦っているけど、強くなってんだろかな。俺がしたことは取り返しのつかないことであるのはわかっている。だから今、俺ができることをしてお前と戦う。絶対に。

赤黒い空の下、風でざわめく森の葉。土埃を上げて走る巨大な蜘蛛。俺は糸と溶解液を吐き出す奴から全力で逃げていた。ミラは木陰に隠れ戦力にならず俺はただ虫が嫌いなことから走って逃げてばかりいた。が、途中つまずき蜘蛛に追いつかれてしまう。蜘蛛は俺を糸で捕縛し木に吊り下げた。体はしびれてはいないがスタンの表示がステータスに表示され身動きが取れない。蜘蛛は俺を足から丸のみにした。ここで終わってしまった…と思った矢先、まだ意識は残っており体力ゲージを確認した。体力は50ほど削られているもの。イエローゲージになっておらず、さらに蜘蛛も俺を吐き出しひっくり返りもがき始めた。反対側の木陰からミラがガッツポーズをしすぐに木に登っていた。粘液を取り払い黒の大鎌で蜘蛛を一刀両断、蜘蛛は青い結晶となって散っていった。

「ひどい目にあつた…蝶の気持ち少しわかったかもしれない…」

「た、頼むぞ…リンネ君がやられたら僕も道ずれだからな、司令塔はしっかり守れよ!!」

「俺よりレベル低いくせに…」

「今回だって僕が投げたピックがなければ君は死んでいたぞ！」

どうもと適当に彼の話を流した。森の道は一向に迷宮区への道へ開かずつとモンスターに追い回されて早2日。かばんの文字化けは解除されたもののマップ状況は相変わらず不明瞭、さらにはフレンドはみなオフラインになっていた。

前回黒鉄宮の階段を上がり森の道が現れた時、なぜかは知らないがここにつながっている気がしたのだ。もしかすると第一層と同じものが隠しダンジョンにも設定されていたのかもしれないが、階段を昇り始めた直後から頭に入ってきたのだ。一体俺は何を思っているのだろう。そう思っていた矢先、甲高い悲鳴が聞こえた。高い声だったが隣にいるミラも戸惑っていたことから彼ではないと確認した。

悲鳴の先へ走って向かうとリザードマンが女性を襲っている場面に遭遇した。すぐさま曲刀をリザードマンに突き刺す、そのまま刺さっている曲刀を掴み蹴りをかました。吹き飛んだリザードマンは雄たけびを上げ仲間を呼び寄せる。ミラに女性を任せると先に曲刀のリザードマンを短剣で斬り倒し、曲刀を取り戻した後一匹を三枚におろし倒した。残る一匹は臨戦態勢だったが、俺が曲刀をしまうと森の奥へ消えていった。安全を確認し二人を呼んだ。ミラは涙目、小柄な女性は頭を下げたままミラとこちらにきた。

「本当リネ君すごいよ…完全に動きを読んだでしょ…」

「まあ…人型だったから戦えただけ…相手はパターンの攻撃しかないし、覚えれば倒せる！」

「できるかア!？」

「ところで貴方は…」

「リネ…あなたがリネさんですね…!?あの死神の！」

地雷を踏んだ気がした。エフェクトはないが脳裏では爆発したような感覚が下り体中が熱くなる。逃げ出そうとはしたが、ミラは間髪

入れず質問した。

「リンネ君と知り合い？それとも殺られた？」「おいそれは…」

「いえ…私の友達が憧れてて…本当に死神さんですか…！」

「いや、もうそんなやつは」「そうそう！リンネ君は死神!!」

ミラの首を絞めて地に臥せる、女性は目を丸くして俺たちの様子を見ていた。早く追い払おうと考えていたその時、とある言葉が蘇った。

『…あの日俺は一つの命を守れなかった…』

まさか…

『俺を初めて正面から見てくれた人…俺が初めて惹かれたもの誰も好きになれなかった俺が好きになったもの…けどそれは！俺の目の前で碎け散った!!』

この子が…

「ナデイの失った…大切な」

「えっ!?!ナデイを知っているんですか!?!」

彼女は実際に飛び跳ね驚いた様子を見せた。その顔は驚きから不安そうな顔に変わり、頭を下げる。状況がわからない俺たち二人は彼女から状況を聞くことにした。

彼女の名前はメグ、アインクラッドでナデイと行動を共にしていたらしい。身長から中学生くらいに見え、現実でも知り合いと言っていたことから同級生であろう。その見た目に反して包容力があるような、包んでいきそうなそんな雰囲気があふれている。戸惑いながらも丁寧に話してくれるメグさん、俺たちも今置かれている状況を話しアイ

ンクラッドへ復帰しようという旨を述べた。そのことを話し終えた直後、メグから連れて行つてほしいとの発言があり、驚いた俺は首を横に振る。

「さすがに危ない…気持ちとはとても分かりませんが…」

「わかっています！でも…もう一度ナデイに会わないと…」

「でも…」

「大丈夫、リンネ君はレベルがあの時より上がっていてとても強くなっているのです！」「お、おい」

「本当ですか!?わ、私もモンスターは倒せないけど特技が…」

というと、ミラに石を投げるようジェスチャー。メグさんは少し距離を取りたくさんの石をミラの周りに放った。石はただ転がり、ミラはその石を拾うとメグさんに向かって投げた。石は直線状に飛んでいくが、そこにメグさんはいなかった。彼女は逃げるところか石を回避しミラに迫っていた。焦る彼は大量に石を投げるが、一つも当たることなくメグさんはミラに襲い掛かる。驚いた俺は曲刀を持ちメグさんの前に立ち刀を振るうがメグさんは武器を持っていない。振り下ろされた刀は空を切りメグさんを捕らえられない。すました顔で息を切らせウインクをするメグさん。これを見せられたら流石に連れて行かざるを得ない。

「これで…連れて行ってくれますか？」

俺の頷いた後飛びはねて喜ぶメグさん。実際武器による攻撃を避けるのは容易ではないし、当たるギリギリで避けているあたりか有の動体視力を持っていることをただただ尊敬する。自分も攻撃パターンを何度か見ることのできるようになるが、彼女は一発で成功させたのだ。ちよつと悔しい。

「不合格！」

「ええっどうしてですか!？」

「メグさんが入ると僕の出番がなくなるでしょう!?! そりゃあだめですよねリンネさん…!？」

「いや…一発合格ですよ…絶対あの城に戻りましょうね!？」 「はい!!」 「そんなあゝ!!」

二人から三人になり、別世界のアインクラッド攻略が始まったのであった。

しばらくし森を抜けると洞窟まで到達した。洞窟には門が設置しておりそこには15人ほどプレイヤーが座っていた。俺たちはそこにたどり着きなせここにいるのかをプレイヤーたちに尋ねた。

「ここ、ボスにつながるはずだけどどうして休んでるんだ?？」

「いけるわけないだろ…俺たちのレベルと合っちゃねーよここ…しかもあんなもの見せられたらやる気もなくなるぜ…」

「上の世界と何か違うことはいかない?？」

「ここに入った瞬間レベルがみんな同じ50になってしまっただけで相手はレベル70…同じモンスターだから出て出来るわけがない…できる時間が決まっている以上出来る奴が来るまでここにいるんだ…」

「どんなボスだったんですか?？」

「前の第一層と同じコボルドのボスだったよ。先に倒していった奴がいるらしいけど、いったいどうやって…」

皆が集めた情報によると、

・ 敵は以前と変わらないがこちらはレベル50固定、相手はレベル70。

・ 制限時間があり超えると次の時間が来るまで門が開かない。

・ 死ななければ何度でも挑戦できる。死んだプレイヤーはその後姿を見えない。

・すでにクリアしたプレイヤーがいるらしい。

とのことだった。ミラが『死神が一緒なんだ！だから俺たちは勝てる!!俺たちはただレベルを上げてきたわけじゃないだろう!死神を全力で支援するんだ!!』と謎にプレイヤー——を煽り第一層ボス部屋に18人で挑んでいる。きつとこいつ会社でも人任せだったのだろうと、溜息を吐きながら彼の首を思い切り絞めている。ミラが腕をタツプしたと同時にアラートが鳴り響く。初めてのボス戦、現れたのは巨大な豚のような生き物、イルファルグ・ザ・コボルド・ロードが空から登場、雄たけびを上げて襲い掛かってきた。俺は思わず声を上げた。

「……こいつ、どんな動きするんだ？」

17人のプレイヤーは一斉に悲鳴を上げフロア中を駆け始め、バトルは始まったのだった。

神なる捌き

これだけじゃ足りない。もっと、もっとあの様な時間が続けばいいのに。あんな程度で負けるあの人じゃない。もっともつと戦つてもらうんだ。

淡い水色のポリゴンが空に散っていく。クリアの文字がステージ全体に表示された途端、18人のプレイヤーは一斉に歓声を上げる。集まり体を叩き合う者、その場に倒れこみ安堵する者、反応は様々だったが、俺はまず一呼吸を入れもう一度周りの状態を確認する。今回犠牲になったプレイヤーは一人もいなかった。ただそれが嬉しく、命が飛ばなかったことがただ頭に残り達成感を満たしていく。その直後だった、背後から俺の頭に一発の拳が炸裂。敵かと思いよろけながら剣を構えるが、敵ではなくむしろ見覚えのある人だった。

『何しよげているんだよ！せつかくボスを倒したんだ、喜びに浸ってみたらどうだ？』

「…いや、それ以上に嬉しいことがあるんだ…俺さ、」

『何言ってるんだよ…ほら、向こうにはヒロインが待っているぜ？』

「…!!」

勝手に体が動く、彼女のもとへ体が動く。華奢な体、軽装のアモネに近づいていく。俺に気づいて振り向いた彼女はれの顔を見て驚きの表情を見せた。

「死神さん…!?!」

メグさんの声で目が覚めた。後ろを見るとろーべが経っていた位置に不思議そうに俺を見るミラが呆然とした様子で立っていた。そうだ、ここはアインクラッド最下層。アモネやローベがいるわけがない。我に返った。そうだ…ここは死後の世界、安心も安堵も存在しない世界だったのだ。俺は戸惑う二人に無理やり口角を上げ「やったな」とだけ声をかけ次の門へと歩いて行った。

門の後はすぐ街になっており、広場前のベンチを見るとすぐに座り込む。街はやはりどこかで見た事のある風景だったが、クリアしたプレイヤーが少なく賑わいは全くなかった。俺は深呼吸すると状況を整理した。

ボスバトルが終わった後、殴られ後ろを振り向いたが姿を見ることはできなかった。その後前を向いた時メグさんがアモネに見えたのだ。重症な気がするが確かに見えた、そしてかすかに何か聞こえたのだ。それが何かはわからないが、ただ落ち着いて考えたとやっぱりこは現実ではないことは分かった。マップを確認するとB9と表示が回復していた。

「リンネ君、本当に大丈夫かよ…？」

「ミラ…うん、たぶん冷静になれてない…初めてボスを倒したから興奮しているのかもしれないな…俺」

「それならいいんだけどさ、メグさん怖がってたぜ？後で会ったら謝っておきなよ。次も期待しているよん」

「そうだな…うん」

何も言い返す気力はなかった。ただ一つ自分に絡みついているものが、次も被害を出さずに切り抜けられるかということであり、今回ギリギリだったことがさらに胸を締め付ける。もう俺のせいで命を飛ばしたくない、これは俺が斬ってきた人へできるただひとつのことだから、そう思い目を閉じた。

2層のボス会議は一層通過から3日後に行われた。広場にてミラを中心に円陣を組み、まずは情報交換から始まった。

「…このフロアボスの情報は…全くない！陣形で何とかするしかない」と！

「いやあでもミラさん、一層下に出てくるモンスターはそっくりそのままの第一層と一緒にだったじゃないですか」

「馬鹿野郎、そうやって次のフロアで同じ戦法をしてみろ！そうやっ

て油断しているやつが喰われるぞ……！」

アメリカンハットとミラと、以下多数の論争が始まったため俺はその場を離れこの層で買ったスペシャルドリンクを飲み干す。「おそらくまた俺が先陣切るんだろうな……」と呟いた直後、気配を感じ振り返るとメグさんが立っていた。メグさんは近くのベンチに座り俺に手招きする。俺はドリンクカップを処分してベンチに座った。メグさんを見るがなぜだろう、気分がよさそうだ。

「死神さんは……この世界、どう思います？」

「……えっ？」

「なんて、気になったから聞いてみただけです。忘れてください」

メグさんの言葉の意味を考えるが……NPCでありプレイヤーのメグさんにどう返答すれば正解か、すぐには出ずしゃべろうとするが言葉に詰まってしまう。こんな時『僕』ならどう返答しただろうと考えているとメグさんは会話を続ける。

「死神さんにあの子……ナデイが憧れる理由も何となくわかったようなそんな気がします」

「あいつは……いや、憧れてなんてないですよ。あいつは……俺を見てはいないです」

軽くため息をつき俯く。本当はこんなことを言いたくないし、彼の大切な人の前はなおさらである。こういう時どうすればいいのか……いつもはアモネが人と話していたから俺にはあまり経験のないことをしている。ふと、背中が柔らかい感触で包まれる。それはとても暖かくついたため息が出てしまった。息を吐き切った時我に振り返るを振り向くとメグさんが両手で背中をさすってくれていた。

「たくさん考えているんですね、死神さんも……でも……今だけでも休んでください」

「…今だけでも…ですか」

「はい。こうすることが貴方の不信感を高めるのかもしれないかもしれませんが…」

「…すみません」

一応ここは圏内でありキルは起きない、特殊な方法を使えば別だが。仕方なく俺はメグさんのリラクゼーションに甘えることにした。今まで感じた事のない安心感、剣を離さないようにするものの全身の力が抜け突然襲う眠気。ステータスは全く状態異常を示さない。そのまま俺は眠っていく…結局一日眠ってしまった。

そして翌日第二層攻略が決行された。第一層よりは敵が少なく感じ、その代わりなのか一撃が重く受け止めるたびに腕がしびれる。なんとか誰も欠けることなく第二層ボス前までたどり着いた。

「皆、気を引き締めて行けよ！相手は何が来るかわからないからな！」「そんなこと言って…今回のL Aは俺がもらいま」

アメリカンハットが何者かに襲われた。すぐ助けに行くがアメリカンハットの前にはどす黒いオオカミのようなエネミーが居座っていた。そのエネミーは口を大きく開くと彼を食い荒らし始めた。口に付いた無数の牙は彼の体を貫き、エネミーはその動きを止めない。「痛い！助けてくれ!!」と叫び最終的に彼は青いポリゴンとなりはじけて消えていった。その後エネミーはこちらを向き咆哮を放つと俺たちに襲い掛かってきた。全員初撃は何とか回避したものの不意な出来事だったため、10と7のグループに分かれてしまった。俺は自信のいる7のグループを散開させ距離を取る。同時に鞆から爆竹を取り出し炸裂させる。エネミーはすかさず俺に攻撃を仕掛けてきた。

相手の名前はシャドウファンタズム、オオカミのような姿をした影のような姿だ。ゲージは三本、身体の至る所に楔のようなものが打ちこまれている。きつと相手はまだ本気でないことが予想できる。が、不意にステップを踏まれその突進に巻き込まれてしまった。その突

進は10人のグループにそのまま向かいプレイヤーを散らして停止した。なんとかまだ皆耐えているが、やはり一撃が重い。戦闘時間がまだ3分経たないのに息が上がりつつある。誰かが閃光玉を投げ一面は白世界に包まれる、視界が暗れた時にはエネミーは消えてしまった。エネミーを探すプレイヤーたち、刹那俺の足元から大きな地響きと共にエネミーが飛び出てきたのだ。反応しきれず上空に吹き飛ばされ、エネミーの爪が迫る。右手の曲刀を爪にぶつけ気道を変えることよって直撃は避けることができたが、勢いよく俺の体は壁に激突した。肺がつぶれたような感覚、焼けるようにいたい背中、何とか立ち上がるも視界は薄々砂嵐がチラつき体力はイエローゲージまで減っていた。

「リンネ君を守るんだ！彼がいなきやここは持たない!!」

「そんなこと言われても…俺たちだって死にたくない！うわあああ!!」

エネミーは標的を変え他のプレイヤーを攻撃する。影の柱を立て自信を防御、プレイヤーの移動範囲を減らし突進攻撃をかます。相手ゲージも減りつつあったがまだ2.5本と少ししか減っていなかった。慌てる指揮官のミラ、状況は一向に改善はされそうになかった。このままでは犠牲者が出る、俺は剣を杖にし立ち上がる。貴重な回復結晶を使用し体力を回復すると攻撃している二人のプレイヤーのもとへ走っていく。

「スイッチしろ！交代だ!!」「お、おう！」

「無茶だ！一人で勝てるわけがない!!」

しかしこいつらに猛攻撃を任せるわけにはいかなかった。俺だけでも確かにジリ貧だがまだ死なない。あと数回攻撃を捌けばこいつを攻略することができる。他の人に任せた時間違いなく犠牲者が現れる、ただでさえ一人がすでに犠牲になり敵の情報がわかっていない

中で皆を守るにはこうするしかないんだ。突進を避けつつ俺はエネミーのボディーにダメージを与えていく。一見変わっていないように見えるが、確実にボスの体力は減少し、ついに15分かけて一ゲージを削りきることができた。

ボスは怯み後退する、周りのプレイヤーからはどよめきが上がる。その直後だった、ボスは再び咆哮を放った後楔が解かれ鎖を引きちぎり全身をさらに黒い影で覆い始めたのだ。驚き立ち尽くす俺たち。影は急に消えると再び俺のもとへ現れ足で踏みつける。その後牙が迫るのを避け何とかレッドゲージで収まることができた。攻撃を終えたオオカミに先ほどの攻撃プレイヤーが再び攻撃を始めた。何とかしてもう一度攻撃に参加しなければ、回復結晶はもう一つしかないが出し惜しみをしている場合ではなく、決勝を見た時には使用していた。俺たちのレベルはここにいる限り均等に50、相手もレベルは50で五分五分のはずだ。マージンはとれていないが、勝てない敵ではない。俺は再びスイッチしボスへの攻撃を続行した。ただひたすら突進を避け、攻撃を確実に当てていく。攻撃を避け当てる、この流れが体に身に付けば確実に倒せるが、俺のゲージはイエローゲージになり半分になっていた。

「スイッチしろ死神！少し休むんだ！」

「さっきより攻撃の手が遅くなっている！俺たちで何とか耐えるから代われ!!」

「……!!」

「そんなにL Aが欲しいか死神！」

言葉に出している暇なんてなかった。最悪俺の命と引き換えにこいつが倒せればよかった。自分の曲刀が突如空を切った、ボスが陰に隠れたのだ。もうパターンは覚えカウンターを決め込もうと構えていたところ、音が鳴り飛び出たのはメグさんの足元だった。メグさんはきれいに身をかわし、影の追撃をひらりと避けていた。俺の攻撃を見ていたと言え、やはり早すぎる…加勢しようとしたときミ

ラが羽交い絞めにし壁まで引きずって来た。

「もうやめてくれよ！君は死ぬ気か!？」

「…こうでもしないとみんな死んでしまう。いくらNPCだからって…」

「？」

「絶対に誰も失っちゃいけない…俺がやらないといけない…俺が…！」

突如甲高い悲鳴、聞き覚えのある声はやはりメグさんだった。メグさんが奴の攻撃に巻き込まれたのだ。なんとかもういちどたとうとするメグさんだったが、彼女の右足は膝より下が切断されておりバランスを崩し倒れてしまう。もう誰も失うわけにはいかない、そう思った時には体が動いていた。

制限時間残り4分、総戦闘時間2時間56分を記録しタイマーは止まっている。フロア内はクリアの文字が一面に表示されていた。だが、一部の人しか喜んでおらず大半はフロアに残り俺を見ていた。その視線はまるで軽蔑するような、侮辱するような俺を批判しているであろう視線だった。

「そこまでしてL Aが欲しかったのか?」「何なら俺たちと交代して順番に攻撃すればあんただけ苦しまなくてよかっただろうに」

「…L A Bならいらぬ。お前たちが前に出ると無駄に犠牲者が出る。もう出なくていい、俺がやる」

「出なくていいって…馬鹿にするなよ、お前ひとりで行われるからとかそういう問題じゃなくてな!!」

「待って！リンネ君は君たちを…守りたかったはずなんだ。けどあいつは…」

しかし、今回は最初に奇襲でやられた一人が犠牲になってしまった。本望ではなかったが、最小限に収めることができた。もう周りの

目線なんてどうでもよくミラが一人のプレイヤーを押さええているのを横目にL aでドロップしたアイテムを捨て門を開き、次のフロアへ向かった。

第三層は今までと街の様子が違い、白黒で支配されており町は一層より小さく見える。崩れかけたベンチに座り自分のやったことを振り返り後悔する。自分がしたことは間違っていないはずなのだ、自分の守りたいものを守れたため満足してもよい気がするのだ。鎌を使うまでは。鎌を使ってから明らかに空気が変わった。だから俺は使いたくなかった、皆、俺じゃなく死神の鎌を頼っている。そして俺も鎌に頼ったことがただ悔しいが、鎌が手放せないことも事実だった。他の人にこれが渡った時また他の人が傷ついてしまうことが怖い、本当は自分が新しい死神に殺されることを一番恐れているのかもしれない。今は手放すわけにはいかないのだ。俺は今後の行き先をしながらいた。

「…さん。死神さん」

「…メグさんですか」

「少し話がしたくなって、落ち着くためにもいいでしょう？」
「…」

「どうしても周りがNPCなのに守ろうとするのですか？彼らは亡くなくても現実への影響は全くないのに」

「それは…きつと自分の心を落ち着けるため」

「いえ、貴方は…本当にみんなを守りたかった。必死に動こうとした結果貴方は鎌を出したのでしょうか。でも…貴方は一人で戦いすぎた。きつと」

「わかっている、俺はやっぱり死神でいないといけないんだ。そうすればあいつらを守ることが出来る。無駄にあいつらに消えてほしくないんだ。たとえそれがコンピューターだとしても…：失いたくないんだ」

「…少しは周りの方を信じてみては良いじゃないですか、きつとミラさんたちも優しく迎え入れてくれるはずですよ」

「あんたはなんなんだ…俺の母親のつもりか…どうして母つていうのはいつもこうやって!」

メグさんの顔を見た途端、右頬に刺激が走った。時間が経つごとにジーンと痛みが広がっていく。頬を押さえながらメグさんの方を向くと顔所の顔は赤く目つきは鋭くなっていた。

「どうして母親を悪く言うの!この世にあなたの母親がいなかったら貴方は生まれてなかったのよ!」

「俺なんて生まれなければよかったんだ!愛していると言われるけど殴られて、邪魔と言われて階段から突き落とされて、外は危険と言われて部屋に監禁されて…学校でも、塾でもこの世界でも…俺の居場所はどこにもなかった!俺は異端児なんだ、母が俺にそうするんならきつとそうなんだ!それともこれが俺の役割か!?どうなんだよ!!」

「…!」
「俺が生まれていなければナデイもあんなふうになつていなかった!ここにいる大半の奴も俺が殺した!全部俺が悪いんだよ!!」

彼女が何か話そうとしたが、無視して立ち上がり遠くの空き家に入った。もう何も聞き取れなくなかった。どこにも居場所がないならせめて自分の空間だけは作りたかった。これが何も強みのない本当の俺、母親に従っていたころの本当の俺なのだ。もうここですべてを終わらせよう、ベッドに腰かけた後目を閉じた。ずん、と体が沈んでいくような感覚が俺の意識を奪っていった。

第2層以降の攻略はあっさり進んでいった。3〜5層は敵が一層に比べると明らかに弱体化しており、後衛にいた俺は全くボスに手を出していない。6〜8層も同中に敵が設置されておらずボスも一層に出た中ボスがボスに格上げされているだけだった。そして今俺たちが攻略している9層も10分と経たずボスが倒されフロアにクリアの文字が浮かんだ。

「今回のL Aは俺だー!」「くっそ…俺が先だったと思っていたのにな…」

「死神がいなくても俺たちは戦えるんだ…!ですよねミラさん!」

「あ、ああ、そうだねえ」

「ミラさんも大袈裟すぎますって!今回はやばいどころか、今回もぬるいが正解でしたね!」

「そうだね…いや、層が上になるほど強くなることが普通だと思っただけど…そんなまさかね…」

俺は足早にこの場所を抜け第10層の広場へと歩いていく。黒ずんでいる空は最初より薄くえんじ色になっており、雲の間からは日光が漏れている。2層以来、集団にいるのが気まざくなり先にフロアを出るが、俺の行く場所にはいつもメグさんが先回りしていた。あんなに喧嘩したばかりなのにメグさんは微笑んで話題を振ってくる。しあかし俺はそんな余裕はなく今自分はどうすればいいのか考えていた。だが自分もこのままではだめだと思っていた。仮にこの状態で現実に戻れたとしても俺は結局死神になることを恐れながらも、謙に頼ってしまうだろう。自分のシコウデハ既に限界を迎えていた。今日もし会えたら話そう。そう思い広場の階段に座ると、数分した後やはり彼女がやってきた。

「気分はどう、リンネさん」

「…俺は今後も何もできないのかな」

「そうやってすぐ不貞腐れなさい、あなたの大切な人も悲しみますよ?」

「…俺にそんな人はい」「わかりました、ならとっておきの情報と交換しましょう。きつとあなたの助けになります。話してみてください、い、スッキリすることもありますよ?」

「…僕は…母さんが怖いんです。兄貴や父さんを傷つけたから…俺も今同じように力で皆を支配しているような気がする。母さんは僕に優しくしてくれた後、見返りを求めるように僕を傷つける。殴っ

て蹴って罵倒して…最初メグさんもそう見えてしまつて…ごめんなさい」

「いえ…私こそ。きつと私が年上なのに…あんなこと言つてごめんなさい」

「…メグさんは本当に母親だつた…？」

ふふ、と笑い手を横に振る。俺のことが年下の弟のように見えたらしくいつもの癖で言つてしまつたらしい。メグさんの家は普段母親がおらず父もあまり話を聞いてくれない家だそうで、弟や妹の世話をしていたのはいつも自分だと言つていた。きつと本当なのだろう、そう考えると俺は自己中すぎた。自分がそうなつてほしくないだけでできもしないことをすべて背負い込もうとしていた。皆と同じ能力で協力して強敵を倒す、一人でできないところは補い合つて突破していく事が大事なんだとうすうす気づいていた。集団でいることは弱いことじゃない、ミラのギルドのようにねじ伏せるためでもない、遠慮もし合わない皆が空間のこと。俺たちの一つの帰る場所なんだと、そう思つた。

「俺は、少しレベルが上がつて変に自信をつけていました。そしてこの人を馬鹿にしていました。群れることは弱いと思つていました…」

「うんうん…」

「けど、それは間違いだつたと思います。ここの人たちは弱さを補い合つている、自分のできることを精いっぱいやっている。戦つたり支援したり…だからここにいる人たちは仲間を拒むことはない…」

「私も頑張つてレベル上げしたんですよ？もう少し頼つてほしいです。でも…よかつた、さつきより顔がイキイキしている感じですよ！なら一つ情報を教えるわ…よく聞いてね。実は…」

俺は息を飲んだ。その事実は今後俺の人生、いや俺以外にいる周りの人の人生に大きく影響する事となつたのだから。

その日の夜、反省会と共に最終層のミーティングが行われた。久しぶりに参加させてもらうが、特に反対もされず、多数の黄色い声に支持され歓迎された。俺はみんなの前で一礼するが直後、「頭なんて下げるな!」「ぜったい上の世界に戻ろうぜ!」とヤジられ皆の輪に入った。しかし、いつも通りミラが仕切っていたが、今回ミラもいつもの緊張感を持っていいのか表情が硬く、メンバーの発言に対し聞き逃すことが多かった。その場は笑って流されるが、表情もを曇らせるメンバーもいたことからメンタル面への影響がありそうだった。その後、陣形を確認しミーティングは終了した。

ミラが就寝した後、ミラ以外のメンバーで集まり円を組み、話し合いが始まった。

「リンネさん、私たちは…この中に嘘をついているプレイヤーがいない限り、私たちは全員人間です。NPCではありません」

「…えっ!？」

「今ここにいた私たちや、この始まりの街にいたプレイヤーは全員生きています。ただ…現実世界に帰ることができないのです」

「どうしてそれがわかるんだ…?そもそもこの世界は何なんですか」

「俺達、この世界を見るのは二度目なんだ」「そうそう、こうやって10層のボス部屋まで来ることができたんだよな。ボスは多少変わっていたけどここにいる奴らはだれ一人変わることなく来たんだ」

「皆いつから…」

「全て仮定になりますが、死神さんはゲームがクリアされたと言っていた、私たちはクリアされたと予想される日B1フロアについて戦おうとしていた。目を覚ましたらまた地下10階にいた。どこかでSAOが起動していて現実で生きている死神さんがここにいるということ。私たちはまだ生かされているのかもしれないということですよ」

この人たちが本当にAIでないかを見極めたい。SAO事件後に調べた時、アインクラッドとSAOはカーディナルシステムによって管理されており、NPCの行動もすべてこのAIが管理している。前

に話した時もかなり正確な会話が可能であり、だからこいつらの会話も俺と辻褃を合わせるよう動いてくるはずだ。本当に人間なら何か証明できる何かを見出したいが…俺には思いつかなかった。もしこれが本当なら…俺が倒したことに変わりはないが…みんな生きている未来が生まれる。

「なら…ナディも…？」

「確信は持てませんが、きつとあの子も意思があるはずですよ。現実でもきつと生きています…けど、なんでここに彼がいないのか、それが不思議でならないんです」

「…死んだプレイヤーがここにいるはずなのになぜ彼が上にいるんだ…？しかも俺はこのSAOにどうやってログインしたんだろう」

会場にどよめきが走る。本来ならSAOは100層のボスが倒されることよってクリアされるはずのゲーム、しかし一層時点で全くと云っていいほど情報が回ってこなかった。そう考えればこの反応は当たり前で俺の言っていることは突飛すぎる。だが誰も疑うことなく真剣に俺に目を向ける。

「仮の話、75層に攻略組が行った際俺がミラを倒した…けどミラは現実では意識はあつて、元気に過ごしている…でもどうして…」

「俺たちは75層以前にやられている…お前さんがいう、75層の世界で生き残れなかったやつらは…まだ現実世界にはいつていない、ずつとここなんだ…」

「なら…本当にお前たちは生きているんだ…でも現実世界に帰っていないってことは…病院のベッドの上か…」

「そう考えると…上で生き残った人はほとんどNPCって考えても、いいのかな？」

それで合っていると思う、メグさんの質問に答えようとした直後、視界がゆがむ。眼は冴えているのに体が急に重くなり、受け身を取ら

ず地面に倒れる。ステータス画面を確認するも視界がぼやけており、バッドステータスになったかどうかも確認できない。3、4人くらいの声が聞こえてくるが、全く何を言っているか聞こえない…

俺は病室の前にいた、誰かもわからない病室の前にアモネと1人で立っていた。ドアをノックした後病室から返事が返ってくる。引き戸を開けゆっくり入ると、ベッド上に1人の少年とベッド際に一人の中年男性が立っていた。俺に座るよう手招きする、俺とアモネはそれぞれ準備されていたパイプ椅子に座った。中年の男性と並ぶ形がで座った俺たちはベッド上の男性の顔を見た。顔はやせこけ、酸素マスクが取り付けられている。起きる様子はなく機械のように呼吸が続けられていた。

「この度は大変ご迷惑をおかけして心から申し訳なく、深くお詫び申し上げます。今回、私が―――さんに影響を与えこのような事態にしてしまった事…」

「そんなに硬くならないでくれ、楽にして過ごしてほしい」

中年男性は、俺の謝罪に驚き慌てた様子で謝罪を制止した。アモネも相手の様子に驚いており座りなおした。男性は少年の頭をなで語り始めた。

「この度は、わざわざここに来てくれてありがとうございます。私は―――の父です」

『…えっ……?』

「貴方達を呼んだのは謝罪させに来たわけではないのです。少し話がありました」

名前が聞き取れない、突然視界が揺らいだ。男性が何かを話しているのに全く耳に入らず、俺の体がだんだん離れていくような感覚、まるでお化けになった気分だ。ついに俺の体まで視界に入り部屋全体の様子が見えてきた。瞬きをした途端、光が差し込み目覚めた時は小

屋の中だった。

「よく寝られたかな、リンネ君」

「いや……ここは……？」

「何言ってるの、第10層だよ？」「まだ寝ぼけてるみたいだな、死神を先頭にレベル上げでも行きますか！」

「ちよ……えっ……」

無理やり立たされ外に連れていかれる、ミラはきよとんとした表情で後からついてきた。段々と状況を把握し、まだアインクラッド地下にすることを理解する。胴上げのような状態で迷宮区に連れて行かされる、その中にはメグさんも入っていた。

「昨日急に寝てしまうから、部屋まで運ぶのが大変だったんですよ？」

「そうだったんですか……？」

「外で会議したんですよ……覚えてないんですか？」

しつかりとは思いつけないが、うっすらとプレイヤーかNPCか言い合っていたことは覚えている。彼らが言うにミラ以外AIではないプレイヤーらしい。疑念が浮かぶが今はそう信じるしかなかった。本来なら俺たちは死んでいるはずであって脳を焼き切られているはずだ。しかし俺はさつき夢のようなものを見た、それはまるで起こったことを思い返すように。夢の内容は思い出せるが、その夢が何なのか関連付けることが難しい。ボーっと考えているとダンジョンのボスまでたどり着いた。いったん考えることをやめ俺達は巨大な蜘蛛にに向かっていた。

蜘蛛の糸まみれになりながらもなんとかダンジョン内のモンスター討伐は成功した。ハイタッチしながら俺たちは10層へと戻っていた。俺は体力ゲージの回復を確認すると小屋に戻ってここまでの状況を整理した。仮に上の世界に戻れたとしても、この世界になぜ俺たちがいるか原因があるはずなのである。

まず、ここまでの出来事を整理する。目覚めるとミラ襲撃前まで時間が戻っていた。そこから俺はゴルドレムを避けミラを倒すことで、ミラのギルドを壊滅させた。その後は俺、アモネ、カザネ、ローベで行動を共にしていたところにナデイが混ざり、何日かたつたある日ナデイに俺が殺された。そこから下の世界で生活が始まった。一応カウントしたところ、ここの生活は今日時点で30日。1日がこの世界では大体8時間で回っており、仮想空間で3日過ぎると丁度1日過ぎる計算となる。そう考えると単純に30×8＝240時間。現実世界は10日間経っているということになる。

次に気になったのが、俺の夢の内容だ。おそらくあれは俺が現実で体験した出来事らしいが、いつ起こったか分からない。ベッドに寝ていた少年の顔、あのイントネーション、確実に近日に聞いていることはわかってはいるが、それがいつだったか全く思い出せなかった。

ログインした原因を考えているうちに一夜が明けついに十層攻略日となった。

朝、洞窟の前には俺とメグさんを30名ほどのプレイヤーが集まり剣を一つに重ね誓いを立てた。

絶対に現実世界に復帰してゲームから生還する。

お互い顔を見合わせて洞窟に入ってしまった。

洞窟は10mほどあるだろうか、縦横どちらにも広く壁と床は岩屋小石だらけで非常に足場は悪い。ランタンがなければ先は見えず暗い道が続く。普段より一回り大きい洞窟だがボスが出るまでの時間は変わりなく、ただ沈黙が続く。まわりを見ると他のメンバーも辺りを見渡しながらくゆっくり前に進んでいく。しばらくしてもう一回り部屋が広くなった。その瞬間、ボスアライトが鳴り響き、目の前の画面にボス出現の赤いポップアップが出現する。奥の扉から現れたのは一度地下フロアで出現したボス、コボルトロードだった。さらに横の壁や床を突き破りかつて出現したボスが続々出現しその数は増え、10体のボスがポップアップした。だが直後、ボスたちは行動を止

め、アナウンスが流れる。その声はS A O開始時に語り掛けてきた、赤ローブの男だった。

『君たちはよくここまでたどり着いた、この階層を超えることができればアインクラッド地上層へたどり着くことができる』

「こいつら全員倒すのかよ…冗談やめてくれよ…!!」

『では健闘を祈っているよ』

俺の待て!!という声は洞窟に消えていき、再びサイレンが鳴り響く。ボスたちはそれぞれ動き出し各自プレイヤーに向かって襲い掛かる。プレイヤーたちはたちまちパニックとなり、組んでいたグループもバラバラに散ったいく。俺はメグさんを連れボスの攻撃を避けていく。ボスの攻撃は特に連携を含んだ攻撃をするのではなくただ個別に攻撃をしてくるだけ、さらにはボスの攻撃が別のボスへ当たりダメージが入っていくのだ。正直このままボスの自滅を待っているのもありかもしれない、しかし体力ゲージはさほど減っている様子はなく既にプレイヤーは3人力尽き、洞窟から消えていった。

「リンネさん！このままだと私たちは…」

「わかっている!!けどこいつら全員相手するのは無茶だ!!」

確かに最後の試練だからだろうか、簡単に突破できるようには見えない。ただひたすら攻撃を避け続けることに終わりが見えない。一度間合いを取り状況を分析した。

当たりには20人のプレイヤーが部屋に散って行動している。俺の近くには3体のボスと、攻撃を見切ることができるメグさん。そしておそらくこのグループであろう攻撃担当の俺。明らかに戦闘で勝つのは難しい、こんな時アモネならどうするのだろうか。

『リンネさん頭硬いですねえ、誰も倒せなんて言っていないですよ』

(どうゆうことだ？倒さなきゃ先に進めないんじゃない)

『だからあ、倒さなくても突破してしまえばいいんですよ？きつとりリンネさんならできるはずですよ』

光が見えた。メグさんに待機するよう伝えたと俺はボスへ向かって走り出し、切りつける。その後爆薬でボスの注意を惹き振り下ろされる攻撃をただひたすらにさばいた。完全にさばききることができ

なくても当たらなければいいんだ。ここを抜けてしまえばいいんだから。メグさんへ視線を向け、アイコンタクトで行けとサインを送る。最初は目を丸くしていたが、何となく理解したのかこちらに走ってくる。そして繰り出されるボスの攻撃をすんでのところであわし、隙間を縫うように奥の門まで走っていく。ボスの攻撃をかくぐり門までたどり着くメグさん。たどり着いたことを確認すると、ボスの攻撃を振り払い門へ向かった。しかし、門へ向かったからだろうか門付近にボスがたまり始め、さらに難易度が上がる。先ほどさばいていたボスたちも門前に集まり雄たけびを上げた。ボスの隙間からメグさんの様子を確認したところ、何かこちらへ叫んでいる。即座にメツセージで要件を確認した。返信はすぐだったが、その内容に目を疑った。

『門に制限時間が発生して、残り3分でこのフロアから全員退出させられるみたいです。クリアできなかった人は洞窟前に戻されるらしいです』

タイムリミットは残り3分、無理にもほどがあつた。今回一人でも上になれるのなら俺は良いと思つた。彼女だけでも帰ることができればきつと彼を止めることができるのだから。突如、背中に衝撃が加わる。

気づけば壁に体は張り付き5秒ほど遅れて全身にビリビリと痛みが広がってきた。何か悲鳴のようなものが聞こえた気がするが、誰の声かもわからなかつた。一人でも増やさなきゃと呟き、再びボスに立ち向かう。足と視界が揺らぐが、胸を貫かれるよりは痛みは浅く体も楽であつた。振り下ろされた棍棒を受け止めるだけで全身に痺れが襲い掛かるが、まだ立っていられた。が、数秒し棍棒の重みは軽くなる。上を見上げるとコボルトロードと他のボスは別の方向へ向かつていく、タイムアップかと門を見るとメグさんの姿がない。まさかと思ひボスの方向を見るとメグさんが攻撃を避けているではないか。急いで加勢しようとしたところ、再び体に衝撃が走り大きく突き飛ばされた。俺が転がりついた場所は門であり、門上に表記された時間は残り1分を指していた。体を上げると真っ先に視線に入ってきたの

はミラだった。ミラが俺を突き飛ばしたのだ。再びメグさんに加勢しようとして足を踏み出すとミラは石を投擲し、俺をけん制した。

「どうしてこんなことをするミラ!!」

「お前が必要と判断したからだ。お：君が必要な人が待っているはずだ。理由は理解できないが、僕はどうかやらそう思っていないらしい」

「…君??」

「さア、早く生きたまえ！君はヤラナキヤイケな、な」

一瞬思考が停止する。やはりミラは…と、思ったがメグを救うわなければ復帰する意味がないことに気づく。時刻を確認するが、残り30秒を示す。今更気づいたが、門周囲2mくらいは敵判定がなくなったり着けば安全に時間がたつことを待っていられそうだ。しかし秒は刻々と秒を刻んでいく。門が開き始め、奥から掃除機のように周辺のアイテムやステージを吸い込んでいく。俺の体も例外でなく門に吸い込まれる、だがほかのプレイヤーはその場に取り残されたままであり白空間の中にプレイヤーが残されたまま、俺の視界はプレイヤーもろとも白く消えていく。まだ、離れたくない。離れたらここで終わりのような、もう二度度会えないような気がした。こいつらは死んでいる、もう死んでいるんだ。何かを掴もうと伸ばした手の先には、メグさんが安堵した表情でこちらを見ていた。そして大きく口パクをして白に染められていった。

あなたに　たくします

門は閉じられ、白い空間はシャットアウトされた。正直これ以降の記憶は残っていない。

時は止まることを知らず

目の前が真っ白になった。次第に明るさが晴れていき辺りを見渡す、小さな小屋の中にある小さな窓からは光が漏れており日中であることが分かった。そこに声の主はいなかった代わりにそこに立っていたのは、部屋着で棒立ちになっているカザネだった。体は自由に動かすことができ、突然可能となったことに戸惑う。ただ慌ててカザネにどう声をかけた方がいいかわからなかった。

「あんだ…どうゆうこと…？」

「あ、あのさ…俺もよくわからなくて…正直何が起こっているか全くわからないんだ。どうして俺がここにいいのか…そもそもこの世界が何なのか」

「いきなりそういわれても…まあ、そうね。とりあえずお互い落ち着いて情報を交換しますか」

二人で深呼吸し、俺が起きるまで何があつたのか俺が何を体験したのかをお互い話し合った。俺が地下空間にずっといた事、地下に生きている人たちがまだいた事、ナデイを知っている人がいた事。覚えていることをすべて話した。確かに覚えていることすべてを話した。途中から何を話しているか分からなくなっていたがただ思いつくことをただひたすら話した。カザネの顔はどうだったか全く分からなかったが誰かに伝えたかった。ふわりと香る花の匂い。

瞬きすると、視界は真っ暗になっていた。

「辛かったよね、全部きつとあんだが本当に経験した事なんでしょ。私は信じる」

「…俺は、救えなかった。俺が救うべきだった。救うべきなんかじゃない、俺が絶対に救わないといけないのに…なのに俺はあいつらを見」

思いつきり殴られた。恐る恐る顔を上げるとカザネは涙を流していた。そして俺をもう一度抱きしめる。かすかに何か言っていた気がするが俺には何も聞こえなかった。

どれくらい時間が経ったか、漏れていた光が消え部屋も暗くなる。

小屋の電気をつけ、机を挟みカザネと俺は椅子に座った。ギシギシと音を鳴らす木の椅子はとても懐かしくついため息が漏れてしまう。カザネに笑われた気がするが、何も聞かなかったことにし黒パンを差し出した。怪訝な顔をしながらも彼女は受け取ってくれ二人きりでの夕食を過ごした。

食事として渡せるものはあつたのにどうして黒パンだったのか、後々考えてもわからない。

「俺が死んだ翌日、俺がここに寝ていた…ってことは本当に地価では時間が止まっていたんだな」

「ええ、そしてあの後からアモネちゃんと連絡が取れなくなっているの。彼女、胸を押さえたまま転移結晶でそのまま消えて…」

「アモネが…!?けど、ナデイの狙いは俺の俺だったはずだから…:…:だけど、ナデイのことだから何をするか分からないし…:検索は」

「アモネの生存は確認できたけど、彼に関してはフレンド切られてからさっぱり。また振出しに戻っちゃったね」

だな、と返事し黒パンをかじる。とても苦い。ステータス画面の間を確認すると19:00を表示し停止していた。ますますこの世界がわからなくなっていた。

止まる時間、にもかかわらず変わる天候と外の様子、そして俺がいたあの地下空間。体験したことがない事態にますます混乱している。俺はもう少し情報収集をするため今行ける層を観察することを提案した。カザネも承諾し、すぐに出発する事となったのだ。カザネはなぜか機嫌がよく見え、ドア先に向かって飛び出していく。俺も後に続くようにその刹那、大きな物体が俺に向かってくる。とつさに転がってよけ壁に突き刺さったその物体を見た。そこには先ほどまで嬉しそうに飛び出していたカザネがナイフで腹を貫かれぐったりしていた。声をかけるが全く反応はなく、腹からはポリゴンでなく血を流していた。HPがゼロになっているが消えることはなく手先は冷たい。瞳を開いたまま死んでいる彼女の顔を見て泣くこともできずただ言葉を失った。直後、目の前がうっすら赤くなり10秒のカウントダウンが流れる。そのカウントはまるで、まるで、

さつき見た

そんな気がした。俺は暗い闇の中に立っていた。そこにたくさんの人がいることはわかるが、暗すぎて見えない。そこで確かなことは一つあった。横を見覚えのある女性が通り過ぎて行つたのだ。あの日目の前で散つた、女性だったような、そんな、気が、した。

目覚めるとそこは気のベッドに横たわっていた。もちろんそこは現実の自分の家であるわけがなく、仮想空間の家であった。日付を確認すると、どうやら現実の時間と連動しているらしく、仮想空間で殺されてから一日が経っていた。

窓から漏れる光、この部屋の感覚。まさかと思ひ俺はゆっくり体を上げ正面を見る。そこにはカザネが目を丸くして棒立ちしていた。

「…デジャヴ、なのか」

流石に俺は同じ状況に驚くことはなかったが、カザネは俺を見て驚いた表情のまま固まっている。とりあえず椅子に座らせカザネに何があつたか話を聞いた。が、ここで異変を感じた。

彼女はなぜここにいいのかわからないと言ひ出したのだ。気づいたらここにいた、そして死んだはずのあんたがそこに寝ていたことしか知らないと言ひ始めたのだ。昨日刺されて死んだことを聞くと、冗談と思つたか笑つて蒸せていた。冗談言うならもつとうまいこと言いなさい、と。俺は自分が昨日体験した事、地下世界で何があつたかをすべて説明する。その説明に対してカザネは昨日と同じように真剣に聞いてくれた。窓の外から何かの気配を感じその方向をにらむ。

「4回」

黒い影は窓から薄くなり消える。俺は追いかけてようと玄関のドアを開けた、その瞬間頭の中に昨日起こった出来事が再生される。どこからともなくナイフがカザネの左わき腹に突き刺さりゲームなのにまるで現実で死んだようなエフェクトが起こつた、あの出来事が数秒

で流れていく。気が付くと自分の腹部中心に機能と同じナイフが突き刺さっていた。カザネが戸の外に出ようとするが、最後の力を振り絞り

「動くな!!隠れろ!!」

と声を出し

目覚めるとそこは気のベッドに横たわっていた。もちろんそこは現実の自分の家であるわけがなく、仮想空間の家であった。日付を確認すると、どうやら現実の時間と連動しているらしく、仮想空間で殺されてから一日が経っていた。急いで起き上がると正面には、部屋着で棒立ちになっているカザネがいた。信じられないような顔をしているが、正直に言うとなんか俺も信じられない。お互い同じ顔をしているのだろう、やけに瞼周辺に筋肉に力が入っていた。

「あんた…どうゆうこと…?」

「あ、あのさ…俺もよくわからなくて…正直何が起こっているか全くわからないんだ。どうして俺がここにいるのか…そもそもこの世界が何なのか」

いきなり殴られた。訳が分からなかった。カザネが何度も俺を殴った後震えた声で俺の背中に手をまわした。服が少し濡れてきたことから泣いているんだと思う、絶対守らないといけない俺は思った。とりあえず背中をさすってあげ椅子に座ってもらい黒パンを差し出した。泣き止んだものの、しゃっくりしておりパンを食べると同時にしゃっくりが起こり蒸せていた。普段きっちりしているカザネらしからぬ姿に少しかわいいと思ってしまった。

すると、玄関からノックが聞こえ俺は玄関に向かう。カザネがなぜか声を荒げ走ってきたが、そのまま玄関を開られる。小さい影が急いで戸を閉めると俺が食べようとした黒パンを奪い取り、口に含んだままむせ始まる。その影は黒フードを取ると振り返る、その顔はどこか見覚えのある顔だった。

「…リンネさん、これで29回目です。貴方を見るのは」

「それはどうゆう」

「貴方は…いえカザネさんも、貴方たちはもうこれで29回同じ場面を繰り返しています」

初めて知らされる真実、俺たちは何度も死んでいる。確かに一回ここに来る前、ナデイに殺された覚えならあるが、それが20回以上も行われているなんて知ることもなかった。俺が口を開こうとすると、アモネは俺の口を黒パンを詰め込みふさいでくる。

「黙って聞いてください、私には時間がありません。おそらくここで一度殺されます。私たちはこの小屋で必ず殺される。私が来ていない以前は二人とも殺された時もあった。殺された後、あなたたちは記憶を失っていました。それは何度も見えてきて、同じ質問に関して答えられなかったりしたから…きつとあっている。そして今回は私が貴方たちの代わりに死ぬ番です。だから一人でも残って次につなげてほしいのです」

俺は黙って頷いた。アモネは咳き込みながら過去に何があったか時系列順に詳しく教えてくれた。俺が死んだあと、一晚経つとベッドに眠っていた話、その間に俺が地下空間で戦った話、二人が涙を流して抱き合った話の時は少し不機嫌そうに話しており、カザネを睨んでいた。そして誰が殺しに来るのか、それは家の中からドアを開けた途端、ナイフとプレイヤーがポップアップするという話だったのだ。つまり、ここを開けなければ俺たちは殺されることはないのだ。が、誰か殺されると時間が巻き戻り、死ななかつた人間が記憶を保持したまま蘇る。どんな原理か全くわからない。だがこの機能の中に絶対何か答えがあるはず、そう思った瞬間玄関のドアが開く。するとナイフを持ったナデイがアモネを突き刺し、壁に押し付けた。アモネは声も上

げずに血を吐き散らし四肢が脱力していった。

俺は窓ガラスを突き破りカザネを連れて逃げた。目の前がだんだん赤く染まっていき、10秒のカウントダウンが発生する。段々体が重くなっていく、振り向くことはできない。前を向き歩を進める。ふと気づいたときには、カザネの手はそこになく、後ろから甲高い悲鳴が聞こえた。

生き残らなきゃいけない。

俺が生き残らなきゃ、絶対あいつらは救えるんだ。後ろを振り向かずまっすぐ歩いた。

生きなければ。

やるべきことはわかっていた。これで30度目の目覚め、目の前には呆然としているカザネ。彼女の反応を見る前にステータス画面を開く。すぐフレンド画面を選択し、とある名前を探していく。どのような順番になっているのか、そんなもの分からない。その連絡先を見つけると、すぐさまメールを送った。

「おっ…嘘だろ本当にリンネじゃねえか」

「まあ、いろいろあつてな…来てくれてありがとうローベ。でも時間がないんだ。とりあえず武装してほしい」

「はあ??？」

首を傾げるカザネとローベ。怪訝な顔をしつつローベは自信の体を重装備で固める。普段軽装備で近接戦闘をしている彼に見合っていないかったが、意外と防具でいえーじが変わることに衝撃を受けていた。軽い攻撃なら通さなさそうな鎧と兜、両手大の盾、完璧だ。後ろを振り向かせたところで玄関に向かってローベを突き飛ばした。

扉が開いた。ナイフは金属音を鳴らし刺さる音がした。日中にはずなのに部屋は暗い、でも誰かを殺すことでまたあの日が戻ってくる。そうしてまた一人、一人と殺すんだ。きっとこれが終わることはない、進むこともない。殺しても殺しても満足しない。どうしてだろう。

どうしてだろう

どうして

どうして

どうして

たすけて

ほしい

気が付くと外にいた。空は夕暮れ、少し寒い風が身をなでていく。眠っていたのだろうか、目元が痒く手でこする。きつと現実でやった目やにでもついていただろう、少し恋しくなる。瞬きするとステータス画面が広がる。そこでわかった。

急いで起き上がると同じタイミングで立ち上がったのだろうか、相手：つまりナデイが立膝についてこちらを睨んでいる。そうだ、ようやくここで気づいた。同じループから離脱することができた、そして今この状況はこの世界を終わりにするチャンスなんだと。

「…何をしに来たんだ、死神。どうして君は僕を捕まえた」

「もちろん、わかったからなんだ。やっとわかったんだこれが続いていた理由が」

そう、わかったんだ。どうしてこの世界が作られたのかが何となく。俺はただ自分が、アモネやカザネ、ローベと脱出するためにこうしてルートを変えたんじゃない。もう俺以外の誰かを失うわけにいかなかった、失いたくなかった。地下のあいつらは死んでいない、そしてナデイも：まだ死んじやいない。

お互い武器を構える、ナデイはナイフ俺は鎌。武騎種は違うがおそらく思いは一緒であろう。つい頬が緩む。俺は目の前の、もう一人の死神に向かって飛び出していった。

夢を見続けて

宙に浮く三本のナイフをさばく。ナイフはいくらさばいてもまるで蜂のように振り払ってもついてくる。ナイフをさばくとわずかな隙間を縫うようにナデイの手とナイフが飛んでくる。ただですら大ぶりの鎌でナイフをさばくことに難儀している最中、手も混ざって攻撃してくることからかなりの精神力を失う作業だ。

不意に消えたナデイは後ろから現れ、俺の背中に乗るとナイフを首元に立てる、とっさに鎌を間に滑り込ませ跳ね飛ばされるのを防いだ。ナデイが後ろから呟く。

「あんたが死ねば、俺はもっと強くなって…あいつを守る事ができる…彼女を二度と死なせないことができるんだ」

「本当にそう思っているのか？強かったらお前は彼女を守れたのか？」

「そうだよ!!あんたみたいに最初から強くってたくさんの人を倒せる力があれば彼女を守ることができる、ようやく彼女を救い出せる!!なのにお前は僕の世界を壊した…!守れるはずだったのに!!」

ナデイを肘打ちし背中から追い払った後、一旦後退し体制を整える。胸元を押さえながらも再び立ち上がったナデイは叫びながら再びナイフを振りかざす。俺は鎌を投げ捨てナイフを振る手を取り、体術スキルの一つである一本背負いをかます。手首をひねることでナデイはナイフを手から離し苦しそうに唸り声を上げる。グアアとうなる姿はまるで猛獣であり手を離すと拘束していない足で立ち上がり今にも暴れだしそうだ。ふと思いついたように小屋にいる三人を呼び出し残りの三肢を押さえしてもらった。

「そうだなナデイ、俺実はメグさんと出会ったんだ。おそらくお前が一度行ったことがあるあの場所だな」

「!!」

「お前のことものすごく心配していた、お前がアインクラッド…いやそれだけじゃない現実でも無事に過ごせるかとても不安そうに話していた!お前にもう暴れてほしくない、罪を被せたくない!!」

「嘘だ!!彼女が僕にそんなこと…そんなこと言うわけない!そんなこと一度も言っていないかった!絶対彼女はあの地下で俺を呪っているだろう!!弱い俺を呪って強いお前に優しくしているんだ!!そんなことなら…!」

「全員この場で死ぬ!!」

アモネが抑えるナデイの左手が衝撃波を放ちアモネは吹き飛ばされた。胸を押さえながら強くせき込むアモネ、さらには頭も押さえだし口から吐血もする。そんな事お構いなしにナデイはアイテムリストを開き、一つのアイテムを召還した。俺が左手を押さえた時にはアイテムが出現しており、そのアイテムが一体何かを理解した瞬間強い衝撃と熱風が俺たちを襲った。

吹き飛ばされた先は崖であり、落ちる手前で曲刀を突き刺し何とか落下してしまふ事態は何とか避けた。だが、崖に目をやると今にも崖底に消えそうなナデイがいた。すんでのところで左腕を掴み引き上げようとする。ナデイは諦めていたのか目を閉じたまま動かない。曲刀を握りながらナデイを引き上げようとするが体にうまく力が入らず手を離してしまふそうだった。また命を奪ってしまうかと思うと、俺の心は限界だった。

グツと後ろに引き上げられる感覚に驚き、手を離してしまふそうになる。後ろを見ると、カザネ、アモネ、ローベが俺の足を引っ張ってくれていた。その衝撃でかは分からないが、ナデイも意識を取り戻し腕を掴まれていることがわかると再び俺を睨みつける。

「もう殺してくれ!!弱い俺なんか!!こんな無様な俺なんかもういらない!!彼女にも合わないし一生俺は地獄の底ですつと罪を背負うんだ!!みんな俺のことなんて…俺も俺のことなんて」

「だったら好きなお前になるんだよ!俺だって最初から強かったわけじゃないし、俺は自分が大嫌いだ!!殺されたくなくて人の命を奪った挙句その人間たちに俺は謝ることだってできなかつたし、人の人生すら背負えていない!!」

そうだ、責任を取らなくてはと思う度殺した人間たちの声や姿が浮かんでくる。それは無機質であるはずのモンスターに乗り移ってい

るようで、現実世界で話している人たちに殺した人たちが乗り移って俺を殺そうとしているのではないかと考えたことだつてある。一度死ぬまで声さえ止まらなかった。けど俺は確信した、地下世界があるなら殺した人間たちは絶対生きている。高圧電流で殺されてなんかおらず、世界のどこかで必ず生きている。だからこそ絶対にここを脱出して、全員現実世界に戻さなきゃいけないんだ。

「俺の都合で殺してしまった人たちを、俺が救わなきゃいけない！たとえ俺が倒れても絶対救わなきゃいけないから…ナデイもメグさんもメイカーさんも…だから、お前を絶対殺させない!!俺はあの世界であいつらのすべてを託された!!もう逃げない!生きればメグさんに会える!生きるんだ!!」

掴んだまま思い切り叫び腕を持ち上げる。が、その感触は軽く崖下を覗くとナデイが俺の右手首を左手に持ちながら落下していったのだ。すぐ左手を伸ばしたが、もう既に掴める距離を越しており背中を下にし落下していく。落ちていく最中、ナデイの表情に先ほどの殺意は一切なく微かに笑っているように見えた。

落下していき数十分が過ぎた。辺りは暗くなり、小屋で四人だんまりを決め込む。アモネはせき込みながら床に寝て、他三人は椅子に座って俯いていた。以前起こっていた再起動エフェクトが起こっていないことからこれが正解だったということは何となくわかったが、ナデイを最後まで守れなかったことが俺たち四人の罪悪感に積もっていた。特に会話を交わすことなく意識が遠のいていく、これで明日が来たらどうしようかと一瞬考えたが、眠気のない意識のフェードアウトに耐えることができず考えることをやめた。

これで正解だといいいんだが。

エピローグ

俺はどうしたかったのだろうか、いったい誰を救いたかったのだろうか。何を救いたかったのだろうか。戦場での判断は正しかったのだろうか、誰に問いかけることもできない。自分に問いかけても答えが返ってくるわけではない。

ただわかるのは、奪った命をもう一度俺が奪ってしまったということの事実だけだった。これは夢なのだろうか。瞬きするとそこは病室だった。部屋には俺とアモネがベッドを囲んで立っており、ベッドには少年が寝ていた。泣いているのだろうか。俺は布団に頭を押し付け頭を抱えたまま起き上がらない。アモネはそれを何とか起き上がらせようと背中をさすっている。すると病室に一人だけか入ってきた。体格がしっかりしており40くらいだろうか、顔に少し年季が入っているような気がした。その男は二人を近くにあつたパイプ椅子に座らせ話を始めた。

「この度はここに来てくれてありがとうございます。貴方たちの話は聞いています」

「…はい。お…いえ、僕がこの子に影響を与えてしまったんです」「いえいえ、議事録や記録映像を見たがそうでもない。これはこの子の弱さから始まってしまった事です。あの子が言っていたことはすべて理由付けです。あなた方は悪くない」

そういいながらおじさんはお茶を飲む。アモネが飲むタイミングでせき込んでしまうがおじさんはすぐティッシュを取り出しアモネに手渡した。そして再び話に戻る。

おじさんの話によると、彼はナディという少年でSAOにログインしてからインクラッドで殺害されてしまう、意識不明のままだそう。その原因として、彼が途中で合った少女メグを殺され、その敵討ちとして向かったが返り討ちにされてしまいその後復活することがなかった。SAO終了2週間前の出来事だったらしい。彼は死神の強いところが好きだったらしく、いつも自分の身に合わない鎌を片手で振り回しメグと平和に暮らしていたそうだ。

その少年は俺も知っていた、俺が隔離されていたころ俺が殺した、俺が原因で殺された人の議事録や映像を何度も見せられていた中で指折りの俺が直接関与していないプレイヤーだった。関係ない少年の心ですら俺が変えてしまったと病室でも俺は涙が止まらなかった。俺は神ではない、現実では死神でもないのだ。ただ、ベッド上に寝ている少年に謝り続けることしかできなかった。俺は殺してほしかった。終われるなら終わらせて欲しかったんだ。

どれくらい寝たのだろう。辺りは真つ白な空間で起き上がった。床があるわけではなかったが、地面を宇hんでいる感触があった。隣を見るとアモネが息苦しそうに胸を押さえていた。近づき背中をさすってやると、アモネの息遣いは落ち着き、小さな声でありがとうと呟く声が聞こえた。思わず頬が緩んでしまう。だんだん恥ずかしくなり彼女の頭をなでながら顔を逸らした。

空間は突如ぐにやりとゆがみ、やがて砂嵐となりねじれが戻っている。完全にねじれが戻ると、そこは噴水の前だった。どこの階層か忘れてしまったが、どこかで見たことあるようなそんな気がした。辺りは俺たち以外プレイヤーの気配がなく、二人だけの空間のような気がした。せき込むアモネをベンチに誘導し、一緒に座った。アモネは今まで見たことないくらい、顔が青ざめていた。あの空間を見たからだろうか。しかし、ナデイに殺される前から体調がすぐれなく見えたのは気のせいなのだろうか。

「なあ、アモネ…無理していいないか？」

「えっ…やだなあリンネさん、私は大丈夫です…ケホツ…ツ」

「アモネ…頼む、俺はお前に助けられたから…俺もお前の力になりたい。大半俺のせいな気がするけど、協力できるなら手伝わせてほしい」

アモネは、顔を赤くして顔を逸らす。何か良くない事でも言ったのだろうか、考えるが悪い言葉は使っていないはずだし少なくとも傷つけたことでは…いやもしかするといらぬ事でも言ったのかもしれない。しばらく沈黙が続いた後頭を下げる。アモネは目を丸くして

頭を上げるよう慌てて話す。その顔は先ほどのように苦しそうではなく何となく気の抜けたような落ち着いた様子だった。俺はアモネに向き直った。アモネは顔を赤らめたままゆっくり口を開ける。

「実は…私リンネさんに隠していたことがあるんです」

「どうして隠す必要が……」

「それは…リンネさんが気にして戦えなくなったらって思ってた……」

大きく息を吸い、ゆっくり話し始める。

「実は私……もう長くないんです」

信じられなかった。聞きたくなかったのかもしれない、今思い出そうとしても勝手に忘れようとする俺がいた。

俺は一人の人間を本当に殺してしまうことになってしまった。取り返しもない大事なものを奪ってしまった。あの後俺はどう返答したんだろう、今俺は何をすべきなんだろう。暗闇の中に浮かんでいるような感覚に身を任せ考えるのを放棄した。いつからか一緒にいたいと思っていた。

役に立ちたいと思っていた。特別頭がいいわけではない、かといって何かできるわけではない。目の前にすると不思議と変な感覚に陥る。好きなんだろうか、わからない。

あの人になりたいわけではない、一緒にいたんだろう。

どうなってもそうであることには変わりはない。

駅から鳴る発車ベル、自動ドアの上に流れる電光掲示板は俺が乗った電車の反対列車となっていた。駅表札を見ると既に俺が下りるべき駅名が表示されている。無我夢中で電車から降り、何とか自動ドアに挟まれることを防いだ。何か荷物を置いてきた気がするがきつと相当なものなら何か連絡があるだろう。そう思い俺はアモネの家に帰った。

結局あの世界は何だったのだろうか、まだあの世界で退官した感覚は残っているし記憶も鮮明に残っている。そしてあの少年がナデイだということにたどり着いた。だが、そう焦ることはなくむしろ罪悪感

が高まった。あんなに幼い少年も自分の存在によって巻き込んでしまったという事実は帰ることができない、しかもまだメグさんたちはどこかで目覚めるのを待っているのかもしれない。

本当であれば夢だったのか、俺には知る由はない。

止めた時はもう戻ってこない。

そうであるならもう奪わない、取り上げない。

俺の手で時を進める。

絶対に俺は

彼女たちを救って見せる。

命に代えても。